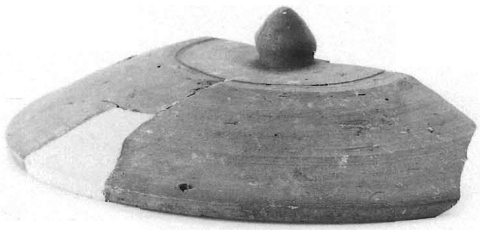
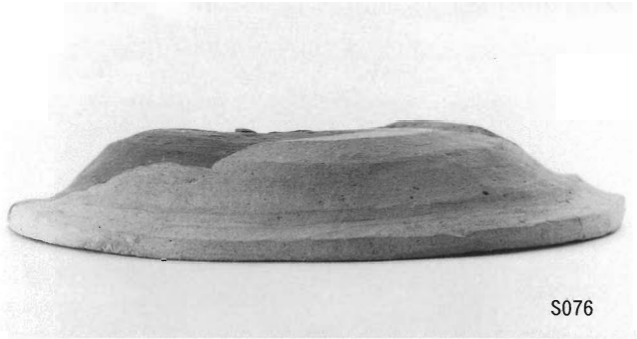
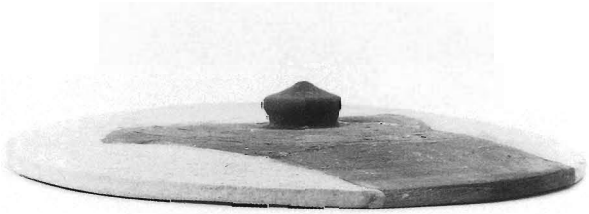
写真図版九一　須恵器／蓋


S070

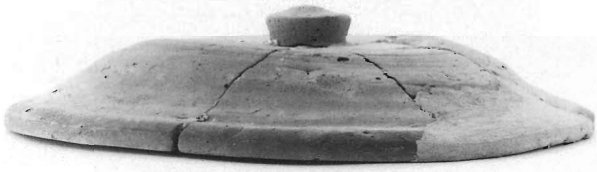

S076

S071


S077

S072

S078


S073

S079

S074

S080

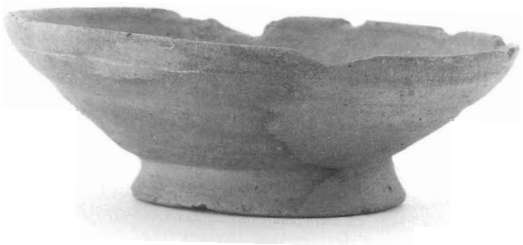
S075

写真図版九二　須恵器／坏

S081

S082

S083



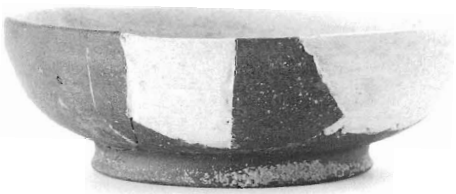
S084

S085

S086

S087

S088

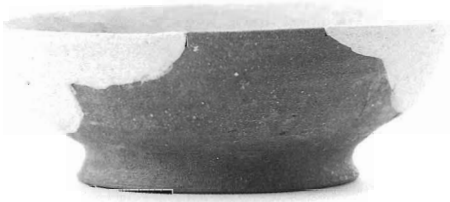


S089

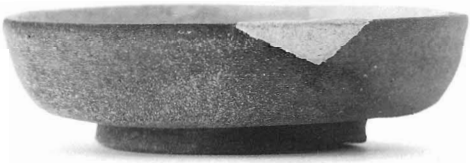
写真図版九三　須恵器／坏

S090

S091


S092

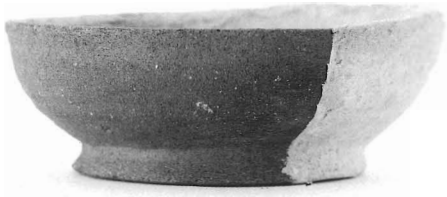
S093


S094

S095

S096

S097


S098

S099

S100

S101

写真図版九四　須恵器／坏

S102

S107

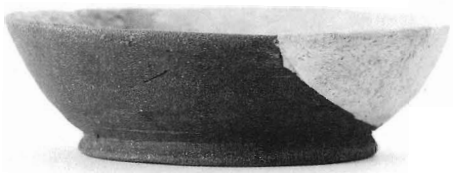
S103

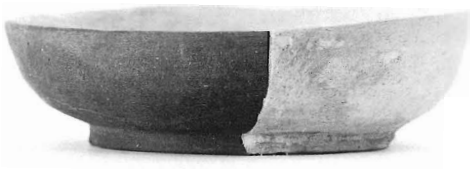
S108

S104

S109

S105

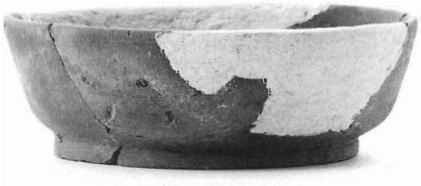

S110


S106

S111

写真図版九五　須恵器／坏

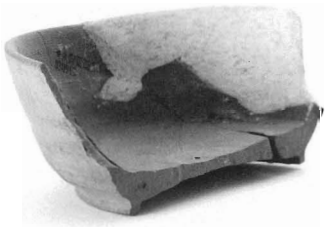
S112



S113

S114

S115



S116

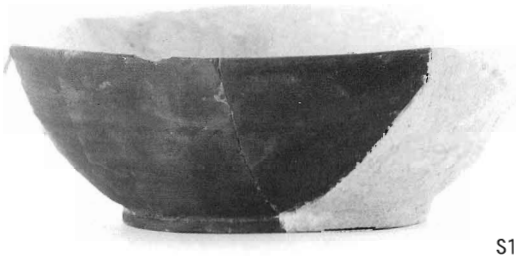
S117

S118

S119

S120

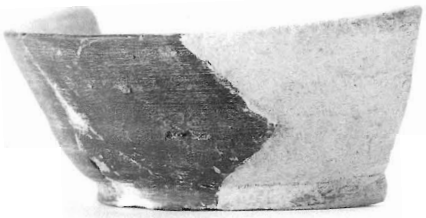
S121



S122

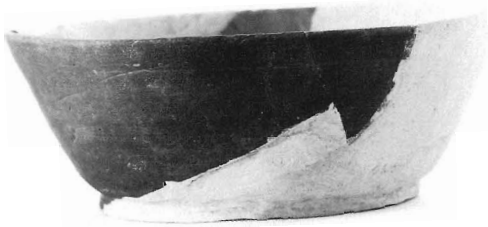
S123

写真図版九六　須恵器／坏


S124

S125

S126


S127

S128

S129

S130

S131

S132

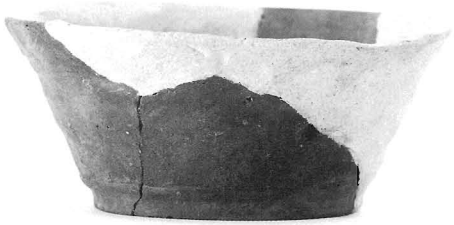
S133

S134

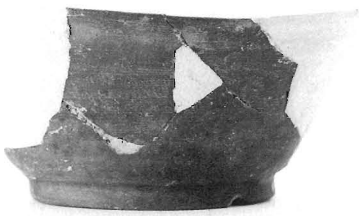
S135

写真図版九七　須恵器／坏

S136



S137



S138

S139

S140

S141

S142

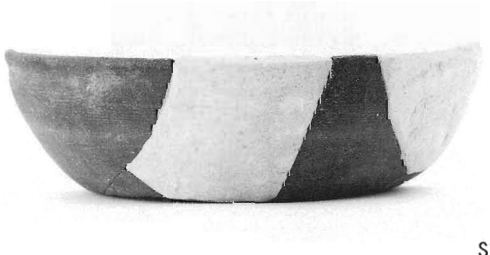
S143

S144

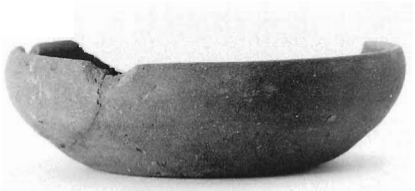
S145

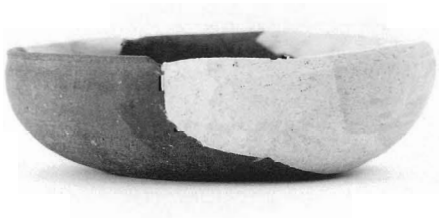
写真図版九八　須恵器／坏

S146


S147

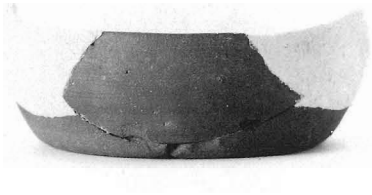
S148


S149


S150

S151

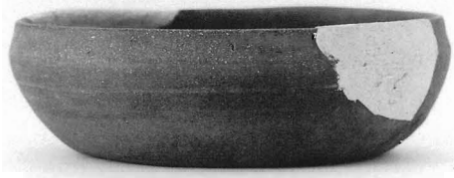
S152


S153

S154

S155

S156


S157

S158

写真図版九九　須恵器／坏

S164

S159

S165

S160

S166

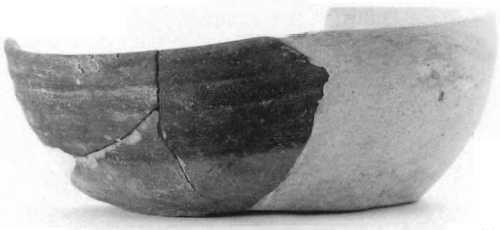
S161

S167

S162

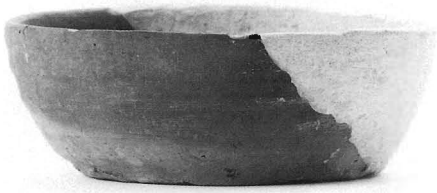
S168

S163


S169

写真図版一〇〇　須恵器／坏

S170


S171

S172

S173

S174

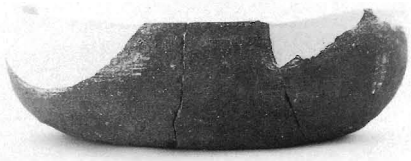
S175

S176

S177

S178

S179

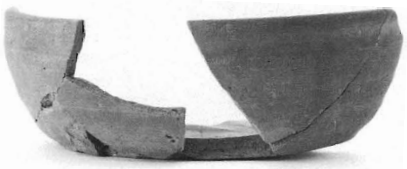

S180

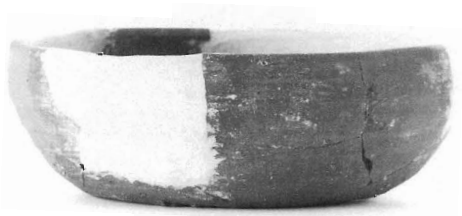
S181

S182

写真図版一〇一　須恵器／坏

S188


S183


S189

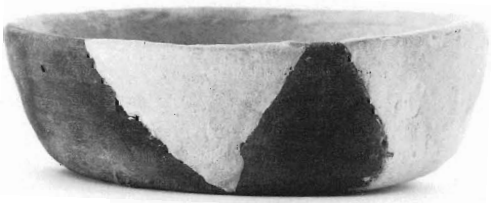
S184

S190

S185

S191

S186


S187

S192

S193

S194

S195

S196

S197

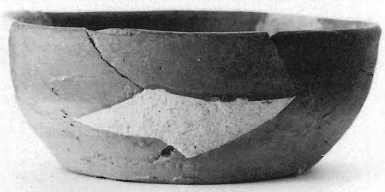
S198

S199

S200

S201

S202


S203

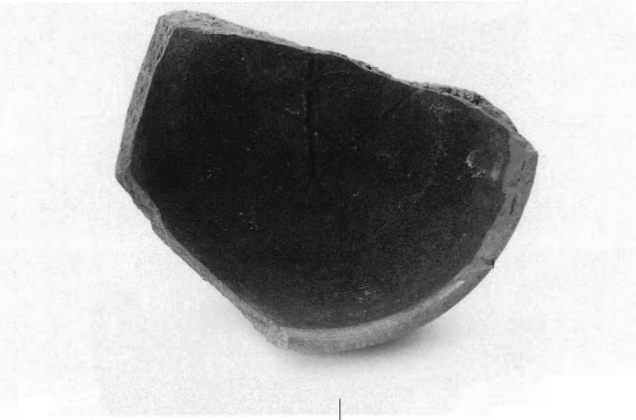
S204

写真図版一〇三　須恵器／坏

S205

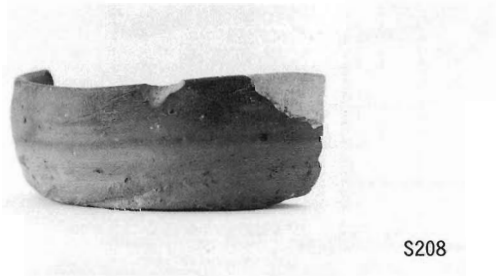
S211

S206



S207

S212


S208

S213

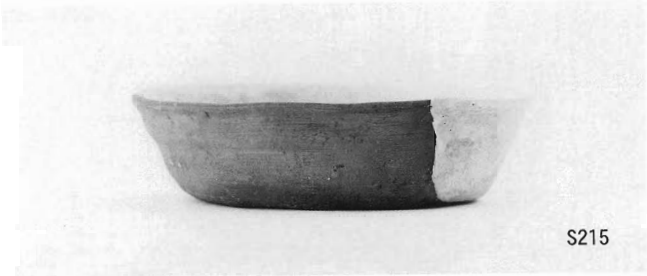
S209

S210

写真図版一〇四　須恵器／坏

S214

S220


S215

S221

S216

S222

S217

S223

S218

S224

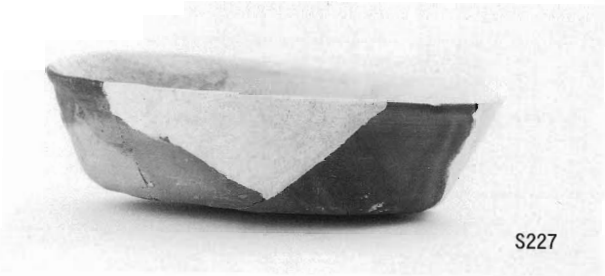
S219

S225

写真図版一〇五　須恵器／坏

S226

S232


S227

S233

S228

S234

S229

S235

S230

S236

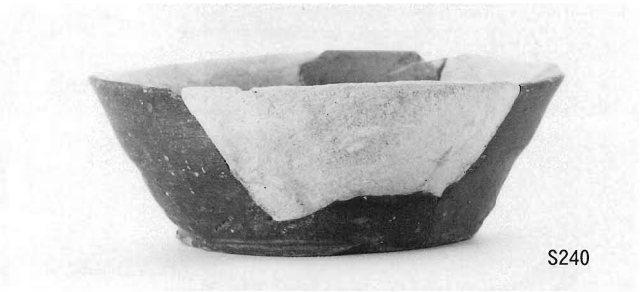
S231

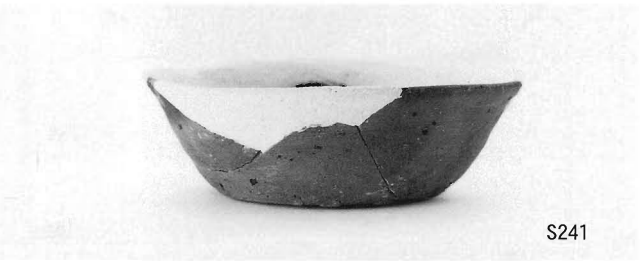
S237

写真図版一〇六　須恵器／坏

S238

S239


S240


S241

S242

S243

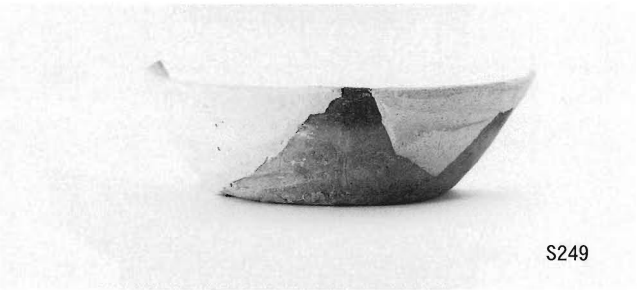
S244

S245

S246

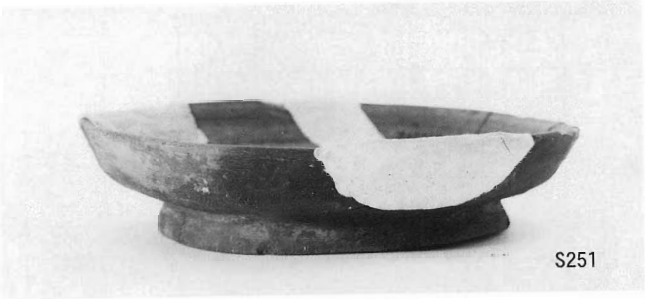
S247

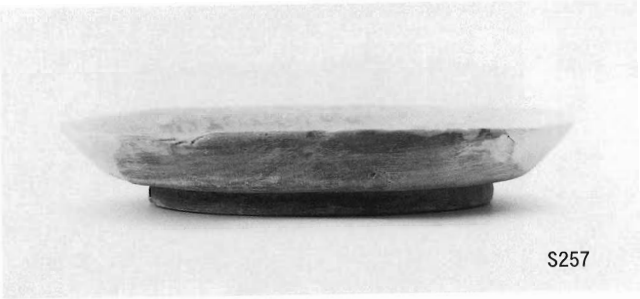
S248


S249

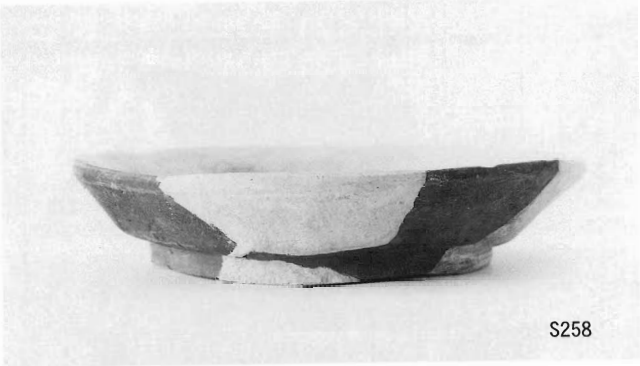
S250

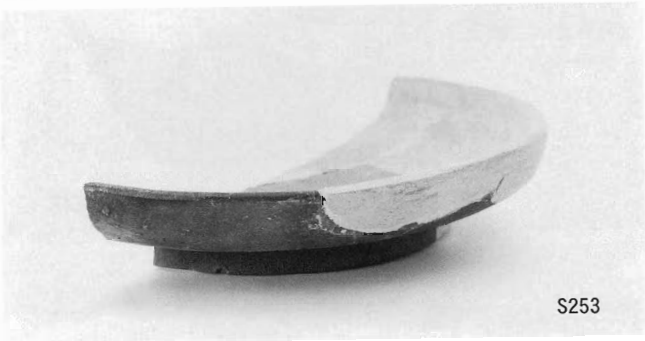
写真図版一〇七　須恵器／皿

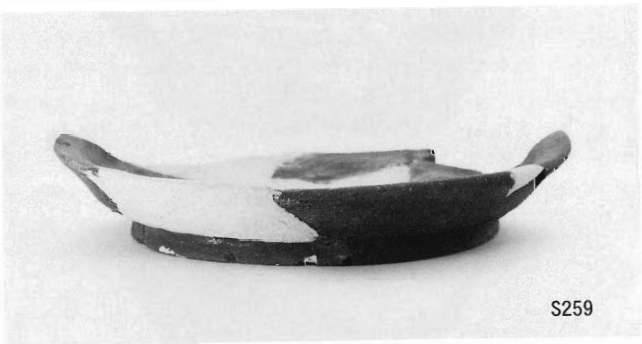

S251

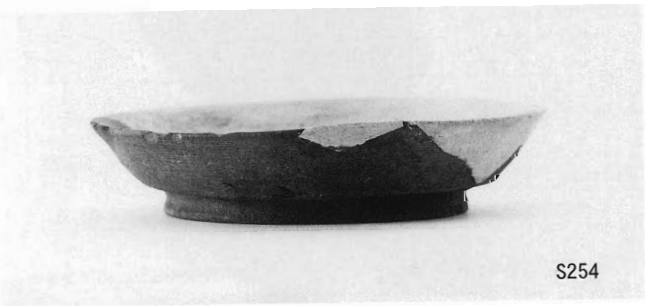

S257

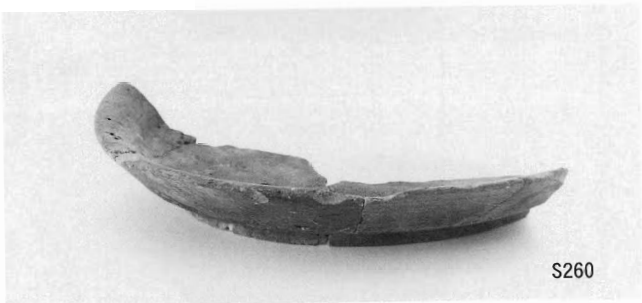
S252


S258


S253

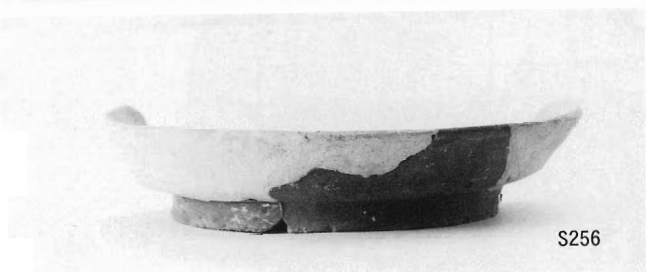

S259


S254


S260

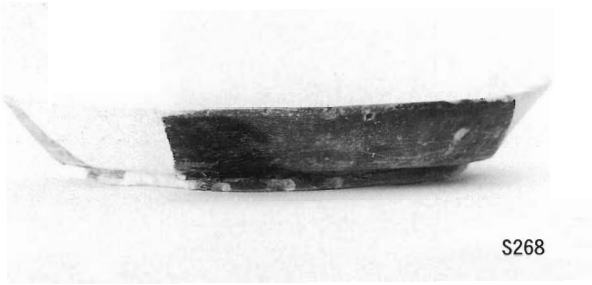
S255

S261


S256

S262

写真図版一〇八　須恵器／皿

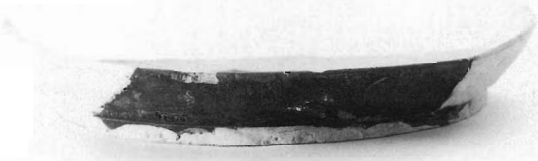

S268

S263

S269

S264

S270

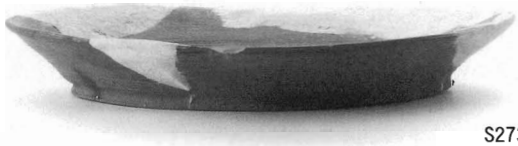

S265

S271

S266

S272

S267


S273

写真図版一〇九　須恵器／皿

S274

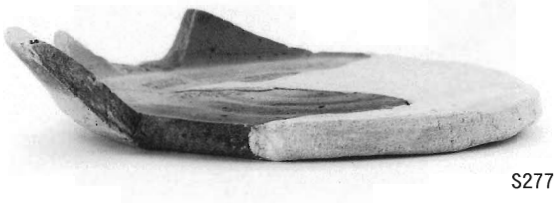
S280

S275

S281

S276

S282


S277

S283

S278

S284

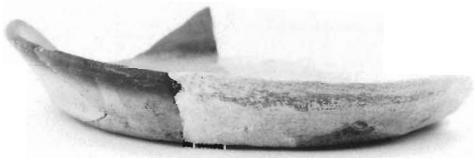
S279

S285

S286

S287

S288


S289

S290

S291

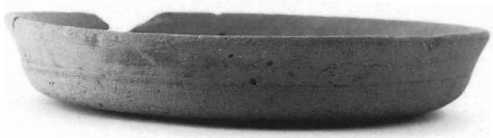
S292

S293

S294

S295

S296


S297

写真図版一一一　須恵器／皿・高坏

S298

S299

S300

S301

S302

S303

S304

S305

S306

写真図版一一二　須恵器／高坏

S307

S308

S309

S310

S311

S312

S313

S314

S315

写真図版一一三　須恵器／高坏

S316

S317

S318

S319

S320

S321

S322

S323

S324

写真図版一一四　須恵器／鉢

S325

S329

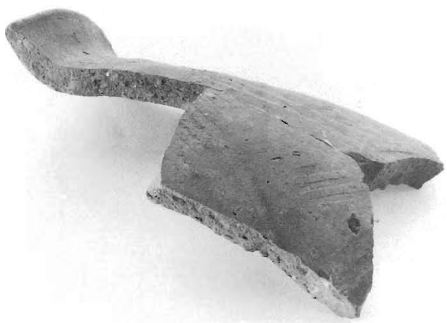
S326

S330

S327

S331

S328



S332

写真図版一一五　須恵器／甕

S333

S337

S334

S338

S335

S339

S336

写真図版一一六　須恵器／壺

S340

S345

S341

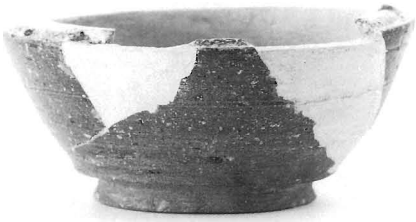
S346

S342

S347

S343

S348



S344

S349

写真図版一一七　須恵器／壺

S350

S351

S352

S353

S354

S355

S356

S357

S358

写真図版一一八　須恵器／壺

S359

S360

S361

S362

S363

S364

S365

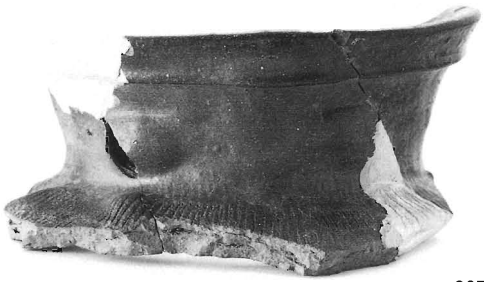
S366

写真図版一一九　須恵器／壺・甕

S367

S368

S369



S370

S371

S372

第２節　赤彩土師器（H001～H065）

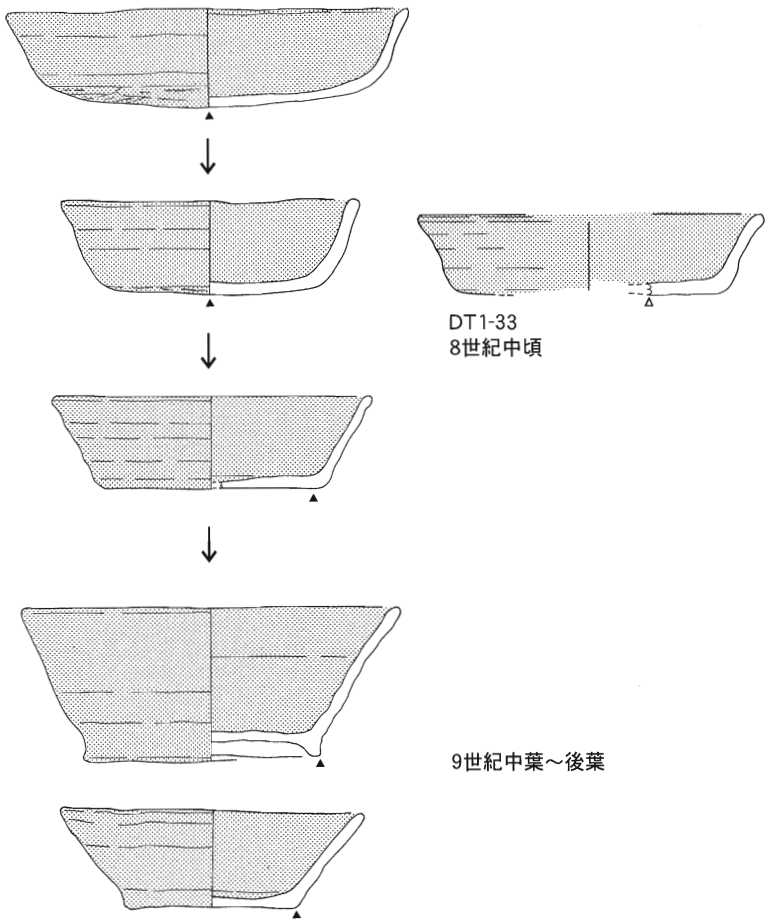
赤彩土師器の比率

赤彩土師器は器壁表面に赤色に発色する化粧土を塗布して赤い食器としたものであり、畿内系の土師器を範にとり在地で維持された技法によるものである。坏・皿は基本的にろくろ台を使用しない成形で、調整時に回転台による整形が加えられる。全体の成形は手捏ねあるいは型押しと粘土積みによっておこなわれるため、器形に歪みが大きく底部に切り離し痕などがない。器種は坏・皿の供膳具が大半であり、わずかに蓋が存在する。Ⅳ区５C層の４グリッド（20ｍ四方）で集計したところ、須恵器の供膳具（坏・蓋・皿）27.3kgに対して赤彩土師器7.4kgであった。その比率は3.7：１で、赤彩土師器が比較的稀少なものであったことを示す。

赤彩土師器は小片に破砕していることが多く、接合検討は完全なものでない。本節では器形が表現できるまで復元できた65点を図示掲載した。なお、図中のアミ掛けは赤彩を示し、▲は赤彩範囲の境界を示す。△は欠損があるため確認できうる赤彩範囲の限界を示している。

赤彩土師器の変化

本節で扱うものは遺構面を被覆した包含層からの出土であり、基本的に単一層に含まれていたもので層位的な区分ができない。須恵器で見る限り、この包含層中には７～9世紀末までの長い時間幅の遺物が含まれており、赤彩土師器についても当然ながらその時期がある程度異なるものが混在しているとみられる。そこで器種ごとに分類した上で、遺物自身の観察から時期差を示すと考えられる順に掲載した。坏と皿の区別であるが、有高台のものには口径が大きく器高が低い明確な皿が存在する。一方、無高台のものは皿と坏の器種分化が不明瞭で、これは特に後述する古い段階に顕著に見られる。



第96図　赤彩土師器・坏の変化と年代

蓋は少数のため変化の様子は明らかでない。坏・皿についてはおおまかな変遷傾向が明らかとなった。坏の変遷過程は、おおまかに以下の各要素の変化でとらえることが可能である。まず、①器形について、底部が丸味をもち、体部側面との境界が不明瞭につながるものから、底部が平坦で体部側面との境界がシャープに折れるものへと変化する。前者は口縁を外に折り外反する体部をもつが、後者は直線的に外へ開く。後者の器形は9世紀後半の須恵器坏の器形と類似するもので、関係がうかがえる。次に②底部赤彩の範囲について、底部全面、すなわち器壁全面を赤彩するものから、底部を赤彩しないものへ変化する。後者は正位に置いた状態では全面赤彩に見えるが、反転すると底面が露胎している。両者の変化は漸移的に起こる可能性があり、底部の縁近くまで赤彩が及ぶものが中間形態として存在する可能性があるが判然と区別できない。さらに③底部の調整が、全面ヘラ削りのものから指押さえ、ナデ仕上げのものに変化する。これは①の器形とも関連するもので、成形方法に起因する。すなわち、後者は底部をあらかじめ均一な厚みを整えた粘土円盤として準備し、その上に体部を積み上げることによって底部の調整が必要ない。

赤彩土師器の年代

こうした変化の方向性は、Ⅳ区の層序関係からも確認された。すなわち、遺構面に伴って形成された土器溜まり遺構（DT1、DT3）では古い様相のものに限定され、被覆土にある新しい様相のものが全く含まれない。土器溜まり遺構は8世紀中頃のものであり、赤彩土師器坏の年代の手がかりとなる。また、最も新しい様相を示すとみられるH063、H065などは、須恵器坏と共通の器形をなし、9世紀中葉～後葉の年代が考えられる。以上を総合すると、本節であつかう赤彩土師器は8世紀中頃～9世紀末の年代幅のなかでの変化を示すものと考えられる。

第31表　赤彩土師器　観察表①

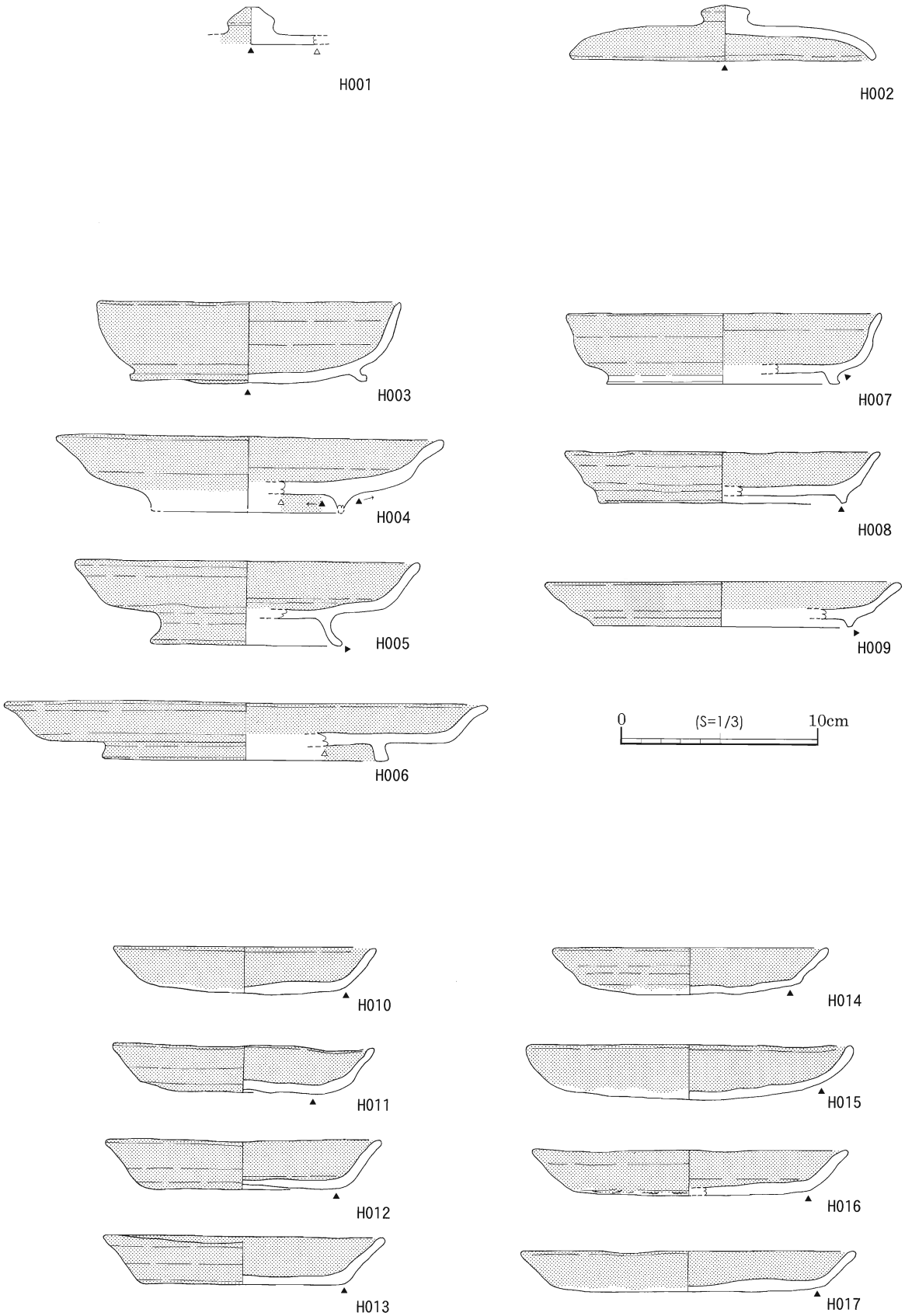
番号	器種	調査区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調整	色調	施文・備考
第97図											
H001	蓋	Ⅳ区	C20	5C層				宝珠つまみ 100%	内面：ナデ 外面：回転ナデ後ナデ	内外面：灰褐色1	赤彩
H002	蓋	Ⅰ区	D15	10層	(15.0)	(15.6)	2.8	全体の25%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：ナデ	内外面：橙褐色1	赤彩　宝珠つまみ
H003	皿	Ⅰ区	D14		(15.3)	(11.8)	4.2	全体の55%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、中央ナデ	内外面：灰褐色2	赤彩　底部外面の一部に黒斑
H004	皿	Ⅰ区	F16	9層	(19.6)			全体の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色1	赤彩（底部は部分的に白い部分がある）
H005	皿	Ⅳ区	A21	5B層	(17.2)	(9.6)	4.3	全体の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色2	赤彩
H006	皿	Ⅰ区	D14	9層	(24.2)	(14.0)	2.9	全体の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ（切り離し痕不明）	内外面：橙褐色1	赤彩
H007	皿	Ⅳ区	Y20	5C層	(16.0)	(11.6)	3.6	全体の20%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：桃色褐色2	赤彩
H008	皿	Ⅰ区	E14	精査土中	15.8	(12.2)	2.6	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色1	赤彩
H009	皿	Ⅰ区	C16	22層	(17.6)	(12.8)	2.3	口縁全周の 25%	内面：回転ナデ・ハケメ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色2	赤彩

第32表　赤彩土師器　観察表②

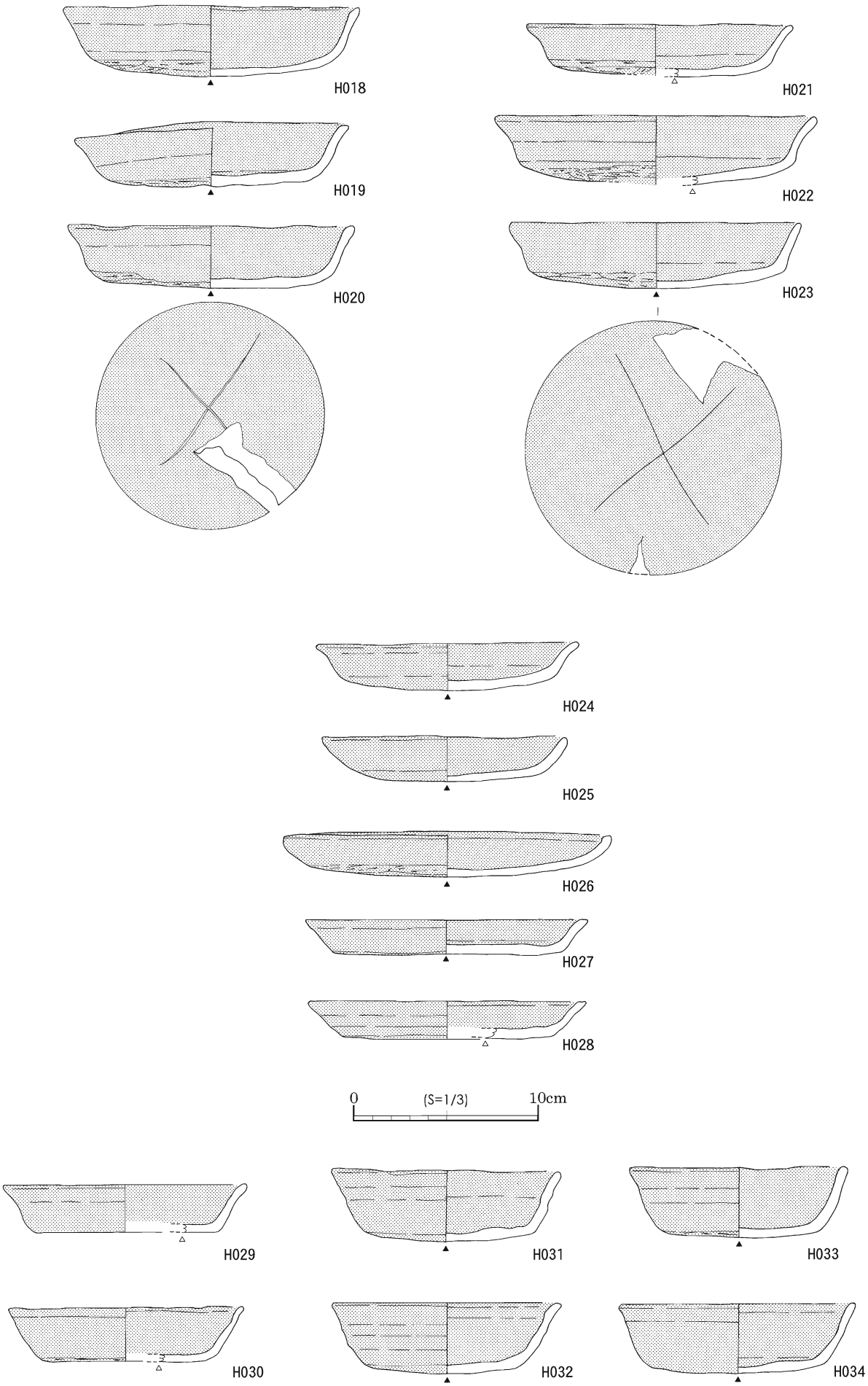
番号	器種	調査区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　　整	色　　調	施文・備考
H010	Ⅲ	Ⅰ区	G14	11層	13.2	10.2	2.5	全体の95%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色１	底部外面以外に赤彩
H011	坏	Ⅰ区			13.2	8.7	2.4	全体の75%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色１	赤彩
H012	Ⅲ	Ⅰ区	G14	10層	(13.7)	(10.0)	2.6	全体の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：灰褐色２	赤彩
H013	Ⅲ	Ⅰ区	G14	10層	14.0	10.6	2.4	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：橙褐色１	赤彩
H014	Ⅲ	Ⅳ区	C19	5C層	(13.8)	(11.0)	2.4	全体の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ・指押さえ	内外面：灰褐色１	赤彩
H015	Ⅲ	Ⅰ区	G15	11層	16.1	13.8	2.8	全体の60%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：灰褐色１	赤彩
H016	Ⅲ	Ⅳ区	Z20	5C層	(15.8)	(12.0)	2.4	全体の25%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色２	赤彩
H017	Ⅲ	Ⅳ区	A19	5C層	(16.8)	(14.0)	2.1	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ハケメ後ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色１	赤彩
第98図											
H018	Ⅲ	Ⅳ区	B17	5C層	(15.8)	(11)	3.8	全体の30%	内面：回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：灰褐色１	赤彩
H019	Ⅲ	Ⅳ区	B17	5C層	14.9	10.6	3.7	全体の80%	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色１	赤彩
H020	Ⅲ	Ⅰ区	G15	11層	15.2		3.5	全体の90%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色１	底部外面に線刻
H021	Ⅲ	Ⅳ区	B17	5C層	(14.2)	11.9	2.9	全体の30%	内面：回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：灰褐色２	赤彩
H022	Ⅲ	Ⅳ区	B17	5C層	(17.2)	(15.0)		全体の25%	内面：回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：灰褐色２	赤彩
H023	Ⅲ	Ⅰ区	G15	11層	15.6	13.5	3.65	全体の85%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：桃褐色１	赤彩　底部外面に線刻
H024	Ⅲ	Ⅰ区	E15	32層	(20.0)	(11.6)	2.5	全体の45%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：橙褐色４	
H025	Ⅲ	Ⅰ区	G14	11層	12.8	9.7	2.5	全体の95%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ケズリ	内外面：橙褐色１	赤彩　全体に歪みあり
H026	Ⅲ	Ⅳ区	C18	5C層	17.4	15	2.5	全体の60%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色１	赤彩
H027	Ⅲ	Ⅳ区	C20	5C層	(15.0)	(12.4)	1.9	全体の20%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色１	赤彩
H028	Ⅲ	Ⅳ区	B20	5C層	(14.8)	(11.4)	2.0	全体の20%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：灰褐色２	赤彩
H029	Ⅲ	Ⅳ区	C20	5C層	(13.0)	(9.7)	2.6	全体の20%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：灰褐色１	赤彩
H030	坏	Ⅰ区	E16	精査土中	(12.6)	(8.0)	3.0	全体の45%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色２	赤彩
H031	坏	Ⅰ区	G14	11層	12.2	9.0	3.9	全体の90%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ・指頭圧痕残る/外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色１	赤彩
H032	坏	Ⅰ区	G14	11層	12.2	8.0	3.9	全体の95%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り	内外面：橙褐色１	赤彩
H033	坏	Ⅰ区	G14	11層	11.6	8.2	3.9	全体の90%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：灰褐色１	赤彩
H034	坏	Ⅰ区	G14	11層	12.6	9.2	4.8	全体の95%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色１	赤彩

第33表　赤彩土師器　観察表③

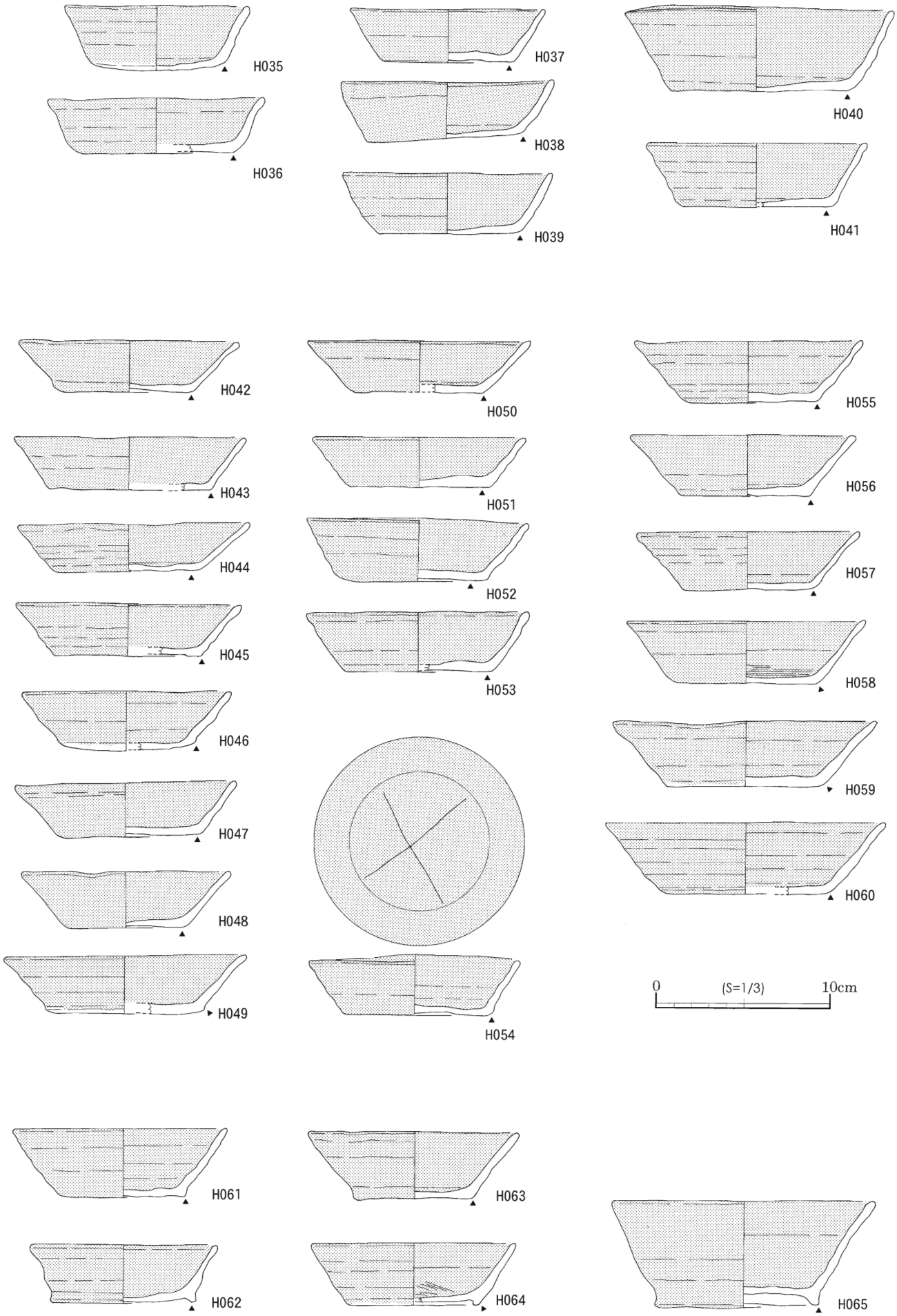
番号	器種	調査区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調整	色調	施文・備考
第99図											
H035	坏	Ⅰ区	D15	34層	(10.4)	(7.6)	3.75	全体の35%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色1	赤彩　口縁部内面の一部に黒斑
H036	坏	Ⅳ区	C19	5C層	(12.2)	(8.8)	3.2	全体の25%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色1	赤彩
H037	坏	Ⅰ区	D16	ピットQ050	(10.8)	(7.3)	3.0	全体の25%	内面：体部回転ナデ・ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色1	赤彩
H038	坏		F16	10層	(12.1)	8.8	3.7	全体の60%	内面：体部回転ナデ、見込ハケメ後ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ、指押さえ	内外面：灰褐色1	赤彩　内面見込のハケメが明瞭に残る。外面一部黒斑
H039	坏	Ⅰ区	E16		(12.0)	(8.0)	3.5	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色3	赤彩
H040	坏	Ⅰ区	F13	9層	(15.2)	10.0		全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色1	
H041	坏	Ⅰ区	D15	9層	(12.4)	(8.0)	3.65	全体の30%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色1	赤彩
H042	坏	Ⅳ区	B19	5C層	12.4	7.9	3.0	全体の60%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：橙褐色1	赤彩
H043	坏	Ⅳ区	B19	5C層	13.0	(9.2)	3.1	全体の45%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色	赤彩
H044	坏	Ⅳ区	B19	5C層	13.2	8.0	2.8	全体の60%	内面：体部回転ナデ、見込ハケメ後ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色1	
H045	坏	Ⅰ区	E14	34層	(12.6)	(8.3)	3.0	全体の30%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色1	赤彩
H046	坏	Ⅳ区	Z20	5C層	(11.8)	(7.7)	3.4	全体の40%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：桃褐色1	赤彩
H047	坏	Ⅳ区	B20	5C層	(12.4)	7.8	3.1	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：灰褐色2	赤彩
H048	坏	Ⅰ区	F13	43層	(11.8)	(6.4)	3.3	全体の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：桃褐色1	赤彩　内外面一部に黒斑
H049	坏	Ⅳ区	A20	5B層	(13.8)	9.0	3.4	全体の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：灰褐色2	赤彩
H050	坏	Ⅳ区	Z20	5C層	(12.5)	(7.2)	3.0	全体の25%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ケズリ後ナデ	内外面：橙褐色1	赤彩
H051	坏	Ⅳ区	A19	5C層	(12.0)	(8.0)	2.9	全体の25%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰白色	赤彩
H052	坏	Ⅳ区	C20	5C層	12.5	8.4	3.7	全体の60%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色1	赤彩　かなりの歪みあり
H053	坏	Ⅰ区	D15	精査土中	12.4	8.0	3.4	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：橙褐色1	赤彩
H054	坏	Ⅰ区	D15	24層	12.0	8.0	3.5		内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：灰褐色1	赤彩　底部内面に線刻
H055	坏	Ⅳ区	A20	5C層	(13.0)	7.4	3.6	全体の40%	内部：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色3	赤彩
H056	坏	Ⅳ区	A19	5C層	(13.4)	(7.4)	3.6	全体の60%	内面：体部回転ナデ、中央ハケメ後ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：橙褐色4	赤彩　外面黒斑
H057	坏	Ⅳ区	Z20	5C層	12.5	7.5	3.3	全体の60%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色1	赤彩
H058	坏	Ⅳ区	Z20	5C層	(13.5)	8.0	3.6	全体の70%	内面：ハケメ後回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色2	赤彩　内面のハケメは明瞭
H059	坏	Ⅳ区	A19	5C層	14.8	(8.8)	3.7	全体の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	内外面：橙褐色1	赤彩（剥落によりほぼ色落ち）
H060	坏	Ⅳ区	Z20	5C層	(16.0)	(9.0)	4.1	全体の25%	内面：体部回転ナデ、見込ハケメ後ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：橙褐色1	赤彩
H061	坏	Ⅳ区	Z20	5C層	(12.2)	7.0	4.0	全体の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：桃橙色1	赤彩
H062	坏	Ⅰ区	E16		(10.8)	(8.0)	3.3	全体の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指押さえ	内外面：橙褐色2	赤彩
H063	坏	Ⅳ区	Z20	5C層	(11.9)	6.9	3.95	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ハケメ後ナデ	内外面：灰褐色3	赤彩
H064	坏	Ⅳ区	C20	5C層	(11.4)	(7.4)	3.6	全体の20%	内面：ハケメ後回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：橙褐色1	赤彩　内面のハケメは明瞭
H065	坏	Ⅳ区	Y20	5C層	15.0	9.4	6.2	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色1	底部を除き全面赤彩。かなりの歪みあり



第97図　赤彩土師器実測図①



第98図　赤彩土師器実測図②



第99図　赤彩土師器実測図③

写真図版一二〇　赤彩土師器

H001

H002

H003

H004

H005

H006

H007

H008

H009

H010

H011

H012

H013

H014

H015

H016

H017

写真図版一二一　赤彩土師器

H018

H020

H021

H022

H023

H024

H025

H026

H027

H028

H029

H030

H031

H032

H033

H034

H035

H036

H037

写真図版一二三　赤彩土師器

H038

H047

H039

H048

H040

H049

H041

H050

H042

H051

H043

H052

H044

H053

H045

H054

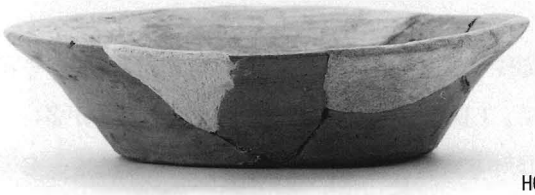
H046

H055

写真図版一二三　赤彩土師器

H056

H058


H059

H060

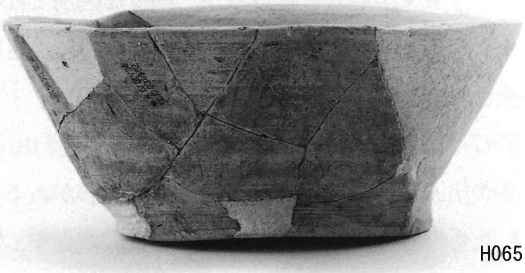
H061

H057

H062

H063

H064


H065

第３節　土師器煮炊具（Ｈ066～Ｈ104）

器種と比率

煮炊調理に使用される土師器の甕、甑、移動式竈、土製支脚を併せて土師器煮炊具として本節で扱う。Ⅳ区の包含層５C層で、４グリッド（20ｍ四方、400㎡）の集計をおこなったところ、須恵器79.1kg、赤彩土師器7.4kgに対して土師器煮炊具は93.9kgであった。当遺跡では一般村落遺跡に比較して須恵器供膳具の比率が高いのが特徴であるが、土師器煮炊具はそれ以上に多い。このうち、移動式竈と甑が16.3kg含まれていた。甕として分類したものが圧倒的に多いが、体部破片の場合判断が難しく、この比率は確実なものでない。

当遺跡では大量の土器が出土しているため、土師器煮炊具の接合検討は十分に行えていない。口縁部を中心に残存状態が良いものを選別し、それらの復元作業に努めた。結果として甕22点、甑3点、移動式竈３点、土製支脚11点を図示掲載している。

甕の特徴と傾向

H066～H087は甕である。いずれもくの字形の単純口縁で、成形・調整方法が共通する。内部は頸部以下を粗く削って器壁を薄く仕上げ、頸部には削り境界の明瞭な稜がつく。口縁は横ナデされひずみを持つものが多い。外面体部は縦方向のハケメで仕上げられる。底部まで残存する良好な資料が無いが、胴部は張りが小さく、なで肩の器形をなす。焼成時黒斑と判別しにくいものを含め、概して使用に伴う外面の煤付着が認められ、直接火にかけられた痕跡を持つものが多い。法量は口径20～25㎝の小型もの、30㎝弱の中型のもの、38㎝前後の大型のものという分化が見受けられるが、明瞭な区別ではない。用途に応じた使い分けが当然想定されるものの規格性はなく、胎土や焼成、器形にも個体差が非常に大きい。必要に応じて様々な製作者が関わった多元的な生産体制が反映されるものである。

H087はほぼ完形で出土したもので、口縁径48.0㎝、器高33.2㎝と非常に大型である。外面に煤や二次加熱による酸化赤斑が認められ、使用された痕跡がある。その容量は通常の甕の５～10倍近くあり、多量の調理を目的としたものと考えられる。集団での共同飲食や、官衙における給食支給などの背景が想起されるもので注目される。特に出土状況に有意な記録は残されていない。

甑・移動式竈の特徴

甑は３点を図示した。２箇所の把手をもつ小型球胴のもの（H088とH089）と、外開きの把手の無いもの（H090）がある。これらが８世紀後半～９世紀という出土包含層の年代と合致するかどうか不確実である。H090は底部まで残存しており、２箇所の桟孔が向き合った位置に設けられる。

移動式竈は破片が多数出土したものの、図示できるものが少なかった。H091は構造のわかる唯一のものである。口径33㎝ほどと小型のものである。

土製支脚の特徴

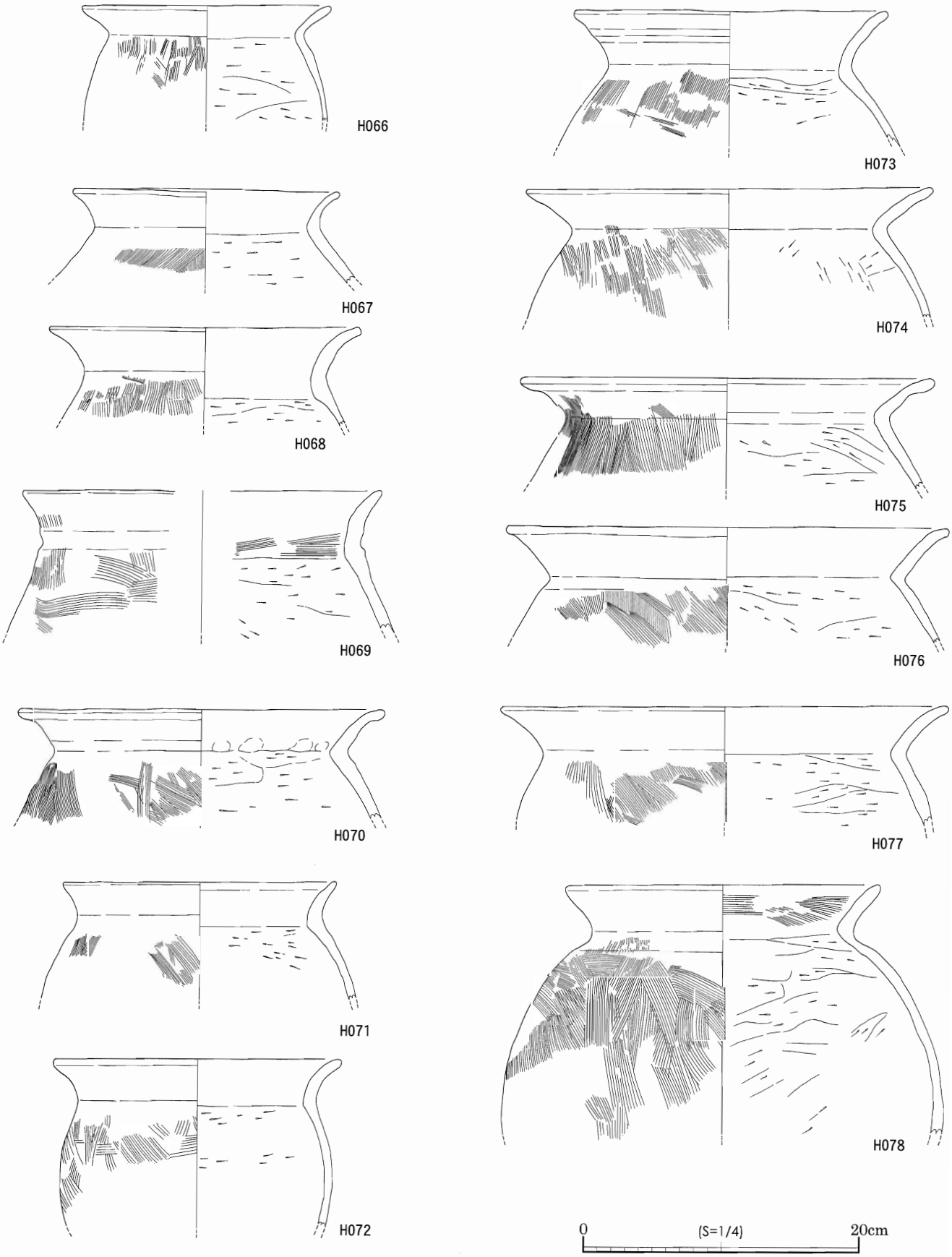
土製支脚は11点を掲載した。持ち手の構造に各種ある。背面から全面まで円孔が貫通するもの（H094～H098）、背面に突起を設けるもの（H099～H104）に大別され、後者は突起の形状、突起内孔の有無などで細別される。このような形態の差異は時期や地域によって変化し、集団帰属を反映して分布範囲が変化するという意見もあるが、当遺跡での状況は同一包含層に様々な形態のものが混在している。時期幅は短いにも関わらず、このように多様な形態が混在していることは、調理器具の形態が固有文化的に排他的分布をするとは必ずしも言えないことを示す。土製支脚の画一性が高いか低いかは、当然ながら遺跡の性格を反映するものであり、期間の短い遺跡で独立性が高い集落であるほど先のような議論が成り立つが、実際はそれほど画一的なものではない。

第34表　土師器煮炊具　観察表①

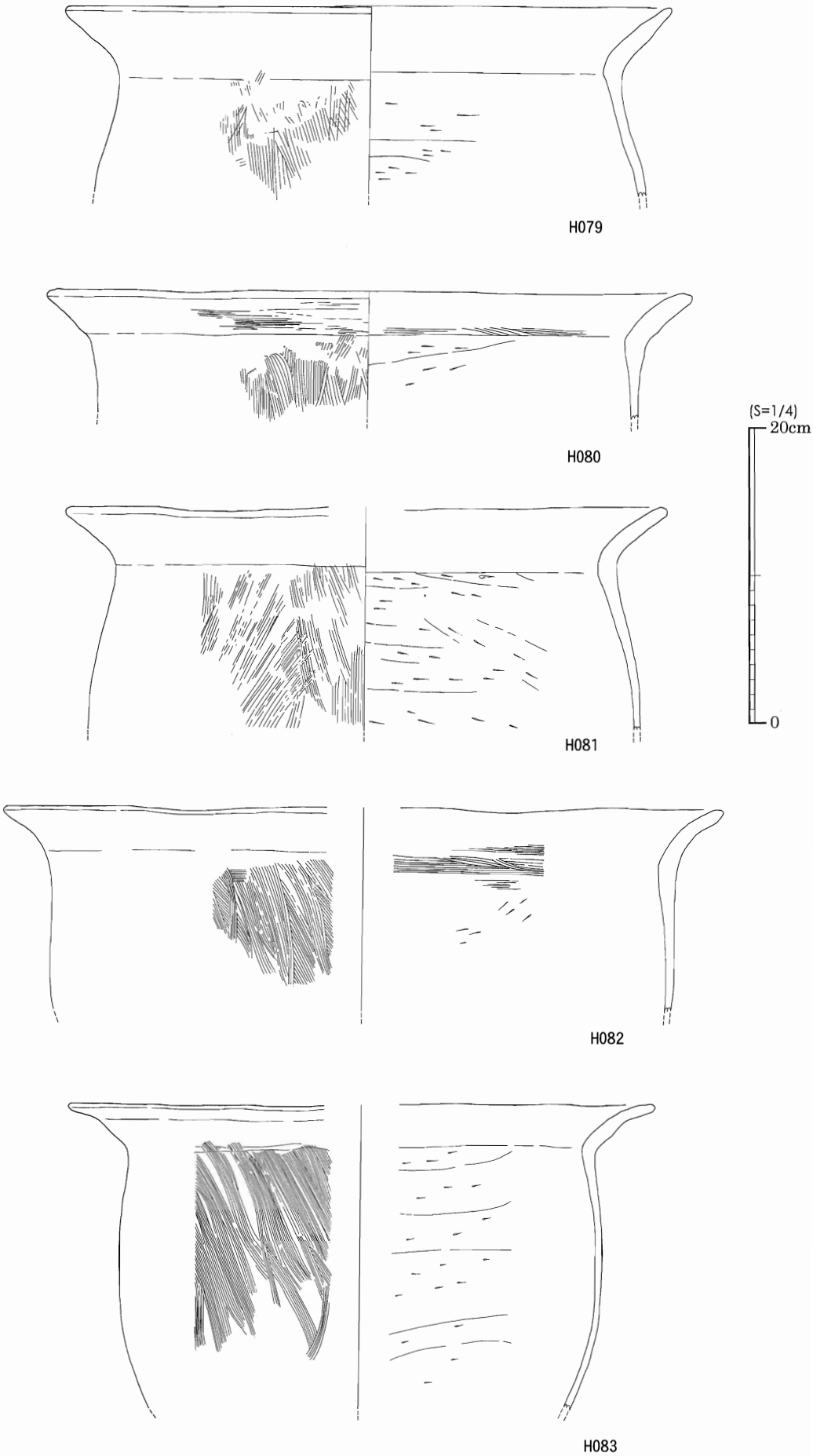
番号	器種	調査区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　　整	色　　調	施文・備考
第100図											
H066	甕	Ⅳ区	A19	5C層	(17.8)			口縁全周の25%	内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内外面：桃褐色１	外面に煤付着
H067	甕	Ⅰ区	F16	9層	20.2			口頸全周の70%	内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内外面：桃褐色１	外面の一部に黒斑
H068	甕	Ⅰ区	E14	9層	22.2			口縁全周の50%	内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内外面：灰褐色３	内外面に黒斑
H069	甕	Ⅰ区	F16	9層	(25.8)			口縁全体の20%	内面：口縁部ハケメ後ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内外面：桃褐色１	歪みあり
H070	甕	Ⅰ区	C16	10層	(26.0)			口縁全周の40%	内面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕残る、頸部ケズリ 外面：口縁部ナデ、頸部ナデ後ハケメ	内外面：灰褐色２	外面口縁部に煤付着
H071	甕	Ⅰ区	G15	11層	(19.8)			口縁全周の40%	内面：回転ナデ、ケズリ 外面：回転ナデ、ハケメ	内面：灰褐色３ 外面：桃褐色２	
H072	甕	Ⅰ区	E16	10層	(20.6)			口縁全周の50%	内面：口縁部回転ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：橙褐色１	
H073	甕	Ⅳ区	Y21	7層	(22.4)			口縁全周の25%	内面：口縁部ナデ、肩部ケズリ 外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ	内面：桃褐色１ 外面：橙褐色１	
H074	甕	Ⅰ区	E15	33層	(29.1)			口縁全周の25%	内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内外面：灰褐色２	
H075	甕	Ⅳ区	B21	51層	(29.2)			口縁全周の25%	内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内面：橙褐色１ 外面：橙褐色３	
H076	甕	Ⅳ区	Y21	6層	(31.6)			頸部全周の20%	内面：口縁部回転ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：橙褐色１	外面に黒斑
H077	甕	Ⅰ区	G13	10層	(32.0)			口縁全周の20%	内面：口縁部回転ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：橙褐色１	内面に煤付着
H078	甕	Ⅰ区	F16	9層	(22.4)			口縁全周の25%	内面：口縁部ハケメ後ナデ、胴部ケズリ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内面：灰褐色２ 外面：灰褐色３	外面に煤付着
第101図											
H079	甕	Ⅳ区	B17	５C層	40.1			口縁～頸部全周の90%	内面：ナデ、頸部以下ケズリ 外面：ハケメ	内外面：橙褐色４	外面煤付着
H080	甕	Ⅳ区	B19	５C層	(42.0)			口縁全周の25%	内面：口縁部回転ナデ、頸部ハケメ後ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内面：灰褐色２	外面にかなり煤付着
H081	甕か	Ⅳ区	E14	9層	(39.0)			口縁全周の80%	内面：口縁部回転ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：灰褐色２	かなり歪みあり 外面に黒斑
H082	甕	Ⅳ区	B19	５C層	(47.4)			口縁全周の10%	内面：口縁部ハケメ後回転ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：灰褐色３	内面に煤付着
H083	甕	Ⅰ区	E14		(38.6)			口縁全周の25%	内面：口縁部回転ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：灰褐色３	外面に煤付着
第102図											
H084	甕	Ⅳ区	B19	５C層	(38.8)			口縁全周の30%	内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ後回転ナデ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：橙褐色１	内面に煤付着
H085	甕	Ⅰ区	F17	10層	(28.8)			口縁全周の25%	内面：口縁部回転ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部回転ナデ、胴部ハケメ	内外面：灰褐色５	
H086	甕	Ⅳ区	C20	5C層	(38.0)			頸部全周の15%	内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内外面：橙褐色１	内外面に黒斑
H087	甕	Ⅰ区	G14	１１層	48.0		33.2	全体の95%	内面：口縁～胴部上半ハケメ後ナデ 外面：口縁部ナデ、頸部～胴部ハケメ	内面：橙褐色１ 外面：橙褐色２	
第103図											
H088	甑				(26.6)			口縁全周の20%	内面：口縁回転ナデ、頸部指頭圧痕残る、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ、持ち手指ナデ	内外面：灰色１	外面に煤付着
H089	甑か	Ⅳ区	A19	５C層				体部10%	内面：回転ナデ、胴部ケズリ 外面：ハケメ、取手部ナデ	内外面：橙褐色１	外面一部に煤付着
H090	甑	Ⅰ区	F13	9層	(29.2)		24.4	全体の50%	内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ 外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	内面：桃褐色１ 外面：橙褐色１	胴部外面の一部に黒斑
H091	竈	Ⅳ区	B17	5A層	(33.5)			口縁～頸部全周の90%	内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ 外面：口縁部ナデ、体部ハケメ・ナデ 底部：ナデ	内面：橙褐色３ 外面：橙褐色４	
H092	竈	Ⅳ区	A21	５C層				底部45%	内面：ケズリ、ナデ、指頭圧痕 外面：ナデ、ハケメ	内外面：灰褐色３	

第35表　土師器煮炊具　観察表②

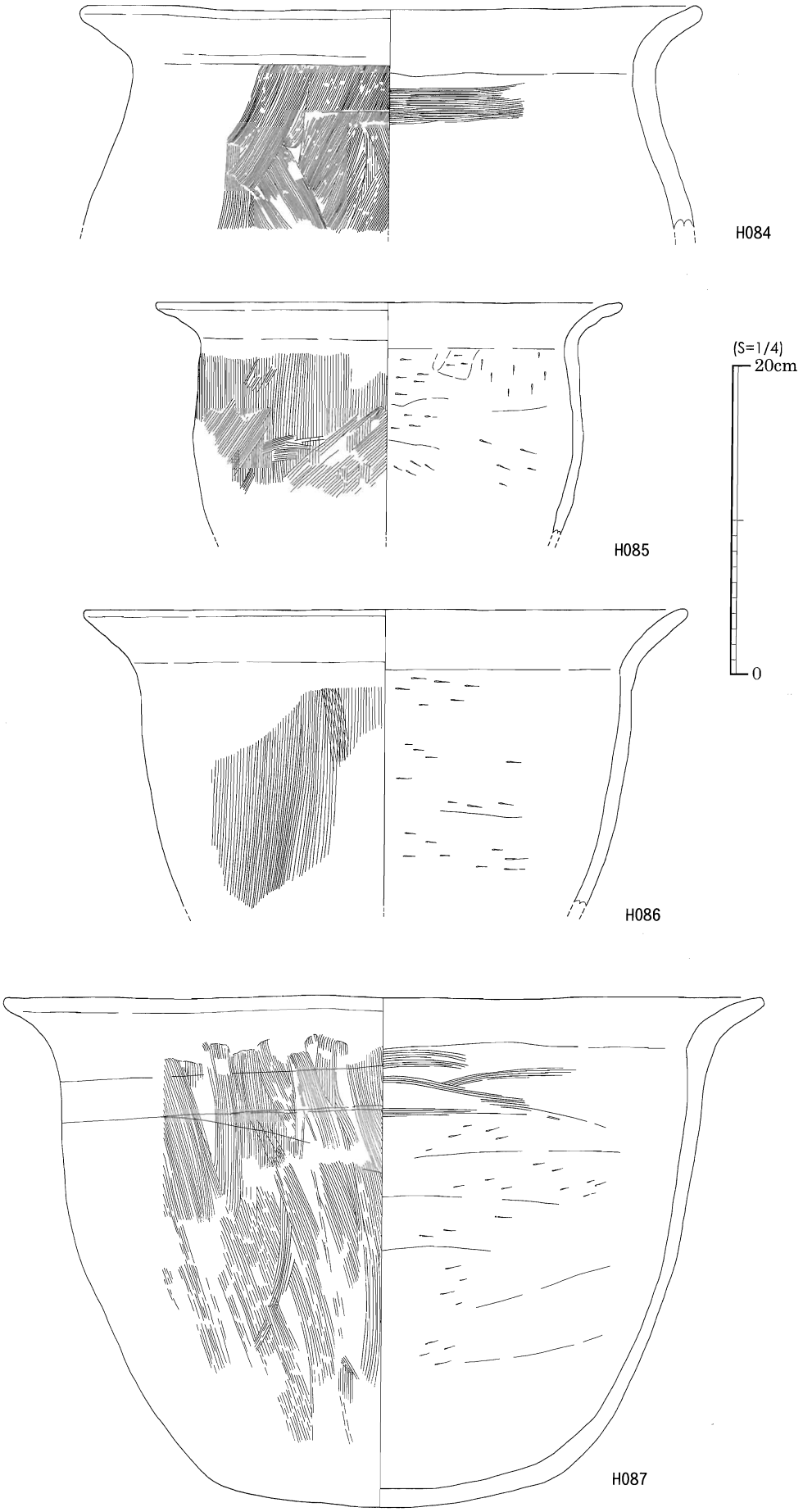
番号	器種	調査区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　　整	色　調	施文・備考
H093	竈	Ⅳ区	Z20	5C層				底部20%	内面：ケズリ、ナデ/外面：ナデ、ハケメ	内外面：灰褐色3	外面の一部に黒斑
第104図											
H094	支脚	Ⅰ区	E15	10層			16.0	全体の80%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	二方向突起　胴部に貫通孔
H095	支脚	Ⅳ区	A20	7層				全体の80%	全面：ナデ、指押さえ、ハケメ後ナデ	全面：灰褐色2	二方向突起　外面の一部に黒斑
H096	支脚	Ⅰ区	E15	35層				全体の90%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	二方向突起　胴部に貫通孔
H097	支脚	Ⅰ区	F13	10層				全体の80%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	二方向突起　胴部に貫通孔
H098	支脚	Ⅳ区	B18	5C層				全体の60%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	二方向突起　胴部に貫通孔
第105図											
H099	支脚	Ⅰ区		Y1層			16.2	全体の90%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	二方向突起
H100	支脚	Ⅳ区	C18	5C層				全体の65%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	二方向突起
H101	支脚	Ⅳ区	Z21	5C層				全体の70%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	三方向突起　底部の一部に黒斑
H102	支脚	Ⅳ区	A18	5C層				全体の50%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色3	三方向突起　背面の突起は輪状　突起の一部に黒斑
H103	支脚	Ⅳ区	C19	5C層				全体の50%	全面：ナデ、指押さえ	全面：灰褐色3	三方向突起　背面の突起はヒレ状　胴部の一部に黒斑
H104	支脚	Ⅳ区	B18	5C層				全体の40%	全面：突起部ハケメ後ナデ・指押さえ、胴部ナデ、指押さえ	全面：灰褐色2	三方向突起　背面の突起は輪状



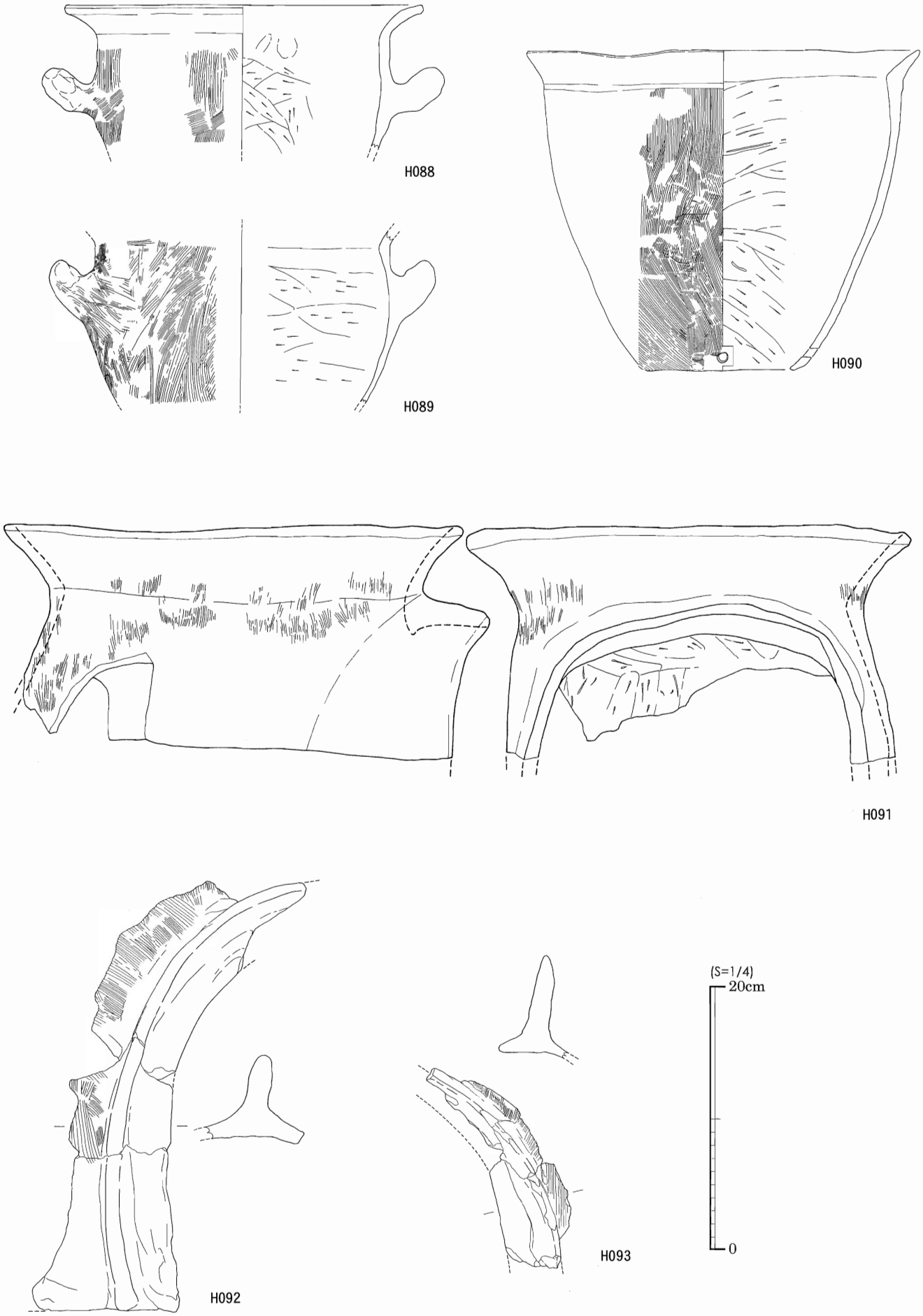
第100図　土師器煮炊具実測図①



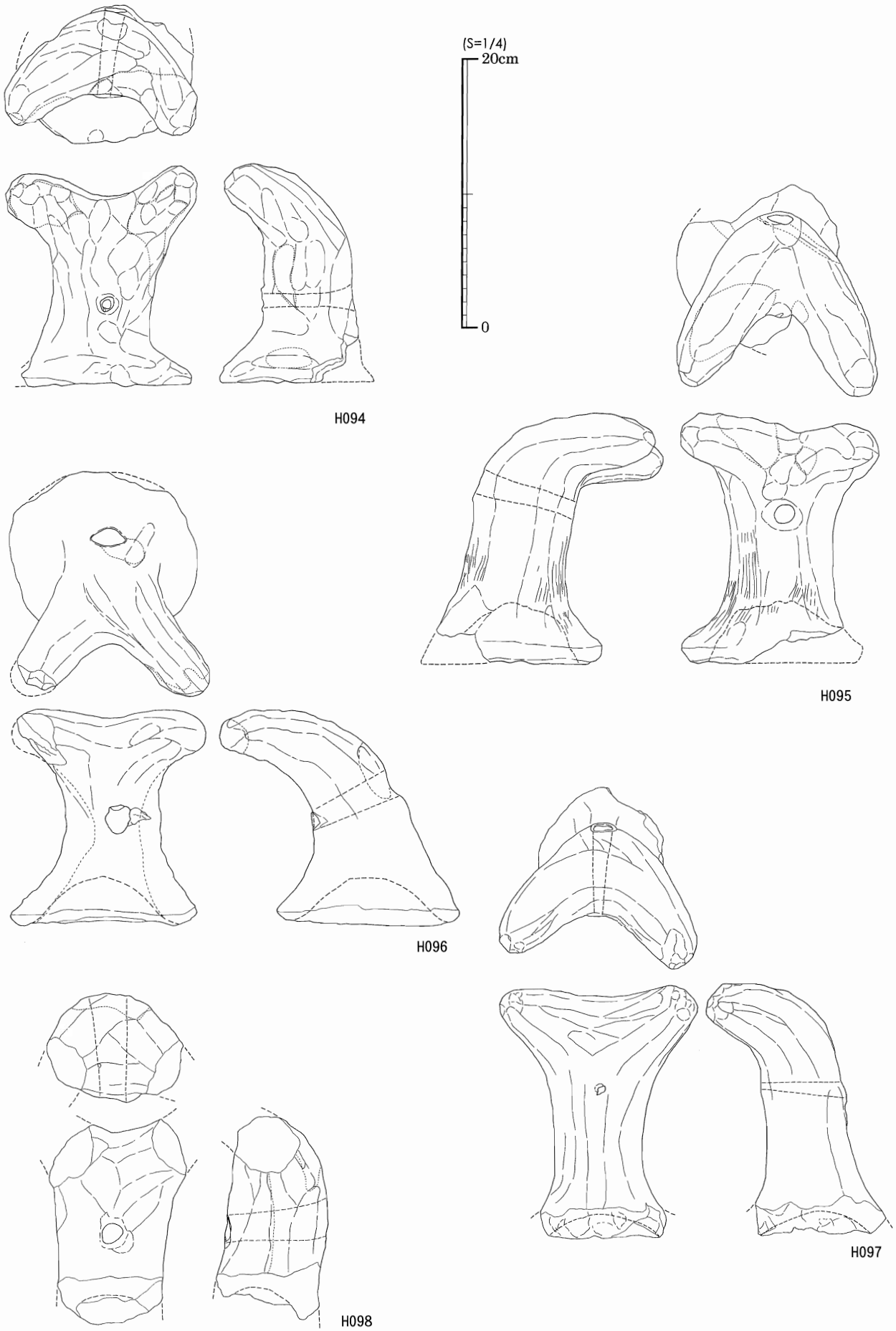
第101図　土師器煮炊具実測図②



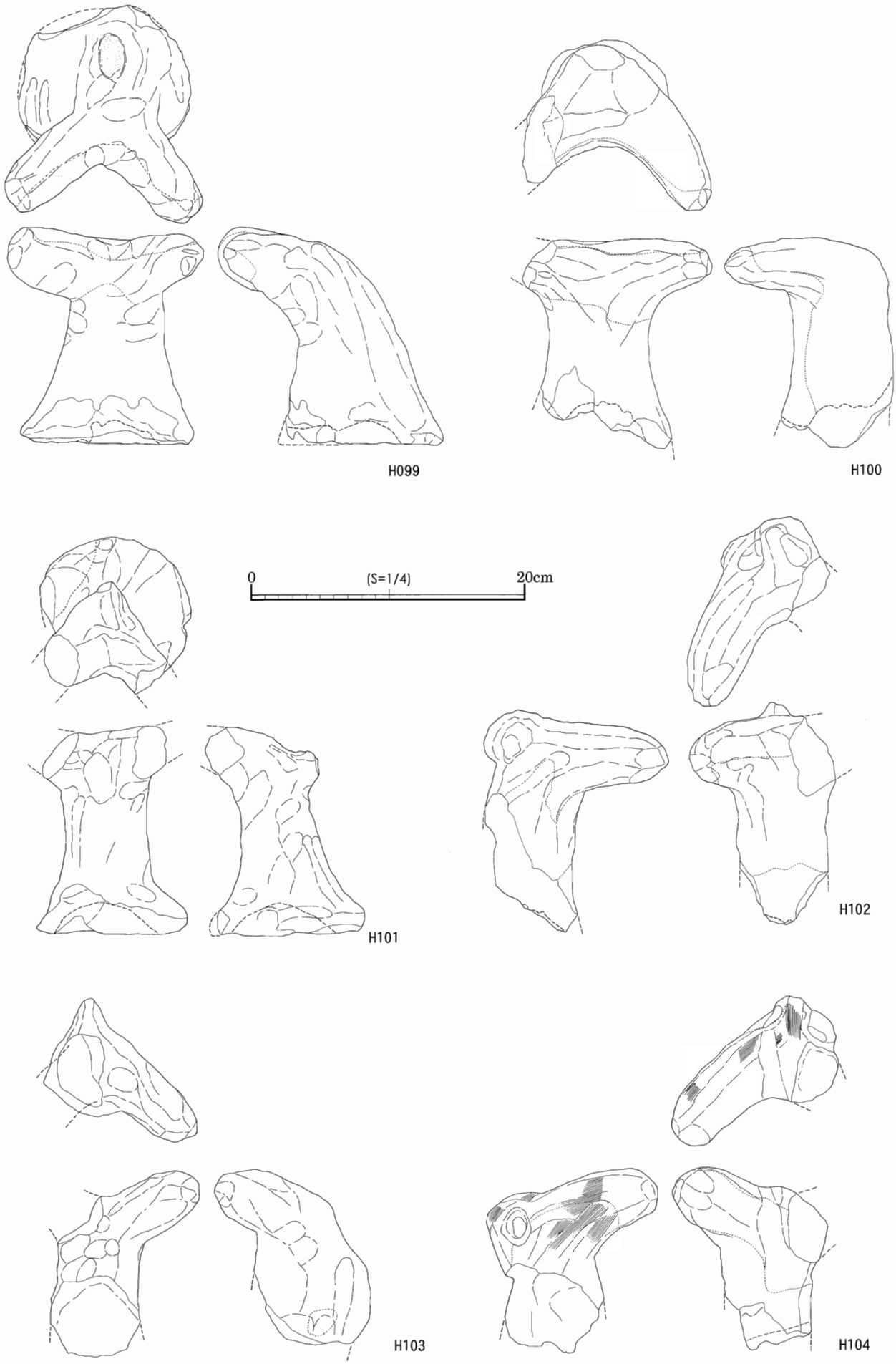
第102図　土師器煮炊具実測図③



第103図　土師器煮炊具実測図④

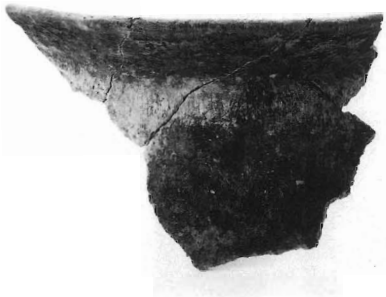


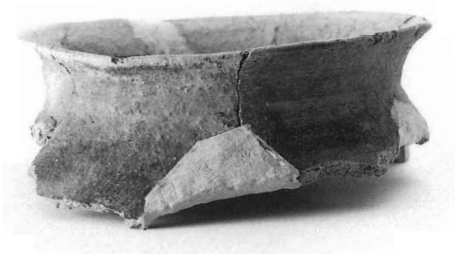
第104図　土師器煮炊具実測図⑤



第105図　土師器煮炊具実測図⑥

写真図版一二四　土師器煮炊具／甕

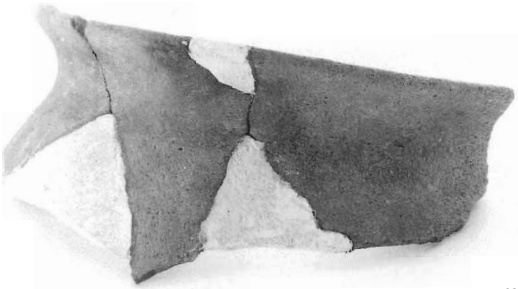

H066

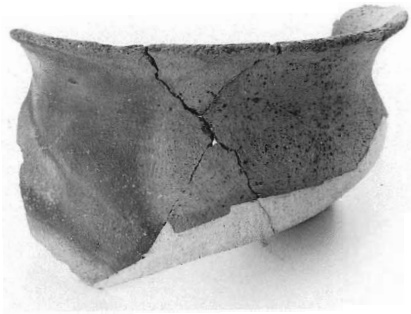

H067

H068

H069

H070


H071


H072

H073

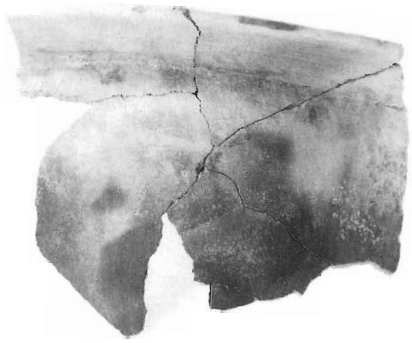
H074

H075

H076

写真図版一二五　土師器煮炊具／甕

H077



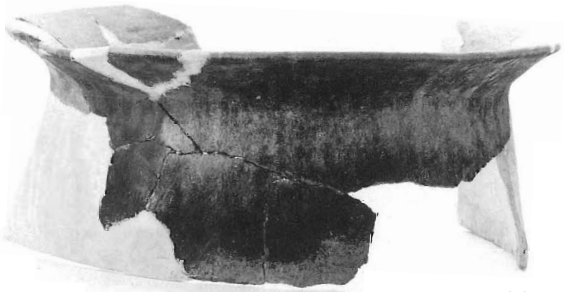
H083

H078

H084

H080

H085



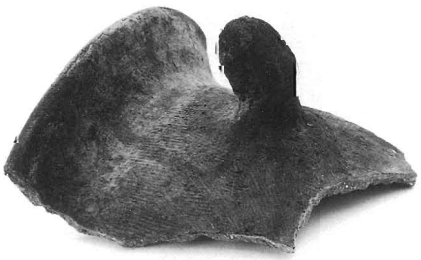
H081

H086

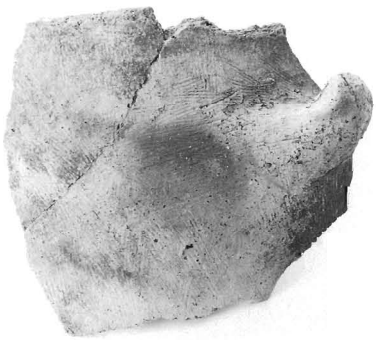
H082

写真図版一二六　土師器煮炊具／甕・甑・移動式竈

H087



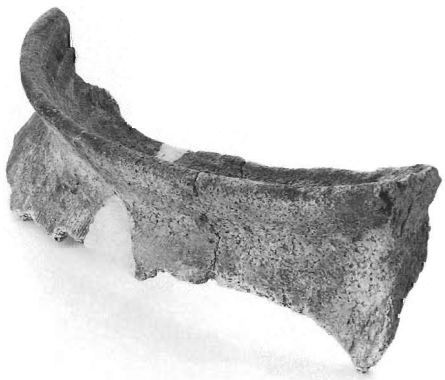
H088



H089

H090

H091



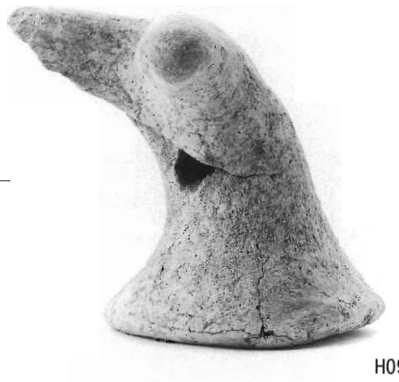
H092

H093

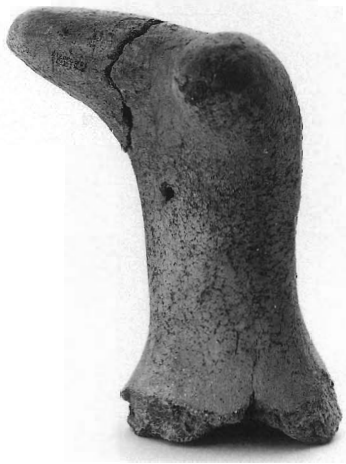
写真図版一二七　土師器煮炊具／土製支脚

H094

H095



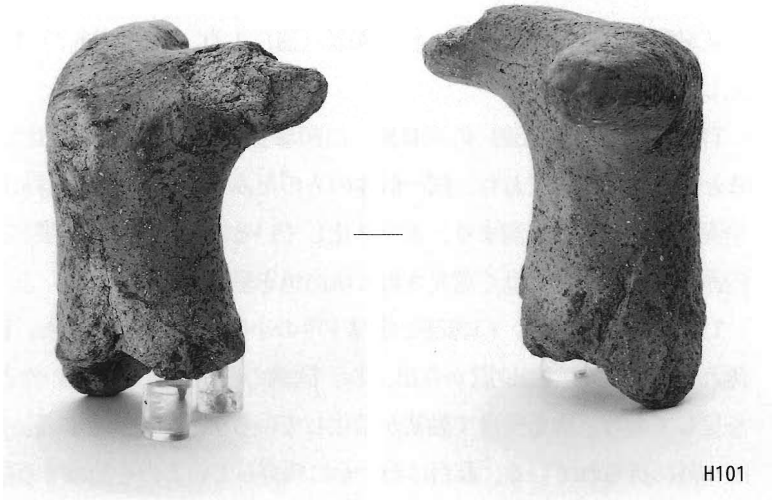
H096



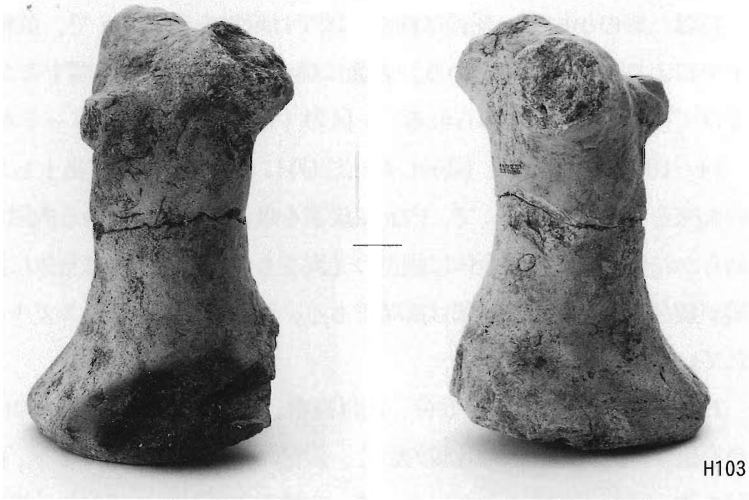
H097

写真図版一二八　土師器煮炊具／土製支脚

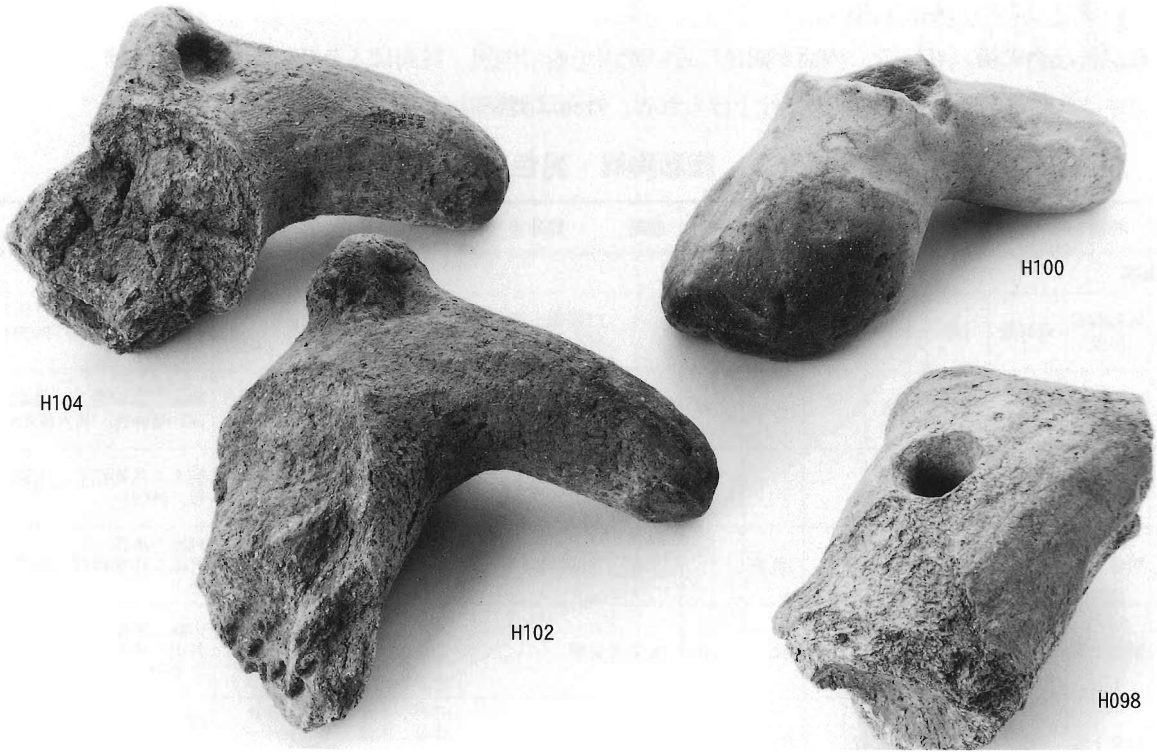
H099



H101



H103



H104

H100

H102

H098

第４節　施釉陶器・黒色土器（T1～T6）

灰釉陶器（双耳瓶）１点、緑釉陶器（皿）１点、三彩（椀？）1点、黒色土器（椀）３点ほか破片多数、が出土している。

T1は灰釉陶器（白瓷）の双耳瓶。口頸部と肩部、耳にあたる計３点の破片が出土した。Ⅰ区D16グリッドからまとまって出土しており、同一個体のものとみられる。外面全体に緑色透明の灰釉がかかる。釉は口縁端部の裏や頸部接続部に濃く溜まり、ガラス化しているほか、全体に均質に薄くかかる。口頸部の内側に釉がかかるが、内面は露胎。胎土は良く還元された灰白色を呈す。

T2は緑釉陶器の皿。口縁部と体部下半の小破片が2点出土した。同一個体とみられる。いずれもⅠ区を南北に流れる溝SD16の南端位置から出土し、同溝の埋土に含まれていたとみられる。表面の施釉部分がにぶい暗緑色を呈しており、火を受けて釉薬が銀化しているように観察される。器形は推定復元して図示した。口縁端部は明瞭に外に折られている。高台はわずかに残存しているのを観察する限り、削り出し高台で傾斜を持つようである。畿内産（京都系）皿と評価される。

T3は三彩の小片で、器種は椀か。図では緑釉を濃いアミで、黄釉を薄いアミで示した。口縁端部を強い回転ナデにより内側に折っている。表面に煤が付着し、釉も白濁するなどにぶい発色をしている。T2と同様に火を受けて被熱したものとみられる。Ⅰ区の「東拡張区」C16グリッドから出土した。

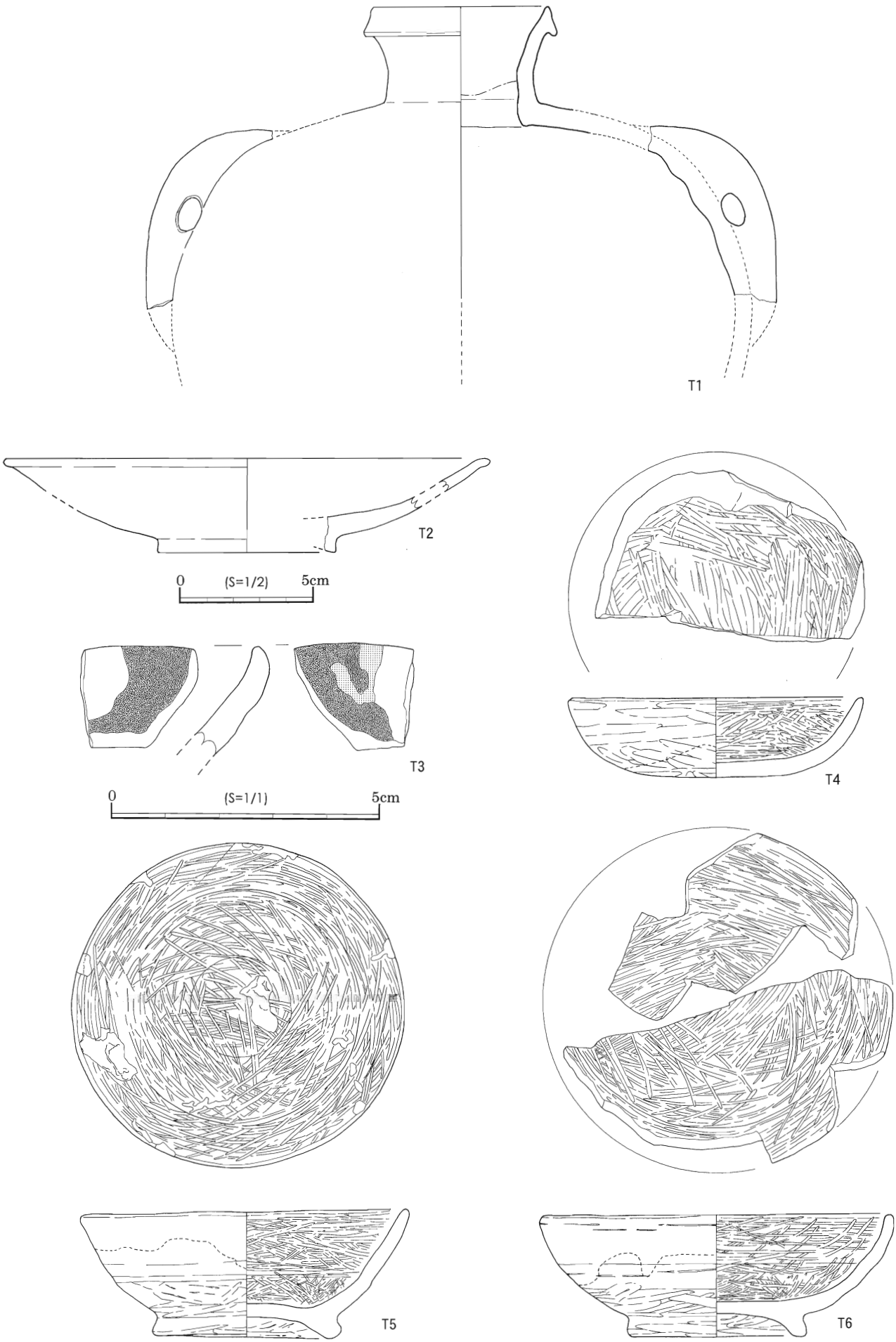
T4～T6は黒色土器で、図示した3点以外にも破片となって出土したものを写真のみ掲載している。T4は無高台の丸味をもった椀（坏）で、内面に炭素を吸着させたいわゆる内黒である。内面は丁寧なミガキにより表面がなめらかに仕上げられ、全体に銀色の光沢をもつ。外面側部は全体に炭素を吸着して黒色を呈し、口縁部に近い上端が銀色光沢をもつ。底部は露胎である。外面は砂粒が動くミガキ（ケズリに近い）調整でなめらかに仕上げられている。

T5は完形の黒色土器椀（坏）、貼付高台。内面が黒い光沢をもつ内黒で、外面は露胎だが上端に炭素付着し黒色を呈す。内面の光沢は比較的弱く、銀色の金属光沢とは異なる。内面に茶色の有機物が付着する。成形時に口縁を強く回転ナデすることによって、内外面に段が生じており、端部は外に開く。口縁は波打っており雑、貼付高台もいびつでケズリ調整は粗い。

T6は貼付高台の椀（坏）で、内面が銀色に近い光沢をもつ内黒、外面はムラ状に炭素吸着し光沢なし。内面のミガキは非常に丁寧で完全に平滑に仕上げられる。外面は調整粗く、高台まわりの成形も雑。

第36表　施釉陶器・黒色土器　観察表

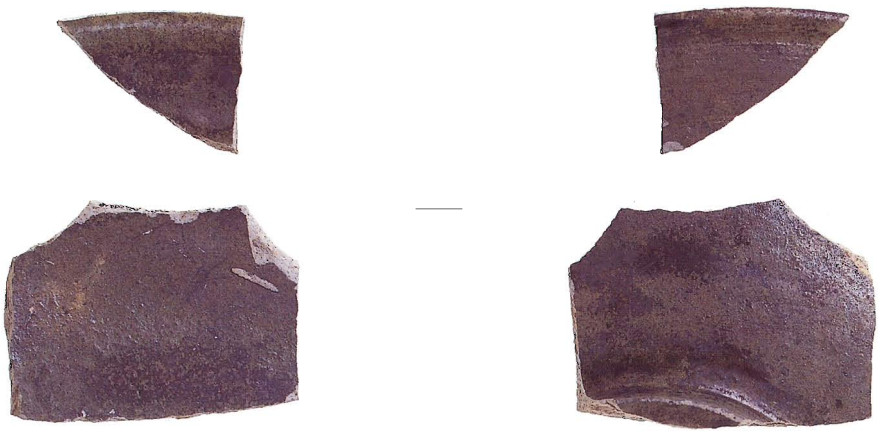
番号	種別	器種	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　整	色　調
第106図											
T1	灰釉陶器（白瓷）	双耳瓶	Ⅰ区	D16	9層	6.5			口頸部、耳、肩破片各１	内面：強い回転ナデ痕を残す 外面：丁寧な回転ナデ、施釉	胎土：灰白色１、外面と口頸内に緑色透明の灰釉かかる
T2	緑釉陶器	皿	Ⅰ区	G16					口縁、体部下半の小片	全面丁寧な回転ナデ、高台削り出し、全面施釉	胎土：灰白色１、表面はにぶい暗緑色、被火銀化か
T3	三彩陶器	椀か	Ⅰ区	C16					口縁付近の小片	全面回転ナデ	胎土：灰褐色２、全面煤付着、被熱か
T4	黒色土器	椀	Ⅰ区	C16		(10.8)		3.0	全体の40%	内面：ミガキ、炭素吸着 外面：体部ミガキ、底部一部にケズリ残す	内面：黒色 外面：体部黒色、底部橙褐色１
T5	黒色土器	椀	Ⅳ区	B17	5C層	12.2	7.0	4.7	完形	内面：ミガキ、炭素吸着 外面：体部上半ミガキ、体部下半ケズリ、回転ナデ、底部ケズリ	内面：黒色 外面：体部上半黒色、体部下半～底部橙褐色１
T6	黒色土器	椀	Ⅰ区	C16		(13.0)	(6.8)	4.6	全体の50%	内面：ミガキ、炭素吸着 外面：体部上半回転ナデ、下半ケズリ、底部ケズリ後ナデ	内面：黒色 外面：体部上半黒色、体部下半～底部橙褐色１



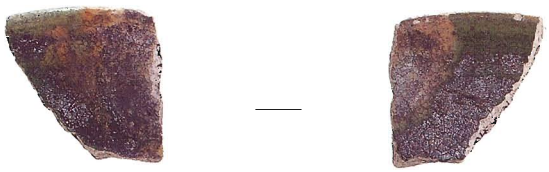
第106図　施釉陶器・黒色土器実測図

写真図版一二九　施釉陶器・黒色土器

T1



T2



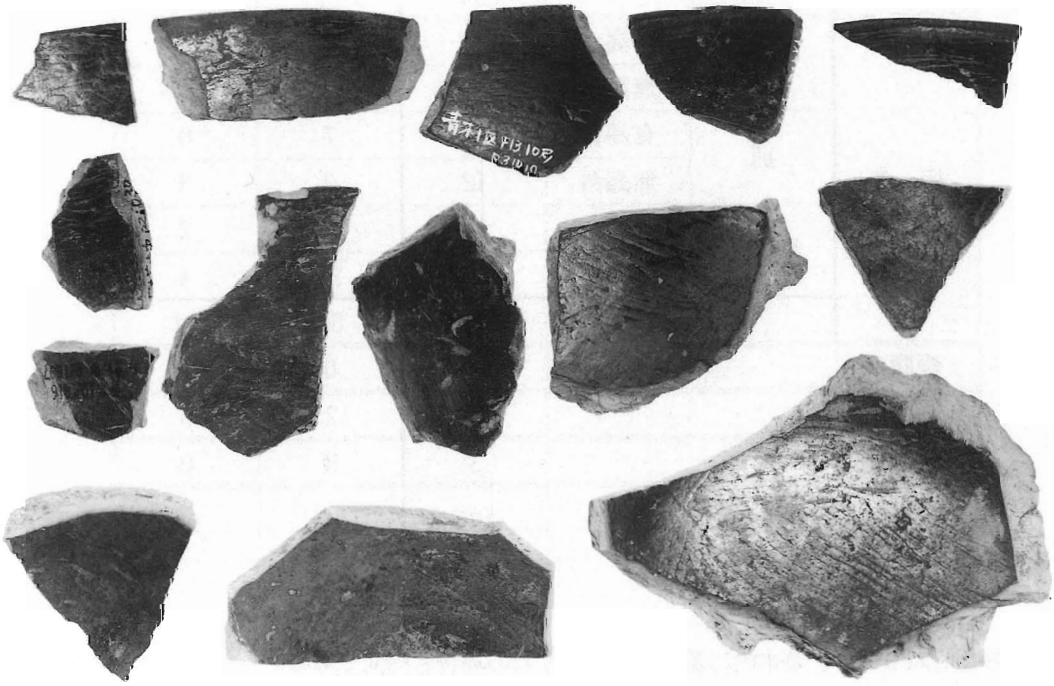
T3

T4

写真図版一三〇　施釉陶器・黒色土器

T５

T６



実測図非掲載の黒色土器

第５節　円面硯・転用硯（Ｚ01～Ｚ67）

１．傾向と特徴

青木遺跡では円面硯１点と転用硯170点が出土している。転用硯については破片の総数であり本来の個体数はこれより少ない可能性があるものの、おそらく100個体超におよぶかなりの数が使用されたことは事実である。これは当遺跡における文字使用の頻度を物語る。このうち67点について図示し、それ以外については写真を掲載した。

定形硯と転用硯の比率

もともと硯として作られた陶硯、いわゆる定形硯は円面硯Z01のわずか1点のみであった。整理作業中には破片となっているものが含まれていないか注意して探していたが、これ以外に確認することができなかった。定形硯わずか1点であり比率を正確に求めることはできないが、転用硯が170点出土していることと比較すると、定形硯はわずか0.6%に満たず、圧倒的に転用硯が多いことが認められる。

転用硯の器種比率

第37表に集計表を示した。転用硯として使用される土器は須恵器の蓋、坏、皿が大半で、わずかに甕、壺、高坏がある。全体に対する比率は蓋が55.3%で最も多く、次いで坏・皿が41.8%、甕、壺、高坏は合わせて3.5%と少ない。坏と皿は破片の場合器種を判断しにくく、両者を合わせて集計せざるを得なかったが、明確に分類できるものでは坏11点に対し皿19点でわずかに皿の比率が高いようである。

蓋と坏・皿で全体の97%を占めており、甕腹などの使用が少ない点が特徴である。

第37表　転用硯集計表

器種	細別		全体	Ⅰ区	Ⅳ区
蓋	輪状つまみ		9	9	0
	宝珠つまみ		44	37	7
	破片		41	35	6
			94	81	13
坏・皿	坏	有高台	7	3	3
		無高台	4	2	2
	皿	有高台	7	7	0
		無高台	12	9	3
	坏・皿	有高台	15	13	2
		無高台	26	22	4
			71	56	14
甕腹			1	0	1
壺			2	2	0
高坏			3	3	0
総合計			170	142	28

使用部位

硯面として使用されるのは、基本的に蓋・坏・皿いずれの場合も内面であるが、一部に例外がある。有高台の坏・皿の場合、Z35、Z36、Z50、Z51のように高台の内側を使用する例が15点認められた。また高台の無い坏・皿においても、底面を使用したものが6点あった。Z41、Z42、Z57、Z58などが該当するが、これらは概して表面

の摩滅が弱く、継続して硯として使用したものとは考えられない。筆揃えのような短期的な用途が考えられるものである。

蓋のつまみ打ち欠き

蓋は輪状つまみ9点に対して宝珠つまみ44点と後者が多い。蓋を反転して硯として使用する場合、つまみの存在が安定を欠くが、これを打ち欠いて使用した痕跡が多く認められる。輪状つまみで3点、宝珠つまみで30点、つまみ部分の完全な欠損が観察された。打撃痕なども残らず、二次的に脱落したものが含まれる可能性があるものの、多くの場合つまみを打ち欠いて使用されたことがうかがえる。

墨書土器を転用したもの

墨書土器を転用したものが13点あった。墨書の部位、内容と、硯として使用された際の関連性は特に認められない。

使用期間と摩耗の程度

使用された頻度、期間などを検討するため、硯面の摩耗の度合いを個別に記録して集計した。摩耗の程度は直接触ってみての表面の感触であり、主観的なものであるが、◎→○→△の大きく３段階を設定した。◎は摩耗が顕著で表面が完全に平滑になっており、光沢をもつまでのものも含まれる。○は確実に摩耗が認められるが、表面の砂粒のザラザラした凹凸が残っているもの。まだ硯として使用が可能なものである。△は筆慣らし程度の墨の付着で、硯面の摩耗が他の部位とほとんど変わらないもの。

全器種を総合した場合の比率は◎22.8%、○42.1%、△35.1%であった。◎の比率が比較的高く、かなり連続した使用がうかがえる。当遺跡でおこなわれた、文字記載をおこなう作業が継続的なものであったことを反映すると考えられる。蓋と坏・皿の比率の違いであるが、◎の比率が蓋27.7%に対して坏・皿14.1%と差異がみられた。つまり、蓋のほうに摩耗が進んだものが多い。

朱墨の硯

Z65、Z66、Z67は赤色の顔料が付着したもので、いわゆる朱墨を擂った転用硯の可能性があるもの。Z66は時期がやや古く、古代の遺構群と直接関係するか不明、Z65は小片であり付着物が人為的な顔料かどうか不確実なものであるが、Z67については確実に顔料を使用した硯あるいはパレットである。工芸等に使用される赤色顔料があるため、これがいわゆる朱墨として文字記載に使用されたかどうかは即断できないが、朱墨とすれば地方官衙や寺院施設の存在を示唆するものであり、極めて重要である。なお、付着物がベンガラや朱などどのような由来成分をもつものかは分析をおこなっておらず不明である。

第38表　円面硯・転用硯　観察表①

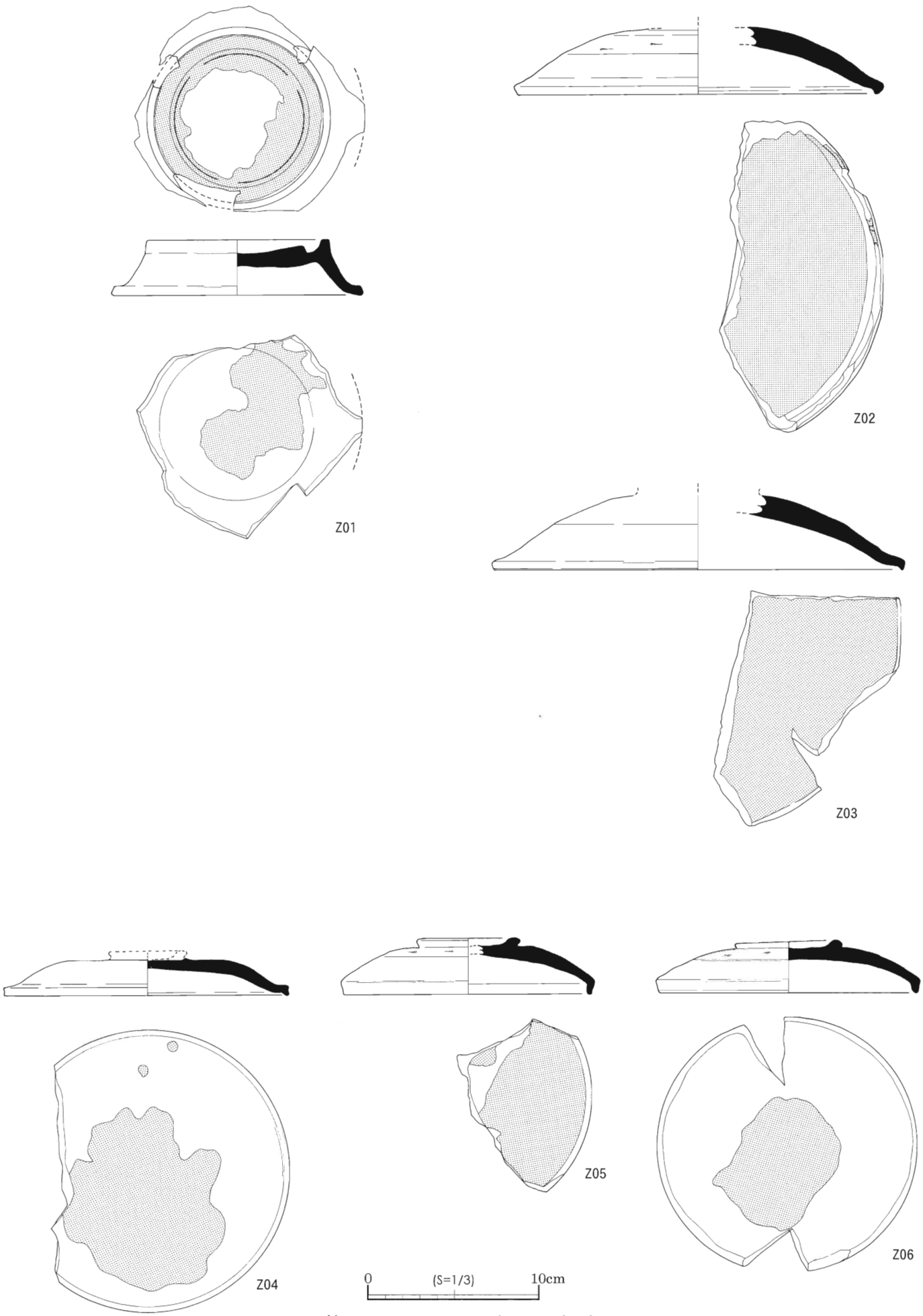
番号	種別	器種	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　整	色　調	施文・備考
第107図												
Z01	須恵器	円面硯	Ⅰ区	D16	9層	10.7	(14.4)	3.3	全体の50%	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、ナデ	内面：灰色2 外面：青灰色2	陸部使用によりかなり摩滅、墨痕あり 外面墨痕、摩滅弱い
Z02	須恵器	蓋	Ⅰ区	D16		(21.0)	(21.5)		全体の25%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、肩部回転ヘラケズリ	内外面：灰褐色5	内面墨痕　筆ならし程度　輪状つまみ打ち欠きか
Z03	須恵器	蓋	Ⅰ区	E17		(23.9)			全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、天井ナデ 外面：回転ナデ	内外面：灰色1	内面墨痕　摩滅顕著 輪状つまみ打ち欠き
Z04	須恵器	蓋	Ⅰ区	D16		16.5			全体の80%	内面：体部回転ナデ、天井ナデ 外面：体部回転ナデ、頂部回転糸切り	内外面：灰色1	内面墨痕　摩滅弱い 輪状つまみ打ち欠き
Z05	須恵器	蓋	Ⅰ区	SB04		(14.4)	(14.7)	3.35	全体の25%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、肩部回転ヘラケズリ後ナデ	内外面：灰色2	内面墨痕　筆ならし程度　口縁部外面白色自然釉
Z06	須恵器	蓋	Ⅰ区	E14		14.9	15.3		全体の90%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転ヘラケズリ	内外面：灰色1	内面中央墨痕　摩滅顕著　外面口縁部白色自然釉
第108図												
Z07	須恵器	蓋	Ⅳ区	B19	5C層	12.6		2.6	全体の40%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、頂部回転ヘラケズリ	内外面：灰色2	内面墨痕　摩滅顕著 外面一部白色自然釉
Z08	須恵器	蓋	Ⅰ区	M溝		13.5		2.9	全体の60%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転糸切り後ナデ	内外面：青灰色2	内面中央墨痕　摩滅弱い
Z09	須恵器	蓋	Ⅳ区	DT04		13.8	14.0	2.9	全体の60%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ、肩部一周回転ヘラケズリ	内外面：灰色1	内面全面墨痕　内面中央摩滅顕著　外面及び破面の一部に墨痕
Z10	須恵器	蓋	Ⅰ区	G15	8層				全体の40%	内面：ナデ 外面：肩部回転ヘラケズリ、頂部回転ナデ	内外面：灰色1	内面墨痕　摩滅顕著
Z11	須恵器	蓋	Ⅰ区	S溝					つまみ100%	内面：ナデか 外面：回転ナデ	外面：青灰色1	内面墨痕　摩滅顕著
Z12	須恵器	蓋	Ⅰ区	G15					全体の20%	内面：ナデか 外面：回転ナデ、頂部回転ヘラケズリ	外面：灰色1	内面墨痕　摩滅弱い
Z13	須恵器	蓋	Ⅰ区	F15	10層	(15.0)	(15.2)	2.8	全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、肩部回転ヘラケズリ、頂部ナデ	内外面：灰色1	内面中央墨痕　摩滅弱い
Z14	須恵器	蓋	Ⅰ区	E14	35層	14.4	14.5	2.9	全体の98%	内面：体部回転ナデ、天井ナデ 外面：体部回転ナデ、頂部回転糸切り後肩部にかけて回転ヘラケズリ	内外面：青灰色1	内面墨痕　摩滅顕著 内面墨書「伊」
Z15	須恵器	蓋	Ⅰ区	E15	10層	(15.5)	(15.7)	1.9	全体の30%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色1	内面中央墨痕　摩滅弱い 外面墨書「家永」　外面口縁部白色自然釉
Z16	須恵器	蓋	Ⅰ区	C南溝					全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、肩部回転ヘラケズリ、頂部ナデ	内外面：灰色1	内面中央墨痕　摩滅弱い
Z17	須恵器	蓋	Ⅰ区	F17	11層	17.3	17.6	2.9	全体の80%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、頂部回転ヘラケズリ	内外面：青灰色3	内面墨痕　摩滅弱い
Z18	須恵器	蓋	Ⅰ区						全体の25%	内面：ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色2	内面墨痕　摩滅弱い 外面墨書□
Z19	須恵器	蓋	Ⅰ区	SB05		14.8	15.0	2.2	全体の75%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ	内外面：灰色1	内面墨痕　摩滅顕著
第109図												
Z20	須恵器	蓋	Ⅰ区	SB04	下層	13.1	13.9	2.7	ほぼ完形	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデか 外面：体部回転ナデ、頂部回転糸切り	内外面：灰色2	内面墨痕　摩滅顕著 宝珠つまみ打ち欠き
Z21	須恵器	蓋	Ⅳ区	B19		12.9	13.0	2.1	全体の95%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ	内外面：灰色2	内面墨痕　摩滅顕著 歪み有り
Z22	須恵器	蓋	Ⅳ区		5C層	14.0	14.4		全体の80%	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色1	内面中央墨痕　摩滅弱い　宝珠つまみ打ち欠き
Z23	須恵器	蓋	Ⅰ区	C南溝		(12.8)			全体の10%	内面：口縁部回転ナデ、天井ナデ 外面：回転ナデ	内外面：灰色2	内面墨痕　摩滅顕著 宝珠つまみ打ち欠き
Z24	須恵器	蓋	Ⅰ区	-17	11層	(13.0)	(13.2)		全体の20%	内面：天井ナデ 外面：回転ナデ後ナデ	内外面：青灰色3	内面墨痕　摩滅弱い 宝珠つまみ打ち欠き
Z25	須恵器	蓋	Ⅰ区	G16		(13.0)	(13.2)		全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、天井ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色1	内面墨痕　摩滅顕著 宝珠つまみ打ち欠き

第39表　円面硯・転用硯　観察表②

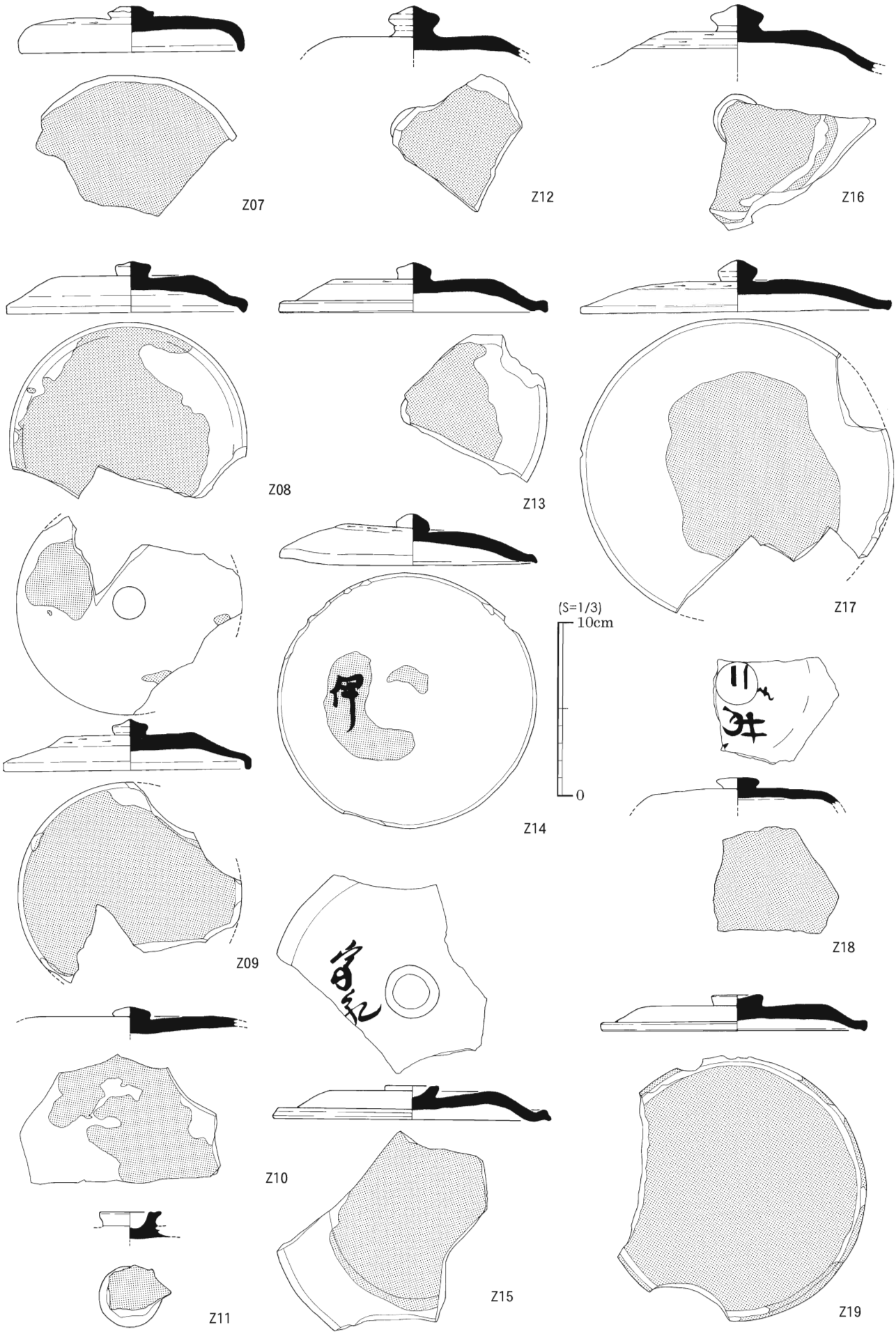
番号	種別	器種	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　整	色　調	施文・備考
Z26	須恵器	蓋	Ⅰ区	D15		(18.1)	(18.5)		全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転糸切り後ナデ	内外面：青灰色１	内面中央墨痕　筆揃え程度　宝珠つまみ打ち欠き
Z27	須恵器	蓋	Ⅳ区	B17		(16.0)			全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、天井ナデ 外面：回転ナデ	内外面：灰色１	内面墨痕　摩滅顕著　宝珠つまみ打ち欠き　外面白色自然釉
Z28	須恵器	蓋	Ⅰ区	S溝ベルト					全体の30%	内面：口縁部回転ナデ、天井ナデ 外面：回転ナデ	内外面：灰色１	内面墨痕　摩滅顕著　宝珠つまみ打ち欠き
Z29	須恵器	蓋	Ⅰ区	SD27		(19.0)			全体の10%	内面：天井ナデ 外面：口縁部回転ナデ、肩部回転ヘラケズリ、頂部ナデ	内外面：灰色２	内面中央墨痕　筆揃え程度　宝珠つまみ打ち欠き
Z30	須恵器	蓋	Ⅰ区	SD06		(14.6)			全体の30%	内面：天井ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転ヘラケズリ	内外面：青灰色１	内面墨痕　摩滅弱い
Z31	須恵器	蓋	Ⅰ区	D16	精査土中	(14.7)			全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、肩部回転ヘラケズリ、頂部ナデ	内外面：青灰色１	内面墨痕　摩滅顕著　宝珠つまみ打ち欠き
Z32	須恵器	蓋	Ⅳ区	A19	5C層	(14.8)	15.0		全体の40%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ	内外面：青灰色２	内面墨痕　摩滅顕著
Z33	須恵器	蓋	Ⅰ区	E17	10層	(14.7)	(15.0)		全体の20%	内面：ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部ナデ	内外面：青灰色３	内面墨痕　摩滅弱い　宝珠つまみ打ち欠き　内面墨書「美鮒」
Z34	須恵器	蓋	Ⅳ区	A19	6層	(15.4)			全体の10%	内面：ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部ナデ	内外面：青灰色２	内面墨痕　摩滅顕著　宝珠つまみ打ち欠き　内面墨書筆そろえ
第110図												
Z35	須恵器	坏	Ⅰ区		11層	13.8	8.8	4.7	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色２	高台内墨痕あり　摩滅弱い
Z36	須恵器	坏	Ⅳ区	B21	5C層	12.8	9.8	4.3	全体の７０%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰褐色４	高台内墨痕　摩滅弱い
Z37	須恵器	坏	Ⅰ区		7層				底部全周の10%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色１	高台内墨痕、摩滅弱い　外面ヘラ記号　底部内面線刻
Z38	須恵器	坏	Ⅰ区	D16			高台径8.8		底部のみ全周の100%	内面：ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	内面：灰色１ 外面：灰褐色３	内面墨痕　摩滅顕著　高台内墨書「伊」
Z39	須恵器	坏	Ⅳ区	A18	6層	(13.0)	(9.0)	4.4	全体の45%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰褐色５	内面墨痕　摩滅弱い　高台内墨痕　筆ならし程度
Z40	須恵器	Ⅲ	Ⅳ区	B18	5C層	(19.8)	(10.0)	4.4	全体の30%	内面：体部回転ナデ 外面：上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ、底部ナデの為切り離し痕不明	内外面：灰褐色４	底部内面中央墨痕、摩滅顕著　口縁部内外面墨痕
Z41	須恵器	坏	Ⅳ区	Z21	7層	13.6	9.8	4.5	全体の80%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色１	底部外面墨痕　摩滅弱い
Z42	須恵器	坏	Ⅳ区	B19	5C層	12.8	9.4	4.3	全体の70%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ	内外面：青灰色３	底部外面墨痕　摩滅弱い
Z43	須恵器	坏	Ⅰ区	G14	11層	(12.8)	(8.0)	4.1	全体の20%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色１	内面中央墨痕　摩滅弱い
第111図												
Z44	須恵器	坏･Ⅲ	Ⅰ区	G15	10層		6.2		底部のみ全周の100%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ	内外面：灰色１	内面墨痕摩滅弱い　高台内墨書□
Z45	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	SD13		(17.0)	高台径(14.0)	2.2	全体の50%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデの為切り離し痕不明	内外面：灰色２	内面中央墨痕　摩滅弱い　底部外面墨書「家永」
Z46	須恵器	坏･Ⅲ	Ⅰ区	E14			(10.0)		底部のみ全周の50%	内面：ナデ 外面：体部ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色１	内面墨痕　摩滅顕著　底部外面墨書「〔美〕」
Z47	須恵器	坏･Ⅲ	Ⅳ区	A19	6層				小片	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色１	摩滅弱い　底部外面墨書□
Z48	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	F15	10層	(16.8)	高台径(14.0)	2.2	全体の25%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラおこし後ナデ	内外面：灰色２	摩滅弱い　底部外面墨書□
Z49	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	SD23		(18.6)	高台径(13.0)	3.7	全体の40%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ	内外面：灰白色１	高台内墨痕　摩滅弱い　高台内墨書「伊」

第40表　円面硯・転用硯　観察表③

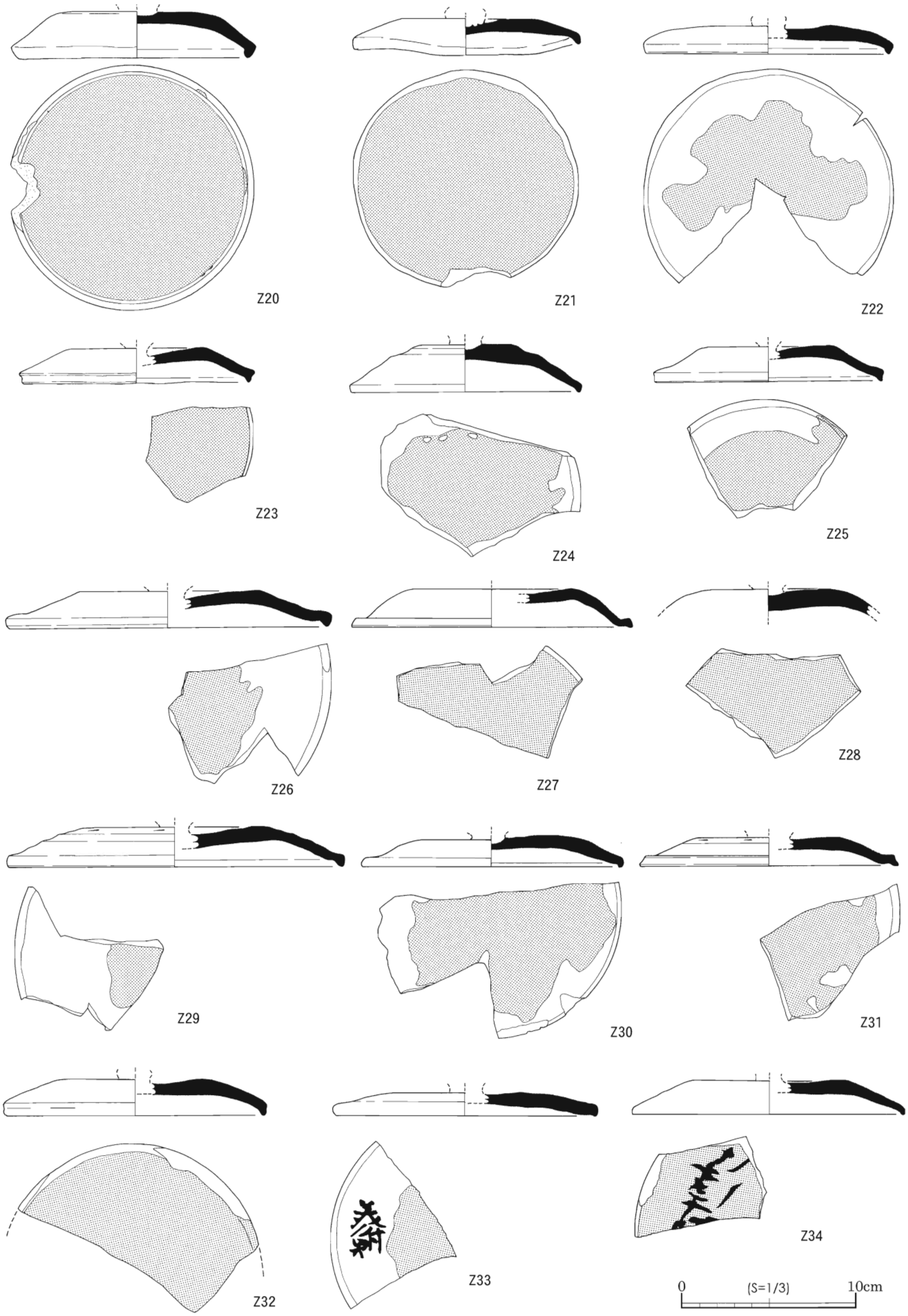
番号	種別	器種	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　整	色　調	施文・備考
第112図												
Z50	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	E17	11層	(17.8)	14.5	2.5	全体の70%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り	内外面：青灰色1	高台内全面墨痕　摩滅弱い　体部外面筆揃え程度の墨痕
Z51	須恵器	坏	Ⅰ区	E14			高台径(12.0)		底部のみ全周の40%	内面：ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデの為切り離し痕不明	内外面：青灰色1	高台内墨痕　摩滅弱い
Z52	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	SB04	A層		高台径(12.0)		全体の40%	内面：ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	内面中央墨痕　摩滅弱い
Z53	須恵器	Ⅲ	Ⅳ区			(16.2)	8.8	1.4	全体の40%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色2	内面中央墨痕　摩滅弱い
Z54	須恵器	Ⅲ	Ⅳ区	B17	5C層	13.6	9.6	2.6	全体の70%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	内面墨痕　摩滅顕著　底部外面墨書「勝兄」
Z55	須恵器	Ⅲ	Ⅳ区	A21	7層	14.6	12.6	2.6	全体の95%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	内外面：灰色2	底部内面中央墨痕　摩滅弱い
Z56	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	E15	37層	(14.7)	8.0	2.6	全体の50%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰褐色4	内面中央墨痕　摩滅弱い
Z57	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	C16 E溝		14.5	10.7	2.7	完形	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内面：茶褐色1 外面：灰色1	底部外面墨痕　筆揃え程度　内面茶
Z58	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	D15	精査土中	(13.8)	(11.0)	2.2	全体の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	底部外面中央墨痕　筆ならし程度
Z59	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	F16	10層	(14.0)	(10.8)	1.45	全体の20%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデの為切り離し痕不明	内外面：灰色1	底部内面中央摩滅顕著　底部外面墨痕　筆ならし程度
第113図												
Z60	須恵器	壺	Ⅰ区	H溝			高台径(13.2)		底部のみ全体の40%	内面：ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色1	内面墨痕　摩滅顕著
Z61	須恵器	壺	Ⅰ区	東拡張区	22層		高台径(12.2)		底部全周の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色1	高台内墨痕　摩滅顕著
Z62	須恵器	高坏	Ⅰ区	H13	10層				坏部下半全周の20%	内面：ナデ 外面：回転ナデ	外面：青灰色1	坏部内面墨痕　摩滅弱い
Z63	須恵器	高坏	Ⅰ区	F15	10層		(9.2)		脚部全周の20%	内面：坏部ナデか、脚部回転ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色1	坏部内面墨痕　摩滅弱い
Z64	須恵器	甕	Ⅳ区	B17	4B層				小片	内面：同心円状当て具痕 外面：平行タタキメ	内面：灰褐色4 外面：灰褐色2	内面一部に墨痕　内面使用によりかなり摩滅　側面摩滅
Z65	須恵器	坏	Ⅰ区	D15	10層				小片	内面：ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデか	内外面：青灰色2	内面朱墨　筆揃え程度
Z66	須恵器	坏	Ⅳ区	B21	5層	(17.6)	9.0	5.3	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデの為切り離し痕不明	内外面：青灰色1	高台内朱墨
Z67	須恵器	蓋	Ⅰ区	D15	9層	15.3	15.4	2.75	全体の80%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、頂部ナデの為切り離し痕不明	内外面：灰白色1	内面に朱墨



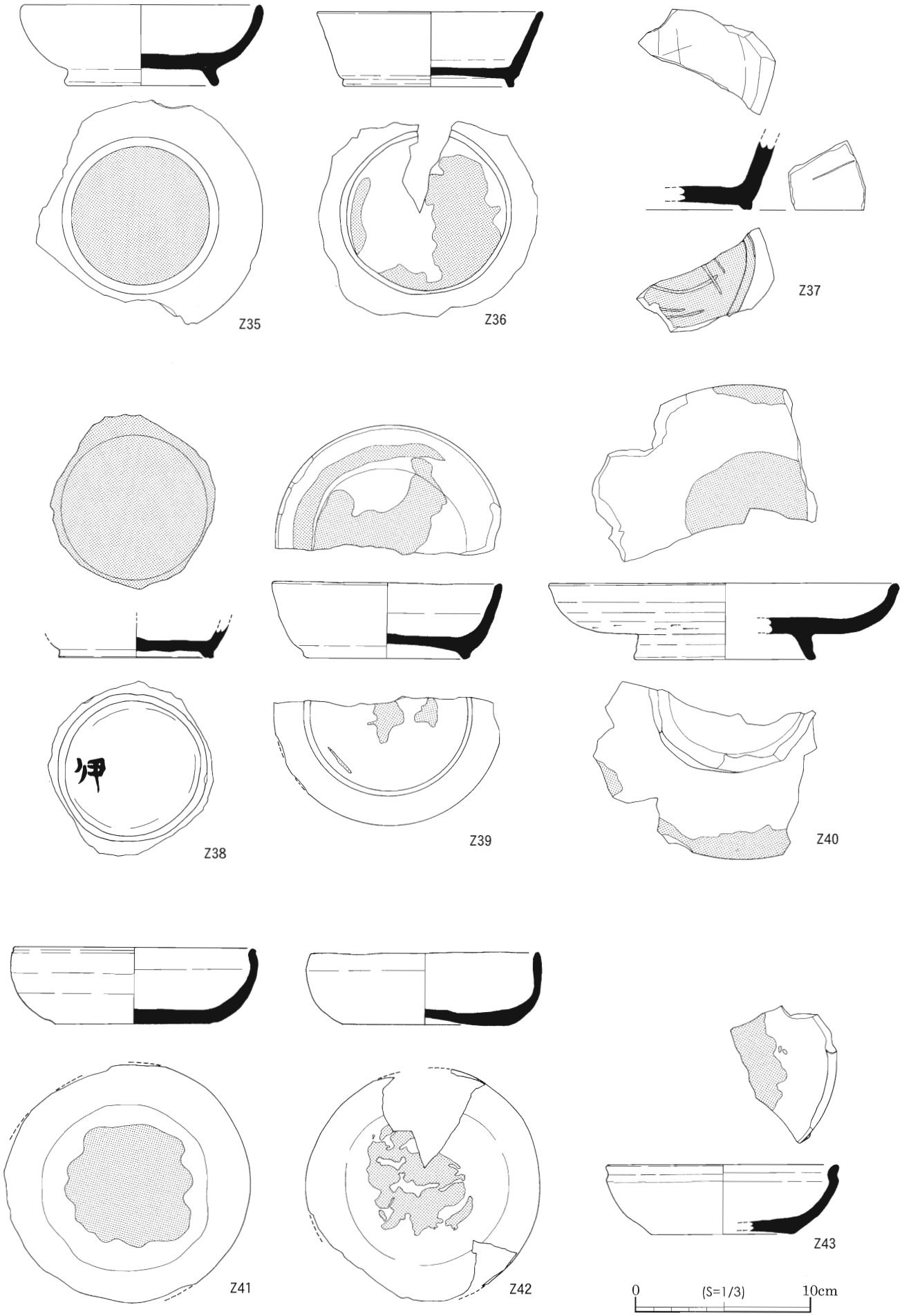
第107図　円面硯・転用硯実測図



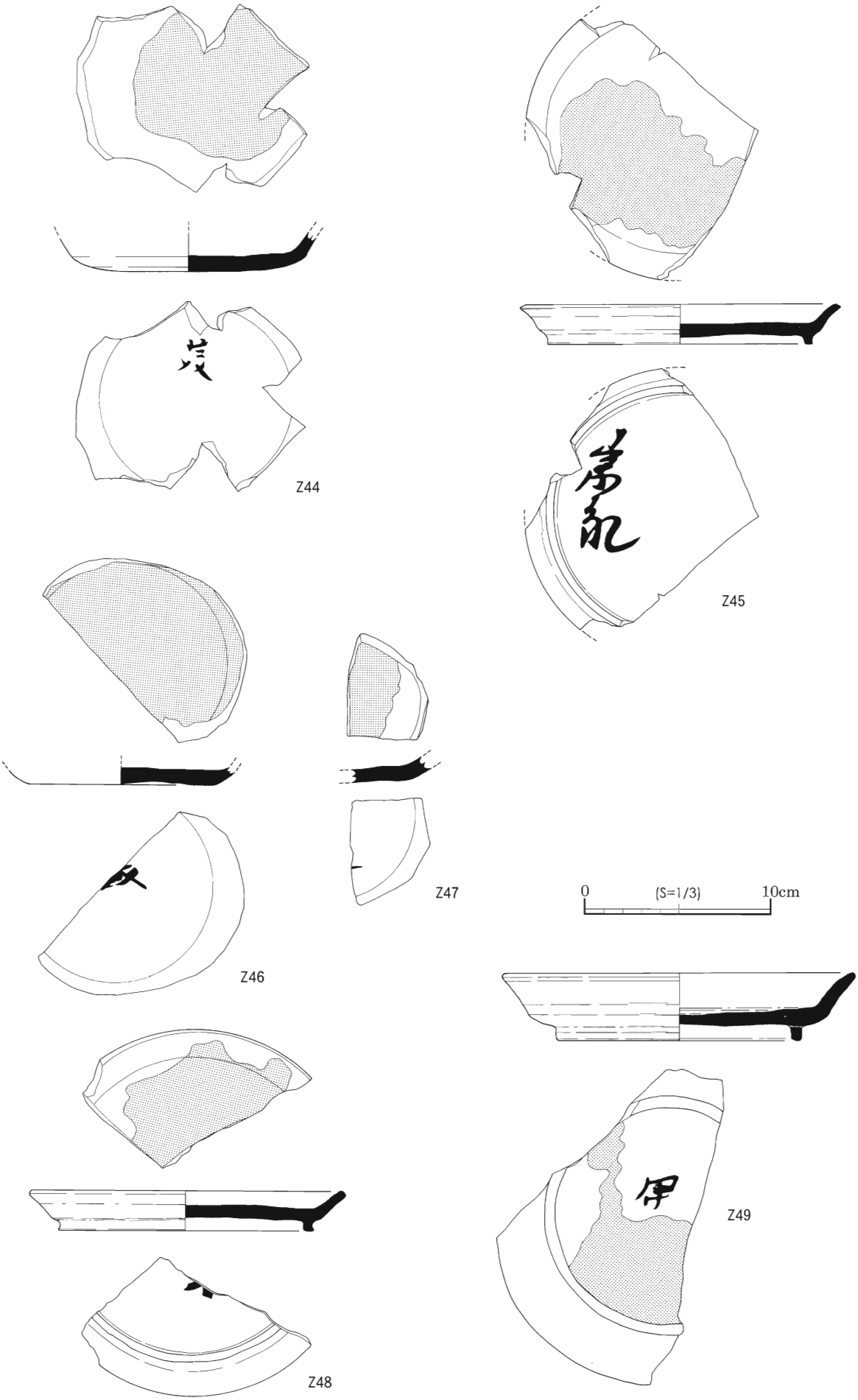
第108図　転用硯実測図①



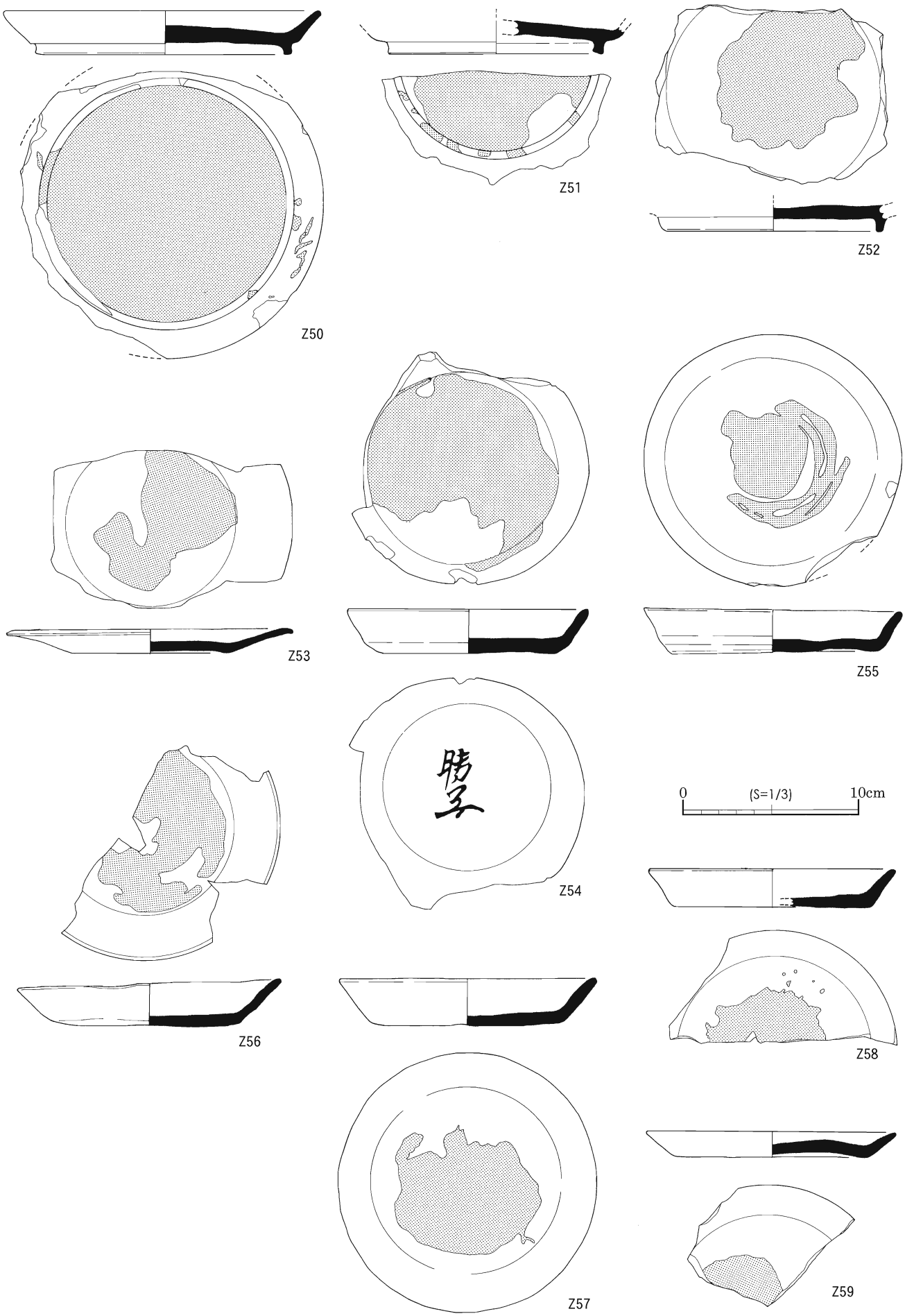
第109図　転用硯実測図②



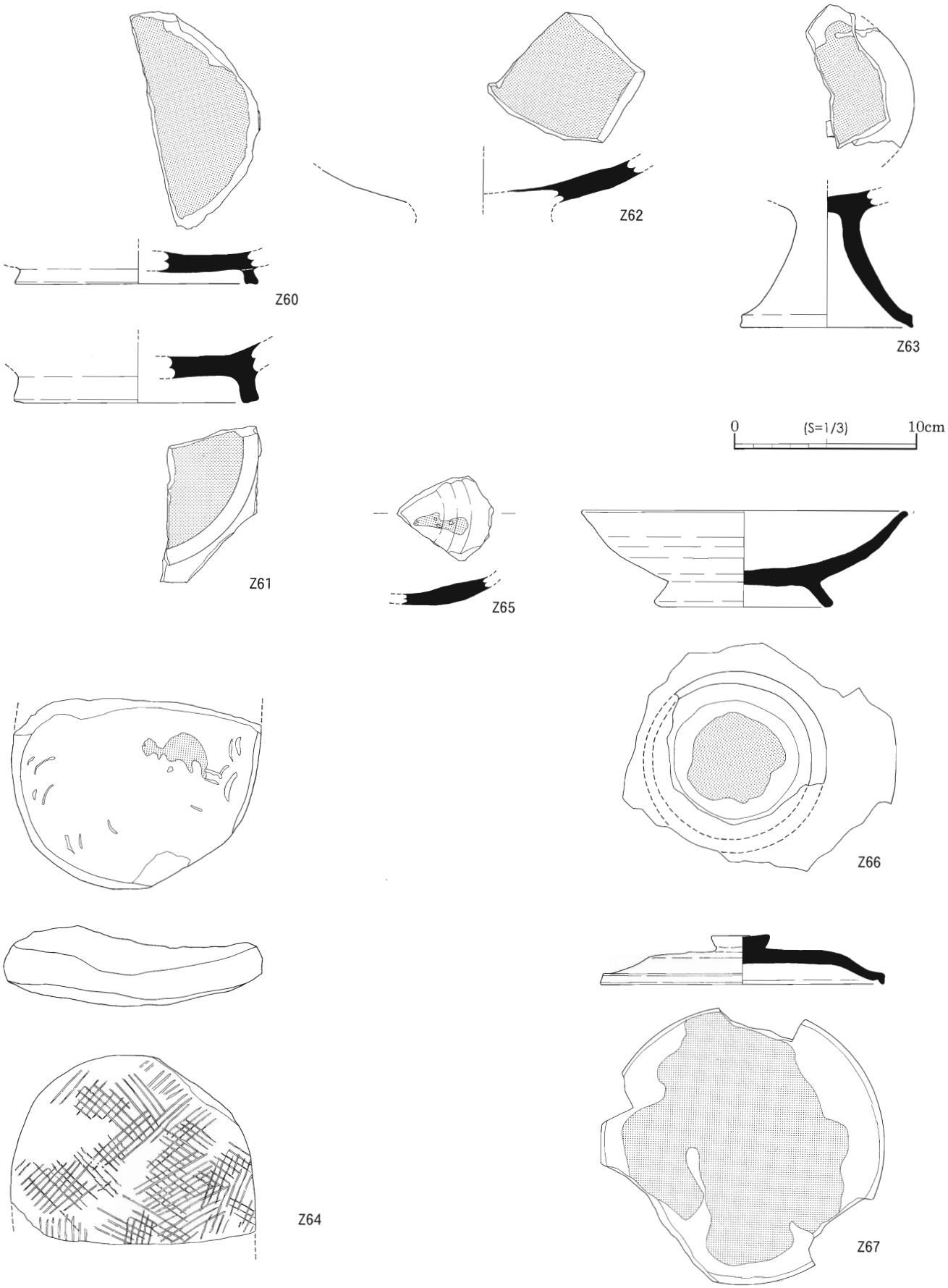
第110図　転用硯実測図③



第111図　転用硯実測図④

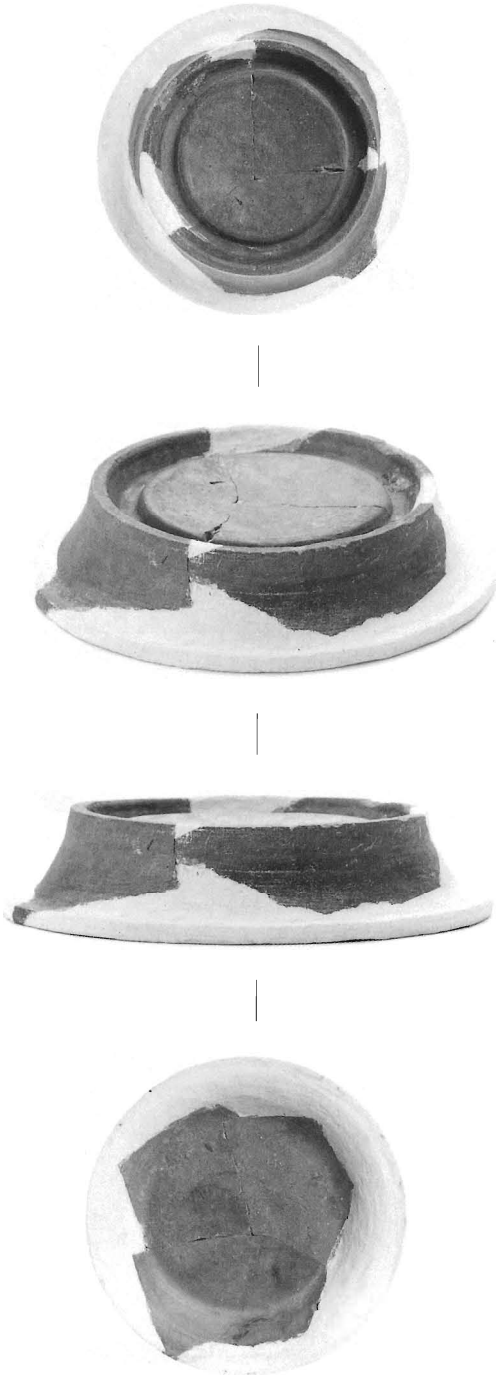


第112図　転用硯実測図⑤

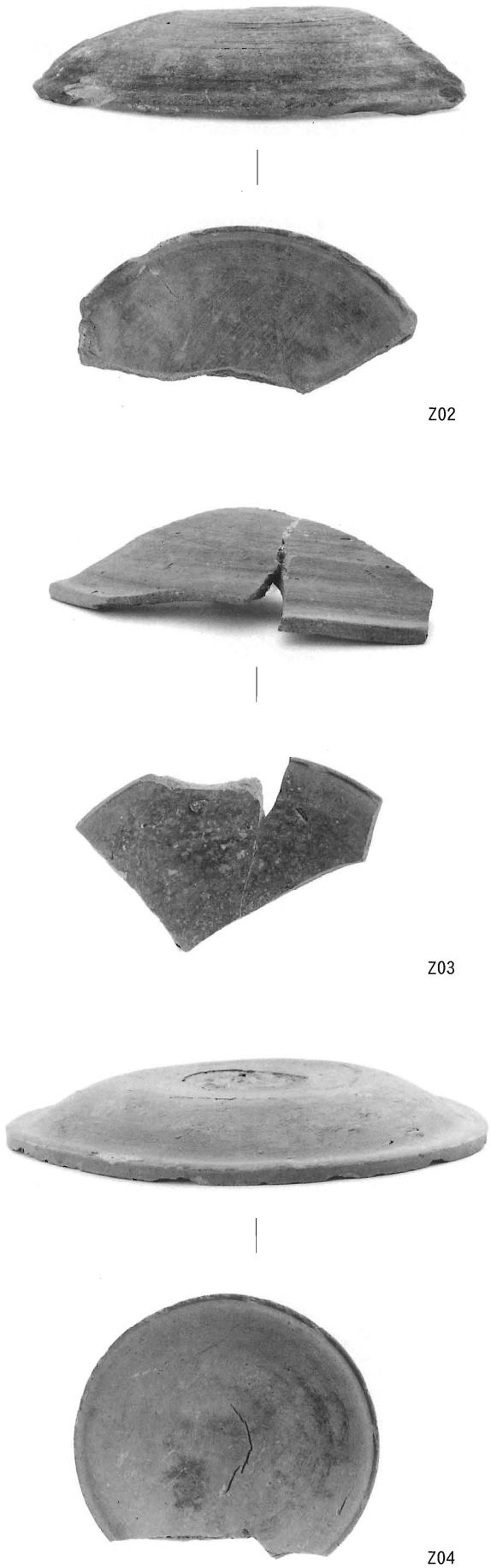


第113図　転用硯実測図⑥

写真図版一三一　円面硯・転用硯



Z01

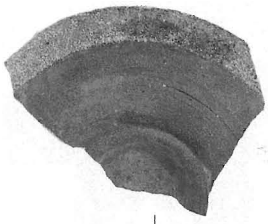


Z02

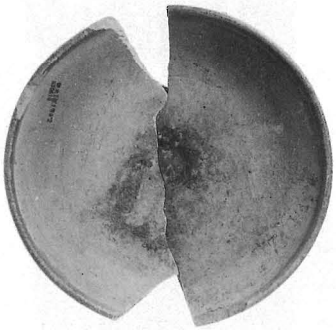
Z03

Z04

写真図版一三二　円面硯・転用硯



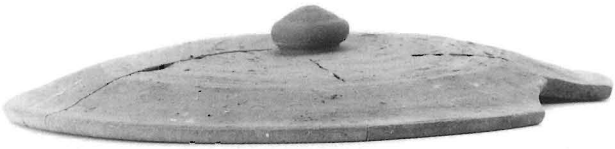
Z05



Z06

Z07

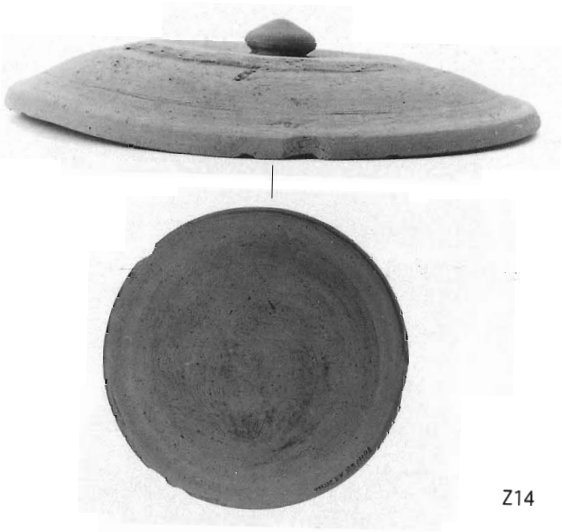
Z08



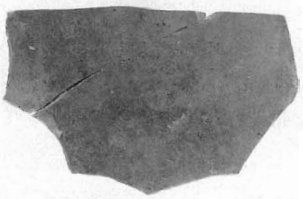
Z17

Z09

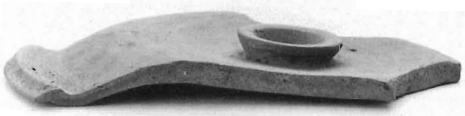
写真図版一三三　円面硯・転用硯

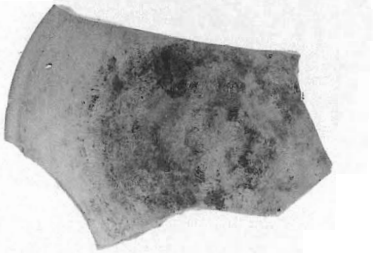


Z14



Z10



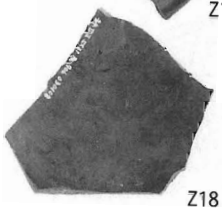


Z15

Z19

Z12

Z13



Z18

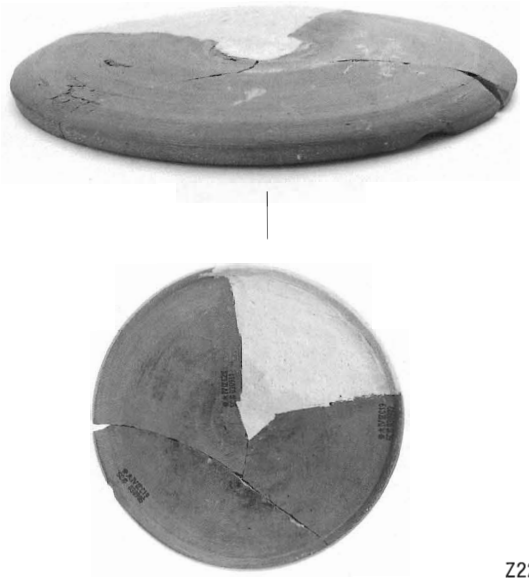
Z16

Z11

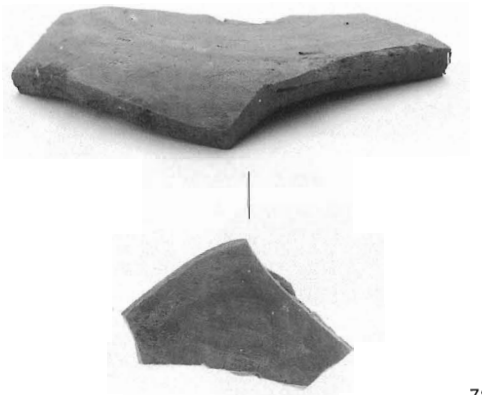
Z20

Z21

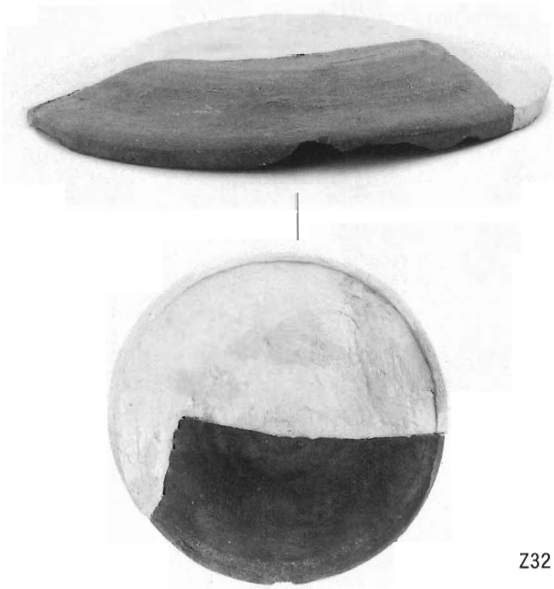
写真図版一三四　円面硯・転用硯



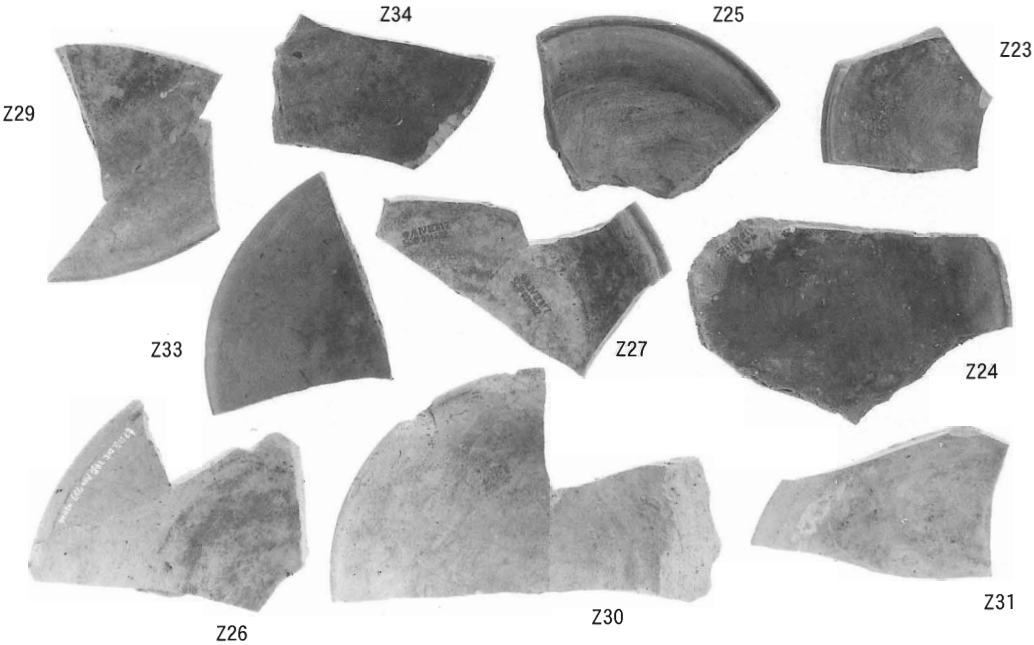
Z22



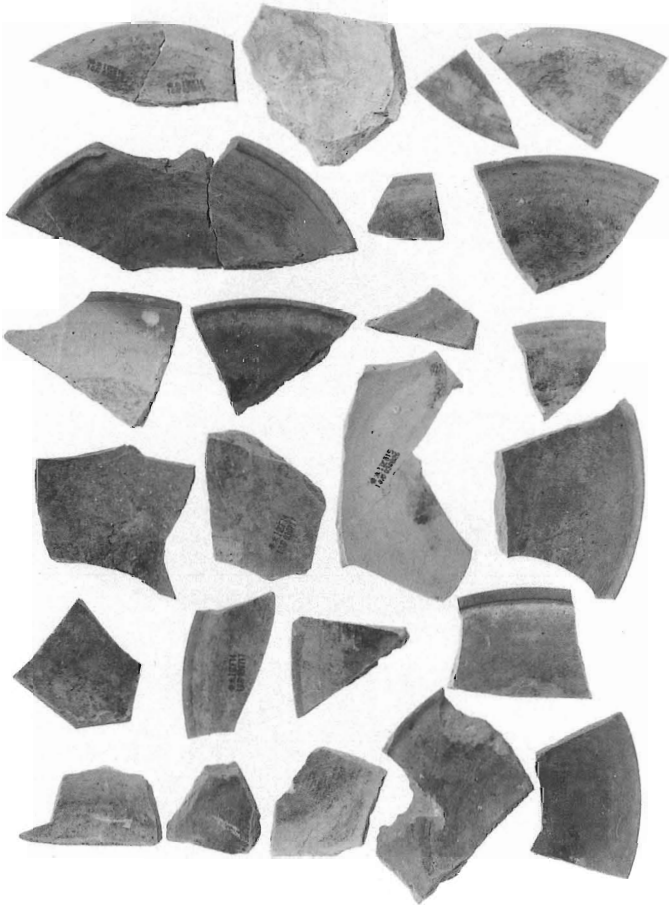
Z28

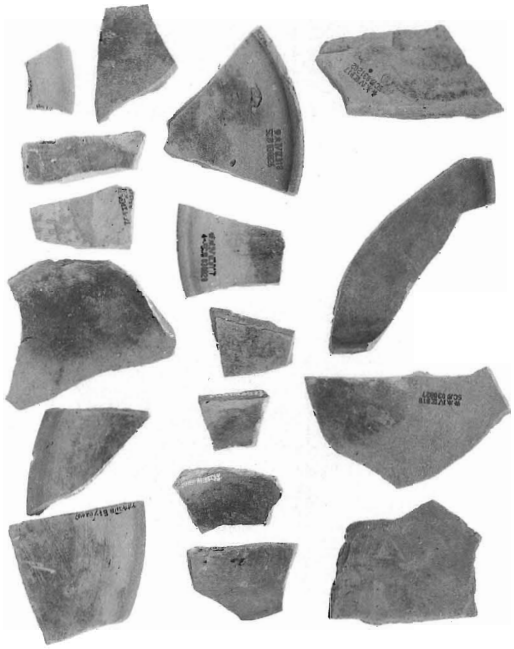


Z32

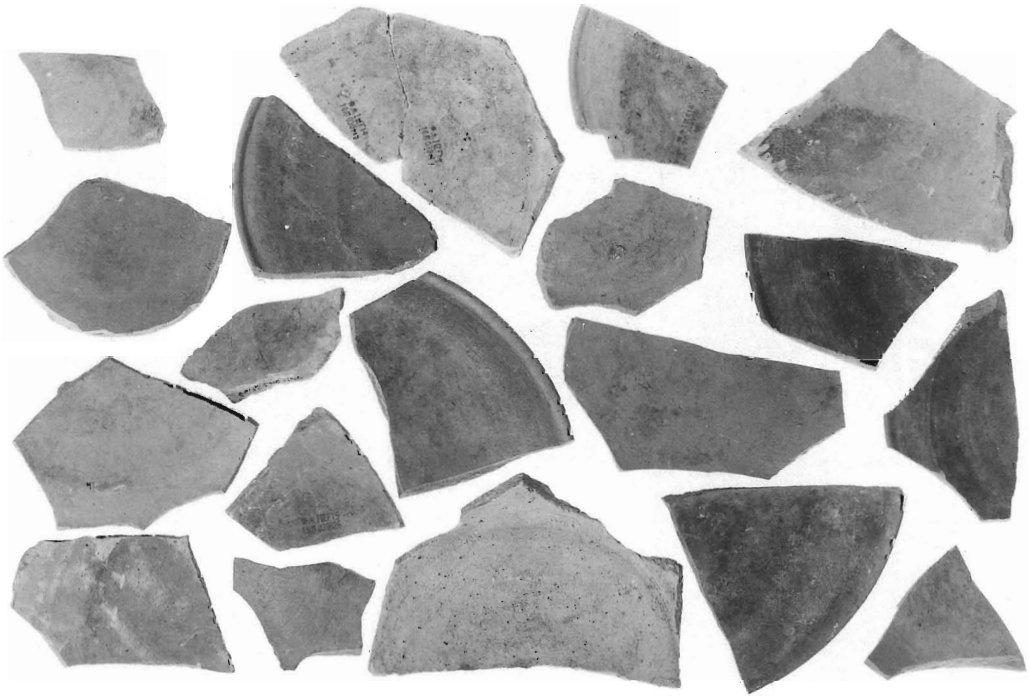


写真図版一三五　円面硯・転用硯

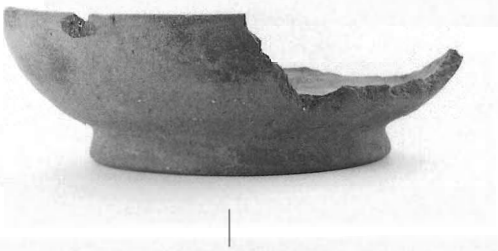


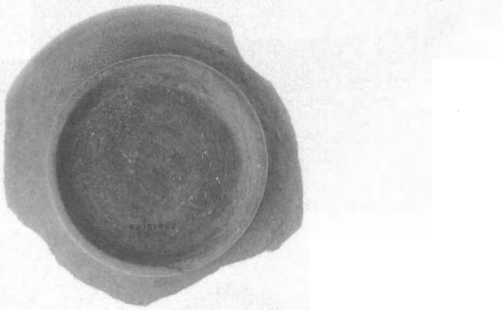


実測図非掲載・須恵器蓋



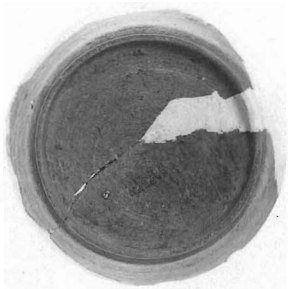
写真図版一三六　円面硯・転用硯





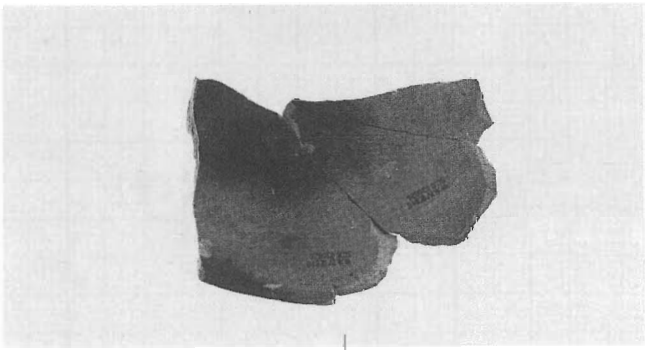
Z35

Z38



Z36

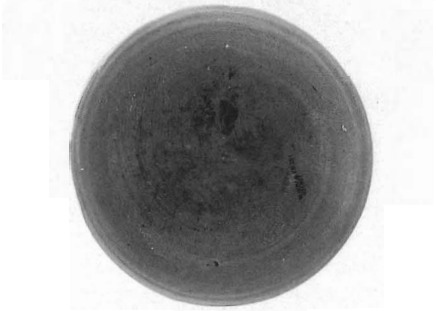
Z39



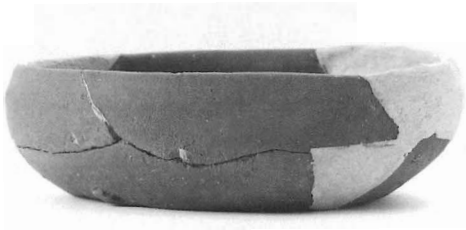
Z37

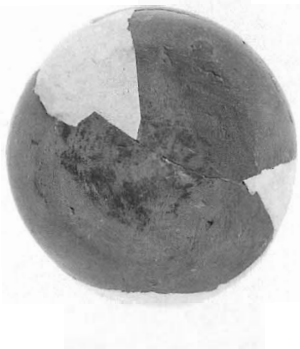
Z40

写真図版一三七　円面硯・転用硯

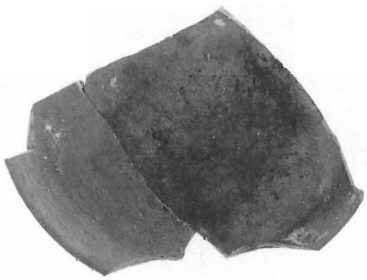


Z41





Z42



Z45

Z48

Z49

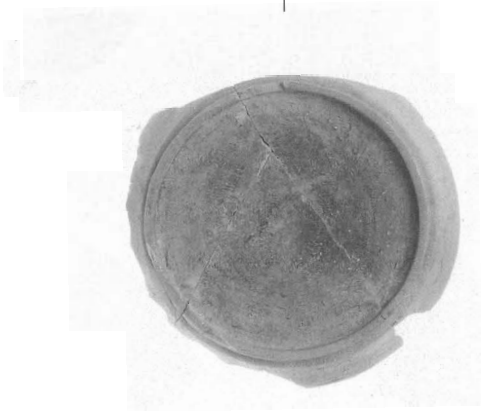
Z44

Z47

Z43

Z46

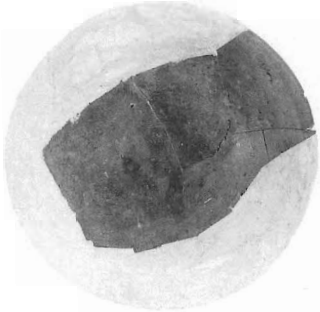
写真図版一三八　円面硯・転用硯



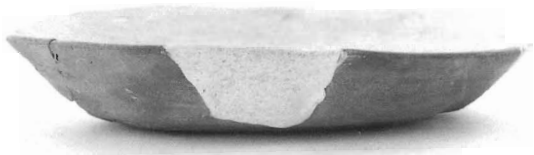
Z50

Z51

Z52



Z53



Z56

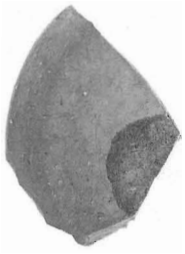
Z54

写真図版一三九　円面硯・転用硯

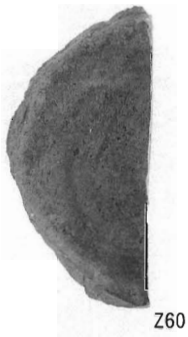
Z55

Z57

Z58



Z59



Z60

Z61

Z62

Z63

写真図版一四〇　円面硯・転用硯

Z64

Z65

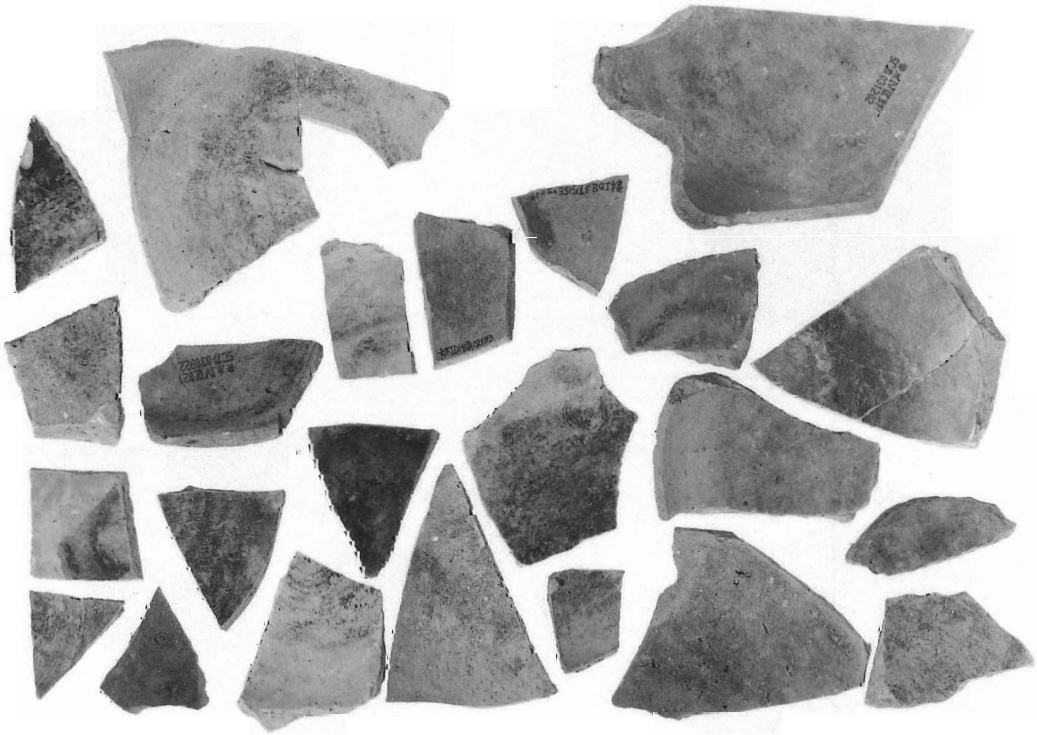
Z66

Z67

実測図非掲載・須恵器皿

写真図版一四一　円面硯・転用硯

実測図非掲載・須恵器高台坏皿



実測図非掲載・須恵器坏皿

第６節　漆付着土器（U01～U37）

青木遺跡では漆が付着した土器が一定量出土している。出土総数は70点であった。このうち完形に近く復元できるものや、器形を図示することが可能なもの37点について実測図を掲載し、それ以外の小片は写真のみ掲載している。破片同士は接合できないものの同一個体のものが含まれていることが想定され、推定値として50個体前後の漆付着土器が今回の調査区内に含まれていたと考えられよう。当遺跡では漆塗り用の木製刷毛（W169）も出土しており、遺跡周辺で漆の集積から製品化までおこなわれていたことがうかがえる。実際に漆塗りの漆器（木製挽物）も一定量出土し、木工・金工などの手工業生産機能が整備された自給体制をもつ遺跡の集約性がみてとれる。

出土した漆付着土器はいずれも遺構面を被覆する包含層中に含まれており、8世紀後半～9世紀のものとみられる。U30、U31のみ古い様相を示し、7世紀代のものであろう。

器種組成

漆付着土器には器種により用途の別が想定されており、漆の採取から運搬、貯蔵、消費の各段階で、瓶類、甕、坏・皿といった目的に応じた器種が使用されている[1]。当遺跡での器種組成の内訳は第41表のとおりであった。運搬具として長頸瓶２点（U01、U03）と広口短頸壺１点（U02）が出土しているほか、瓻8点（U04～U11）の中にも運搬具が含まれているとみられる。大半を占めるのは坏・皿・蓋類で、パレットとして使用されたものと考えられるものである。貯蔵具である甕はみられない。なお坏2点には漆紙文書が付着していた。

第41表　漆付着土器の内訳

器　種	種　別		調　査　区		小　計		比　率
	須恵器	赤　彩 土師器	Ⅰ　区	Ⅳ　区			
壺　類	3		2	1	3		4.3%
瓻	11		5	6	11		15.7%
坏(高台付)	4	4	8		8	55	78.6%
坏(無高台)	21	5	20	6	26		
皿	1	1	2		2		
坏または皿	13	4	15	2	17		
蓋	2		1	1	2		
高坏	1		1		70		1.4%
	56	14	54	16	1		

青木遺跡における漆集積と加工工程

漆の木から採取した漆液のゴミを取り除いたものが生漆で、これを弱い熱を加えながら撹拌し、余分な水分をとばして精製したものが透漆である。これに墨など黒色顔料を加えた黒漆が漆工芸に使用される。生漆と黒漆の違いは外観上の観察では判別できない、とする考えがあるが、赤外線画像で観察することで炭素の含有の有無を確認することが可能であり、ある程度の推定ができる。炭素を含む黒漆が暗く表現されるのに対し、生漆は白っぽく映る傾向がある。

赤外線画像で確認した結果、各器種がどのような段階で使用されたものであるかがある程度把握できた。まず、長頸瓶（U01、U03）と広口短径壺（U02）の内容物は生漆であり、採集地から運搬して当遺跡に持ち込む段階に使用され、器を破砕することによって内容物を取り出されたたものと判断される。特にU01は平城宮跡の分類で壺Kとされるものであり、採取地から集積地へ漆を運搬する際に使用される最も一般的な器種である。

また、11点の瓻のうち4点（U05、U06、U07、U09）は生漆または透漆が付着しており、残る7点は黒漆（U10、非掲載3点）と黒漆の可能性が高いもの（U04、U08、U11）であった。前者４点は頸部から先を打ち欠いており、

内容物を取り出す際の造作とみられることから、採取地からの運搬具として使用された可能性が高い。後者7点については底部の破片ばかりであった。よって、瓻の用途は複数あり、ひとつは採取地からの運搬具として用いられた可能性、もうひとつは漆工工程で貯蔵具（もしくは使用にあたっての「小分け」容器として）使用されていた可能性がある。

漆付着土器の8割を占める坏・皿・蓋類はいずれも黒漆が付着しており、パレットとして使用されたものである。ただし、赤外線画像で明確に黒く確認できなかったものもあり、こうしたパレットには炭素を混ぜない透漆のためのものであったと推定される。透漆は木製漆器の塗り工程において、下地塗りなどに使用されるものである。こうした各種のパレットに加えて木製品で漆刷毛（W168）が出土していることからみても、最終的な消費活動である漆塗製品の生産がおこなわれていたことは間違いない。当遺跡では高級食器である漆器が出土しているほか、銅滴や鉱滓などが出土しており金工生産がおこなわれていたとみられる。漆の集積から漆工にいたる活動は、こうした金属製品・木製品の生産活動と一体となって機能したものとみられる。ただ、破片含めて70点という数量はそれほど多いとは言えず、特に運搬具が少ない。漆の集積は基本的に国家の主導でおこなわれるもので、ひとつに中男作物としての税が知られ、大量に消費できるのは国衙レベルでの官営工房など限られた場所であった。近年出雲国府では日岸田地区62号溝で壺Kを中心に30点ほどの運搬具が集中して出土しており、国衙付随の官営工房に大規模な集積が行われていたことが分かっている。一方、こうした税としての集積以外のルートで漆が流通していたことも知られ、当遺跡での漆集積はそうした小規模な収納や、あるいは経済活動によっておこなわれたものかもしれない。瓻のような容量の少ない運搬具が壺Kより多いことはそのような採取規模を反映したとも考えられる。当遺跡では貯蔵具である甕に付着したものがみられず、集積された量がそれほど多量ではなかったこともうかがえる。

個別の観察所見

以下、個別の資料について観察所見を述べる。

U01は須恵器の長頸瓶（壺K）。3個体に破砕されているがほぼ完形に接合する（写真図版142）。頸部中ほどから細かい単位の打ち欠きによって割取られ口縁先端を欠く。運搬時には既に頸が短い状態に成形されていたものであろう。内容物を取り出す際に破砕が加えられており、底部と体部の接合線を境にして、きれいに水平に割られている。打撃痕が残らず、一撃でねらいどおりに割っていることがわかる。底部の破片には篦などで掻き出した痕跡がみられる。体部の破片は縦に２つの破片となって割れているが、これは取り出しの破砕より一段階後の割れである。わずかながら破面にも漆の付着がみられるため、取り出し直後に廃棄された段階での割れとみるのが自然であろう。

運搬時の漆液の水位はちょうど胴部が最大径をなす肩の位置までで、これを境にして天井面には茶褐色の漆膜が厚く付着する。吃水位置近くでは皺が多く、天井の高い位置では垂れ下がった鍾乳石のように固化している。これらは採取から破砕して取り出されるまでの間に固化したものである。内容物の量は概算で470ccほどであった。運搬用の縄掛けや籠などの痕跡は残されていなかった。Ⅰ区D15グリッドの落ち込み状遺構（調査時名称SX65）から出土した。位置は礎石建物SB04の南側直近にあたる。

U02は須恵器の広口短頸壺（壺C）。還元が弱くにぶい赤褐色を呈す。全体の2割程度の破片だが、破面に漆が付着しないことから二次的な破損とみられる。内面全体と外面の口縁～頸部に薄い膜状に付着する。Ⅳ区C18グリッドの包含層中出土。

U03は須恵器瓶類の肩から天井部にかけての破片。肩の稜線がやや張る長頸瓶とみられる。ほとんどの破面は二次的なものだが、唯一、頸部に近い側の破面には漆付着がみとめられる。内容物を取り出す際に、頸部と体部の接合ラインを破砕したと推定される。

U04～U11は須恵器瓻。U04は赤外線画像でやや黒く観察され、黒漆の可能性があるものとした。内面に薄い膜状の漆が付着する。破面はいずれも二次的なもの。U05は墨を含まない生漆・透漆の容器。取り出し時に頸部を

打ち欠いている。円孔をふさいでいたとみられる木栓の一部がわずかに付着して残る。付着はかなり厚く、外面にも広く認められる。破面はいずれも二次的なもので、意図的な破砕があるかどうか断定できない。U06は生漆・透漆容器。口縁は打ち欠かれている。内面は頸部にのみ付着がある。破面は1単位で、破面にも付着がみられることから意図的な破砕の可能性が高い。U07は肩部から上の破片で、生漆・透漆容器。口縁は取り出し時に打ち欠かれる。肩部外面にはほぼ全周にわたって10箇所以上の打撃痕が残る。やや鋭利な刃物による直線的な打撃痕と、楕円形の剥離が肩部をめぐっている。これは内部に残った漆を掻き出すための破砕を試みた痕跡であり、ねらいどおりに割れないことから残る「ためらい傷」である。最終的には肩部を境に上下に割れているわけで、その意図は達成されたのであろう。U08は黒漆の可能性があるもの。水平に破砕され、体部下半が残されている。破砕後の掻き取り痕が内面に残る。底面に「×」の焼成前ヘラ記号がある。U09は生漆・透漆容器。内面に薄く膜状に付着する。内容物を出す際に円孔が使用されており、周囲にも付着と外面への垂れが認められる。大きく１単位で破砕されているが、破面には付着がない。円孔から全ての漆液が排出された後に破砕されたため、破面につくほどの漆が残っていなかったためかもしれない。底面には「×」の焼成前ヘラ書き記号がある。U10は黒漆。U08と同様に下半が水平に破砕される。U11は底部の破片で、やや立ち上がりの傾斜が緩いことや切り離しがヘラ切りであることから甕ではなく瓶類の可能性があるもの。破面は二次的な破損の可能性が高い。残された漆は薄膜状に部分的にみられ、赤外線画像の観察から黒漆の可能性があるものとしたが、明確に断定はできない。

U12以降はパレットとしての使用が想定される坏・皿類。須恵器と赤彩された土師器の両方があるが、概して須恵器の方が破片が大きく残存状態が良い。破片点数でも須恵器が多いが、その数値差以上に土師器の使用は少ないと言える。

須恵器坏には残りの良いものが多いが、特にU17は唯一完形で出土した。底面にも漆が付着しているため不明瞭だが、うっすらと墨書きの線らしきものが観察される。積極的に判読するならば「伊」にも取れるが、きわめて根拠の弱いものであるため図示しなかった。転用硯の中には墨書土器を硯にしたものが一定量含まれており、このU17も墨書土器とすれば漆容器に転用したものの一例とすることができる。

坏・皿類に付着した漆はいずれも薄い膜状を呈し、二次的にはがれて部分的にしか残存しないものも多い。刷毛等の工具で拭き取った痕跡が残るもの（U18、U30など）があるが、少数である。

U27は高台の内側を中心に漆が付着したもので、赤外線画像から炭素が含まれていないと判断される。他の漆付着土器と比較して器形が古い様相を示し、一連の漆加工とは関わらない古い段階の別の作業に用いられた可能性が高い。高台の内側は容量が少なく、少量の漆を扱うために使用されたとみられる。漆自体の用途としては漆工以外に接着剤など様々な場合が想定されるもので、こうしたケースを想定すべきであろう。高坏U31も同様で、坏部内面に刷毛で塗ったような状態で薄く漆が付着する。

漆紙文書

漆容器の蓋として使用された紙が固着したもの（漆紙文書）が2個体出土している。残存しているのは文書全体のごく一断片にすぎず、判読できる文字も少ない。文書としての記載内容については、第2分冊にて扱っている。

U36（1号漆紙文書）は赤彩された土師器坏。底面は赤彩されず、垂れた漆が外面～底面に付着している。紙が残存するのは内面の立ち上がり屈曲部から側部下半にかけて。紙と漆の表面との間に隙間が生じており、見込み部の漆は紙と接しない状況で固化している。紙がどの段階で固着したかは特定しにくいが、以下の2通りの考え方が可能である。ひとつは、紙が容器の使用中に固着した可能性。この場合、紙蓋は使用時に完全にはがすことなく器と接していたことになる。想定される使用状態としては、紙蓋を一部めくって刷毛などを浸し、液量が少なくなった段階で器全体を傾け、ほとんど使い切った段階で紙蓋とともに廃棄する、といったものである。内面見込みの漆膜の状態は一様でなく、ほとんど漆の厚みが無い部分と、ある程度の厚みをもって固化している部分とがある。これは器全体を傾けて使い切った状況と対応するものかもしれない。紙が固着する段階としてもう

ひとつの解釈は、廃棄時に紙が器に重ねられた、という可能性である。使用再開時にはがされ器と別々に置かれた紙蓋が、漆を使い切った段階で改めてまとめて廃棄するために器の上に重ねられた、ということになる。この解釈も可能であるが、紙の固着部位が漆の水位面付近に限られていることの説明が難しい。漆が浸透した紙が器に貼り付いたのであればもう少し高い部位、例えば口縁端部などにも付着してしかるべきであるが、実際に残されているのは漆が空気と触れ固化する水位面付近である。前者の解釈がより妥当なものと考えられる。とすれば紙の固着位置は蓋としての使用時の位置を反映したものとなる。

U37（2号漆紙文書）は須恵器の高台付坏。紙が付着するのはU36と類似し、内面の側部中位。紙が直角に途切れる箇所があり、複数の紙が同時に固着しているとみられる。紙が固着するより下位、すなわち底面と底面から高さ1㎝ほどの部分は漆が完全に掻き取られ、表面に差粒が固着する。この差粒は廃棄直後に付着したものである。紙が器に固着する段階については、U36で想定した２つの可能性のうち前者が想定される。すなわち紙は使用時にすでに器の水位面付近に貼り付いていて、乾燥が始まっていた、その後紙を部分的にめくるなどして完全に漆が掻き出されて廃棄された、という経過である。いったん紙蓋が被せられてから、次に使用が再開されて最終的に廃棄されるまでには紙の縁が固化するに十分な一定の保管時間があったということになろう。なお、紙より上方の口縁端部にかけて広く薄く漆膜が付着している。これは刷毛などの漆液をぬぐったためとみられ、付着したのは紙蓋がかけられるより前の段階、ということになる。

【註】

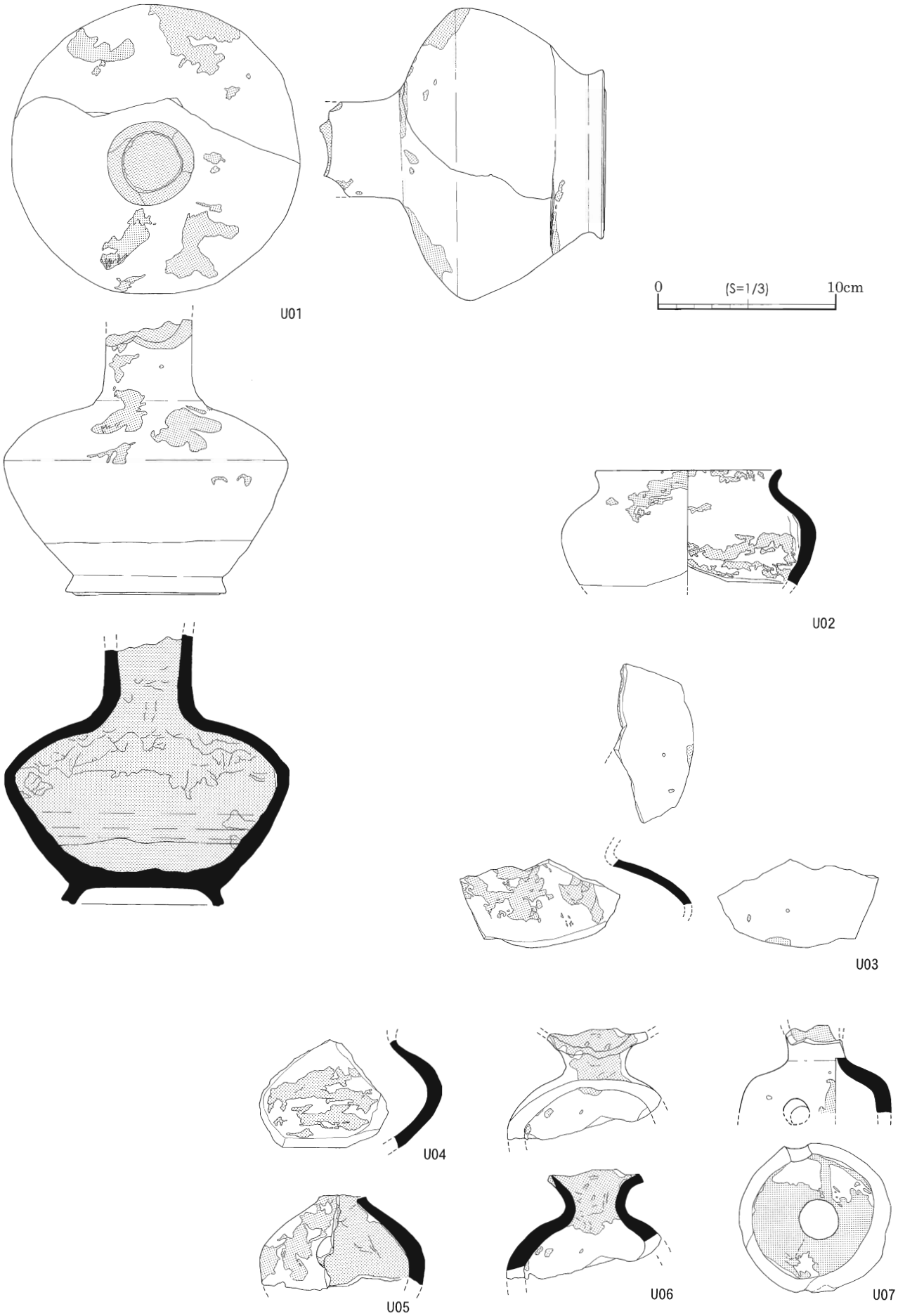
（1）玉田芳英「漆付着土器の研究」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集　文化財論叢Ⅱ』1995年

第42表　漆付着土器　観察表①

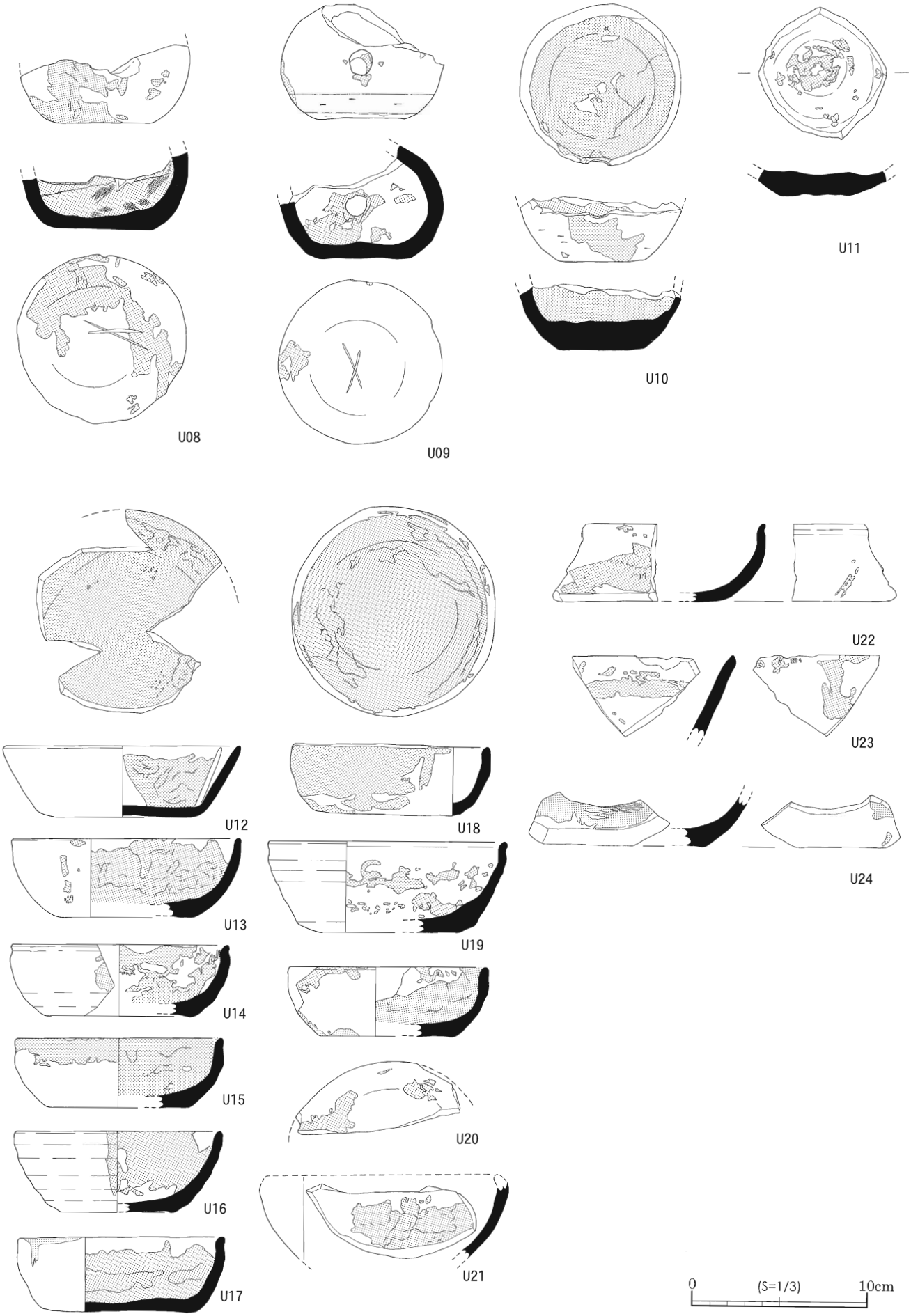
番号	器種	器種	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　　整	色　調	施文・備考
第114図												
U01	須恵器	壺	Ⅰ区				高台径 8.0		全体の80%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内面：青灰色２ 外面：灰色２	打ち欠き　内面、外面の一部及び破面に漆付着　内面かきとり痕あり
U02	須恵器	壺	Ⅳ区	C18	5C層	(10.4)			口縁～体部全周の20%	内外面：回転ナデ	内外面：茶褐色１	内外面に漆付着
U03	須恵器	壺	Ⅰ区	D15	Y1層				小片	内外面：回転ナデ	内面：青灰色１ 外面：灰褐色４	内面・破面及び外面の一部に漆付着　漆の中に繊維状の物質混入
U04	須恵器	甕	Ⅳ区	C19	5C層				小片	内外面：回転ナデ	内面：灰色１ 外面：青灰色１	内面に膜状に漆付着
U05	須恵器	甕	Ⅳ区	C18	5C層				体部上半全周の40%	内面：漆付着のため不明 外面：回転ナデ	断面：灰色１	内外面、頸部割れ口、孔に漆付着
U06	須恵器	甕	Ⅰ区	B17	5C層				頸部～肩部全体の40%	内外面：回転ナデ	内外面：灰色２	内面頸部中心に漆付着　外面垂れ 頸部割れ口にも漆付着
U07	須恵器	甕	Ⅰ区	D15					頸部～肩部のみ全周の100%	内外面：回転ナデ	内面：青灰色１ 外面：灰色２	内面、外面の一部に漆付着
第115図												
U08	須恵器	甕	Ⅳ区	B17	5C層		5.5		底部全周の100%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転糸切り	内外面：青灰色１	内面、外面の一部に漆付着、内面かきとり痕あり 底部外面にヘラ記号「×」
U09	須恵器	甕	Ⅳ区	B17	5C層		5.3		全体の50%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部上半回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り	内外面：灰色２	内外面、孔に漆付着　体部打ち欠き 底部外面にヘラ記号「×」
U10	須恵器	甕	Ⅰ区	E14			5.1		底部全周の100%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデの為切り離し痕不明	内外面：灰色１	内面、外面の一部、孔に漆付着
U11	須恵器	甕	Ⅳ区	B19	5C層		3.8		底部全周の100%	内面：回転ナデ 外面：底部ヘラ切り後ナデ	内外面：青灰色１	内面一部に膜状に漆付着

第43表　漆付着土器　観察表②

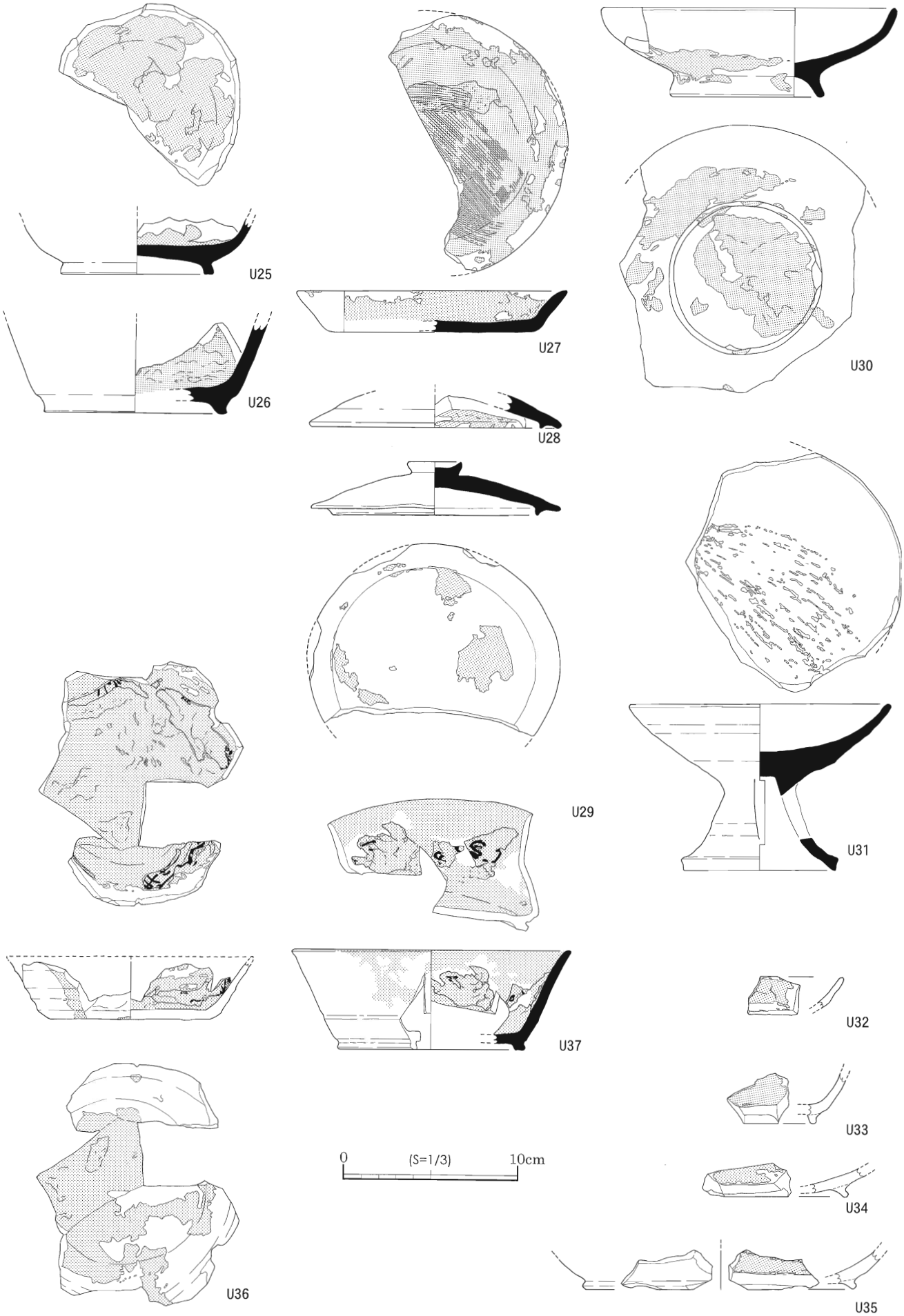
番号	器種	器種	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　　整	色　調	施文・備考
U12	須恵器	坏	Ⅰ区			(12.3)	7.8	4.1	全体の40%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り	内外面：灰色２	内面、外面の一部に漆付着
U13	須恵器	坏	Ⅳ区	B17	5C層	(12.8)	(7.4)	4.5	口縁全周の50%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色２	内面、外面の一部に漆付着
U14	須恵器	坏	Ⅰ区	F15	10層	(12.0)	(8.2)	4.1	口縁全周の25%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰褐色４	内面、外面の一部に漆付着
U15	須恵器	坏	Ⅰ区	D16	9層	(11.6)	(7.9)	4.0	口縁全周の20%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色１	内面に膜状に漆付着　外面口縁部に漆付着
U16	須恵器	坏	Ⅰ区	F13	9層	(11.6)	(6.4)	4.1	全体の25%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色１	内面、外面の一部に漆付着
U17	須恵器	坏	Ⅰ区	S溝ベルト	35層	11.4	8.6	4.3	全体の50%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色１	内面、外面の一部に漆付着　内面かきとり痕あり
U18	須恵器	坏	Ⅰ区	C16	22層	10.8	8.1	4.1	完形	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色２	内面、外面の一部に漆付着　内面かきとり痕あり
U19	須恵器	坏	Ⅰ区	E14		(13.2)	(7.9)	4.2	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色２	内面一部膜状に漆付着
U20	須恵器	坏	Ⅰ区	D16	9層	(11.0)	7.6	4.0	口縁全周の20%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色２	内面膜状、外面一部に漆付着
U21	須恵器	坏	Ⅰ区	D15	10層				体部全周の25%	内外面：回転ナデ	内外面：青灰色１	内面に漆付着
U22	須恵器	坏	Ⅳ区	Y20	5C層				小片	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色１	内面に膜状に漆付着、外面の一部に漆付着
U23	須恵器	坏	Ⅳ区	B17	5C層				小片	内外面：回転ナデ	内外面：青灰色１	内面一部膜状に漆付着　外面の一部に漆付着
U24	須恵器	坏	Ⅰ区	D16	精査土中				小片	内外面：回転ナデ	内外面：灰色２	内面、外面の一部に漆付着　内面かきとり痕あり
第116図												
U25	須恵器	坏	Ⅰ区	E14			高台径8.6		高台全周の50%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内面：青灰色１ 外面：茶褐色２	内面膜状に漆付着
U26	須恵器	坏	Ⅰ区	D16			高台径(10.6)		底部全周の25%	内外面：回転ナデ	内外面：青灰色１	内面に漆付着　内面かきとり痕あり
U27	須恵器	Ⅲ	Ⅰ区	E14		(15.2)	(11.2)	2.4	全体の40%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内面：灰白色１ 外面：灰白色１、底部青灰色１	内面に漆付着　内面かきとり痕あり
U28	須恵器	坏蓋	Ⅳ区	Z21	7層	(14.0)	(14.4)		口縁全周の10%	内外面：回転ナデ	内面：青灰色１ 外面：灰色２	内面に膜状に漆付着
U29	須恵器	坏蓋	Ⅰ区	D16	Y1層	11.6	14.2	3.05	全体の70%	内面：回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ	内外面：灰色２	内面一部に漆付着
U30	須恵器	坏	Ⅰ区	C16	Y1層	(16.5)	高台径8.4	4.15	全体の50%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデの為切り離し痕不明	内外面：青灰色１	外面、高台内に膜状に漆付着
U31	須恵器	高坏	Ⅰ区	D14	10層	(14.8)	(8.6)	9.6	全体の60%	坏部内面：体部回転ナデ、中央ナデ 坏部外面：回転ナデ 脚部内外面：回転ナデ	内面：灰色１ 外面：灰色２	坏部内面に膜上の漆が線状に付着 ２方切れ目
U32	土師器	Ⅲ	Ⅰ区	D15	10層				小片	内外面：回転ナデ	断面：灰褐色２	内外面赤彩　内面に漆付着
U33	土師器	坏	Ⅰ区	E溝ベルト					小片	内面：漆付着のため不明 外面：回転ナデ	内外面：橙褐色１	外面赤彩　高台部黒斑　内面に膜状に黒漆が付着
U34	土師器	坏	Ⅰ区	D15					小片	内外面：風化のため不明	内外面：灰褐色１	内外面赤、内面に膜状に漆付着
U35	土師器	坏	Ⅰ区	D15					小片	内外面：風化のため不明	内面：灰褐色２ 外面：灰褐色１	内外面赤彩　内面に膜状に黒漆付着、外面の一部に漆付着
U36	土師器	坏	Ⅰ区	E15	精査中		(9.0)		全体の50%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部漆付着の為不明	断面：灰褐色１	漆紙文書　赤彩 内外面に漆付着
U37	須恵器	坏	Ⅰ区	E15		(15.7)	高台径(10.2)	5.7	口縁全周の25%	内外面：回転ナデ	内外面：青灰色３	漆紙文書　内面、外面の一部に漆付着



第114図　漆付着土器実測図①



第115図　漆付着土器実測図②



第116図　漆付着土器実測図③

写真図版一四二　漆付着土器

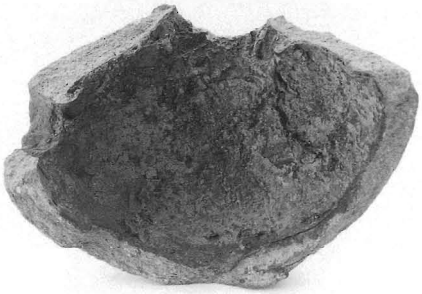
U01

写真図版一四三　漆付着土器

U02

U03

U04



U05

U06

写真図版一四四　漆付着土器

U07

U09

U08

U11

U10

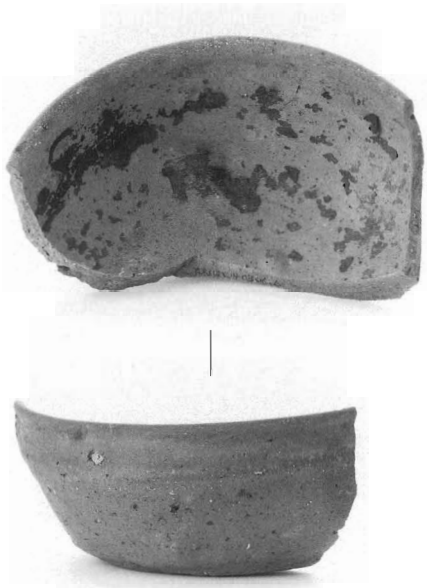
写真図版一四五　漆付着土器

U12

U13

U18

U17



U19

U25

写真図版一四六　漆付着土器

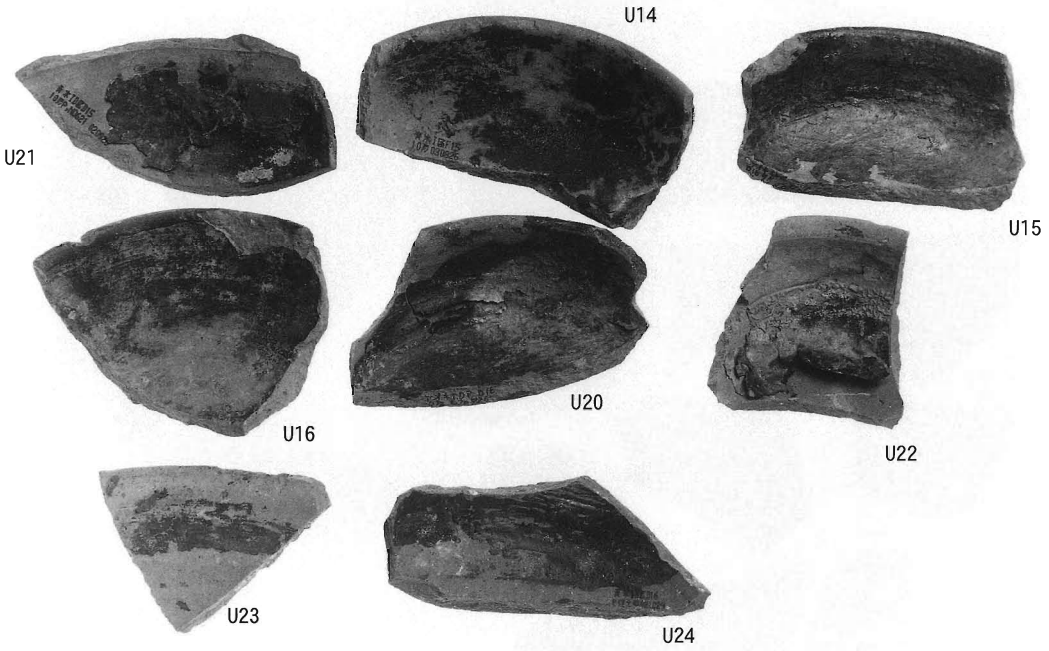
U26

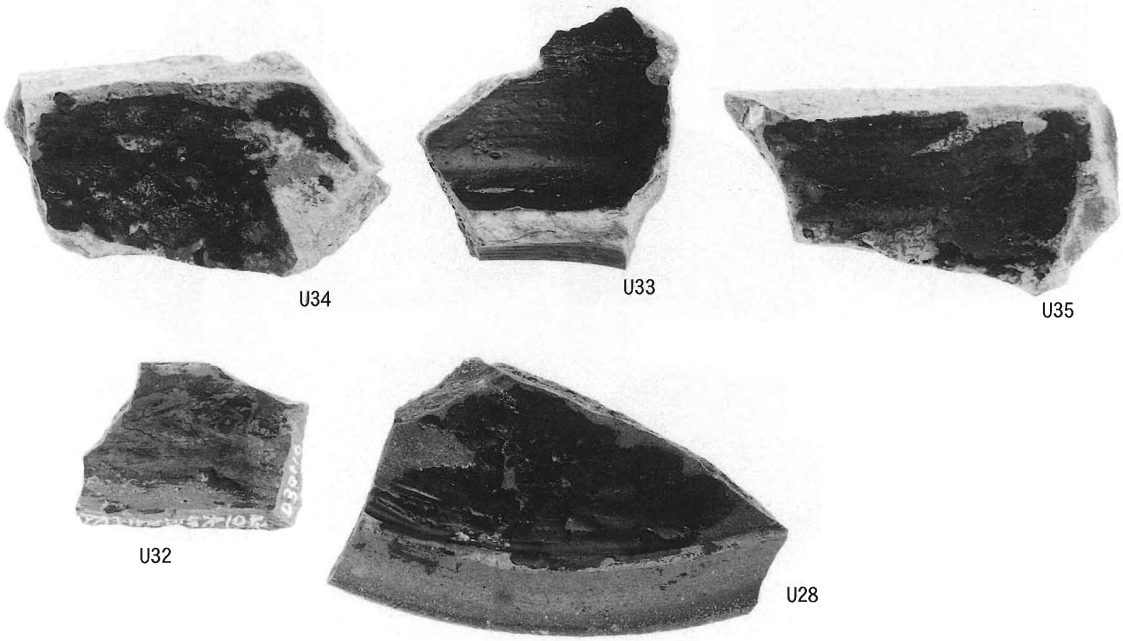
U27

U30

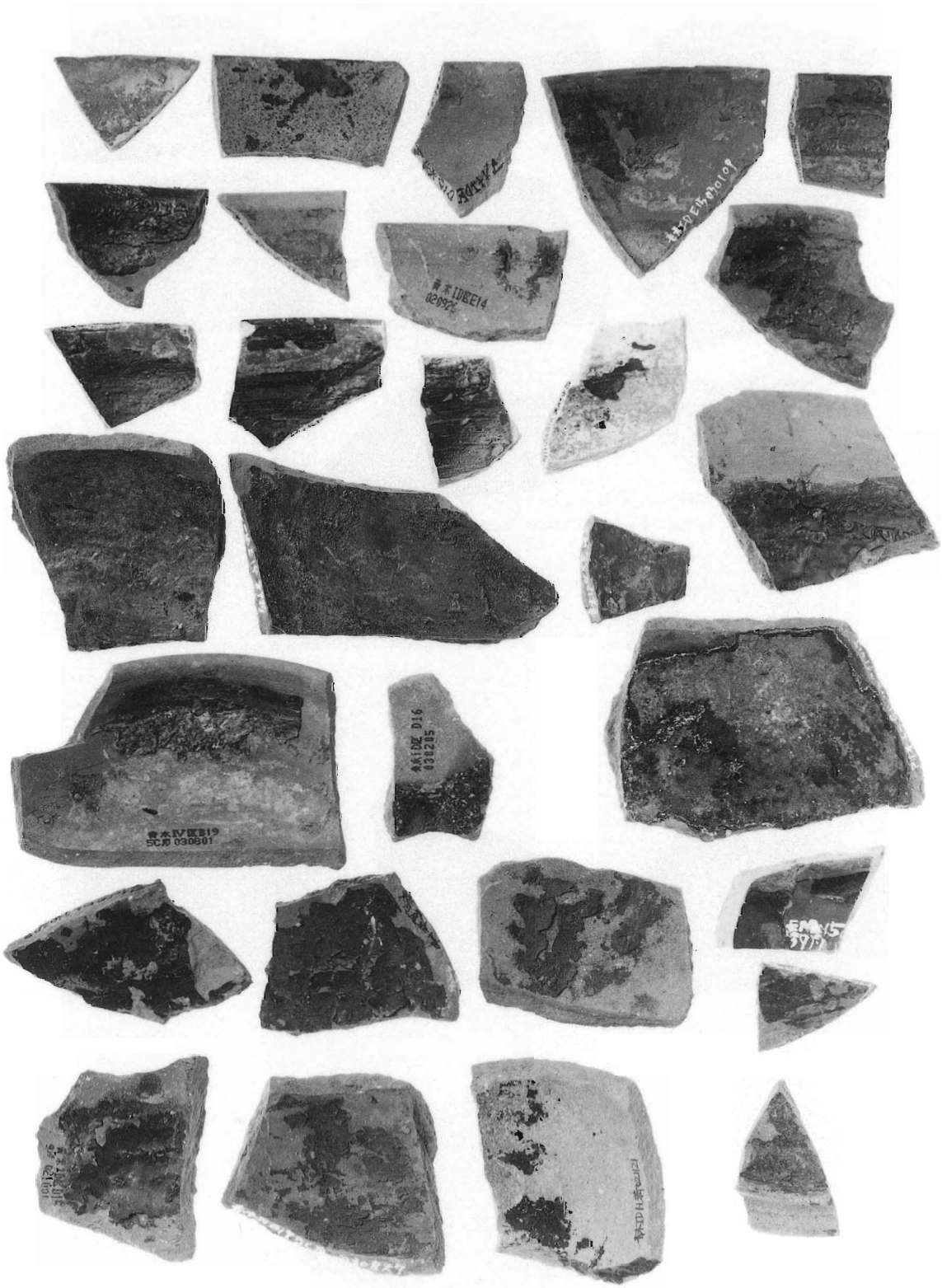
U31

U29


U14
U21
U15
U16
U20
U22
U23
U24


U34
U33
U35
U32
U28

写真図版一四八　漆付着土器



写真のみ掲載

第７節　製塩土器・手捏ね土器・その他土製品（H105～H135）

１．製塩土器（H105～H126）

製塩土器の総量

当遺跡では製塩土器が多量に出土している。土師質で砲弾形を呈し、いわゆる焼塩工程に使用されるものである。計量を全ておこなっていないが、Ⅳ区５B層（～9世紀末の包含層）だけでも12.6kg出土した。５B層は包含層全体からみてごく一部であり、調査区全体では30kgを超えるのは確実である。1個体あたりの重量を250ｇ（完形品H106の実測値）とすると、100個体分を優に超える製塩土器が調査区内から出土したことになる。当遺跡における物資の集積や消費活動の活発さを物語り、遺跡の性格を考えるうえで注目される。

製塩土器の大半は小さな破片となって出土していた。接合検討をおこなったが、実測可能なまでに復元できたのはわずかであった。第117図には５点のみ掲載している。

H106はこのうち唯一、完形近くに復元でき、器形や法量がとらえられるものである。以下特徴を述べる。成形は型造りとみられ、器壁の厚さは一定しない。内面には横方向のナデ痕が残り、胎土表面が水分を持つべちゃべちゃした状態でナデ調整による仕上げがおこなわれている。型から外した後の調整、整形は指押さえのみで、口縁端部はつまみ押さえて薄く仕上げられる。外面には指頭圧痕で凹凸激しく、内面はナデ消されているが指押さえのくぼみが残る。全体にひずみが大きい。表面は焼きによる被熱ムラがあり、さまざまな色調で斑状となる。外面表面が薄く剥離するように剥げた部分が認められ、焼く際に水分を持っていてはじけたものとみられる。

墨塗りされた製塩土器

注目されるのは、口縁端部の外面に帯状の墨塗りが認められることである。H106では図示していないが、墨とみえるものは黒色を呈し幅１㎝程度、口縁端部に沿って付着している。墨書土器にみられる墨書と表面状は非常によく似ている。H110からH126には、そのような墨塗り？が付着した破片を集めて図示した。いずれも口縁端部、あるいは口縁に近い部分の外面に、黒い帯状のものが認められる。個体によっては輪郭が不明瞭にぼやけ、焼き工程で付着した煤様のものの可能性があるが、一部のものは輪郭が極めて明瞭で、筆描きの墨としかみえない。これが意図的なものかどうかは現時点で断定できないが、他遺跡の製塩土器でこのような痕跡がみられるものは無く、人為的につけられた可能性は高い。とすれば、生産地でつけられた記号か、あるいは当遺跡で集積・保管から消費に至るどの段階かでつけられた管理上の記号であろう。当遺跡で盛んに行われた墨書、硯の数量からみると、後者の可能性が注目される。

２．手捏ね土器（H127～H133）

手捏ね土器としてH127からH133を図示した。いずれも包含層中からの出土で、H127～H131は状況からみて古代のもので、祭祀的なミニチュアとしての性格をもつ手捏ね土器とみられる。一方、H132とH133は比較的丁寧な整形であり、古墳時代以前の小型丸底壺である可能性がある。

H127は坏形の器形をとる手捏ね土器。外面はかなり粘土の乾燥が進んだ段階で整形されたようで、表面にひび割れが多く生じている。平面形もいびつで、口縁も水平でなく大きく波打つ。H128は形のいびつな手捏ね土器で、器壁が10㎜以上あり厚くぼってりしたもの。指押さえでこね上げて成形され、内面には多くの指頭圧痕を残す。板の上で基底部を横から押さえつけているため、底面には板の圧面が平坦に残る。口縁は大きく波打ち、最も高い部分には薄く黒色の付着物がつく。燈明用具として使用された可能性も考慮される。

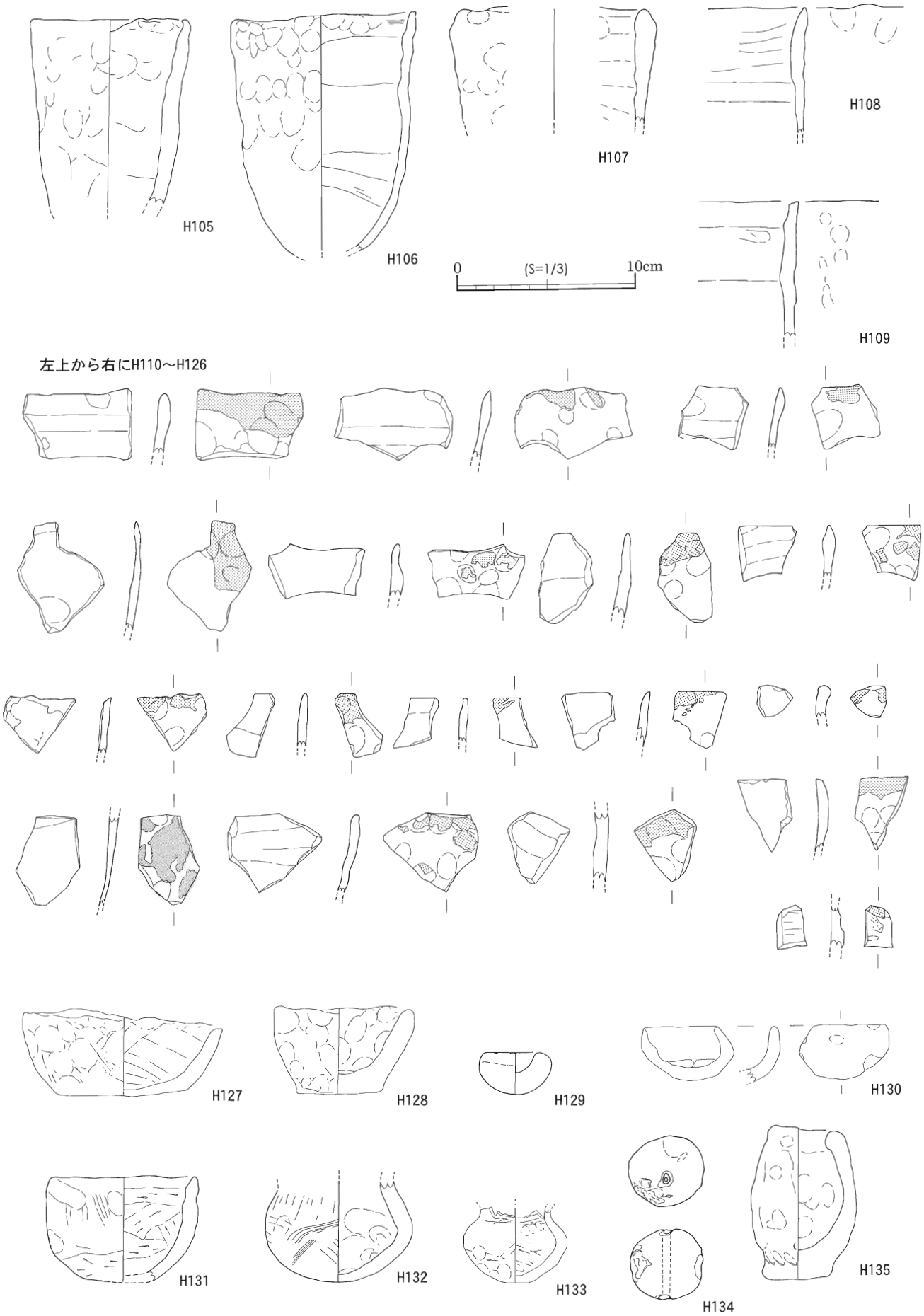
H133は胴部最大径58㎜の小型丸底壺。胴部下半はていねいなケズリで整形される。

３．その他土製品（H134～H135）

H134は古墳時代以前の可能性がある土玉。H135は器高8.7㎝の飯蛸壺で、グリッド層位不明。

第44表　製塩土器・手捏ね土器・土製品　観察表

番号	種別	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調　整	色　調	施文・備考
第117図											
H105	製塩土器	Ⅳ区	A18	5C層	(8.6)			全体の30%	内面：ナデ・指頭圧痕 外面：指頭圧痕	内外面：橙褐色2	
H106	製塩土器	Ⅰ区	D15	9層	10.0			全体の60%	内面：体部ナデ、口縁部指頭圧痕 外面：指頭圧痕	内外面：橙褐色1	
H107	製塩土器	Ⅰ区						小片	内面：ナデ 外面：指頭圧痕	内面：橙褐色1 外面：灰褐色1	
H108	製塩土器	Ⅳ区	X21	5B層					内面：ナデ、ケズリ 外面：ナデ、指頭圧痕残る	内外面：橙褐色2	
H109	製塩土器	Ⅳ区	Z21	5B層					内外面：ナデ、指頭圧痕残る	内外面：橙褐色2	
H110	製塩土器	Ⅰ区	D16	精査土中				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内面：灰褐色1 外面：桃褐色2	外面墨痕
H111	製塩土器	Ⅰ区	E15	34層				小片	内面：ヨコナデ後ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内面：橙褐色3 外面：橙褐色2	外面墨痕
H112	製塩土器	Ⅰ区	D16	精査土中				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内面：橙褐色3 外面：灰褐色3	外面墨痕
H113	製塩土器	Ⅰ区	D15					小片	内外面：ナデ、指頭圧痕	内面：橙褐色2 外面：橙褐色3	外面墨痕
H114	製塩土器	Ⅰ区	D16	9層				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：橙褐色1	外面墨痕
H115	製塩土器	Ⅰ区	D16					小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内面：橙褐色4 外面：橙褐色2	外面墨痕
H116	製塩土器	Ⅰ区	D15	精査土中				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：橙褐色1	外面墨痕
H117	製塩土器	Ⅰ区	-16	9層				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内面：橙褐色1 外面：灰褐色1	外面墨痕　内面塩付着
H118	製塩土器	Ⅰ区	D16					小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：橙褐色1	外面墨痕
H119	製塩土器	Ⅰ区	D16					小片	内外面：ナデ	内面：橙褐色1 外面：橙褐色2	外面墨痕
H120	製塩土器	Ⅰ区	D16	精査土中				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内面：灰褐色2 外面：橙褐色2	外面墨痕
H121	製塩土器	Ⅰ区	D16	9層				小片	内外面：ナデ	内面：橙褐色1 外面：橙褐色2	外面墨痕
H122	製塩土器	Ⅰ区	M溝					小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：橙褐色1	外面煤付着
H123	製塩土器	Ⅰ区	D16	9層				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内面：橙褐色2 外面：橙褐色1	外面墨痕
H124	製塩土器	Ⅰ区	D15	精査土中				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：橙褐色1	外面墨痕
H125	製塩土器	Ⅰ区	D16					小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：橙褐色1	外面墨痕
H126	製塩土器	Ⅰ区	D16	9層				小片	内面：ナデ 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：橙褐色1	外面墨痕
H127	手捏ね土器	Ⅳ区		排土中	11.1	4.2	4.9	完形	内面：ナデ 外面：体部指頭圧痕、底部ナデ・指頭圧痕	内面：灰褐色1 外面：灰褐色2	
H128	手捏ね土器	Ⅳ区			7.5	4.8	5.0	完形	内面：指頭圧痕 外面：体部指頭圧痕、底部板目痕後ナデ	内面：灰褐色4 外面：灰褐色2	底部板目痕
H129	手捏ね土器	Ⅳ区	Z21	5B層	2.9		2.35	完形	内外面：ナデ	内外面：灰白色	
H130	手捏ね土器	Ⅰ区	E溝					全体の40%	内面：体部ナデ、底部指頭圧痕 外面：ナデ、指頭圧痕	内外面：灰褐色3	外面黒斑
H131	手捏ね土器	Ⅳ区	B18	5C層	(7.8)			全体の40%	内面：口縁部横ナデ、体部ケズリ 外面：体部ハケメ・指頭圧痕、底部ケズリ	内外面：灰褐色3	
H132	手捏ね土器	Ⅰ区	E13	5層				全体の80%	内面：指ナデ、指押さえ 外面：指ナデ、ハケメ、指頭圧痕	内外面：灰褐色2	
H133	手捏ね土器	Ⅳ区	B20	6層		1.4		体部100%	内面：ケズリ、頸部指頭圧痕 外面：ナデ、体部下半指頭圧痕	内外面：灰褐色3	外面一部黒斑
H134	土玉	Ⅳ区	A19	5C層				ほぼ完形	外面：ナデ	外面：灰白色1	最大長3.9
H135	蛸壺	Ⅰ区			(3.5)	(4.0)	(8.7)	全体の95%	内外面：指押さえ	内外面：橙褐色1	

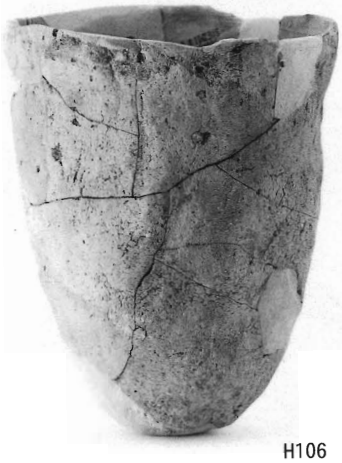


第117図　製塩土器・手捏ね土器・土製品実測図

写真図版一四九　製塩土器

H105

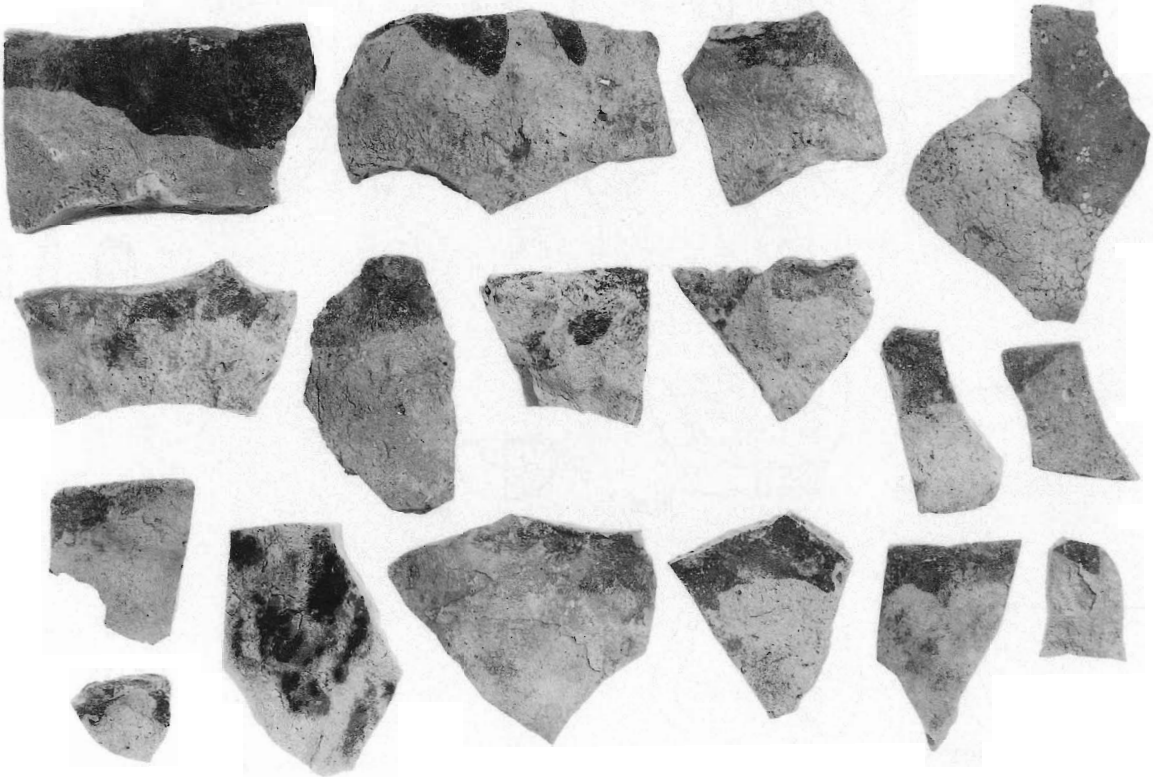
H108



H106

H107

H109



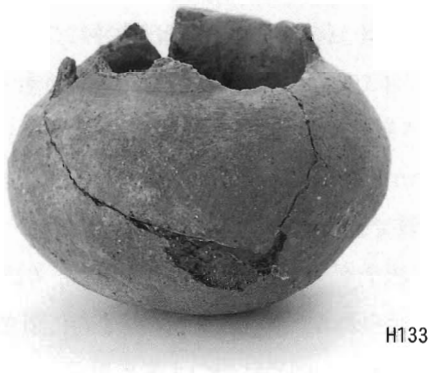
左上から右にH110～H126

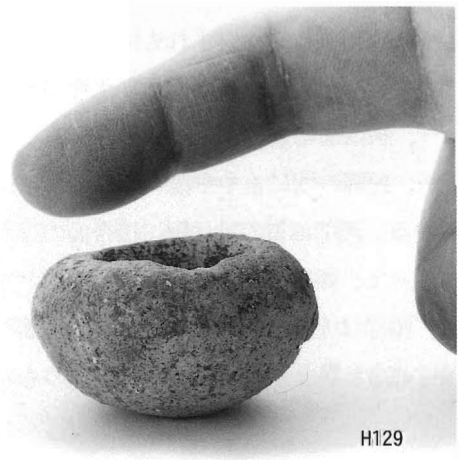
写真図版一五〇　手捏ね土器・土製品

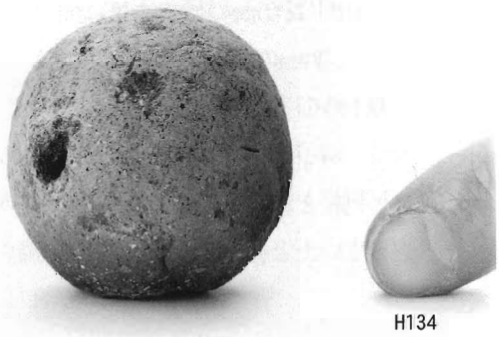
H127

H132

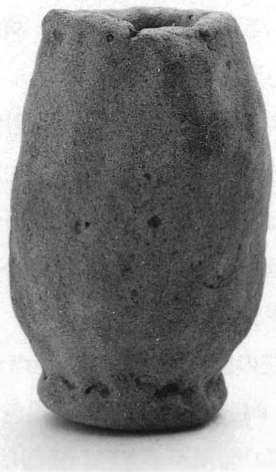
H128


H133


H129


H134

H130


H135

H131

第８節　土　馬（C73～C85）

全容のわかる２個体分のほか、破片が11点出土している。中村倫子氏の原図を改変して使用させていただいた。C73は鞍を着装した土師質の土馬。右前脚と胴部を欠く。オス馬が表現される。Ⅳ区Z20グリッド５C層から出土した。復元長243㎜、最大高131㎜。橙褐色１の胎土中に石英粒を中心とした砂粒を多く含み、粗くざっくりした粘土が用いられている。表面は砂粒が露出しており粗い。馬の表現は首を下げた状態。正面から見ると向かって左側に口がかたむいており、愛嬌のある表情をしている。目、鼻は直径4.5㎜ほどの竹管状のものを刺突してつけられる。口も同じ工具を横に押しつけて表現している。耳は貼付けて成形され、左耳は欠失している。たてがみは別材の貼付けではなく、首の上ラインを指でつまんでかすかに表現されている。鞍は欠失部分にかかっていて全容があきらかでないが、鞍橋の後輪部分の立ち上がりが残存している。高さ10㎜ほどの別の粘土を貼り付けて成形される。尾は後方へ向けてほぼ水平にのびる。剥離痕からみて、尾は体部と一体の粘土から成形したもので、四脚は個別に成形して貼り付けたと判断される。性器表現は13㎜ほどの粘土を貼り付けて表現される。肛門は径3㎜の棒を鞍に向けて刺突される。深さ20㎜。C84はC73の付近から出土しており胎土が似るため、C73の右前足ではないかと考えたが、太さ、長さが釣り合わず、剥離面も全く接合しないことから別個体と判断される。

C74は土師質で装具が表現されない裸馬。頭部と尾の先端を欠く。メス馬が表現される。破片は散らばって出土しており、出土グリッドはF14、G13、G14、G15。胎土は精製されたもので砂粒を含まず、表面はナデによって丁寧に仕上げられる。脚は逆V字に直線的に開きふんばった姿勢をとる。いずれも付け根に接合面のはがれが認められる。前足はひづめ状のつま先表現があるが、後脚には無い。たてがみは首の粘土をつまんで後方に延ばして形作られる。肛門は径5㎜の棒で水平に開けられており、胸前面に達する手前までのびる。性器表現は後脚の間に径4.5㎜、深さ30㎜の穴があけられている。ところが、前脚の間にもやや径の小さい穴が深さ28㎜まであけられており、製作時の当初は前後が逆であったことがわかる。頭部は首の付け根に接合面のはがれが認められることから、体部と別づくり接合であったことがわかる。よって、頭部を接合する段階で当初と逆の向きに前後を決定したものと判断される。首は持ち上げた姿勢をとる。頭部は完全に失われているが、破面のすぐ上あたりで下顎へと屈曲していたと推定される。尾は先端を欠くが、C73と異なりごく小さな突起状のものであったとみられる。

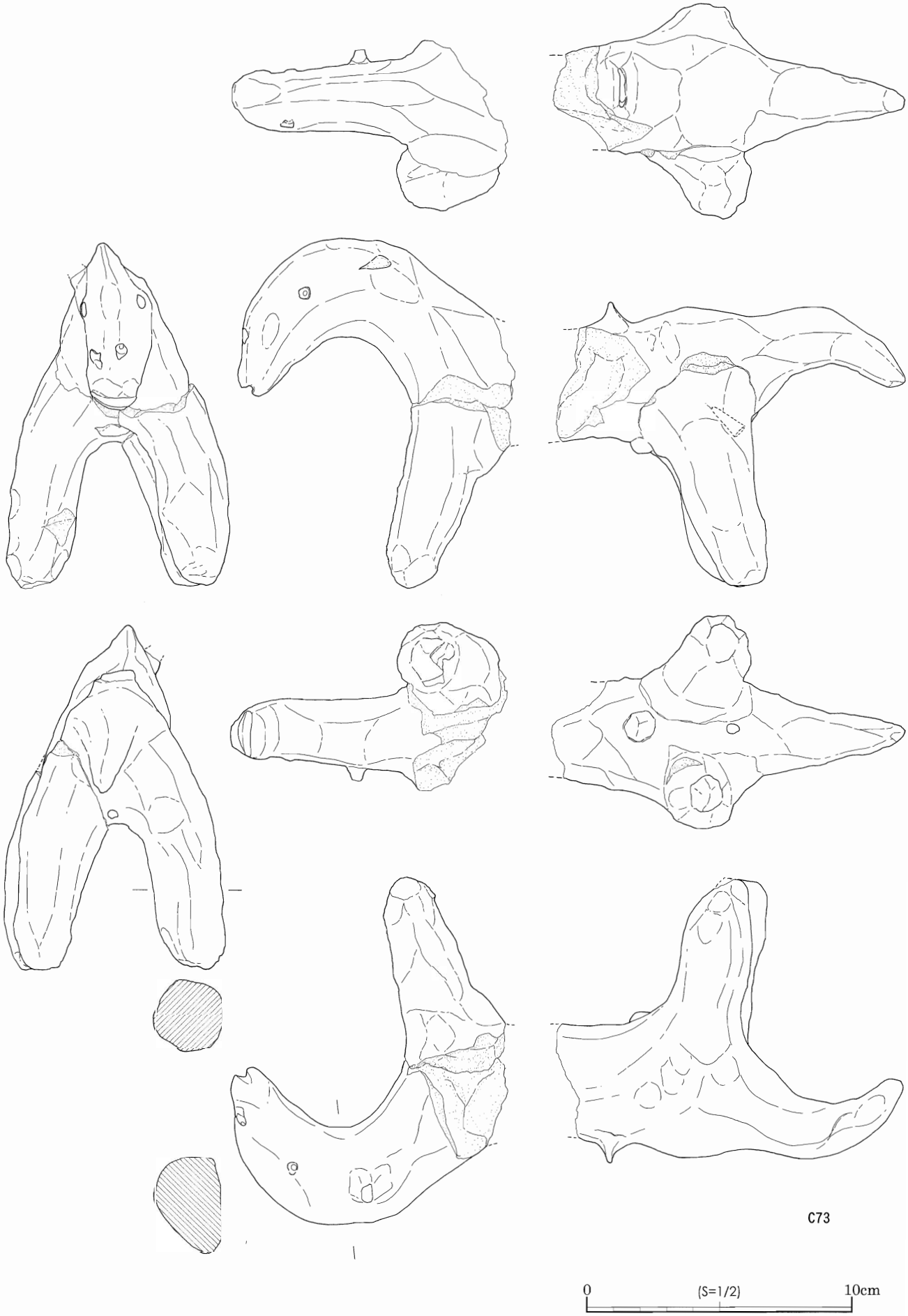
C75～C77は同質であり同一個体のものとみられる。いずれもⅠ区G13グリッド10層から出土した。C75は頸部の破片で、たてがみがつまみ出して表現される。右目にあたる位置に刺突による窪みがある。体幹との接合面で破損した可能性がある。C76は脚の破片、接合面から剥離している。C77は脚の先端部の破片。3破片ともに焼成が堅緻で桃褐色２を呈する。

C78～C81は須恵質の脚部破片。尾部の破片の可能性をもつものを含む。胎土は灰色1で還元焼成され、完全な須恵質となる。同一個体のものかは不明。C78はⅠ区F13グリッド12層、C79はⅠ区G14グリッド11層、C80はⅠ区D16グリッド、C81はⅠ区F13グリッド11層から出土した。C78とC79は同大で同一個体の可能性がある。C81はひとまわり大きく別個体か。C80は全体にかかった自然釉の様子や、端部が地に着いた平坦面が無いことから脚でなく尾である可能性がある。

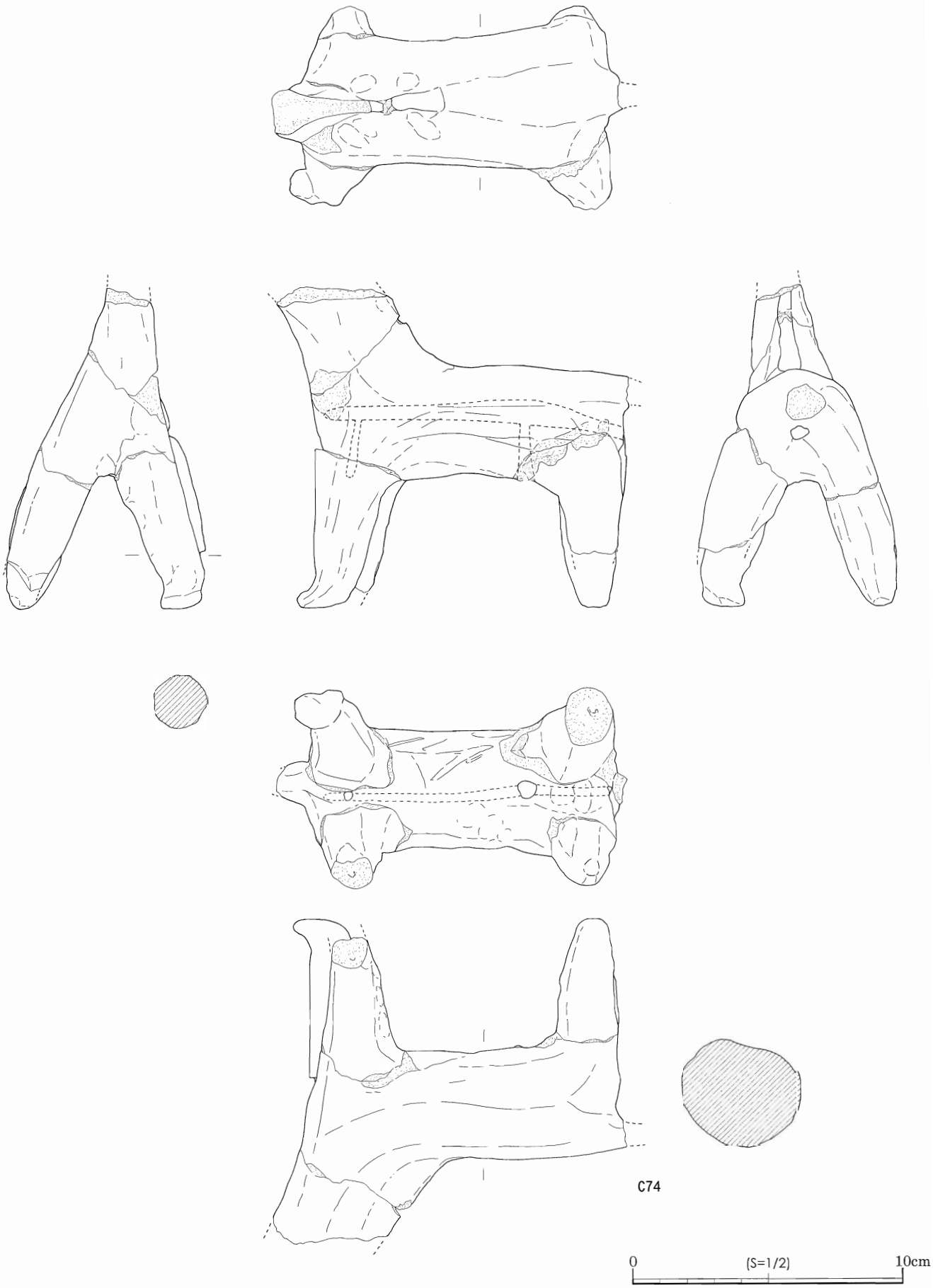
C82とC83は土師質の脚部破片。出土地点が近く同質であることから同一個体のものである可能性が高い。ともにⅠ区G13グリッド11層から出土。橙褐色１の胎土で、砂粒を含むが全体に胎土が精選されたものである。先端がすぼまり着地部の面積が小さい。表面は丁寧になでられている。C74の胎土に近い。

C84は土師質の脚部破片。C73の付近、Ⅳ区Z20グリッド５C層から出土した。C73と胎土も近く、粗い砂粒を含んだざっくりした土で表面に砂粒が表出してざらざらしている。C73とは接合しない。

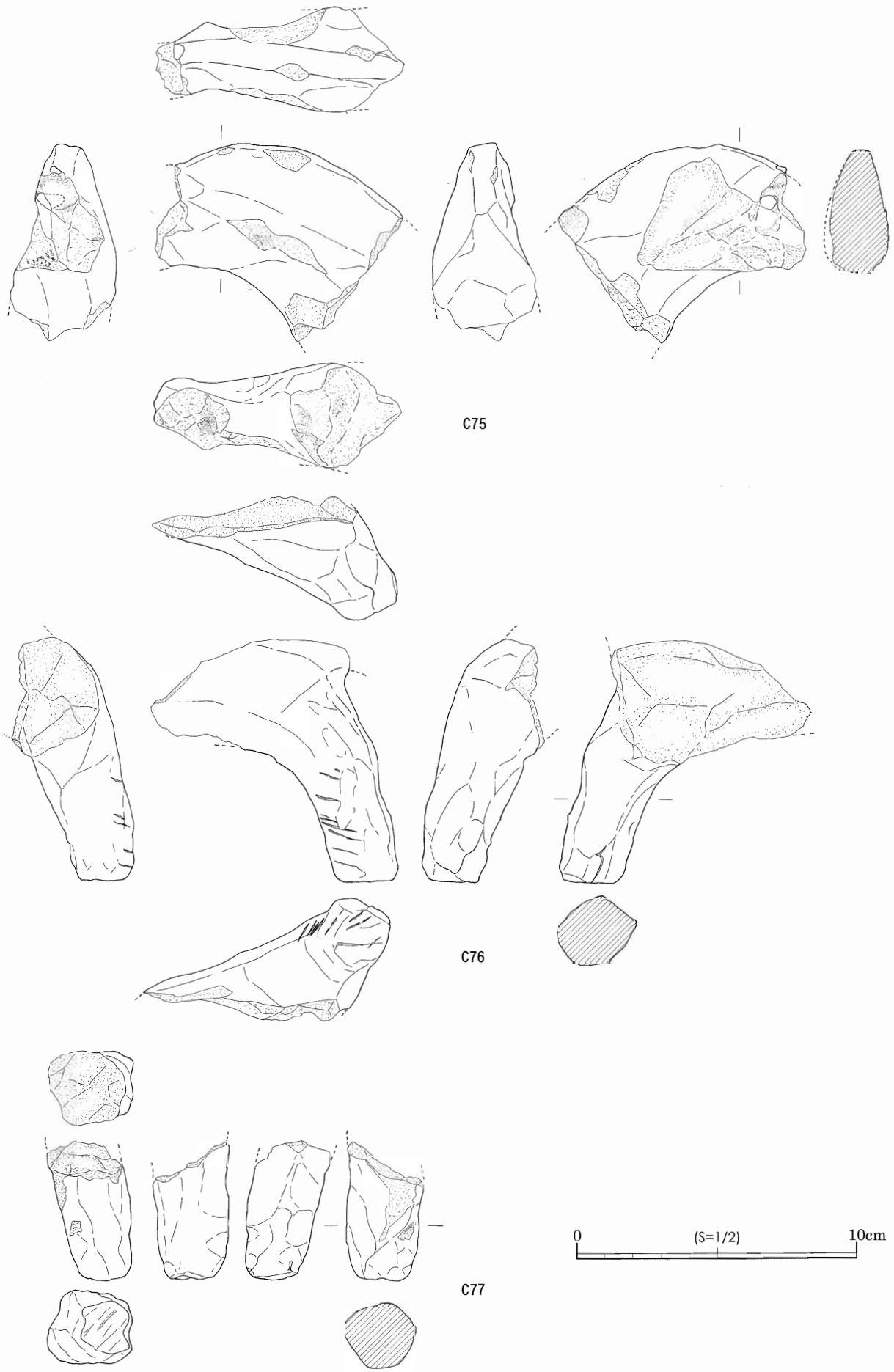
C85は土師質の脚部破片で、Ⅰ区G13グリッド11層から出土。同質の破片は他に無い。



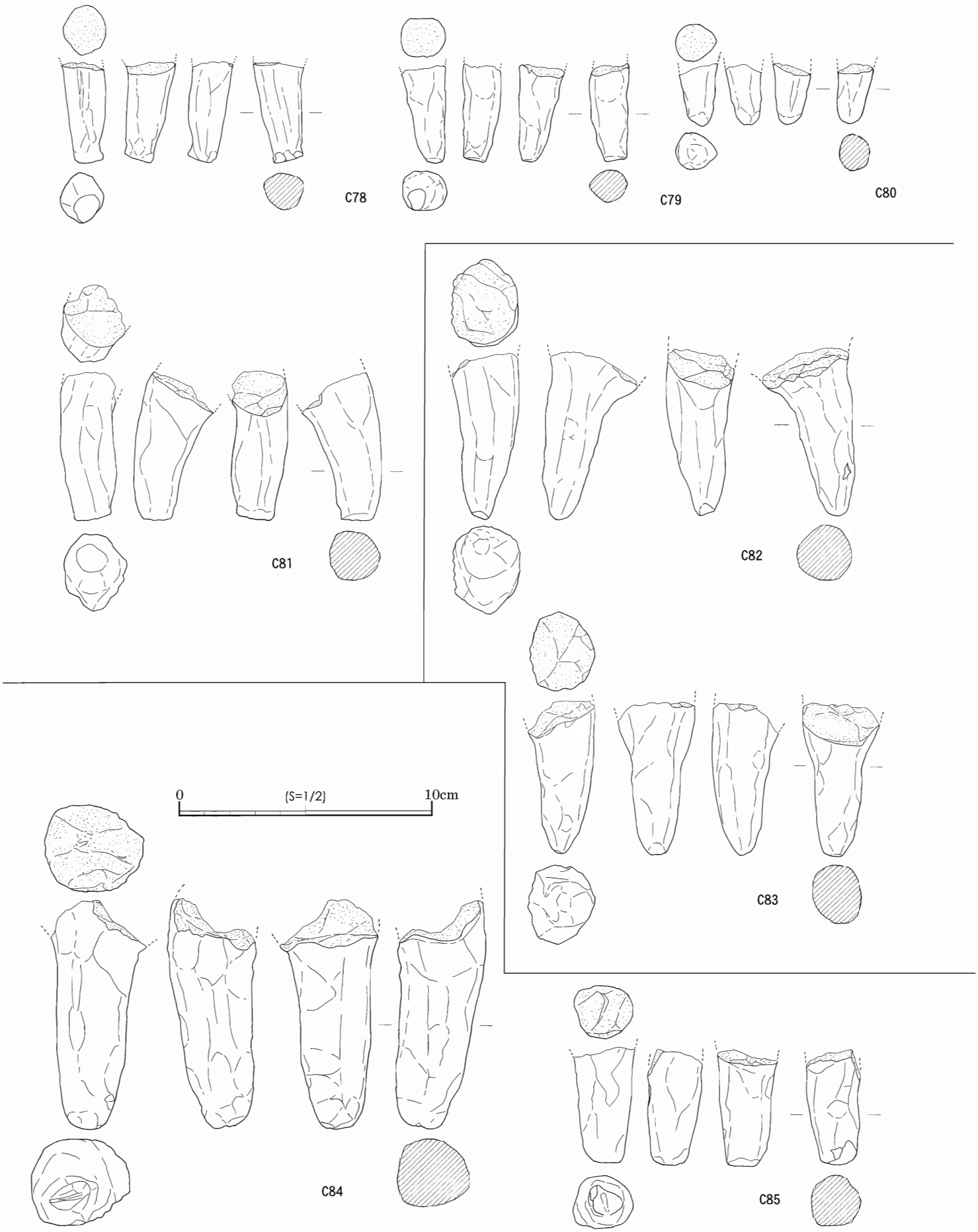
第118図　土馬実測図①



第119図　土馬実測図②



第120図　土馬実測図③

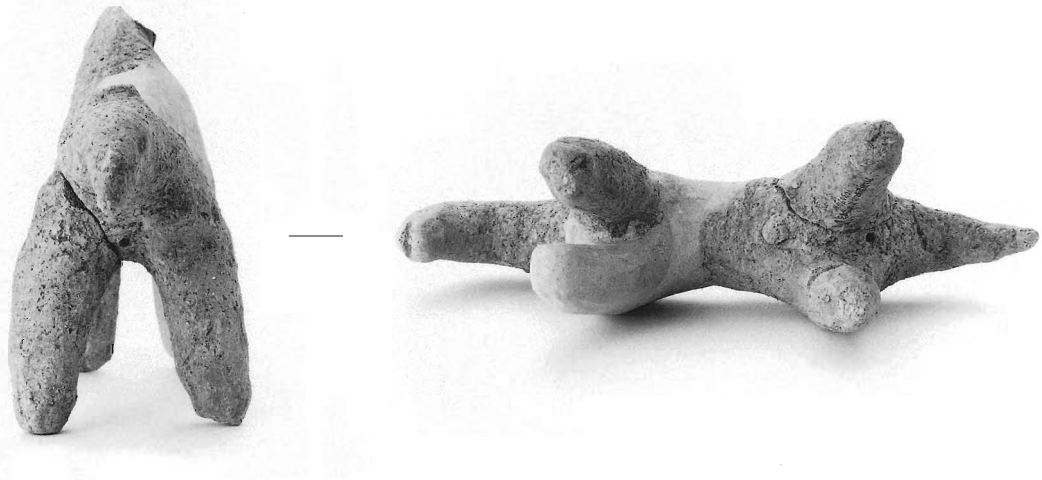


第121図　土馬実測図④

写真図版一五一　土製品／土馬

写真図版一五二　土製品／土馬

C73



C74

第９節　金属製品（M01～M40）

１．腰帯具（M01～M04）

金属製の銙帯金具4点が出土している。なお、石製のいわゆる石帯に関する遺物は全く出土していない。

M01は銅製巡方の表金具。Ⅰ区北半で出土しているが、地点・層位不明。横幅27.5㎜×縦幅21.6㎜×厚さ2.1㎜。重量5.2ｇ。4箇所に一体型の脚鋲がつき、鋲はいずれも先端まで欠損なく残存している。鋲の長さ2.5～2.8㎜で、裏面図の左上の脚は先端に叩きかしめた面を残す。垂孔は6.4×21.5㎜で大孔の部類に入る。残存状態が良く、サビはほとんど発生していない。鋳上がり後の研磨などによる擦痕はほとんどみられず、全体に成形がていねいである。表面は銅地がそのまま露出しており漆塗などの加工痕跡は残っていないが、裏面には部分的に黒漆膜が固着しているのが認められる。膜は裏面に広くみられるほか、垂孔内の側面にも残存している。このことから、残存している黒漆は革帯に由来するものではなく金具自身に塗布されたものであったことがうかがえる。表面は完全にはがれて残されていないが、同様に黒漆塗りであったことが推定される。

M02は銅製巡方の裏金具。Ⅰ区C16グリッドから出土した。横幅27.3～27.6㎜×縦幅23.7～24.9㎜×厚さ0.9～1.1㎜。重量3.8ｇ。外側になる面は平滑で、研磨痕とみられる傷が一方向にはいる。一部赤銅色の地金が露出するが、全体にサビなく安定した状態。漆などの付着物はまったく認められない。内側（帯側）の面は槌打による不定形な凹凸が多く残り、粗い仕上げのままで研磨は加えられていない。平面形は整った長方形でなく、特に図上上辺は湾曲している。鋲孔は5箇所あり、径1.3㎜程度。うち1箇所には鋲脚が入ったままの状態で破断している。

M03は銅製巡方の裏金具。Ⅰ区から出土した。横幅29.8㎜、縦幅22.0㎜以上、厚さ1.2㎜。重量3.4ｇ。破損しており全体形は明らかでないが、４隅に鋲孔が設けられていたと想定される。外側になる面は酸化被膜の下に研磨痕が多く残る。地金が露出し金色を呈する部分があるが、鍍金などとは考えられない。漆などの付着も認められない。内側の面は槌打のままで研磨されないが、M02にくらべ平坦に仕上げられている。

M04は銅製丸鞆の裏金具。Ⅰ区D16グリッドからの出土。横幅26.2㎜×縦幅17.3㎜×厚さ1.4～1.8㎜。重量2.9ｇ。垂孔が設けられるタイプ。垂孔の規模は6.8㎜×17.5㎜で全体に対して大きい。垂孔の位置は中心からずれて偏っており、上辺が直線でなく折れるなどいびつな平面形である。外側の面は平滑だが、内側の面はやや凹凸が認められる。サビなどなく安定した良好な残存状態で、研磨痕はみられない。漆などの付着も認められない。

２．刀装具（M05）

M05は銅製刀装具で、鞘尻金具（石突）もしくは柄の先端金具（冑金）。Ⅳ区の北東Y21グリッドより、包含層である６層から出土した。最大幅32.0㎜×長さ27.0㎜×最大厚13.5㎜、重量15.1ｇ。両側面に計2箇所、径1.2㎜の鋲孔が設けられる。孔は外側から穿孔され、内側には微細なバリが出る。金具の内法の計測値から、柄（鞘）木は幅27.9㎜×厚10.6㎜に復元される。残存状態良好で、サビ等みられず表面が露出している。金銀装や漆などの加工痕跡は全く認められない。また、使用に伴う傷やへこみなどもみられない。

３．鉸具（M06）

M06は鉄製鉸具。Ⅰ区の北東隅近くから出土。長さ54㎜、輪部の最大幅45㎜、軸付近での最大厚9.9㎜。重量29.7ｇ。残存状態良くサビがほとんど無いため、本来の状態のままを観察することができる。T字形の刺金は先端が鈍く丸まり、鍛打による凹凸が残り雑な成形。輪部内側に設けられた小さなくぼみにはまっている。断面方形の軸棒は輪部に開けられた孔を貫通させ、先端を叩きかしめて固定している。内法から、装着された帯は幅27㎜以内、と想定できる。刺金と軸棒の成形がひずみあり拙いのに対し、輪部の成形は丁寧で、明確な稜線が造り

出されている。腰帯具としての用途も想定されるが、鉄製でやや作りが大きいこと、他に鉄製の腰帯具関連のものが出土していないことから、断定することは難しい。

4．不明製品（M07～M08）

M07は吊り金具状の鉄製品。Ⅰ区のE14グリッドから出土した。２つの鉄環が軸で連結されており、サビつくことなく現在でも可動部が動く。上の環は下側が幅広に広がっており、円孔が穿たれる。これに軸を通した後で先端を球状に太く成形していて、軸は上下・回転方向に自由に動くことが可能である。軸の下端は下の鉄環に通して折り返され、軸に２周巻き付けて固定される。下の鉄環は断面円形の鉄棒を丸めただけのもので、歪んだ楕円形を呈する。用途は不明だが、遊動性のある２者を垂下ないし連結するためのものであろう。延ばした状態で全長101㎜、上の鉄環の長径42㎜×短径30㎜、下の鉄環の長径32㎜×短径20㎜。重量16.7ｇ。

M08は鉄製の棒状製品。Ⅰ区のD15グリッドで、礎石建物SB04の下層から出土した。断面円形の棒を曲げたもので、一方の端は鈎状に曲がり先端が鋭くなる。他方の端はやや太く潰されている。長さ52㎜、断面径5㎜、重量6.3ｇ。用途不明。

5．銅　滴（M09）

M09は溶解状態で固化した不定形の金属塊で、外観から非鉄金属を素材とするものとみられ、いわゆる銅滴の可能性がある。Ⅳ区のZ19グリッドで、10世紀までの遺物を包含する５層から出土した。42×26㎜、重量12.4ｇ。厚さ3.0～4.2㎜と薄く、流れた状態で固まっている。表面は凹凸が多く、表面張力のまま固まった様子ではない。微細な気泡をわずかに含んでいる。

6．鏃（M10～M13）

鉄鏃4点が出土している。M12は古代（8世紀後半～9世紀）のもの、それ以外は包含層からの出土で時期を特定できないが、形状からみて古墳時代のものと考えられる。

M10は鉄製の長頸鏃。Ⅰ区から出土。茎の先端を欠き残存長122㎜、篦被から先端までの鏃身長108㎜、重量13.6ｇ。ただしサビや砂粒が多く付着する。

M11は柳刃式の鉄鏃。Ⅰ区G14グリッドから出土した。残存状態悪く、表面が大きく剥離しているほか、側縁刃部も欠損が多い。現状での重量7.9ｇ。

M12は鉄製の雁又鏃。Ⅰ区の溝SD16の埋土中から出土した。先端の刃部幅37㎜、刃部長54㎜、茎を含めた全長69㎜。重量6.7ｇ。

M13は大きく折れ曲がった鉄製の長頸鏃。Ⅰ区のD16グリッド、包含層第９層から出土した。先端の刃部を欠損し、全体が鏃身基部を境に大きく曲がっている。

7．斧（M14～M16）

同大、同形態の鉄斧が３点出土している。いずれも折り返しにより袋部をつくる鍛造鉄斧。手斧等、小型の横斧としての用途が想定される。3点とも時期は古代のものと想定される。

M14はサビの付着が著しく細かな形状が明瞭でないが、刃部がバチ形に開く形状。全長77㎜×刃部幅46㎜×基部幅37.5㎜×基部厚17㎜、重量101.9ｇ（サビ含む）。木質などは残らない。Ⅰ区E15グリッドから出土した。

M15は全長76.0㎜×刃部幅41.2㎜×基部幅36㎜×基部厚19㎜、重量83.3ｇ（サビ含む）。Ⅰ区礎石建物SB05に伴って出土している。位置は建物平面プランの内側で、北東端に検出された礫の隙間である。この礫は版築の上面に敷かれた地覆石状のもので、M15は建物機能面の直上から出土したものと評価できる。袋部から刃にかけての平面形は片側が直線的、他方が広がる形状で、対称形でない。研ぎ減りの可能性もあるが、刃のラインがやや

傾いていて、横斧としての使用時には不都合があると考えられる。全体に成形が粗雑な印象を受ける。

M16は全長73㎜×刃部幅43.7㎜×基部幅34.5㎜×基部厚16.8㎜、重量107.5ｇ。Ⅳ区の南西隅に近いD20グリッドで、古代の遺構面を被覆する包含層（５C層）中から出土した。鎌M22と位置・層位が近い。湿潤な環境で保存されていたため残存状態が非常に良く、表面にはほとんどサビが発生していない。また柄の木質が袋部に入った状態で残存している。残りの柄の部材については周辺に残されていなかった。仮に装着された状態で埋没していたとすれば柄全体が残存しうる環境であるため、袋部の柄先が折損する形で埋まったものと考えられる。M14・M15の袋部断面形状が若干丸味をもつのに対して、M16は整った長方形に仕上げられている。

８．刀子（M17～M18）

鉄製刀子2点が出土している。古代のものである可能性が高い。

M17は茎から刃部の基部にかけての破片で残存状態は悪い。背側に関があり、刃側は茎から刃部にかけて直線的につながっている。残存全長96㎜（刃部長42㎜、茎長54㎜）で両端を欠いている。関近くでの刃部幅9.4㎜、背厚3.4㎜。現状での重量6.7ｇ。出土地点はⅠ区C16グリッドで、SD31の西側に重なる溝遺構の埋土中から出土した。

M18は茎の一部を欠くがほぼ完形に復元される。復元全長161㎜、刃部長86.4㎜。重量10.3ｇ。関近くの刃部最大幅12㎜、背厚3.3㎜。Ⅰ区D16グリッドから出土した。状態が悪いが柄木が残存している。ただし表面が残る箇所はない。茎の先端は折れ曲がるが、これは土中での二次的なものとみられる。刃部は研ぎ減りによる若干の内反りがみられる。

９．鎌（M19～M23）

鉄鎌5点が出土している。M20とM21は出土層位から古墳時代のものの可能性がある。M22とM23は古代（8世紀後半～9世紀）のもの。M19は古代の可能性が高い。

M19は先端部が湾曲する形状で、中ほどからくの字に折れ曲がる。残存長108㎜。基部近くでの最大刃幅25㎜、背厚3.5㎜、先端での刃幅15㎜。重量24.7ｇ。刀子M17と同じ溝遺構内から出土した。

M20は直刃の鎌で、先端にかけて湾曲する。中ほどから二次的に折れ曲がる。残存長130㎜、刃が残存する箇所で刃幅30㎜、背厚2㎜、重量27.4ｇ。Ⅰ区の礎石建物SB04周辺で、建物の遺構面より下層から出土した。

M21は古墳時代中期の土器を含む礫群中から出土しており、古墳時代のものである可能性が高い。残存状態が悪く、縁の剥離が進んでいる。残存長110㎜、中ほどでの刃幅25㎜、重量22.6ｇ。

M22は大型の鎌で、Ⅳ区の古代の包含層（5C層）中から出土した。D20グリッド。斧M16と出土位置が近い。先端を欠き残存長184㎜、基部近くでの刃幅40㎜、背厚5.2㎜。重量148.7ｇ。基部から7.5㎝ほどは刃部が厚く刃が鈍いが、急に内湾して刃が薄くなる。研ぎ減りが顕著である。

M23はほぼ完形で、先端部が大きく内湾する。M22もこれと同様の形状であろうと推定される。Ⅳ区のA20グリッド、方形貼石区画の北西角にあたる位置から出土した。厳密には貼石区画のすぐ外側で、遺構面に乗った状態であった。最大刃幅26㎜、背厚3.5㎜、重量52.2ｇ。古代の建物群と同時期のものと評価される。

10．紡錘車（M24）

M24は鉄製紡錘車。鉄製の軸がはめられた状態で固着している。軸は断面円形で直径5.4㎜、はずみ車から下端まで43㎜突出し、先端が尖る。上端は欠くが、軸の残存長98㎜。はずみ車は平坦な円盤で、直径50㎜。全体の重量43.5ｇ。Ⅰ区のE17グリッドから出土した。時期は建物等と同じ古代（8世紀後半～９世紀）とみられる。

11．釘（M25～M38）

鉄製釘類が14点出土している。そのうちM25～M28の4点は赤色顔料が付着するもの。Ⅰ区の礎石建物SB04の周辺であるD16グリッドから4点がまとまって出土しており、建物との関連が注意される。

M25は傘釘で、残存長111.5㎜、先端を欠くが欠失部分は長さ5㎜程度とみられる。傘部は円形で直径24㎜。重量36.8ｇ。先端から45㎜ほどの間に赤色顔料の付着がみられる。4面ともに付着しているが量は少なく、部分的に薄く残る程度である。Ⅰ区の北壁際で、古代の包含層中から出土した。

M26は鋲のような形状で、下面全体に赤色顔料が膜状に厚く付着している。現状では外面（上面）にも付着しているが、これは出土後の保管時に二次的に付着した可能性がある。鋲頭外面には鍛打痕跡らしい凹凸が残る。鋲頭の縁は薄く仕上げられており、欠けが多いため本来の平面形ではない。本来は円形に近い平面形が想定される。重量3.9ｇ。Ⅰ区のE15グリッドから出土しており、礎石建物SB05の遺構面被覆土中に含まれていた。赤く塗彩された建築部材等に打たれたもので、鋲脚が短いことから固定具としての機能性は低く、装飾としての飾り鋲である可能性が高い。断定はできないが、本来は礎石建物SB05に用いられていたものの可能性も考えられる。

M27はⅠ区E15グリッドから出土した鉄釘。長さ84㎜、断面方形で太さ7×6㎜。重量12.0ｇ。頭部端から先端まで全体に赤色顔料が付着するものとみられるが、サビで固着した土が覆っており全体を観察することができない。土サビがはがれた箇所ではいずれでも顔料が認められる。M26と同様に礎石建物SB05との関係が想定されるものである。

M28は小型の鉄釘で、先端を欠くが残存長39.8㎜、中ほどでの太さ6㎜で断面方形。重量1.9ｇ。全面に厚く赤色顔料が付着する。礎石建物SB04があるⅠ区D16グリッドから古代の包含層（基本層序9層）中より出土している。

M29は小型の鉄釘で完形、全長61.2㎜。全体にサビで覆われる。太さは6㎜程度で断面形は隅丸方形。重量4.5ｇ。Ⅰ区のD15グリッドから出土した。

M30は完形で全長71.0㎜。頭部での幅8.0㎜、厚さ5.6㎜で、先端へ向けて細くなり先端は鋭い。断面は角がたつ方形で、きちんと４面が成形されている。重量5.0ｇ。Ⅰ区のF15グリッドで、古代の遺構面より浮いた状態で包含層中から出土した。

M31は全長89.2㎜、断面円形に近い棒状鉄製品で、用途が釘であるか断定できないもの。中ほどが太く図示しているが、サビによる膨張の可能性がある。本来の太さは一定であったかもしれない。下端は尖るが鈍く、丸味を持っている。上端は平たく鍛打され、わずかに屈折している。重量11.6ｇ。Ⅰ区の北壁沿いから出土した。層位は古代の遺構面より上方である。

M32は完形の鉄釘で全長71.8㎜、若干曲がっている。重量6.9ｇ。頭部は楕円形に面をつくり出す。Ⅰ区のD16グリッドから出土した。

M33は釘以外の用途も考えられる棒状鉄製品。Ⅰ区D16グリッドから出土した。上端は両面から鍛打されてバチ形に開く。両面が合わさって刃のような形状をなすが、利器にしては鈍く鋭さはない。釘と考えた場合、下端は欠損していることになるが、現状で見る限り荒れた破面ではなく平坦な面をなしている。古い破面の可能性もあるが、むしろ下端は生きた面で、この形状で完形とみるほうが自然である。全長96.9㎜、22.8ｇ。

M34は断面長方形の棒状鉄製品。釘であるかは不明。残存長61.9㎜、重量7.3ｇ。下端は欠損、上端は本来の形状と観察されるが、破面である可能性もある。Ⅰ区の礎石建物SB04の南東角で検出された木組みの溝状遺構に伴って出土した。

M35はかすがい状の鉄製品。先端は欠損するがかなり鋭く仕上げられていたようである。先端から70㎜ほどで屈曲する。また先端から37㎜のところで段がつき、幅が広くなっている。Ⅰ区F13グリッドから出土した。5.3ｇ。

M36はやや大きい釘状鉄製品。先端を欠くが残存長131.2㎜、上端での太さ14.5×10.9㎜。90.0ｇ。Ⅳ区のZ21グリッドで、9世紀後半～10世紀頃の遺物包含層(5B層)中から出土した。

M37は先端をわずかに欠くがほぼ完形の鉄釘。残存長215㎜。上端での太さ13×17㎜、重量153.7ｇ。上端は平坦に面が作られている。Ⅳ区のA21グリッド、方形貼石区画の北東隅の北東側から出土した。古代の遺構面の上に乗った状態であった。

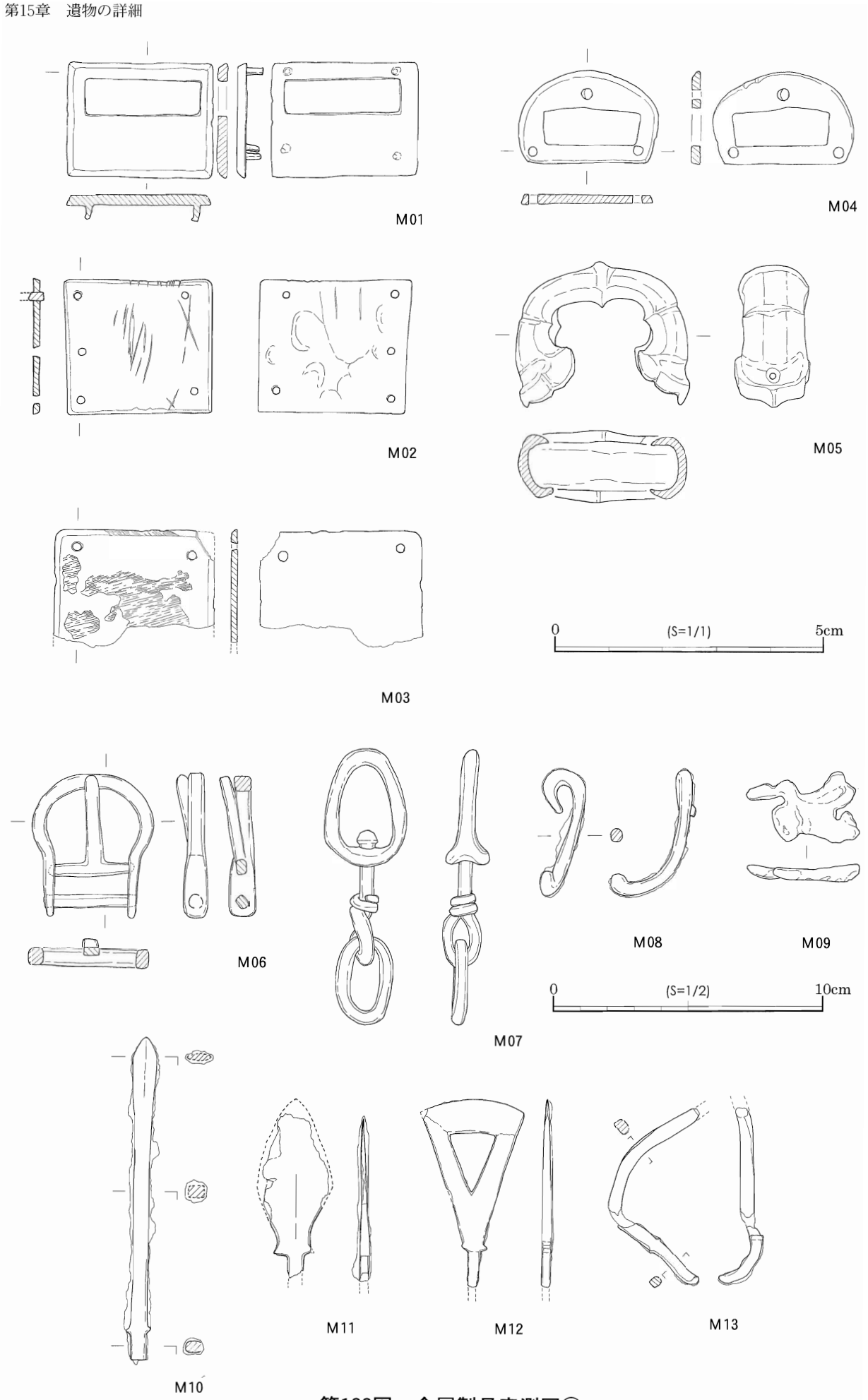
M38は大型の鉄釘で完形。全長240㎜。上端の太さ28×13㎜、重量209.7ｇ。4面が丁寧につくられ稜はシャープである。先端はわずかに曲がっている。Ⅰ区F14グリッドで古代の包含層（9層）から出土した。

12．鍋（M39～M40）

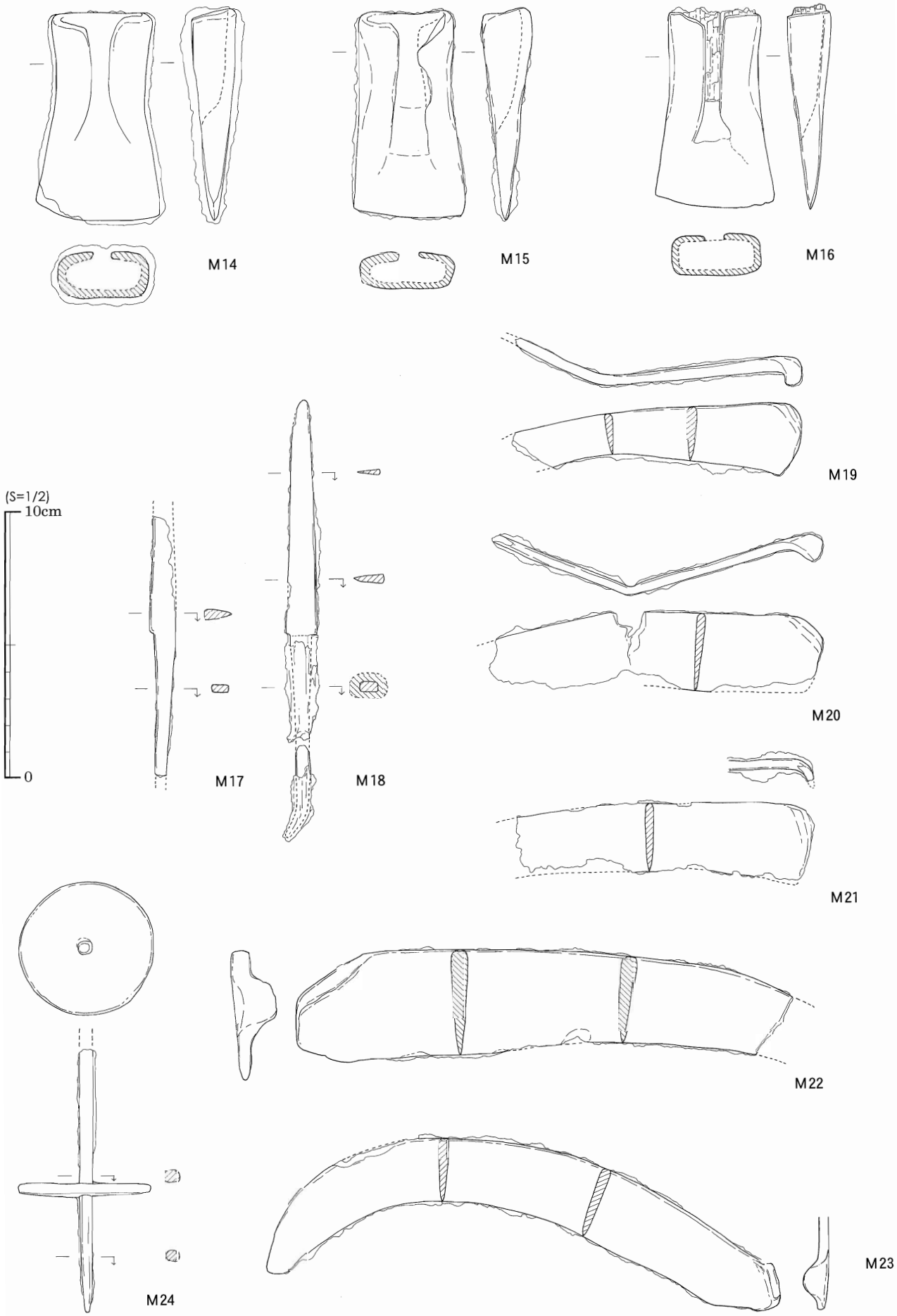
鉄鍋の口縁付近の破片が2点出土している。2点は出土地点も近く同一個体の可能性を考慮したが、口縁受け部の幅・厚さが若干異なり別個体と判断される。M39は口縁径30㎝程度に復元され、M40もそれに近いものとみられる。M39はⅣ区Z19グリッド、M40はⅣ区Z21グリッドから出土した。層位は古代の遺構面直上に堆積した包含層である。

13．金箔

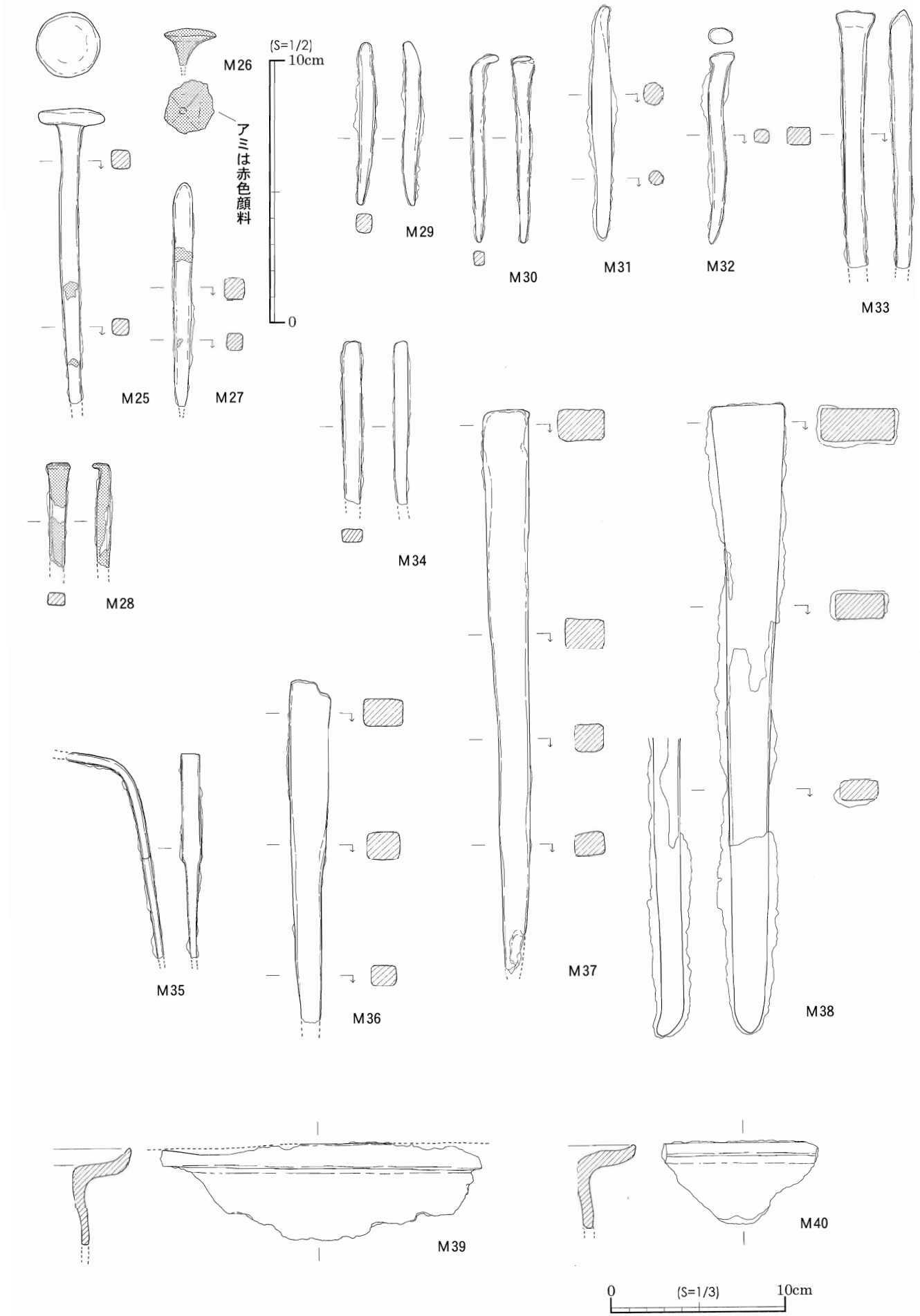
写真のみ掲載（写真図版154）した。Ⅰ区D15グリッド9層で検出したもので、差し渡し15㎜、非常に薄い金箔状のものである。折れ重なった状態で泥土と混じっていた。片面のみ金色を呈し、光沢をもつ。裏面は光沢のないくすんだ銀色で、黄色味はまったくない。木地金張り製品などの箔が遊離して土中に埋没した可能性を考慮して掲載した。しかしながら裏面が銀色であることの解釈が難しく、作業中に現代のものが混入した可能性を排除できない。裏面が銀色であるためには、銀地金箔張りあるいは銀地に金のアマルガム鍍金、または銀箔と金箔の貼り合わせが必要であるが、そのような加工が必要な理由が全く考えられない。分析をおこなうことができなかったため、慎重に余地を残して掲載しておくが、例えばアルミ箔に塗料で金箔状の加工を施したものなど、現代のものである可能性も高い。



第122図　金属製品実測図①



第123図　金属製品実測図②

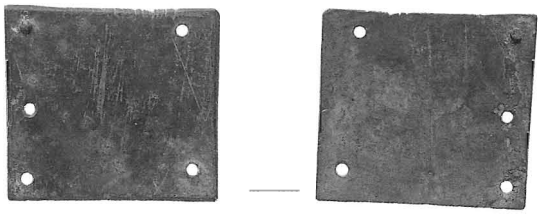


第124図　金属製品実測図③

写真図版一五三　金属器／銅製品／腰帯金具・銅滴

写真図版一五四　金属器／銅製品／腰帯金具・刀装具・銅滴

M01



M02

M03

M04

腰帯金具（巡方・丸鞆）

M05

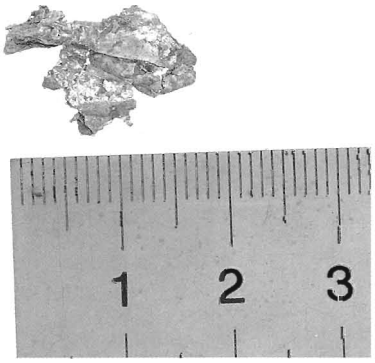
刀装具

M06

鉸具

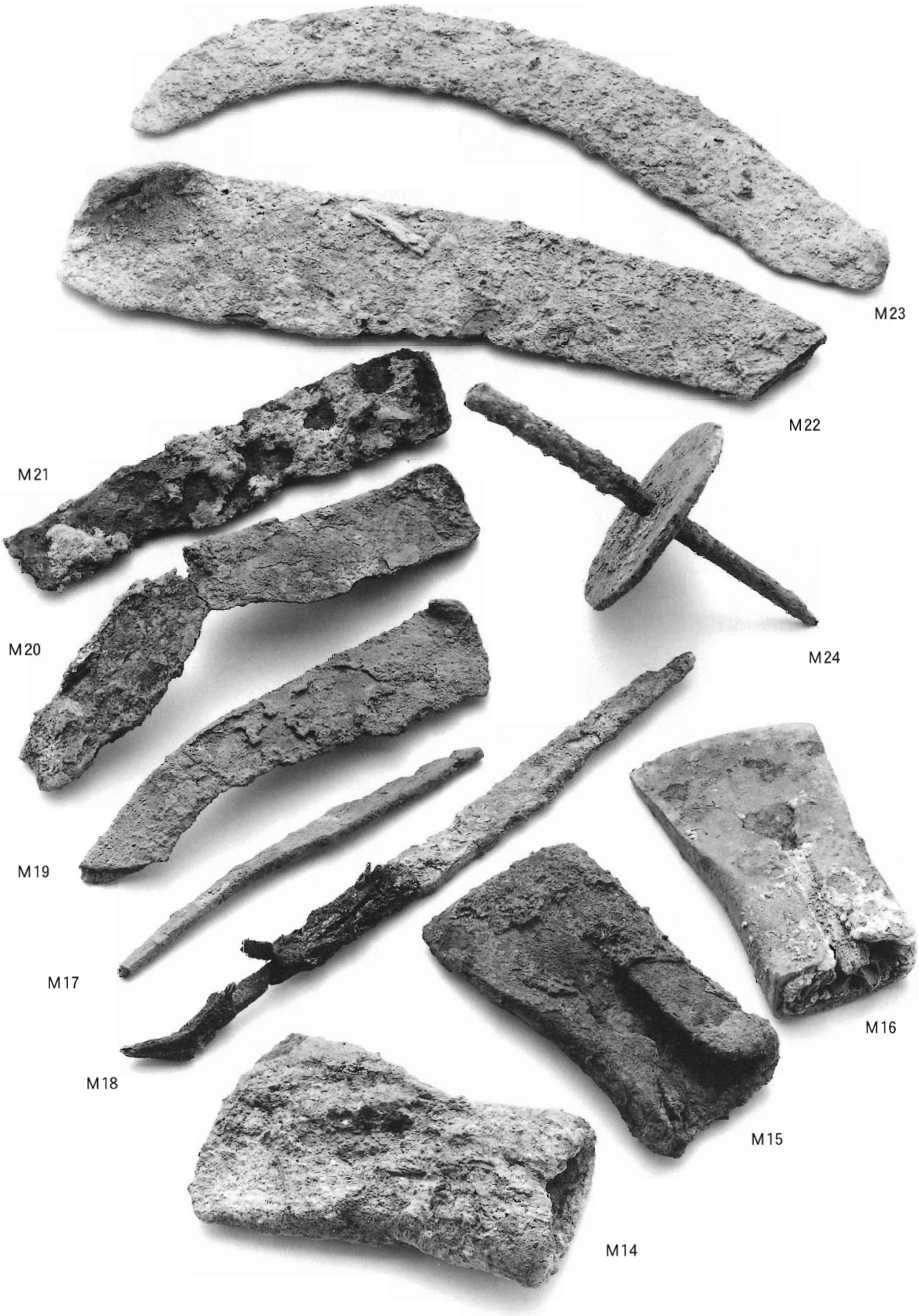
M09

銅滴

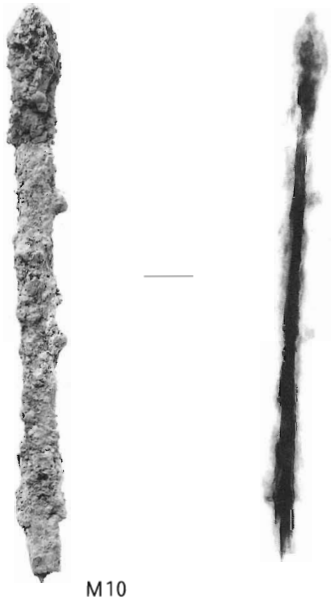


金箔（写真のみ掲載）

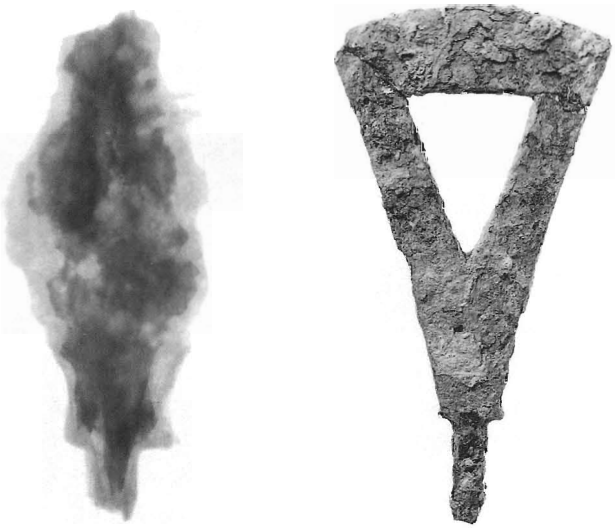
写真図版一五五　金属器／鉄器／斧・鎌・刀子・紡錘車



写真図版一五六　金属器／鉄器／鏃・斧・刀子

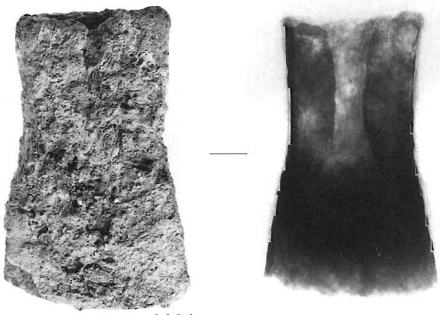


M10

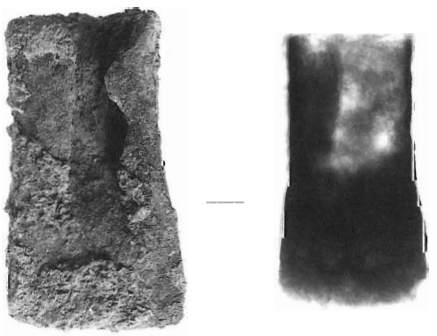


M11　M12

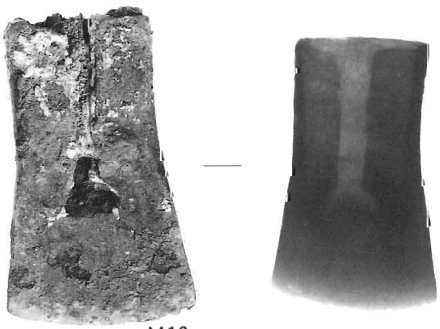
鉄鏃



M14

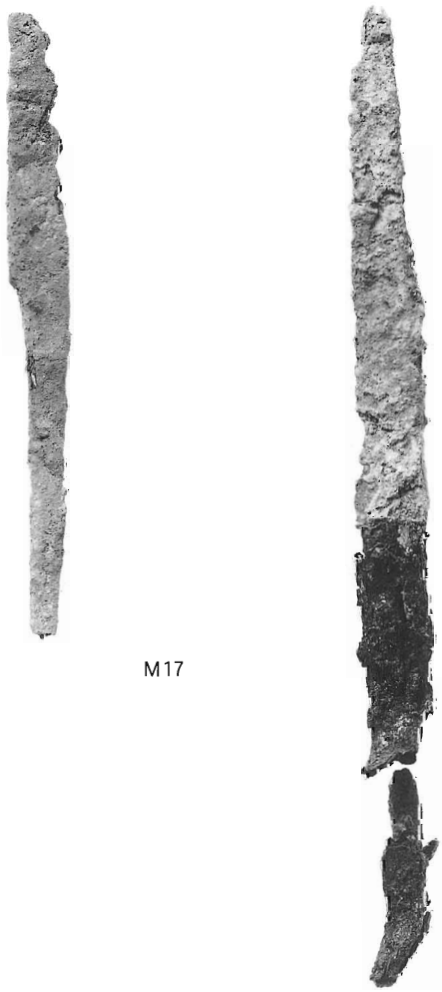


M15



M16

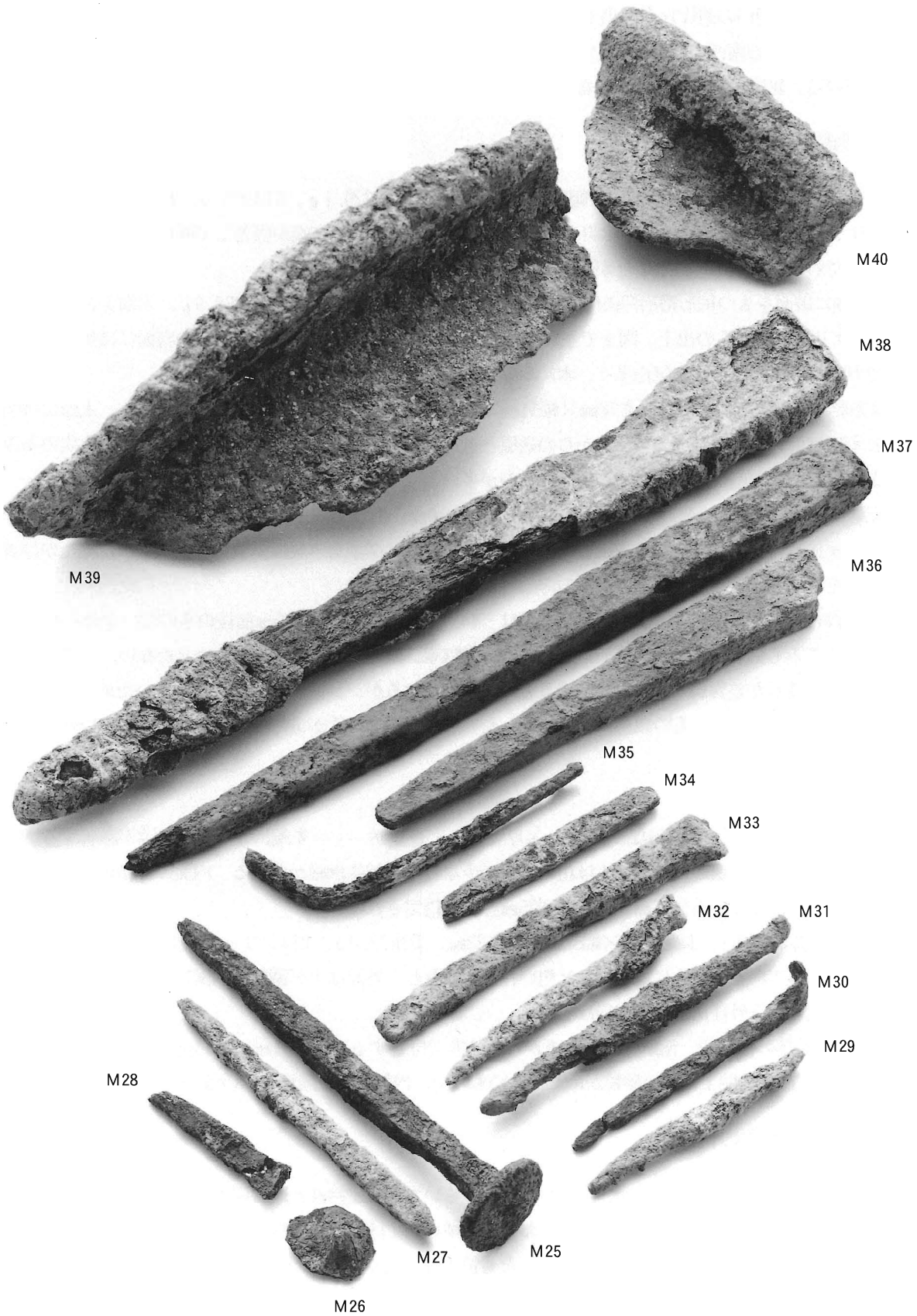
鉄斧



M17　M18

刀子

写真図版一五七　金属器／鉄器／釘鍋



第10節　鍛冶関連遺物（M41～M47）

椀形鍛冶滓9点と羽口の破片14点が出土している。出土地点はⅠ区の西端に明確な集中が認められる。グリッドごとに見るとⅠ区の南西端であるG13グリッドに5点がまとまり、それに隣接するG14・F13グリッドから2点ずつ出土している。Ⅳ区からは出土していない。

1．椀形鍛冶滓（M41～M44）

M41は完形の椀形鍛冶滓。長さ125㎜×幅79㎜×厚さ35㎜。重量329.1ｇ。G13グリッド出土。底面に炉底の粘土が付着し、全体に気泡多く5㎜大の木炭をかみこむ。上面には羽口の先端が固着して断片として残る。このことから図上で右からの送風であることがわかる。

M42は両側に破面をもつ椀形鍛冶滓破片。長さ63㎜×幅116㎜×厚さ32㎜。重量252.9ｇ。木簡を含む廃棄土坑SX10（E15グリッド）からの出土。図上で左右の面は破面であり、両端を欠く。舟底状の底面には炉底の粘土をブロック状にかみこむ。全体に気泡多く、木炭かみこみも多く認められる。

M43は完形の小型椀形鍛冶滓。長さ70㎜×幅51㎜×厚さ20㎜。重量88.3ｇ。G13グリッド出土。上面には図上の左側に羽口溶解物が付着しており、左からの送風と推定される。底面に炉底の粘土が付着する。木炭のかみこみはほとんどない。気泡は認められるが小さいものが多い。

M44は完形の小型椀形鍛冶滓。長さ62㎜×幅43㎜×厚さ10㎜。重量35.7ｇ。D16グリッド出土。全体に薄いが、図上の右側が比較的厚く、右からの送風と推定される。上面には微細な木炭が少量付着、底面には粘土が付着する。紫紅色を呈する部分があり、非鉄金属の滓の可能性も考えられる。

椀形鍛冶滓は大小２つのものにわけられる。M41・M42は比較的大きく幅10㎝前後のもので、全体に気泡が多く木炭のかみこみも顕著である。一方、M43・M44は小型で幅5㎝程度、気泡は小さくめだたない。いずれも鍛冶滓とみられ、こうした差異が工程差に対応するものと推定されるが、分析等おこなっていないためこれ以上は言及できない。なお、図化したもの以外には細片化した椀形鍛冶滓の破片があり、写真のみ掲載している。

2．羽口（M45～M47）

M45は羽口先端部の破片。長さ64㎜×幅57㎜×厚さ26㎜。重量48.0ｇ。先端にガラス質の滓が融着する。外面には幅13～14㎜の板ナデ痕が残る。胎土は粗い砂粒が少ないが、植物繊維が混じる。内面には軸棒の引き抜き時の痕跡が残る。外径は復元直径75㎜、内径は同25㎜程度に推定される。

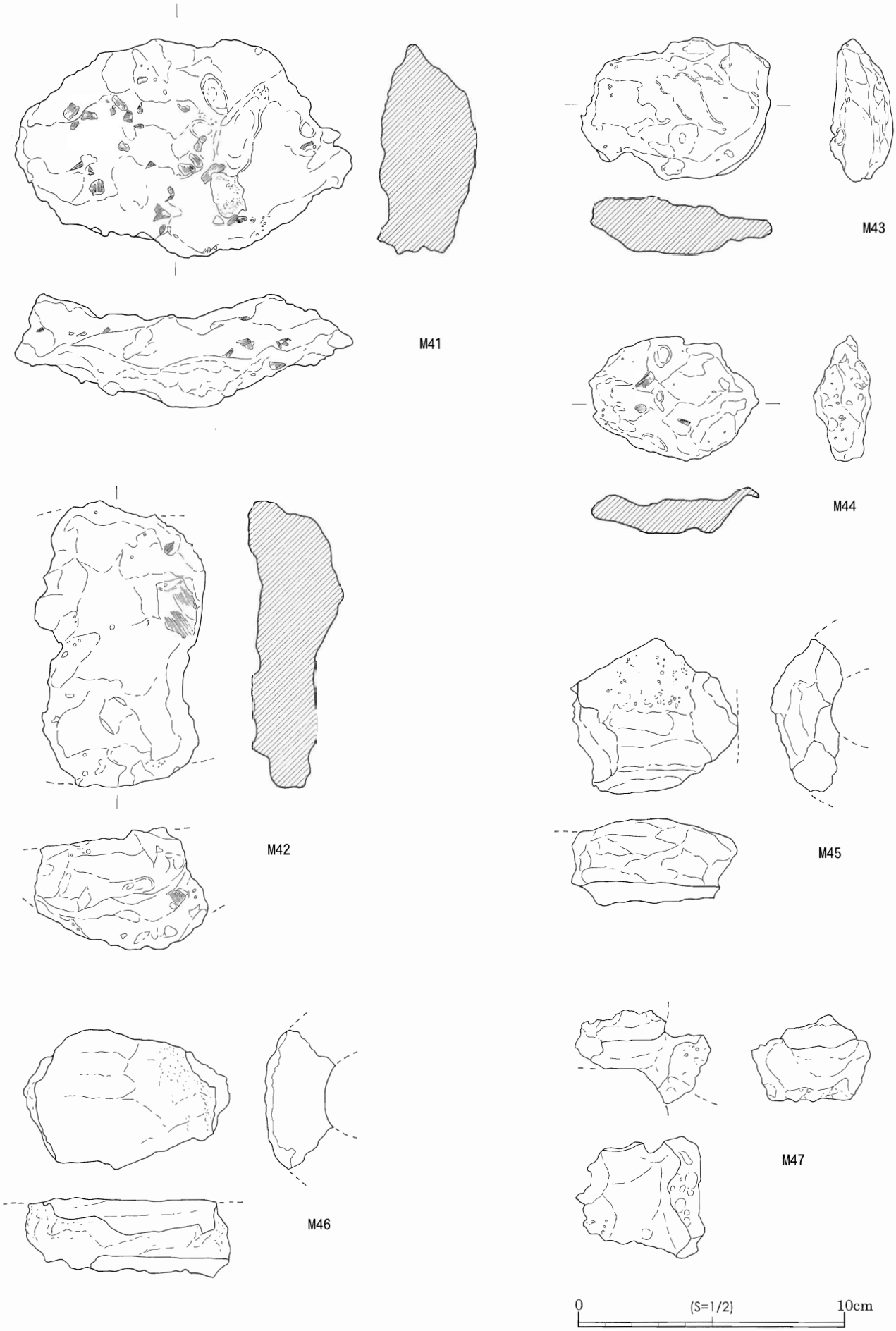
M46は羽口先端部の破片。長さ76㎜×幅52㎜×厚さ23㎜。重量78.0ｇ。D14グリッド出土。先端は還元状態で、胎土は赤く酸化している。胎土には石英など粗い粒を多く含む。外面はナデ調整、内面には軸棒引き抜き時の条痕が残る。復元される外径は75㎜、内径は32㎜。

M47は羽口先端部の破片で、溶解物が垂れ下がった状態で付着する。長さ44㎜×幅43㎜×厚さ30㎜。重量24.2ｇ。G13グリッド出土。胎土は粗い砂粒がめだたないもので、内部は赤く酸化している。

3．鍛冶関連遺物の評価

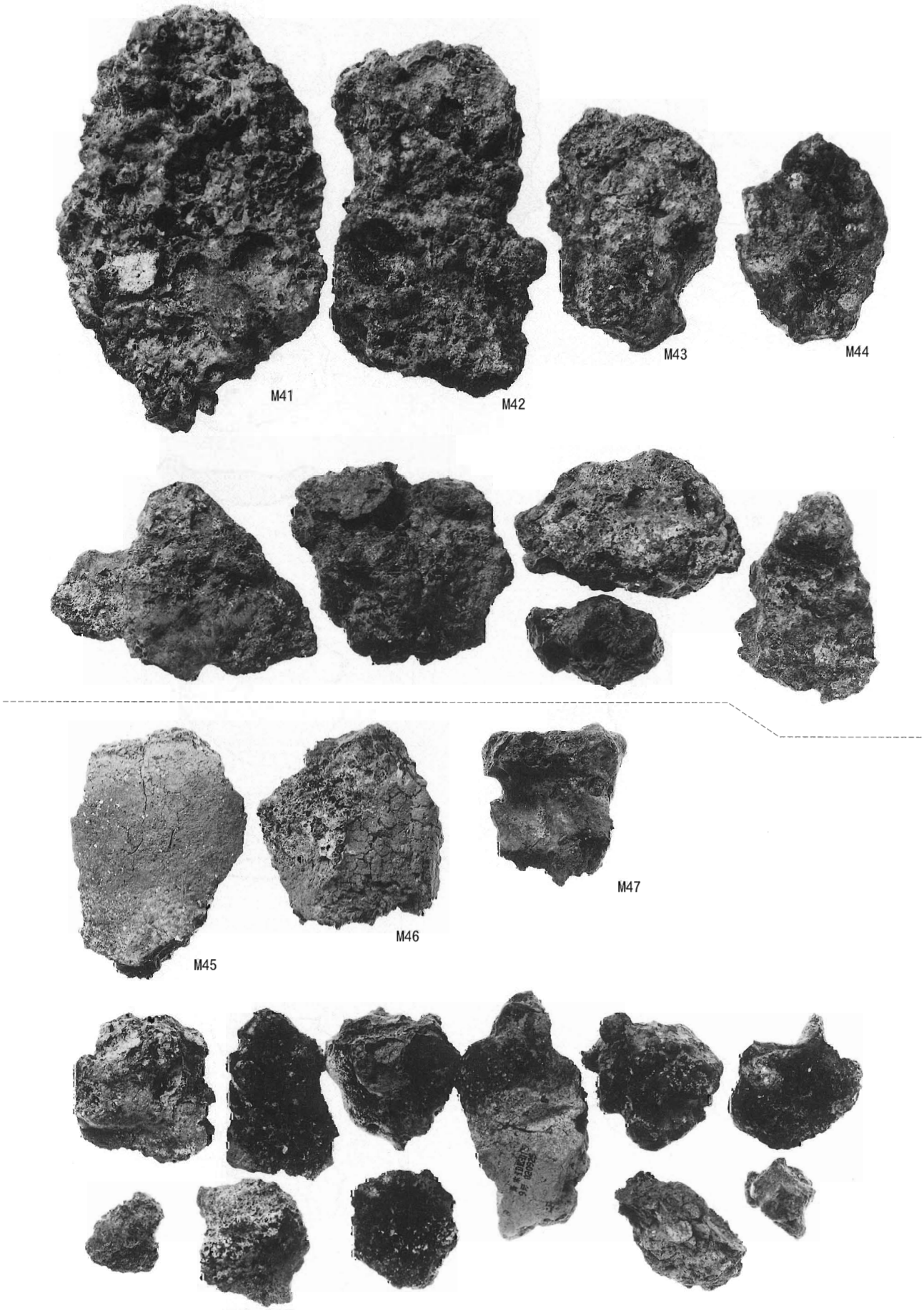
時期を直接もとめることは難しいが、出土した層位からいずれも建物群と同時期のもので、8世紀後半～9世紀前半のものであることが推定できる。前記のとおり出土地点がⅠ区の西端に集中しており、一括性のある遺物群であると評価される。砂鉄集積遺構（Ⅰ区SK01）とも位置的に近く、関連がある可能性もある。

工程は詳細に特定できないが、遺跡内で鍛冶がおこなわれ、鉄製品生産に関する機能があったことは重要である。滓の中にはM44のように非鉄金属の滓である可能性をもつものがあり、実際に銅滴（第122図M09）も出土していることも注目される。建物群が機能し、遺跡が周辺地域の物資の集約や消費に大きな役割を果たすなかで、それに付随する鉄・銅など金属器の生産工房が設置されていることが指摘しうる。



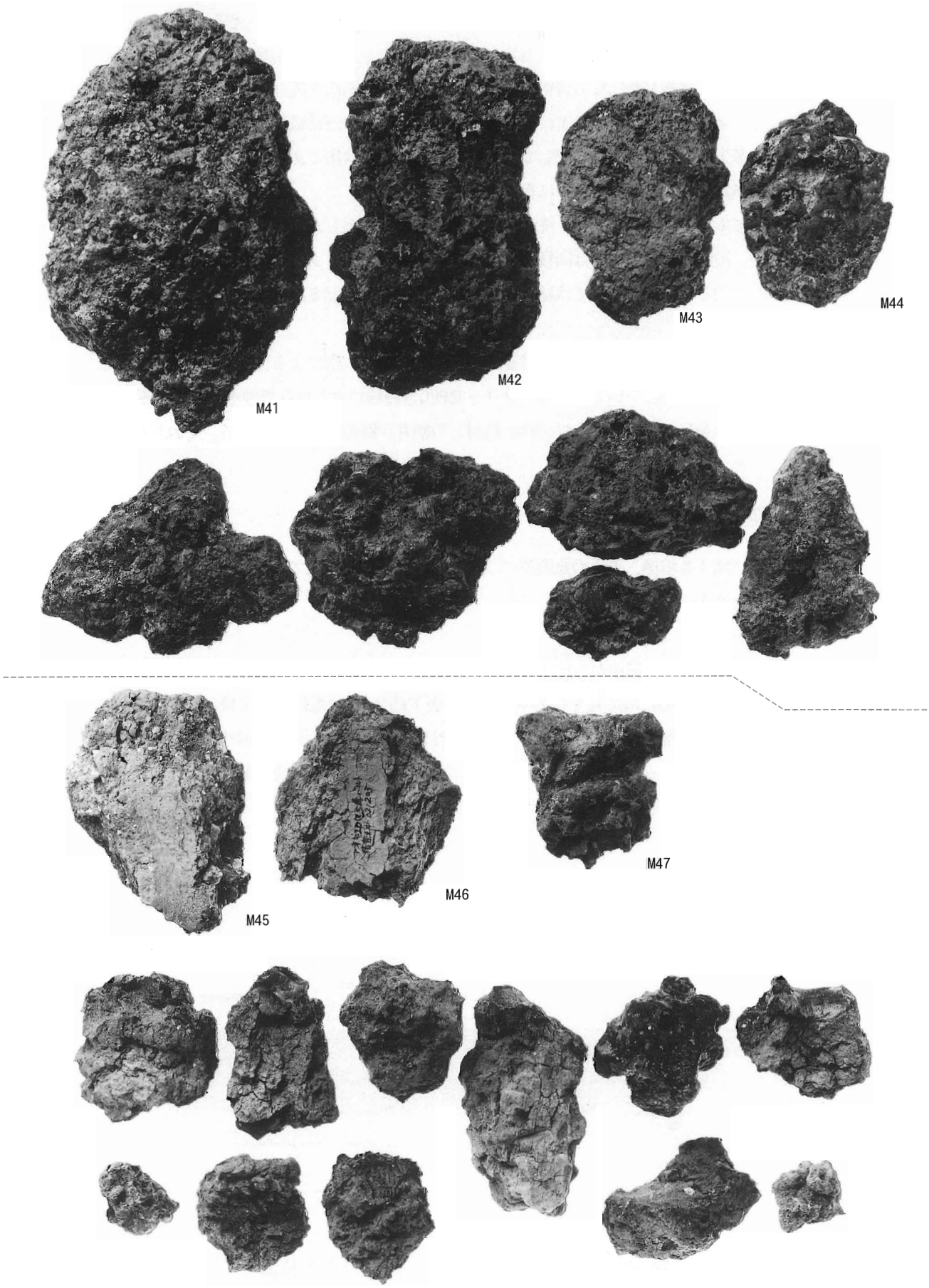
第125図　鍛冶関連遺物実測図

写真図版一五八　鍛冶関連遺物／椀形鍛冶滓・羽口



上段：椀形鍛冶滓
下段：羽口

写真図版一五九　鍛冶関連遺物／椀形鍛冶滓・羽口



上段：椀形鍛冶滓
下段：羽口

第11節　木製品（W001～W223）

223点の木製品が出土している。『木器集成図録』近畿古代編（奈良国立文化財研究所、1984年）、『六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）を参考に、用途・機能に基づく分類をおこない、それにしたがって順に掲載した。なお資料の観察にあたっては山田昌久氏（首都大学東京助教授）の全面的な指導を得ており、本文の記述は氏の力添えによるところが大きい。また紡織具については東村純子氏（京都大学文学研究科）より多大なご教示を得た。記して深甚の謝意を表する次第である。本文記載にあたって両氏の教示を参考にしたが、誤認があれば当センターに責があるものである。

出土した木製品は基本的に全点持ち帰り、洗浄・観察・分類の対象とした。用途不明の物を含めて実測図・写真を掲載しているが、円形曲物については同技法・同形同大のものが多くあったため、残存状態の良いものを選別して掲載した。非掲載とした物については結合技法・法量・木取りなどを記録するにとどめ、結果については本文で言及している。

掲載した木製品については株式会社京都科学に委託し、糖アルコール法による保存処理を全点おこなった。また前記の非掲載とした円形曲物については、当センターでPEG含浸法による保存処理を進めている。

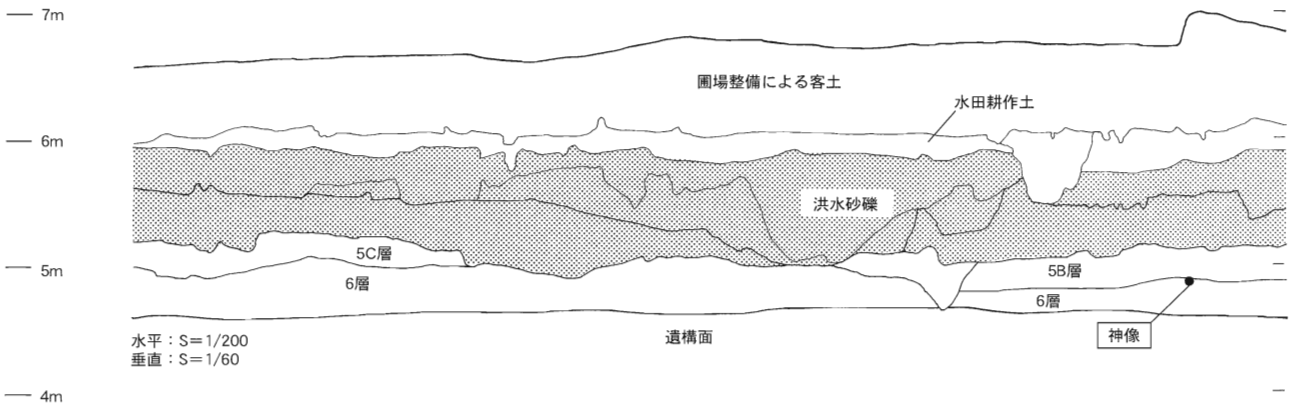
本節で述べる以外の木製品として、掘立柱建物の柱材と石敷井戸跡の井戸枠材がある。それらについては各遺構の項でふれることとする。

1．祭祀具／神　像（W001）

当資料の年代決定に関する根拠、出土の意義等については、第18章総括にて詳細に述べており、ここでは事実関係を報告することとする。

出土状況

Ⅳ区の北東隅に近い地点の包含層中から出土した。出土位置は第18章に示した。平成15年６月23日、湧水を排出するための溝を調査区の周囲にめぐらす作業中に、現地表下約２ｍ、標高4.88mで検出している。男性作業員がスコップを用いて人力で掘削をおこない、ペアとなる女性作業員が掘り上げた土砂中に遺物が含まれないか確認をする作業中であった。スコップ１杯分の土砂とともに掘りあがってしまったため出土状況を記録できなかったが、正面を上にして横位の状態で埋没していた可能性がある。掘り上げた直後にその存在に気づき、ただちに出土地点・層位を記録した。



第126図　Ⅳ区北壁土層図と神像の出土位置

出土地点での層序関係を第126図に示した。出土位置はⅣ区基本層序の６層上面であり、５B層で被覆されていた。つまり、両層のちょうど境界にあたる。この層序は出土地点とほぼ同一の位置で記録したものであり、包含位置の層序との関係は正確である。５B層の上には洪水砂礫層が堆積している。これは砂礫のみで構成される洪積一括堆積層であり、完全に無遺物であったことから重機を用いて除去した。つまり、標高5.2mより上方の土砂を重機で水平に掘削して他所へ搬出した後に、人力での掘削を開始した。したがって、上層の遺物が５B層より下位に混入する可能性は全く考えられない。よって、6層の上面かつ５B層の下面、という包含位置の層序関係は疑う余地がない確実なものである。また土層断面は図示したとおりで、神像が上方から掘り込んだ遺構などに伴う可能性も考えられない。

幸いにして神像が出土したのが調査区全体を掘り下げる前であったことから、神像を被覆していた５B層の掘削は特に慎重に行い、層序の別を厳密に意識しながら遺物の確認につとめた。５B層の堆積範囲は調査区東側の狭い面積に偏っており、第76図（204ページ）に示したとおり包含されていた遺物はそれほど多く無い。204ページで詳しく述べるように、５B層中に包含される遺物は９世紀前葉のものが多く、９世紀末～10世紀初頭ごろのものが最も新しい。須恵器坏では底面と側面の境が鋭角で、体部が直線的に外開きで立ち上がる形態のものが中心を占める。これは９世紀中葉～後葉頃の年代が考えられるものである。一方、最も新しい様相を示すのは体部が大きく外反する無高台の坏（S250）や高台が底面最外周につく高台坏（S135、S138）である。これは松江市の古曽志平廻田3号窯と同段階のもので、出雲国府などでの緑釉陶器との共伴例から9世紀末～10世紀初頭の年代が想定されている。５B層中にはこれより新しい時期の遺物が一切含まれなかった。一方、神像が乗っていた6層はそれより古く、8世紀中頃～後葉ごろの堆積層である。

上記の層位的関係から、神像が埋没したのが少なくとも8世紀後葉より新しいのは確実である。また被覆した５B層は年代幅が短く、9世紀中頃から10世紀初頭にかけて堆積したものであることから、５B層の堆積開始を最も新しく見ても10世紀初頭であり、これを神像埋没の年代下限とすることができる。ただし、消費遺跡ごとの微妙な使用期間の長短差が存在することと、平廻田３号窯段階の時期は年代を決定する良好な出土事例がまだ少なく、今後前後する余地も残ることから、神像の年代は最大限新しい時期を含めて８世紀後半～10世紀、とかなりの時間幅をもたせて評価することとなった。

報道発表の経緯

出土地点周辺の現地調査をおこない、上記のような層位・出土遺物にもとづく考古学的検討を加えるのに３ヶ月余りを要し、５B層および６層の堆積年代をしぼりこむことができたのが平成15年９月末であった。これを受けて同年10月７日には、遺跡全体の成果を総合して報道機関への記者発表をおこなった。当センターが配布した提供資料のうち、神像に関する記載は次のとおり。「１）木彫神像が出土　奈良時代後半～平安時代前半の土層から、高さ13.5cmの神像1点が出土した。本来は社寺の建物内に安置され、信仰の対象であった神像が遺跡から出土することは極めて珍しい。また、今回出土した神像の年代は現存する神像彫刻のなかでは最古級で、文献史料からうかがえる神像彫刻の開始期にあたる。」文中の「奈良時代後半～平安時代前半」が指し示す具体的な実年代としては、8世紀後半～10世紀、という年代を口頭で補足した。「最古級」「神像彫刻の開始期」という表現は想定した年代の幅のなかで最も古い時期である可能性を念頭に置いたものである。その後実施したC14年代測定などによる結果を加味すると、現状では想定した年代幅の中で最も新しい10世紀とするのが適当であり、「最古級」といった表現は不適当と言わざるを得ない。

本資料の特徴

木造男神坐像。総高135mmと非常に小型の小像。基部で幅61mm、奥行き48mm。一木の削り出しで、材は樹種ヒノキ、芯持ち材。材の芯は底面中央の向かって右側にあり、左肩と首の間のあたりで芯が抜ける。年輪は20年分ほどあり、背面下端に2箇所、枝の芯が観察される。枝の径は6mmと3mmで細い。ヒノキの小径材を丸太削り出しによって成形した可能性が高い。

冠をかぶり、胸前で両手を拱手、持杓する。膝や脚の表現は全く無く、底面は平らに切られ、工具痕跡が多く残る。刃部形状が直線的な、刀子などの工具が用いられたとみられる。こうした工具は、凹面をなす部分（首の下や袖と体幹の境、冠の項部と巾子との境など）に鋭い刃跡を残している。痕跡を見る限り、刃厚が薄く鋭利な工具であったと観察される。

底面の削りは向かって左側に集中しており、置いた場合の傾きを調整するためであった可能性がある。堅い芯に近い部分では数度削りを入れている。現状では平面に置いたとき、首から下の部分は直立して左右のバランスも均衡とれている。しかし頭の部分は中心が向かって右にわずかにずれ、軸も垂直ではなくやや傾く。また冠も巾子の面が正面ではなくわずかに右を向いている。

袖など衣文の彫りは無く、墨描きで表現される。出土直後には右袖に３条の墨描きによる線がうっすらと残存していたが、現状では肉眼・赤外線画像ともに確認することができない。肩は張らずなだらかな曲線を描く。肩から背面上部にかけては、細かな削りの単位を残している。杓の成形は粗く、胸の部分と分離されていない。

表情は目尻がつりあがった憤怒形をあらわし、粗く彫られた工具痕を残す。髭が墨描きで表現される。冠は薄く扁平で、頭頂部の額面と立っている部分（巾子）の前面は墨で黒く塗られる。縁部は墨塗りが無い。縁は顔面との段差を彫りによって表現するが、真横から背面にかけては段差が無くなり表現されない。巾子は前面が直立し、背面は前傾する。着装している袍の襟が削り出して表現されるが、冠の縁と同様に背面では表現が無くなる。脱色処理、糖アルコール含浸による保存処理をおこなっている。C14年代測定に必要な試料を採取したため、底面には3箇所えぐれた部分がある。

年　代

本例は国立歴史民俗博物館に依頼し、炭素14年代測定を実施した。結果は第17章第1節に記載されている。底面にみえる木口面から、残存する最外年輪のひとつ内側の年輪部分より測定試料を採取し計測した。なお、このほかに最外年輪、外から11年目の年輪部分も採取したが、炭素量不足により測定していない。外側から2年目の年輪部分を計測したところ、895～1025ADの年代中に95.2%の確率で含まれ、なかでも10世紀後半の可能性が最も高いとの結果が得られた。

上記の年代は用材の伐採年代であり、保管されていた古材や別用途の材が彫刻用材に転用された可能性も否定できないが、当資料は小径材でそのような利用法を想定できない。よって、神像の製作年代を示す測定結果とみて重視すべきであろう。第18章で述べたように、冠の形状や側面観といった神像彫刻史上の視点からは、平安前期から後期への過渡的様相を示す資料と評価されるもので、これと10世紀後半という年代は齟齬しない。一方、出土層位からみた考古学的手法による年代では10世紀初頭を下限としていて、若干の開きが認められる。現状ではこれらを整合させることができないため、製作年代について10世紀後半が最も可能性が高いものとして提示しておく。

２．祭祀具／絵　馬(W002)

ここでは事実関係の記載をおこない、資料の評価、意義等については総括（第18章）で詳細に検討を加えている。

出土状況

完形の状態で出土した。左側辺にわずかに欠けがあることと、木目に沿って上下に2分割する割れが生じているが、いずれも埋没後の二次的なものと判断される。

Ⅰ区のD15グリッド、礎石建物SB04の南西側を掘削中に出土し、取り上げ後の室内洗浄時に馬が描かれていることが判明したため、出土状況の記録をおこなっていない。

法　量

横幅124.5㎜、縦98.8㎜、最大厚6.7㎜（いずれも保存処理後の実測値）。平面形は長方形に近いが、上辺の両隅は丸味をもつ。右辺が直線的で右下隅は直角に角をなすのに対し、左辺は丸味をもち、左下の隅は直角ではない。

ヤリガンナ等で板に加工されており、ケズリ痕跡を表裏面ともに良く残す。ケズリは上半で特に顕著であり、全体の厚みも下から上へ薄くなる。下端中央での厚み6.7㎜であるのに対し、上端中央では4.9㎜であった。馬の顔からたてがみ上部にあたる左上の箇所は3.9㎜と特に薄く、墨描きの際に修正描き直しのためのケズリが入った可能性がある。材の木取りは追柾目で、樹種鑑定はおこなっていない。

曲物転用材か

表裏面ともに鋭利な刃物による切痕跡が多く残る。馬の描かれた表面より、裏面の方が顕著で数が多い。切りの方向は全面に散漫に重なるのではなく、局所的に同方向の痕跡が集中する。裏面の左上部分には、左上から右下にかけてやや長めの切りが６単位ほど、右上部分には右上から左下にかけて短い切りが15単位ほど認められる。上辺中央に穿孔された掛孔によって切られる切り跡がみられることから、絵馬として加工される前の板の状態で切断作業の台として使用された結果とみられる。切り跡の単位が短いことから、切る対象は小さいものであろう。他遺跡出土の絵馬では、曲物底板などを転用して絵馬とした例が5例確認できる。それらの事例では側板の綴孔が残存していることなどから判別されるわけだが、本例と同様に切痕跡が残るものが多い。よって、本例も曲物底板を転用して製作されたものである可能性が高いと考えられる。

掛　孔・使用痕跡

掛孔の穿孔は、表面から裏面に向かって行われたと考えられる。孔の位置は上辺に極めて近く、孔の上縁はわずか2㎜ほどの厚みしかない。孔周辺には紐ずれの痕跡などが認められない。他遺跡出土のものには紐ずれが顕著に認められる事例があり、懸垂された状態で長期間経過し、その後廃棄などによって埋没したと考えられている。本例についてみれば、製作から廃棄までそれほどの時間経過をうかがわせる状況にはない。また他遺跡出土のものでは、表面の風化が進み、墨書きの部分がミミズばれ状に高く残るものがある。これらは風雨の影響を受けるような状況、例えば吊り下ろした状態で長時間置かれたことを示すと考えられる。これに対し本例は表面の風化が少なく本来の状況を良く保っており、製作から埋没するまでの時間が短いことがうかがえる。

馬の図像表現

描かれた馬は左向きの飾り馬である。墨描きのみで、彩色はみられない。姿勢は首をもたげ顎を引き、視線を下に向ける。頭頂の髪は房を描いてその中に細く線を描き込む。頸部のたてがみは黒くベタ塗りする。眼は大きく強調して描かれ、額からわずかに飛び出す。他遺跡の事例で”トンボメガネ状”と表現されるものに近い。口の部分には円が2つ接して描かれており、双輪形の轡鏡（鏡板）を表現したものとみられる。面繋（頭絡）の表現は正確ではない。轡につながる手綱は背へと延び、鞍の上の空中で円弧を描く。手綱の先を「見えない人物」が握っているかのように、表現には動きがある。

頸には平行する線が3条描かれるが、意図するところは不明である。筋肉の動きを表現したものか。頸～頭部の大きさに対して胴・四脚は寸詰まりで短く、ややアンバランスである。在来種の馬の体形に近いともとれる。写実的であれば、鞍橋から胸にかけて繋がる胸繋が描かれるべきであるが、胸から側面にかけては渦巻き状の円弧が描かれている。臀部にもこれと向き合う渦巻きが描かれる。これは臀部の筋肉の動き、あるいは尻繋の表現ともとれるが、あまり手慣れた筆致でなく空白を埋めるための埋め草であろう。

平城京や難波宮を含む河内平野出土の絵馬には、陰嚢表現があり雄馬が描かれたものが見られる。本例については、こうした生殖器表現は観察できず、少なくとも雄馬を明確に表現したものではない。まとめでふれるように、平城京などの例では雄馬が単独であらわされるのでなく、左右を向き合う雌雄２枚一対の絵馬として、製作時から明確な意図のもとで表現されている。地方出土のものでは２枚一対とうかがえるような資料自体がみられ

ず、雌雄の別が本質的なものでなかったことが見て取れる。

馬装全体としては、飾りが少なく簡素な平時馬装としての水干鞍が表現されたものと考えられる。轡や手綱、鐙など写実的な表現がされている一方で、三繋の構造が不正確、障泥の表現が無いなどの拙い要素もある。都城以外の地方から出土した絵馬としては写実的で、筆致も細かく丁寧と評価できる。馬体は胴が短くややアンバランスであるが、在来固有種の体形とは近いものであろう。

馬装・馬具

馬装・馬具の表現は、前記の轡のほか、鞍と鐙が描かれる。鞍は居木（着座する部分）が馬の背に小さく表現さるのみ。端がわずかに立ち上がるが、鞍橋（垂直方向に立つ部分）の表現は前輪・後輪とも無いに等しい。鞍の下に敷かれる韉（したぐら）や障泥は全く描かれない。鐙は線描きで壺鐙が写実的に描かれる。踏込が後方にやや突出した半舌鐙である。

馬の姿勢と「側対歩」

馬の体勢は、画面奥にあたる右前脚を上げ、残りの３脚は地に着く。右後脚をわずかに前に出す。腿から下を墨塗りし、蹄は輪郭だけで白く表現する。総括（第18章第２節）でふれるように、画面奥側の前後脚を同時に動かす姿勢は「側対歩」と呼ばれる歩様で、漢代から唐代にかけての図像表現に多用されたことが指摘されている[1]。国内出土の絵馬についても、熟達した筆致のものは同様の体勢をとるものが多く、図像化された馬の定式的表現であったことがわかる。本例もその表現を知った上で意識・志向したものであろう。

余白と描き順

馬は材の上方に寄った位置に描かれる。下には1.5cmほど空白があるが上にはほとんど空きがなく、たてがみから頭頂部にかけては板の縁にかかっている。表面に描ききれなかった輪郭線は側面に及ぶ。したがって、本来完結していた頭部が二次的に削られているのではなく、当初からこの配置で描かれていたことがわかる。全体の配置をみると、中央近くに描かれた四脚が最初に描かれたために、頭部にいくにつれ余白が小さくなり、最終的には計算があわずに頭頂部のあたりがはみ出してしまったのではないかと想像される。

【註】

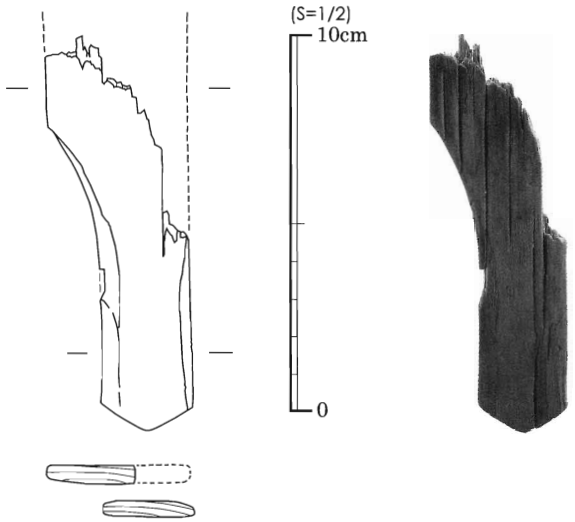
（1）　末崎真澄「古代の美術にみる馬の伝統的表現」『馬の博物館研究紀要』第1号、1987年

３．祭祀具／形　代(W003～006、W053)

木製形代とみられるものが5点出土している。W004とW005は木簡類を含む木製品が多く出土したくぼみ状遺構SX50から出土したもの。

W003とW004は薄い板状をなすもので、馬形などの一部の可能性があるが本来の形状は不明である。現状では側面すべてに切断痕があり、二次的な破損ではない。W003は削りがやや粗く、表面に段差が残る。W004は平滑に削られている。W005は祭祀具かどうか明確でないが、他の用途が想定できず、鋤形などの可能性もあるためここに含めている。薄板ではなく厚みをもった棒状製品である。W006は刀子形で、全長27.4cm、柄部長11.1cm。

Ⅳ区の掘立柱建物近くから出土した。金属製の刀子を忠実に模した形代と考えられる。刃は断面三角形、柄は断面長方形をなす。柄端部は圭頭状に山形を呈する。成形時のケズリ痕跡を明瞭に残し、最終的な仕上げは粗い。柄の中程では段差が生じたままで、現状ではこの段差で割れが生じている。



第127図　W053（刀代・刀形）修正実測図・写真

W053は当初木簡状木製品に含めていたが、保存処理の作業中に形代と判明したものである。２つの破片からなっており、当初は第134図に図示したような形状と考えていた。ところが、保存処理の最終過程で2破片が異なる位置関係で接合することが判明した。形状からみて刀形の柄部にあたると考えられる。挿図・写真図版については入稿後で修正できなかったために、修正後のものを上に掲載しておく。柄から刃の基部（関）にかけての破片で、柄端部を山形に作り出す。刃側は両面から斜めに削りが入っている。Ⅰ区礎石建物SB05の付近から出土した。

４．祭祀具／木簡状木製品（W007～W052、W054～068）

61点を木簡状木製品として報告する。形状、法量にさまざまなものがみられるが、基本的に薄板で細長く成形されたものをここに含めている。なお、W053は形代の項で述べたように刀形であることが判明したため除外した。

時期はいずれも8世紀後半～9世紀のものとみられる。

付札木簡との共通性

本書第２分冊で解説するように、当遺跡からは付札木簡が21点出土している。これらは上端が山形ないし圭頭状で、下端が尖った短冊状をなし、051形式とされるものである。木簡状木製品のうちの40点ほどは、こうした付札木簡と形態・法量が類似する。両者を区別する相違点はひとえに文字が書かれているか否か、という１点だけである。

肉眼で墨痕がみられないものについても、全て赤外線画像によって墨が残されていないか観察をおこなった。その結果、木簡状木製品としたものについては全く墨痕がなく、かすれて消滅したものや、削り消したと考えられるものが無いことが確認できた。つまり、木簡状木製品は当初から全く文字が書かれることが無かった、と言うことができる。

よって文字の記載があるものを木簡、文字が無いものを木簡状木製品として機械的に分別して扱うが、両者を関係づけて検討する必要がある。

用　途

こうした木簡状木製品の用途・機能については不明な点が多いが、想定しうるものとして下記の可能性があろう。①斎串と同様の祭祀具として使用された可能性。次に、木簡とみるならば②未使用の状態で作成・保管されていた付札が廃棄された可能性。③文字を記載しなくても機能する付札であって、遺跡において集積された物資につけられていたものが廃棄された可能性。なお①～③の他、付札木簡と同様に文字が記載されていたものが、

集積後に文字を削り消された可能性も想定できるが、当遺跡の場合は削り痕跡がみられないことや、削り残した墨痕があるものが皆無であることから考えにくい。また、付札木簡は「伊」「美」「神」+人名、という記載方法が共通し、片面に大きく墨書されるため、完全に墨が消滅したことも考えられない。

いずれの場合を想定しても、文字の書かれた付札木簡と共通の目的で使用された可能性が高い。つまり、付札木簡と木簡状木製品が同一遺構から出土している点が重要である。特にⅣ区のSB02床下からは付札木簡（74～77号木簡）と木簡状木製品（W018、W034、W068）が一括して出土しており、保管ないし廃棄の段階において両者が混在していることが見て取れる（第２分冊９ページ、第７図）。Ⅰ区の木簡出土遺構であるSX10（W050）、SX50（W010）でも同様に、木簡状木製品が共伴して出土している。

上記①の可能性については祭祀の場としての当遺跡の性格を考えれば、十分検討に値するであろう。ただし、遺存状態を観察すると、表面の風化が進んでいないことが注意される。野外に地面に立て置かれた状態で一定時間経過したとすれば、表面が風化して劣化したり、墨書があるものについてはミミズばれ状に墨が浮き出したりする現象がみられるのが一般的であろうが、当遺跡の資料についてはそういった特徴がみられない。その点だけで①の用途を否定することはできないが、一般的な斎串と同様の祭具として見ることは難しいかもしれない。

②③は付札木簡と考える点で共通するが、遺跡の施設が発信元か受信先かという点で異なる。木簡の項で述べるように、付札木簡の記載では周辺複数郷から物資が集積される状況が想定されており、③の理解に近い。Ⅳ区SB02床下の出土状況を見る限りでは、付札木簡と混在して廃棄されており、③の可能性が高いと考えられる。

法量・形態

第132図には破損無く完形で出土したものを掲載している。最大のW007が長さ30.2cm、最小のW016が16.0cmであった。W013～W016は16cmほどで法量が近似し、まとまりがある。付札木簡とも近い。第133図には破損した状態で出土したものを掲載している。W020～W027、W035～W037は下端を欠くもの、W028～W034、W038～W044は上端を欠き剣先形の下端が残るものである。いずれも破損は二次的なものと考えられるが、W020のように焼けがあり燃えさし状のものもある。

第134図には形態がやや異なるものをまとめて掲載している。W059は両側からの切り欠きがあるが、斎串にみられる形態とは異なり、五輪を表す塔婆形に成形されている。Ⅰ区の古代（律令期）以前の包含層である第10層から出土しているが、時期が下るものが混入した可能性も考えられる。W068は横方向に刃物による切り痕跡が不等間隔に入るもの。

５．服飾具／下　駄（W069～W078）

10点の下駄が出土している。木簡・木製品が多数出土したⅠ区SX50からW069が出土している他は、包含層からの出土である。時期はいずれも8世紀後半～9世紀とみられる。

下駄の傾向

全体に使用による摩耗が顕著で、ほとんどに歯の減りや指ずれがみられる。歯の本来の形状が大きく損なわれたものが多い。いずれも実用品で、かなり使い込まれたものが廃棄されたとみられる。廃棄に際しては火を受けて焼損痕跡をもつものが５点ある（W069～W072、W074）。平面形や鼻緒孔の穿孔位置、歯の形態などがそれぞれ異なっており、個体差が大きい。

個別の特徴

10点とも一木から台と歯をつくる連歯下駄。W069とW070は歯を４つに作り出したもの。歯の形状は湿地にはまりにくいなど用途上の意図によるものか。ともに成長速度の早い大径材で、他の下駄と異なる素材の特徴をもつ。W069は左足用で緒と指の摩耗みられないが、歯が多少使用減りしている。W070は左足用で使用減りほとんど無し。歯はわずかに外に開く。

W071～W077は２つ歯の下駄。W071は右足用で使用減り顕著、緒孔の開け直しがあり、古い孔とみられるものは側縁にかかっている。また穿孔途中でとまり貫通していないものが2箇所ある。指ずれによる摩耗が激しい。また歯は前後ともすり減っており、後側は完全に消滅している。W072は右足用で、親指の指ずれによる摩耗が顕著に認められる。歯もほとんどすり減っている。裏面に焼けがみられる。W073は右足用で幅広く大型のもの。腐食による破損が激しく、他のものより保存状態が悪い。指位置の摩耗については有無が確認できない。歯は低くすり減っており、付け根に溝状の掘り込みがみられる。W074は右足用で指ずれが顕著。歯は高く良好に残存している。焼けによる焼損がみられる。樹種ニレ属。W075は長さ12.0cmと小型で子供用か。右足用で、使用の摩耗はわずかである。歯は低いが平坦面が残されており本来低かったものと考えられる。W076は右足用で、歯は痕跡程度に残されるほど摩耗している。W077は左足用で、指ずれ、歯の摩耗が顕著である。

W078は形態や木取りが他のものと異なる。歯の下辺が台の幅より広く外開きで、高さも高い。木取りはミズキ属の芯持材を横方向に用いている。

６．服飾具／櫛・檜扇（W079～W081）

横櫛の破片2点と、檜扇の骨1点が出土している。

櫛W079とW080はともにヒサカキ属で作られたもので、平面形は肩が丸味をもつ長方形に復元される。幅３cmあたりの歯数はW079が23本、W080が29本ほどで、平城宮跡の出土例の平均値が32本であるのと比較してやや歯が太く粗い。表面は丁寧に磨かれている。W079は木簡の廃棄土坑であるⅠ区SX10から、W080はⅠ区の溝SD16埋土中から出土した。

W081はヒノキで作られた檜扇の一部で、本来10枚以上あったとみられる骨のうち1枚だけが出土した。基部には要の孔が開けられ、上端は鋭角に斜めにカットされることから外側の部材であることがわかる。上部にあったとみられる綴じ孔は破損のために失われている。木製品が多く出土したⅠ区のSX50から出土した。

７．容器／挽物（W082～W090）

轆轤木工・漆工技術と遺跡の評価

轆轤成形された挽物の容器類が9点出土している。うち４点は黒漆をかけた漆器、５点が漆をかけない白木作りのものであった。いずれも包含層中の出土で、8世紀後半～9世紀。器種は漆器の蓋・合子または壺・坏があるほか、白木作りのⅢがある。

挽物容器は一般的な集落レベルまで広く普及しているものでなく、地方においては使用者の階層が比較的に高いものと認識されている。その製作に必要な轆轤技術は木工に関する技術のなかでも独特のものであり、地方官衙付随の官営工房で轆轤木工技術が専有され、地方への木工技術普及の拠点となったという指摘もある。当遺跡出土の挽物を概観すると、Ⅲの法量が近似しており安定的な生産が行われていたとみられること、漆器の蓋や合子、椀などの器種が一揃え存在していること、などが特徴としてあげられる。漆器の出土は必ずしも珍しいものとは言えないが、一定の器種組成として出土しうる遺跡はかなり階層的に高い一部に限られ、具体的には地方官衙に関連する遺跡が多い。青木遺跡の評価においては、轆轤を用いる木工技術が安定して保持される集約的な生産体系が存在したこと、漆器を使用する高い階層が存在したことが重要であろう。この点については、他の手工業生産と併せて第18章第2節で総括している。

個別の特徴

W082、W083、W086、W089は黒漆をかけた漆器で、W084、W085、W087、W088、W090は轆轤挽きのまま漆をかけない白木作りのもの。漆器はいずれも下地塗りをせずに、素地に直接黒漆をかける。W082は宝珠形のつまみを

もつ蓋で直径18cm。下面には刃物痕がある。W083は小型の坏で、内面に轆轤目の段を大きく残す。高台状に底部を一段細く削り込む。復元口径9.8cm、器高4.0cm。W084は白木作りの皿もしくは椀で、円盤状の平高台を削り出す。下面中央には轆轤の軸跡の凹みを残す。W085は保存状態が悪いが、輪状高台を削りだした器高の低い皿である。復元口径16.4cm。W086は黒漆の光沢面を残す状態の良いもので、壺・合子などの脚付の円筒形容器とみられる。ごく一部の破片であるが、蓋を受ける受け口の段が残されている。

W087～W090は無高台皿で、いずれも刃物痕を多く残す。W087は側面の立ち上がりが非常に低く、底面に刃物痕を多く残す。復元口径19.9cm。W088は外面に焼けによる炭化がみられる。内面は荒れてざらついている。復元口径21cm。W089は外面に焼け痕があり、内面はうっすらと黒っぽい塗りが残る。焼け痕と区別しにくいが、立ち上がり部の外面には光沢をもつ漆面が残ることから、本来は全体が漆塗りされていたものと判断した。内面見込みは使用のために漆がはげ、木肌が露出している。内面に刃物痕が多く残される。復元口径22.7cm。W090は白木作りの無高台皿で、内外面に刃物痕を多く残す。復元口径22.5cm。内面中央には花形の陰刻が施される。半円を４つ連ねたもので、焼き印で押されたものかもしれない。轆轤挽き作業の軸中心点とは若干位置がずれているようであり、成形時の固定具痕などでなく装飾的なものと考えられる。

樹種

挽物に使用される木材樹種については、都城ではケヤキが9割近く大半を占め、例外的にヒノキやヤマグワが使用されるようである。当遺跡では、7点がニレ属で最も多く、モクレン属（W083）とヒノキ（W088）が1点ずつあった。ニレ属はケヤキ材の代材として選択的に用いられているようであり、植生を反映した意図的な選材がおこなわれているとみられる。

８．容器／指物（W091～W098）

板材の接合によって製作されたとみられる容器を、指物として扱った。8点出土しており、いずれも箱形容器の部材である。包含層の出土で時期は8世紀後半～9世紀。容器に組む際の接合方法は、W094が組指し、W096が不明である他はいずれも留釘を打ち込む釘接合とみられ、釘孔が残る。樹種同定は4点のみおこなっており、スギが3点（W095、W097、W098）、ヒノキ属が1点（W091）であった。

W091は1辺に沿って3箇所の釘孔があり、一方の短辺（図では下辺）が山形をなす。W093は箱の側板にあたる部材とみて指物に加えたが、曲物底板の破損補修品の可能性もある。一辺に密に並んだ孔は補修孔か。W094は組指しで組む箱の部材。W095は2箇所の釘孔の上にそれぞれ浅い刳りがあり、別の棒材などが乗る構造であったとみられる。W096は箱状容器の部材だが、接合方法は痕跡なく不明。W098は中央に紐ずれした孔があり、取っ手紐の孔の可能性がある。

９．容器／刳物（W099、W100、W105、W106）

刳り抜いて成形された容器の破片４点を刳物として扱う。時期は8世紀後半～9世紀。

W099とW100は側面が斜めに立ち上がり深さをもつ容器で、槽と呼称されるものである。W099は大型の槽で、平面形は長円形であったと想定される。W100は長方形の槽の持ち手部分にあたり、向き合う位置に別の持ち手があったものと考えられる。W099と同様に大型の部類に入るものであろう。

W105は容器の取っ手部分の破片であり、柄杓状の用途が想定される。釣瓶のように長い柄が付けられた可能性もある。盤などの容器に耳として付随する箇所の可能性もあるが、前者の可能性がより高いとみられる。Ⅳ区の掘立柱建物SB04の柱穴P9埋土中に含まれていた。W106は小型の盤・皿の底部脚にあたると考えられる。

10．容器／曲物（W101～W104、W107～109）

曲物容器とそれに付随する部材のうち、円形曲物を除いたものを扱う。円形曲物については次項でまとめており、本稿で扱うものは楕円形や長方形曲物、蓋や枠など付随するものがある。いずれも包含層出土で時期は8世紀後半～9世紀、樹種はスギ3点とヒノキ属が2点。

W101とW102は、曲物容器を固定し運搬などに使用する際の、枠の一部である可能性が高い。端部近くが両側から細く抉られており、紐などで緊縛するためのかかりとなっている。

W103とW109は楕円形曲物、W107は隅丸の長方形曲物で、いずれも底板にあたり樺皮結合の綴じ孔、綴じ皮が残る。

W104は長方形曲物の蓋の可能性があるもので、一端に突起が作り出される。容器本体に耳状の作り出しが付随して、それと固定するための突起であることが想定される。

W108は容器に付随する枠の把手としての用途が推定される。端部にほぞが作り出されており、垂直方向の枠材に嵌められるものと考えられる。

11．容器／円形曲物（W110～W137）

青木遺跡では143点に及ぶ多量の円形曲物が出土した。このうち残存状態が良いものや特徴的なもの28点を選別して掲載している。

出土状況と時期

円形曲物は多くが包含層中からの出土であるが、一部は遺構に伴って出土している。内訳は、木製品が多く出土したⅠ区SX50から3点（W125、W130、非掲載1点）、木簡廃棄土坑Ⅰ区SX10から1点（非掲載）、Ⅰ区礎石建物SB04南面の木組み遺構（調査時名称SX16）周辺から2点（W134、非掲載1点）、溝遺構Ⅰ区SD16埋土中から6点（W126、W131、非掲載4点）、Ⅰ区北東隅の包含層中の遺物集中地点（調査時名称SX45）から4点（W114、W119、W128、非掲載1点）であった。

時期はいずれも8世紀後半～9世紀と考えられるが、遺構ではなく包含層出土のものは10世紀頃までのものを含む可能性がある。

結合方法の大別

143点中139点は円形曲物の底板（円板）部分であった。（容器を蓋とみるか身とみるかによって円板の呼称は変わるわけだが、ここでは記述の都合上、区別せずに底板と称する。）一部のものは側板が結合された状態で出土しており、本来の関係をよく保っている。それらは優先的に掲載した。また残る4点は側板の部材のみが単独で出土したものである。底板の数に比べて側板のみの出土が極端に少ないのは、材自身の薄さによる土中での残りにくさと、底板に比べ破片化した場合に認識しづらいことが理由なのかもしれないが、いずれにしても確認できたのは底板が断然多く、側板はわずかであった。

底板のみで出土したものが多いために、側板をどのように結合したかという詳細な方法については分析が難しいが、底板にのこされた結合痕跡によって大きく2通りの方法によることがわかる。ひとつは木釘を外から打ち込んで結合する釘結合、もうひとつは樺皮で綴じて緊縛する樺皮結合である。

釘結合の技法と特徴

W110～W125が釘結合で作られたものである。釘結合の技法に共通する製作技法は以下のとおり。側板の円の内側に底板をはめ、側板の外側から木釘を打ち込んで両者を結合する。木釘は底板の側面に垂直に打ち込まれる。底板と側板の下面はそろっており、段をなして上げ底状をなすものはみられない。側板は基本的に1列の樺皮で綴じられており、綴方は3段で共通するようである。打ち込まれる木釘の数は５～８箇所でばらつきがあるよう

だが、保存状態によっては木釘が周囲と同化していて判別が難しいものもあった。

W110とW124では、側板のさらに外側に幅の細い箍（たが）を当て、その外側から木釘を打ち込む様子がわかる。W110はその様子を良くとどめており、樺皮で綴じた独立した箍が重ねられている。W110以外の個体についても、この外側の箍が本来あった可能性があるが、脱落してしまうとその痕跡がまったく残らないために判断することができない。

側板が残るものが限られているが、高さがいずれも低く木皿風に用いたものと推定される。最も低いW011が1.7cm、W124が3.0cmである他は、5点が4.2～4.4cmにまとまっており規格性がうかがえる（W110が4.3cm、W012が4.2cm、W117が4.3cm、W123が4.4cm、W125が4.3cm）。

樺皮結合の技法

W126～W137は樺皮で結合するもの。基本的な構造として、底板に2孔1対の孔を設け、側板下端近くに設けられた孔と樺皮で綴じることによって緊縛される。側板の径は底板よりひとまわり小さく、底板の縁が帽子の鍔のようにはみ出している。側板をはめるために底板に溝を彫る技法や、外周ひとまわりを薄くして段を設ける技法が他遺跡の事例であるが、当遺跡の場合は全てが段を設けず同一平面上に側板を乗せるものである。結合のための綴じ孔は等間隔に4箇所設けるという共通性がみられる。唯一W137は5箇所で結合している。

側板が結合された状態で残存するのはW126とW134の2点のみであった。高さはW126が2.5cm、W134が2.3cm（底板の厚さを含む）といずれも低いものである。側板は1列2段の樺皮で円筒形に綴じられており、底板との結合のための緊縛は位置を違えて行われている。現状で見る限り、結合の樺皮が緩まないように打ち込んだ木栓などの存在は確認できなかった。樺皮結合のものに共通する特徴として、底板に円が刻まれている。側板を置く位置の設計線とみられる。

樺皮結合の特徴

当遺跡から出土した樺皮結合曲物を一般的な事例と比較すると、製作工程がかなり簡略なものであることが認められる。例えば、結合位置は通常6～10箇所で固定されるのに対して、４箇所と少ない。また綴じ孔は刀子などで細くスリットをあけて樺皮を通すのが通例だが、キリを用いて大胆に大きな孔を開けている。また底板の表面が材を割っただけのものが多くみられる。ヤリガンナなどで平滑に仕上げ調整をするのが普通であるが、本例ではその工程が省略されている。こうした工程の簡略化は、製品が液体を入れないことを前提としていること、耐久性が必要でなく、短期間の使用を目的としていること、容量が小さく内容物の負荷がそれほどかからないとみていたことを示すであろう。

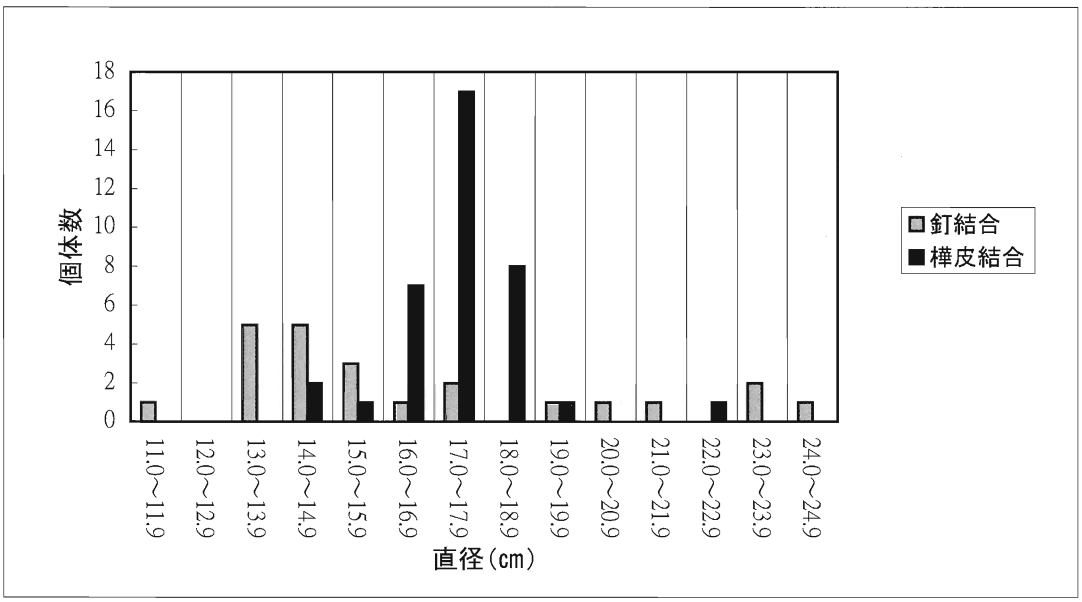
また底板に残された刃物痕は、実際に使用して食事や調理をする際につくものであるが、釘結合のものに刃物痕が非常に密に残されるのに対して、樺皮結合には全く無いものや少ないものが多い。実際の使用痕跡からも、樺皮結合の使用が短期間であったことがうかがえる。（ただし、後述のようにこれを蓋としてみた場合、刃物痕の多少は期間差でなく用途差ということになる。）

結合方法の差異と用途

釘結合と樺皮結合の差は何を反映するものであろうか。『木器集成図録　近畿古代編』では「古代には主として前者（樺皮結合）が蓋、後者（釘結合）が身に用いられたようである。」と述べられており、両者が組み合わせて使用されたことが想定されている。当遺跡では、こうした想定が妥当なものか、あるいは別の背景を考えるべきか、検討してみた。

今回出土した底板のうち、結合部位が残存していたものを結合方法で分類すると、釘結合が24点（側板のみを含む）、樺皮結合が38点であった。出土総数の半分ほどしか判別できなかったために、樺皮結合のほうが1.5倍多い、というこの数値をどう評価すべきか難しい。一方、使用された樹種を比較すると、釘結合（スギ７点、ヒノキ・ヒノキ属6点）、樺皮結合（スギ10点、ヒノキ属1点）という結果が得られた。すなわち、釘結合はスギとヒノキがほぼ半々で同数であるのに対し、樺皮結合には圧倒的にスギが多く使用されている、ということである。

第128図　結合方法別の直径分布



次に底板の直径がどのように分布しているかを検討してみた。破損して出土したものは復元値である。その結果、第128図に示したような分布の結果が得られた。釘結合は全体数が少ないという制約があるが、やはり法量の個体差が大きく、一方の樺皮結合がかなりのまとまりを示すことがわかる。特に17.2～17.8cmの間に37点中15点が集中しており際だったまとまり、規格性がみてとれる。復元計測の誤差を考慮すれば、これらの一群はほとんど同一規格とみて良い。

こうした検討結果を見る限りでは、両結合法で身と蓋を作り分け、両者が組み合って1つの容器を構成する、という想定は当遺跡では当たらないとみられる。法量の分布にみられる規格性を重視すれば、樺皮結合による曲物は短期間に一括して製作されたもの、釘結合の曲物はある程度の時間経過の中で個別に製作されたもの、と考えられるだろう。さらに言及するならば、樺皮結合の円形曲物が、何らかの集団饗食に必要としてまとめて製作された簡便な食器の一群とみることはできないだろうか。

ただし、出土状況を見る限りでは、両者は混在して廃棄・埋没しており、樺皮結合のものが一括して廃棄された、という状況ではない。また樺皮結合のものにも刃物痕跡が残るものがあり、一定時間の使用継続期間を経てそれぞれが個別に廃棄されたようである。よって一度きりの使用を前提とした食器ではないが、その簡便な作りからも製作の契機が上記に想定したようなものであった可能性は高い。樺皮結合曲物の法量は、挽物の皿（直径22cm前後）よりひとまわり小さく、須恵器皿とほぼ近い。

刻字・焼印記号をもつもの

底板に文字・記号が記されたものが4点あった。位置は使用時に外面になる面である。

W115は中央に直線的な刻みが3本彫り込まれる。見方によっては「三」ともとれる。W127も外面のほぼ中央に「三」と刻字される。刃物で細く刻まれている。W129は「十」字形に焼コテによる記号がみられる。鉄箸などによる直線を交差させたものであろう。W132は彫りによって「上」と記される。W136は縁辺に焼コテにより「#」状の記号が記されている。W137は彫りによって文字が縦方向に３文字記され「大原□（毛カ）」と読める。

12. 紡織具（W138～W152）

製糸具である枠、製織具である糸巻、綛かけ、整経具、織機部材などが出土している。なお、木製品以外の製糸具として鉄製紡錘車が出土しており、本章第6節金属製品で掲載している。時期はいずれも8世紀後半～9世紀

と判断される。

本節冒頭にも記したように、紡織具の用途に関しては東村純子氏より多くのご教示を得た。

糸巻（糸枠）

W138～W146は糸枠の部材。糸枠とは回転を利用して糸を小分けする道具であり、基本的に4本の枠木と、これにさしこまれる十字に重ねた２つの横木からなる。横木(W138～W140)が3点、枠木(W141～W146)が6点出土している。

横木はいずれも中央部を正方形に薄くし、2枚を相欠き仕口で重ねるものである。先端部の加工は仕口部分から削り始め、先端部を丸棒状に削りだしている。W139とW140は回転軸を通す軸孔があくが、W138は軸孔がない。W139が長さ10.8cm、軸孔径0.7cm。W140が長さ10.2cm、軸孔径0.8cm、Ⅰ区の溝SD16埋土中から出土した。

枠木は定型的な形態をなしており、2箇所に設けられた横木との結合のためのほぞ孔は全て円形で、孔の間には刳りが入る。また両端は斜めにカットされて細くなる。先端の厚みは本体と同じままのものが多いが、W144のみは厚みも削りこまれて細くされる。ただし刀身状に尖るほどではない。枠木の腹から彫り込まれたほぞ孔が、側面に達して小孔をなしているものがあるが、これは意図せざるものであって木釘などを打ち込んで横木先端を固定したものではないとみられる。

東村純子氏は糸枠の法量や形態について分析をおこなっており[1]、当遺跡出土のものは時期を通じて主体となる中型糸枠にあたる。なお、中型の分類基準は「枠木の長さが30cm未満、横木の長さが9～12cm程度、軸孔は直径約0.5～１cm」とされている。地方の糸枠は在地性の強い特徴をもつものが多いとされるが、本例は枠木の装飾的造形や横木の画一的形状などが、東村氏が宮都型とするタイプに近い。

なおW144は孔の位置を他の部材とそろえるための割付線がある。

整経具

整経具は織機にかける前に、織物の幅や長さに合わせて経糸の本数・長さを整えるための道具である。出土例として認識される例は少ないが、絵画資料や民俗例から想定される形態は、長い整経台に複数の杭（糸掛）が一列等間隔に並ぶような形状である。

W148はそうした整経具の一部で、糸を掛けるための杭部分にあたると考えられる。整経台に差し込まれる基部が方形に作られており、基部付近にある稜はすぐに丸く削られる。長さ19.1cm。Ⅰ区礎石建物SB05の被覆土中から出土した。

W147は当初、W148と同様の整経具の杭と考えたが、先端が尖っていて糸を均一に張って保持することができないことから別用途の部材と考えるべき、との教示を受けた。図版等は紡織具の中に含めたが、ここでは用途不明品としておく。

桛

桛（かせ）は撚りをかけた糸を巻き取る道具で、糸を乾燥させて撚りを安定させるとともに、糸の分量を計るための用具である。形状は棒材を工の字形に組合せたもので、中央の支え木を握って両側の腕木に糸を手動でからめ取っていくように使用するものとされる。

W149はこの桛の支え木の可能性が高い。方形に作られたほぞ状の部分に腕木が組み合う。破損品のため支え木の規模は不明。破損品の場合、結合部を上に図示するルールにのれば、掲載図は天地逆にするのが適当であった。

綛かけ

綛かけ（かせかけ）は桛で幾重にも輪状に巻き取られた「綛」を保持して、回転しながら糸を引き出すための道具。形状は十文字に組み合わせた2本の支え木と、その先端の孔に差し込まれて糸が巻き付く腕木、および2本の支え木を受ける台によって構成される。

W120は綛かけの一部で、台の上部にあたるものと考えられる。使用時の状態は図示した状態と天地が逆であ

り、台から方形の芯木が延び、円盤状に太い部分をはさんで支え木を受けるための回転軸として先端は円形に成形されている。

織機

織機は複数の部材が組み合って使用されるものであり、部分的な部材のみの出土の場合はその部位を同定することは難しいとされる。W151は地機の経糸を上下に区別するための中筒にあたる部材ではないかと考えて紡織具に含めたが、中筒の場合は表面に糸がこすれることによって生じる擦痕（糸ずれ）が密に残されることが特定の決定的な根拠であり、本例についてはそれが全く観察されないこと、中筒としては必要ない先端の面取りや細く仕上げる削りなどがあることから、用途不明の棒状製品と訂正する。

W152はその構造や規模からみて織機の構造部材の可能性が高い。基部には出ほぞが作り出され、先端近くに丸い凹みが掘り込まれている。この凹みによって直交する方向の部材を支持するものとみられるが、具体的な部位については断定しにくい。東村氏の教示では、高機の筬装置を支える部材とするのが最も可能性が高い、との指摘を受けた。

紡織具の評価

青木遺跡では数が少ないながら、一連の紡織具がひととおり出土している。製糸段階に必要なものとしては、枠があるほか鉄製紡錘車も出土している。鉄製紡錘車は出土分布が布の貢納国と一致することが指摘されており、製糸と製織の分業制が徹底された紡織体制では、官衙・郡司層の管理下で製糸部門を負う集落から出土する例が多いとみられている。当遺跡の場合は製糸段階の用具だけでなく、綛かけ、糸巻、整経具、織機といった製織段階に用いる用具があり、製糸から製織までの一連の工程が遺跡付近でおこなわれていた可能性が高い。地方における紡織体制は官衙や郡領層など有力氏族の居所を拠点として整えられ、生産される布帛の用途は在地社会内での消費に限らず現物貨幣としての経済的流通材としての性格が強い。貢納物として国衙主導によって生産される場合も同様である。青木遺跡では鍛冶や非鉄金属を含む金工、漆工、木工に関わる手工業生産がおこなわれていたことがわかっているが、布生産はそうした生産体制のなかでもとりわけ基幹的なものであり注目される。なお当遺跡における手工業生産体制については、第18章第2節であらためてふれることにする。

【註】

（1）東村純子「古代日本の紡織体制－枠・綛かけ・糸枠の分析から－」『史林』第87巻第5号、史学研究会、2004年

13. 農具／編具／木錘（W153～W166）

14点が出土している。ほとんどが古代の遺構面を覆う包含層中からの出土で、時期はいずれも8世紀後半～9世紀。W162は土坑SK02の基盤層に含まれていたことから古墳時代以前に上る可能性がある。

うち12点は棒状木錘で細く削り込んだ部分に紐を巻き結ぶもの、W164が板状で孔を設けて紐を結ぶもの、W166が中央をくびれさせるものである。ただし前者には編具以外の用途が考えられる2点（W155、W165）が含まれている。

調査中にはこの棒状木錘の用途について、祭祀具である陽物形（男根状）木製品ではないかと考えていた。研究会等の機会においても、当遺跡における祭祀具の一例として紹介したことがある。ところがその後に調査が進むにつれ同様のものが多く出土し、過去に出土したものを整理する過程でも確認することができた。それらはいずれも成形が粗く写実的でないことから、陽物を意図したものとは考えにくい。よって報告するにあたり、全てを編具の木錘として扱うこととする。

棒状木錘

棒状の芯持丸太材を適当な長さに裁断し、端部近くを細く削り込んでくびれを作る。上端は裁断されたままのものもあるが、斜めに角をとるようにラフな削りが入る。くびれから下部にかけてはゆるやかに太くなるよう削りが入る。この削りは大胆で粗いもので、稜線をそのまま鋭角に残すものが多い。形態はいわば牛乳瓶をなで肩

にしたようなものである。

法量には明確でないが区別があるようであり、小型（W153、W154）が長さ9cm・径2cm、中型（W156～W158）が長さ13cm・径3cm、大型（W159～W161）が長さ17cm前後・径3cmと、約4cm刻み程度の段階差がみられる。大型のものよりさらに大きいW162、W163は形状が異なっており、編む素材などの差異を反映したものかもしれない。個別の特徴を列記する。W153は外側に樹皮が残る。基部は周囲から切り込みを入れた後に折っている。W154は腐食劣化が激しく、本来の形状をとどめない。W156、W157は樹皮が残る。W158は丸太材でなく、半裁材を削りだしている。W159は芯が腐朽によって抜けている。W160は樹皮が残らないが、外表に近いとみられる。W161は上部先端に焼け痕がある。

棒状以外の木錘

W164は板目材の板の上辺に方形の孔を穿ち木錘とするもの。下辺は上辺より厚く作られている。丸太材に近い断面円形のものや、下辺がきわだって厚い断面泪形のものなどが他遺跡で知られているが、本例は表面を平滑に削って整形調整している。

W166は中央部にくびれを設けたもので、両端部を太いままで小口を平面に裁断する。「鼓形」と呼称される、これより全長が短い木錘が出土例も多く知られており、それに基本的な機能が近い。

木錘の樹種と用途の区別

木錘に使用される材の樹種は、肌がなめらかで摩擦が少なく、糸のひっかかりが起きないものを選択的に用いられるとされる。当遺跡の場合、クワ属3点、サカキ2点、イチイ属、ニレ属、シキミ、コナラ属（アカガシ亜属）などの広葉樹が使用されていた。木錘には一定の重量が必要とされ、特にW164のようないわゆる泪形断面形のタイプにはカシ類のような緻密で密度の高いものが選択されていることがわかる。

棒状木錘とした一群は比較的軽く、紐同士の間隔も密に用いられるものとみられる。簾編みのような細かい製品を編む用法が推定され、なかでも大中小の3段階ほどの使い分けがあったことが考えられる。棒状のものでもさらに大型のW163やW166などはそれより大きな構造の編み物に対応したもので、さらに泪形のW164などは葦簀などの粗い編み作業に使用されるものであろう。

いずれのタイプにしても、本来は同法量・同形態のもの多数を一組にして使用されるべきものであり、出土したのはそうした作業に使用されるうちのごく限られた一部である。出土数量としては多いと言えず、遺跡周辺でそう大がかりな生産体制などが想定されるものではない。

木錘以外の用途が想定されるもの

第147図には形状などの特徴から木錘の可能性をもつものを全てまとめて図示したが、うち2点は木錘以外の用途である可能性が高い。

W155はくびれの作りが他のものと異なり、紐の巻きしろが作られていない。編具以外の用途が考えられる。またW165も同様であり、くびれから下の肩にあたる傾斜部分がない。また本体部分に削りの稜が残る。こうした点からみて、やはり編具以外の用途が想定されるものである。

14. 工具・食事具・漁撈具（W167～W171）

W167は工具の柄にあたる部材である。表裏分割したものを二枚合わせにするもののうち一方にあたる。内面に茎をはさむくぼみがV字形に彫られている。目釘孔などの痕跡はみられない。大きさからして鋸などの柄ではなく、刀子の柄などの用途が適当と考えられる。

W168は鎌の柄の基部にあたるものと考えられる。一木を削りだしたもの。残存状態が悪く、図化した反対面は大きく二次的に欠失している。

W169は漆塗りに使用された刷毛で、方形に作り出した先端を割り裂いている。全体に漆が薄く付着している。

先端には挟み込まれた毛状の繊維が漆によって固着して残る。縛り固定した痕跡はみられないが、先端付近の幅広い部分に漆が付着していないため、緊縛していた紐などとともに脱落したものとみられる。基部の先端は片削ぎにカットされている。当遺跡では漆容器として使用された土器が多数出土しており、製品としては漆塗を施した挽き物もある。工具としての刷毛が出土していることは、遺跡内で漆塗り製品の生産が完結して行われていたことを実証するもので、手工業生産体制を考えるうえで興味深い。

W170は破損した一部であるため用途が断定しづらいが、本来杓子形をなしていたうちの一部分と考えて食事具とした。武器形などの木製祭祀具である可能性も考えたが、積極的に決定する根拠を欠く。

W171は楕円形の板状製品の一端に円孔を穿ったもので、浮きとして報告されることが多いものである。円孔の周囲には紐ずれなどの痕跡がみられない。1点だけの出土であり、別の用途も想定されるがここでは浮子としておく。

15. 発火具／火鑽臼（W172～W174）

回転摩擦式発火具が3点出土している。棒状の臼を用いるキリモミ式の火鑽臼である。時期は8世紀後半～9世紀。

W172は円形曲物の底板を転用したもので、3箇所の発火痕がある。曲物自体は釘結合のもので刃物痕が多く残り、実際にかなり使用されたものである。木目に沿って底板が割れた破面を利用して転用している。発火動作は表裏両面から行われている。目的不明の小さな穿孔が3箇所に残されている。曲物として使用された際に、蒸し器などの用法であった痕跡かもしれない。Ⅳ区SD01から出土しており、10世紀頃の年代が考えられる。

W173とW174は角材を用いた火鑽臼。ともにⅣ区の掘立柱建物周辺から出土している。

W173は長さ404㎜、幅51㎜、厚さ21㎜。使用した６箇所の発火穴が残り、穴の内部は摩擦熱で黒色炭化している。このほかに３箇所、杵の掛かりをつけるための切り込みがあるが、実際に使用した痕跡はない。発火穴の径は8.8～10.8㎜で、杵先端の径を示すものと判断される。使用された6箇所の穴は深さがほぼ均等で、いずれも下面まで５㎜ほどの厚さを残す。材は構造材などの転用材か端材とみられ、表裏両面は平滑に整えられていて厚みも均一である。一方の端部は表裏両面から工具切り込みを入れた後に折っている。他方の端部は現状では荒れているが、本来は円弧形の整った端面をなしていたとみられる。

W174は長さ416㎜、幅58㎜、最大厚32㎜。10箇所の発火穴が設けられる。穴の内部が黒色炭化しているほか、火種による焼けが生じた部分がある。発火穴の深さはばらつきがあり、特に図中左端の穴はかなり浅く、使用が可能な状態である。材はW173に比べて不整形で、厚さも両端でかなり異なる。表面は平滑だが、両側面は波打つような曲線で、構造材の再利用材とは断じがたい。建築端材の可能性は考えられる。左端はナタ状の工具で大きく切り込みを２方向から入れた後に折っている。右端は現状ではかなり荒れが進むが、直線的でなく山形にとがる形で切り折られたとみられる。

16. 農具／収穫具（W175・W176）

W175は竪杵の端部。2個体出土しており、同一個体かどうか断定できないが、ここでは1個体として扱っている。先端は摩耗し光沢面をなす。側面に刃物痕を密に残しており、切り作業の台として使用されたものか。樹種ヒサカキ属。Ⅰ区の溝遺構SD16から出土した。

W176は横槌で、柄の端部を欠損している。槌部の端面は平面に切断されている。使用にともなう摩耗はあまり顕著にみられない。

2点とも時期は8世紀後半～9世紀。

17．接合補助材／楔（W178～W180）

3点出土している。いずれも建築物の交差部、結合部に使用される留め楔とみられる。3点とも片刃状に先端が尖る。W178は先端幅も細く削られているが、他の2点は同一幅である。W178はⅣ区SB03の付近の、建物遺構面を被覆する包含層中から出土した。他の2点も包含層中からの出土。いずれも時期は8世紀後半～9世紀とみられる。

18．構造材／建築材・器具材（W177、W181～W194）

使用された部位は特定できないが、何らかの構造物を構成する一部の部材とみられるものをまとめて構造材とした。建物上屋などに関わる大がかりなものを建築材、室内に据え置かれる器具等の一部とみられるものを器具材としたが、その分類は厳密なものではない。

W177は現状の形状では木栓とされるもので、建築材の重ね部分に差し込まれるピンとして機能したと考えられる。ただし別の解釈としては、さらに長い建築材の端部のほぞ部分がきれいに切り落とされたものである可能性もあろう。

W181～W184は建築材の端材。W181は全面が平滑な直方体。鋸で建築材の長さを調整した際の端材ではないか。W182は破損した一部だが、仕口部分の破片。大きさからみて建築材ではなく、例えば織機などの器具材であろう。W183とW184は工具により切断された端材で本来の用途は不明。

W185はなんらかの枠材で、横板をはめこむ溝が両側に設けられた上で、さらに棒を受けるための円孔が間隔を置いて開けられている。格子や窓枠などにあたる可能性があるが、特定することはできない。W186は上端にほぞが、下端にほぞ孔状の凹みがある。何らかの枠材か。W187は建築材の端材で、横架材先端の受け部にあたる段の可能性がある。W188は建築材の端材。ほぞ孔部分で材の先端近くか。

W189は建築材を鋸で切断した端材で、粗い加工痕を残す。W190は器具材で、何らかの軸を立てるための軸受台。他の出土例ではタタリ台と称されることがあるが、その用途は広く可能性があるため、限定せずに軸受台としておく。方形の孔を中央に設けられていたとみられるが、人為的に半分に破砕されている。W191は直方体の木材で、一面の中央が一段低く削られている。加工は粗い。積極的に用途を想定するならば、建物の束柱を受ける台などになるか。W192は鴨居や敷居などの建築材の一部が切られたものの可能性がある。W193は何らかの器具材が二次的な加工を受けて端材となったもの。W194は円形に成形した材の中央に表裏から方形の凹みを掘り込んだもので、軸受台である。他の紡織具と関連づけて解釈するならば、タタリ台とみることも可能であろう。

19．木樋（W195）

Ⅰ区の溝遺構SD16の付近、遺構の外側から出土した。断面U字形をした木樋。長さ62㎝。先端は連結するために段を設けて薄く作る。また底部には幅6センチほどの凹みが設けられており、横方向の桟木などに乗って固定するためのものとみられる。中央部には円形の凹みがあるが、本来あったものか節跡などが二次的に腐朽したものかは判別できない。

出土地点は礎石建物SB05と石敷き井泉、溝SD16が一体となった空間の一部であり、木樋がどのように使用されていたか問題となる部分である。遺構としては検出できないが、地面上に設けられた導水施設の存在なども想定できるわけで、興味深い資料である。

20．杭（W196～W203）

杭材は破損品が多く出土しているが、状態が良く特徴的なもの7点を選んで掲載した。このうちW196、W197、W200、W201の4点はⅠ区のSX16に伴うもの。SX16は礎石建物SB04の南辺東寄りで検出された木組みを伴う遺構で、建物の雨落ち溝あるいは基壇外装と考えられる。W203の扉蹴放材を横長に立てて、上記4点の杭で固定した状態で検出されており、土留めの目的であろう。杭は形状、法量もばらばらで、規格的に用意されたものでない。なお、この木組みの北側には整地土とみられる人為的な堆積があり、この中に木製品が多く含まれていた。

21．扉蹴放し材（W203）

杭の項で述べたSX16に伴うもので、雨落ち溝あるいは基壇外装の土留めに転用されたものである。本来は建築材で、扉口の基底に敷居として水平に使われる「蹴放し」の材にあたる。長方形の孔が2箇所設けられ、一方には接して凹みが設けられる。この凹みは扉の回転軸を受けるための軸釣孔である。片扉式で、扉幅は約40cmと狭い。材の横断面は長方形で、全体に板材をなす。両端はカットされているが、使用時本来の形状かどうか明らかでない。両端には柱と固定するための何らかの構造が必要であるが、本例にはそれが残されていない。最終的な出土状況が板材としての転用であったために、加工のある両端を切り落として再利用されたものかもしれない。

22．不明品（W204～W223）

用途の決定が難しいものを不明品としてまとめて報告する。破損や二次的加工のために本来の形状を失っていて判別できないものや、完存しているが使用状況を知る手がかりがなく用途を特定できないもの、棒状の単純な形状のため多様な用途が想定され特定できないもの、など用途不明とする根拠は様々である。

W204は板状で、W212と同様に一端を幅広に、他方に抉りを入れている。W204は全周が加工面。形代などの木製祭祀具の可能性も考えられるが、決定する根拠を欠く。W205は両面に刃物痕が残る。曲物底板などの破損品の可能性があるが、その場合は例の少ない板目材ということになる。W207は端部に両側から抉りをいれて突起を作りだし、端部近くに３つの小孔があけられる。紡織具の綛かけの可能性も考慮したが、先端の抉れがあることや、小孔が傾斜せずまっすぐに開けられている点からみて当たらない。W208は自在鉤のように掛け位置を変える機能をもつなんらかの調整具とみられる。W209、W210は器具材などかもしれないが、用途不明。W211は杓子状の形状だが、中ほどに円孔が2つ設けられる。細い柄の部分は端部が斜めに切られているが、本来はさらに長かったものかもしれない。W213は調整具とみられる。大きさの異なる方孔が2箇所に開けられ、端部を欠く。W214は大きさが段階的に異なる３つの孔が開けられている。その孔の間には穿孔を途中でやめた錐の痕跡が残される。孔のサイズが区別されている点などを考慮すれば、調整具以外の用途が想定される。W215は溝状に彫り込みがあり、紐などの留め具等の用途が想定されるもの。W216は完形。細くした部分の中央に、鉄棒による焼き穿孔で円孔が開けられている。木栓状に何らかの結合あるいは固定に使用された可能性があるが、特定することは難しい。

W217～W223は棒状の不明品。W217は丸太半裁材の削り出しで、一端をグリップ状に削り断面方形にしている。W218は平面形が刀子形をなすが、刃部にあたる部分は厚みをもったままで刃が作られていない。W219～W222は断面円形の棒状製品。加工の様子はそれぞれ異なる。W223は細長い板で、先端をＶ字型に削る。

23．木製品の用材傾向

1．樹種同定の結果

木製品の一部を選別して樹種同定をおこなった。個々の樹種については第46表以下に記載している。また、樹種分類群ごとの顕微鏡写真、観察記載などは第17章第２節にまとめて記した。

2．用材の傾向

以下に樹種同定業務を受託した文化財調査コンサルタント(株)渡辺正巳氏、古野毅氏（島根大学総合理工学部）の所見を記す。本節で扱った木製品の他、建物柱材、石敷き井泉井枠材などの所見を併せて記載する。

第45表に、樹種同定を行った試料の主な用途別一覧表を示す。(樹種別の試料一覧は第18章第2節に掲載）今回行った青木遺跡での樹種鑑定のほか、島地謙氏ほかの集成（文献(1)）、鹿島町立歴史民族資料館の集成結果（文献(2)）を併せて示している。

木製品のうち用材に傾向が認められるのは、「井戸材」「糸巻」、「指物」、「挽物」、「曲物」であった。これらについて、さらに詳細に検討すると以下のようになる。

井戸材

モミ属、スギから成る。文献(1) ではスギ、ヒノキが主であり、モミ属は10%に満たない。

モミ属に着目すると、青木遺跡では４隅の柱がすべてモミ属である。一方、文献(1)では、ヒノキ、コウヤマキのみである。このことから青木遺跡では、井戸柱材としてモミを意図的に使用した可能性が高い。なおモミは、現在も島根県東部で平野周囲の丘陵上に自然分布しており、資源としては奈良、平安時代でも利用可能な状態であったと考えられる。

島根県東部での井戸材の樹種同定結果として中野美保遺跡、出雲国府跡での報告がある（渡辺・古野，2003，2004）。しかしいずれも枠材で、合計3試料がスギと同定されたのみである。当地域での傾向を見るために、今後積極的に用材を調べる必要があろう。

糸巻き

モミ属、ヒノキ属、スギ、カヤ属などの針葉樹が用いられている。文献(1)は、糸巻きが8世紀以降、スギ、ヒノキなどの針葉樹材で作られる様になったことを指摘している。今回の青木遺跡は奈良・平安時代の遺物であり、この傾向に一致する。ただし前述の「井戸枠」同様に、モミ属の割合が高いことが特徴である。

指物

スギ、ヒノキ属などの針葉樹材が用いられている。文献(1)でも、遺跡出土遺物に限ればスギ、ヒノキ属が用いられており、同傾向を示す。

挽物

ニレ属がほとんどで、ヒノキ属、モクレン属が用いられている。文献(1)あるいは山田（1993）では、ヒノキ、ケヤキが主に用いられている。ニレ属はケヤキと共にニレ科に属し、木材組織学的にも、形態、生態的にも近縁の属であることから、ここではケヤキの代用として使用された可能性がある。

曲物

スギ、ヒノキ属のみから構成される。一方文献(1)ではヒノキ属が圧倒的に多用されている。樺皮結合のものはほとんどがスギであるが、釘結合のものではスギとヒノキ属の割合が半々になる。製作技法と樹種には対応関係が認められる。

その他

試料の多かった「木錘」は、文献(1)、文献(2)ともに様々な樹種が用いられており、用材としての傾向が無かった。近辺に生育していた樹木や、破材などの転用が主であったと考えられる。

「収穫具」には、ツバキ科のサカキ、ヒサカキ属が用いられていた。文献(1)、文献(2)での傾向は、カシ類、ナラ類が多いがサカキの用例も報告されている。また、文献(2)で示されたツバキ（ツバキ属）もサカキ、ヒサカキ属同様にツバキ科に含まれ類縁の種類であり、代用された可能性がある。

掘立柱建物の柱材について

2×2間の総柱建物5棟（Ⅰ区SB06・16、Ⅳ区SB02・03・04）と柵列（東側木柱群）については、ほとんどがクリ材であった。この他ケヤキ、クスノキ属の広葉樹材、マツ属(複維管束亜属)、ヒノキ属、カヤ属などの針葉樹材が用いられていたが、意図的な用材は認められなかった。Ⅳ区SB05では4種の樹種が用いられている。これらの内バラ属は、多くが灌木で、「柱」には不向きである（試料とした柱根は、直径が25cm、長さが62cmあった。）。当時は、柱となりうる径（太さ）の種がこの地方にも存在したことになり、興味深い。

まとめ

青木遺跡での樹種傾向、特徴として以下の点が明らかになった。

(1) 指物、木錘、収穫具の用材は、全国的な傾向と一致した。

(2) 井戸材には、主に針葉樹が用いられる。特に今回はモミ属が多用されることが特徴である。

(3) 8世紀以降、糸巻きには針葉樹が主に用いられる。今回の結果では、井戸材同様にモミ属が用いられていることが特徴的であった。

(4) 挽物も全国的な用材の傾向と一致したが、ニレ属をケヤキの代用として用いた可能性がある。

(5) 柱の用材はクリがほとんどを占め、ケヤキ、クスノキ属、ツバキ属類似、バラ属類似の広葉樹も認められた。針葉樹では、カヤ属、マツ属(複維管束亜属)、ヒノキ属が用いられていた。しかし樹種の配置についての明確な「意図」は認められなかった。

(6) 柱材としてバラ属が認められた。現在認められる「バラ属」のほとんどが灌木であるが、当時は柱となりうる径（太さ）の種が存在したことになる。

(7) 柱材を除いて、「モミ属」が青木遺跡を特徴付ける重要な要素であることが分った。今後、調査範囲を広げ「モミ属」の使用域についてのデータを得る必要があろう。

【文献】

（1）島地　謙・伊東隆夫編1988『日本の遺跡出土木製品総覧』296p.，雄山閣出版，東京.

（2）鹿島町立歴史民族資料館編1999『'99特別展森のめぐみ島根県出土木製品集成』101p.，鹿島町立歴史民族資料館，島根

【引用文献】

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p.，文永堂，東京.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植生史関係史－．植生史研究特別第1号，242p..

渡辺正巳・古野毅（2003）出雲国府跡出土柱根・木製品の樹種(1)．史跡出雲国府跡-1--風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書-，14，199-208，島根県教育委員会.

渡辺正巳・古野　毅（2004）中野美保遺跡出土木製品の樹種．中野美保遺跡-一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書-，4，159-160，島根県教育委員会.

第45表　用途別樹種同定結果（柱を除く）

製品名	用途別出土樹種数		
	青木遺跡Ⅰ・Ⅳ区	島地ほか(1988)	鹿島町立歴史民俗資料館(1999)
井戸材（側板）	スギ5	スギ37、ヒノキ20、マツ類8、モミ6、コウヤマキ5、クリ7	
井戸材（土居桁）	モミ属3、スギ1		
井戸材（隅柱）	モミ4		
器具材（枠材？）	スギ1		
器具材（軸受台）	モクレン属1		
建築材（扉蹴放し材）	スギ1		
接合補助材（木栓）	スギ1		
杭材	スギ2	シイ類388、クリ331、カシ類181、コナラ類147、スギ133、ヒノキ105、マツ類42、カヤ25、イヌガヤ22、モミ10、	
木樋	スギ1		
刷毛	ヒノキ属1	ヒノキ6	
収穫具（横槌）	サカキ1	クヌギ類12、アカガシ亜属3、カシ類6、ナラ類3、サカキ2	アカガシ亜属2、コナラ(アカガシ亜属)2、ツバキ属1、ツバキ1
収穫具（竪杵）	ヒサカキ属1		サカキ？1、コナラ(アカガシ亜属)1
工具柄	ヒノキ属1	ヒノキ4、クリ2、トネリコ類1、カヤ1、コウヤマキ1、スギ3、クヌギ1	イチイ属1、イヌガヤ属1、タブノキ1、モミ属1、コナラ(アカガシ)1、アカガシ亜属1、サカキ1
楔	スギ1	ヒノキ6、スギ1、コウヤマキ2、アカガシ亜属1、サカキ1、ミズキ？1、	
編具（木錘）	クワ属3、サカキ2、モミ属1、ニレ属1、イチイ属1、ウツギ属1、シキミ1、ｺﾅﾗ(アカガシ亜属)1	アカガシ亜属4、ヤブツバキ？3、コナラ亜属1、ヒノキ2、シイノキ1、シキミ1	ミズメ1、サワグルミ1、サカキ1
かせ（支え木）	スギ1		
綛かけ（軸材）			
整径具（糸掛）	スギ2		
糸巻（枠木）	モミ属2、ヒノキ属1、スギ1	ヒノキ29、スギ4、モミ1、ハンノキ1、クヌギ類1、ケヤキ1、ヤマザクラ1	ヒノキ1
糸巻（横木）	ヒノキ属2、カヤ属1		
織機（構造部材）	スギ1		
下駄	ニレ属1、ミズキ1	ヒノキ29、ケヤキ24、スギ21、ヒノキアスナロ12、ホオノキ7、クリ6、ミズキ3、ツガ属3、	
檜扇	ヒノキ属1		
櫛	ヒサカキ属2	イスノキ18、ツゲ8、シキミ3、ネギキ4、	
指物（箱）	スギ3、ヒノキ属1	ヒノキ4、スギ2	
挽物（坏）	モクレン属1	ヒノキ31、ケヤキ15、トチノキ9	
挽物（壺）	ニレ属1		
挽物（皿）	ニレ属5、ヒノキ属1		
挽物（蓋）	ニレ属1		
曲物（底板）	ヒノキ属2	ヒノキ206、スギ36、モミ21、アスナロ20、サワラ4、マツ(二葉松類)2、ケヤキ8、ヤマグワ1	
曲物（把手）	スギ3		
曲物（枠）			
曲物（蓋？）			
曲物（円形底板：樺皮結合）	スギ11、ヒノキ属1		
曲物（円形底板：釘結合）	スギ6、ヒノキ属6		
形代	スギ1、カヤ属1		
木簡状木製品	スギ2、ヒノキ属1	ヒノキ1	
火鑽臼	スギ2	スギ6、ヒノキ1、オニグルミ1、クヌギ1、ケヤキ1、シイノキ1、カエデ1、シャシャンボ1	スギ3、カヤ1
火鑽臼（曲物底板）	スギ1		
不明品（木栓状）	スギ1		
不明品（板状）	クワ属1		
棒状不明品	スギ4		
不明品（調整具）	スギ1、ｺﾅﾗ(アカガシ亜属)1		

第46表　木製品　観察表①

掲載番号	大別	名称	部位ほか	樹種	調査区	グリッド	層位	法量(長さ・幅・厚み) cm			木取り	備考
第129図												
W001	祭祀具	神像		ヒノキ	Ⅳ区	X20	6層	13.5	6.1	4.8	芯持削り出し	
第131図												
W002	祭祀具	絵馬			Ⅰ区	D15		9.88	12.45	0.67	追柾目	
第132図												
W003	祭祀具	形代		スギ	Ⅰ区	SD23		10.0	3.0	0.5	板目	やや粗い削り、表面に段差残る
W004	祭祀具	形代			Ⅰ区	SX50		7.0	2.0	0.3	板目	平滑に削られている
W005	祭祀具	形代か			Ⅰ区	SX50		17.0	1.5	1.0	割材削り出し	
W006	祭祀具	形代		カヤ属	Ⅳ区	SB04近く	6層	27.4	1.6	0.8	割材削り出し	
W007	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F15	9層	30.20	3.40	0.46	板目	
W008	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区		2層	24.60	2.10	0.50	板目	
W009	祭祀具	木簡状木製品			Ⅳ区	B20	5C層	24.50	2.70	0.90	柾目	
W010	祭祀具	木簡状木製品		スギ	Ⅰ区	SX50		22.50	2.10	0.48	板目	
W011	祭祀具	木簡状木製品		ヒノキ属	Ⅰ区	SD05上面		19.70	2.30	0.40	柾目	
W012	祭祀具	木簡状木製品		スギ	Ⅰ区	N溝		17.90	2.40	0.40	板目	
W013	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	G16	9層	16.60	1.73	0.45	板目	
W014	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F15	9層	16.50	2.15	0.56	柾目	
W015	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	11層	16.00	1.90	0.36	板目	
W016	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	E溝ベルト		16.00	1.70	0.40	板目	
第133図												
W017	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F10	10層	16.00	1.50	0.30	柾目	
W018	祭祀具	木簡状木製品			Ⅳ区			15.60	1.70	0.20	板目	
W019	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区		9層	13.30	1.50	0.80	柾目	
W020	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	SD15		14.60	2.20	0.30	板目	
W021	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	G14	9層	12.40	1.70	0.30	板目	
W022	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	G14	9層	10.20	1.20	0.30	柾目	
W023	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	10層	9.10	1.77	0.30	板目	
W024	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	10層	9.90	2.10	0.38	板目	
W025	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F14	10層	9.00	2.5	0.36	柾目	
W026	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F14	10層	5.73	1.70	0.29	柾目	
W027	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区		9層	4.50	1.40	0.30	柾目	
W028	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	G14	9層	12.30	1.27	0.20	板目	
W029	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	SD27		13.60	1.70	0.30	柾目	
W030	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F15	9層	14.40	2.57	0.50	柾目	
W031	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	C南溝		14.70	2.82	0.42	板目	
W032	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	11層	14.80	1.66	0.30	柾目	
W033	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	SB05		17.30	1.80	0.51	板目	
W034	祭祀具	木簡状木製品			Ⅳ区	SB02	6層	18.90	1.57	0.50	板目	
W035	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	D16		14.20	1.60	0.40	柾目	
W036	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	G14	9層	15.80	2.38	0.63	板目	
W037	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	10層	20.40	2.40	0.60	板目	
W038	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	E14	34層	7.60	1.75	0.50	柾目	

第47表　木製品　観察表②

掲載番号	大別	名称	部位ほか	樹種	調査区	グリッド	層位	法量(長さ・幅・厚み) cm			木取り	備考
W039	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F16	10層	9.70	1.30	0.36	柾目	
W040	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	M溝		9.80	1.44	0.42	柾目	
W041	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	10層	10.40	2.40	0.36	柾目	
W042	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	SD16	2層	10.90	2.16	0.60	板目	
W043	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	11層	11.90	2.15	0.26	柾目	
W044	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	C南溝		12.10	1.20	0.64	板目	
第134図												
W045	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	S溝	24層	13.90	1.98	0.82	柾目	
W046	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	D16		11.30	1.90	0.30	柾目	
W047	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	C16	9層	11.10	2.13	0.64	板目	
W048	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	D16		15.00	2.20	0.40	柾目	
W049	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F17	10層	9.50	2.60	0.30	板目	
W050	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	SX10		17.90	2.90	0.60	柾目	
W051	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F14	10層	13.60	2.60	0.50	柾目	
W052	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F15	9層	6.20	3.20	0.70	追柾目	
W053	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	SB05-9		15.60	2.40	0.50	板目	
W054	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	D16		14.70	2.30	0.24	柾目	
W055	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	E14	34層	7.40	1.80	0.48	板目	
W056	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	G15	11層	9.70	2.00	0.37	柾目	
W057	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F14	10層	12.80	1.80	0.24	板目	
W058	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	E14	34層	7.20	2.50	0.42	板目	
W059	祭祀具	塔婆形			Ⅰ区	F15	10層	12.5	2.5	0.6	柾目	
W060	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	D17トレンチ	精査工中	11.5	2.9	0.5	板目	
W061	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	Q069		10.5	4.3	0.6	柾目	
W062	祭祀具	木簡状木製品			Ⅳ区	A18	5層	11.5	2.4	0.1	板目	
W063	祭祀具	木簡状木製品			Ⅳ区		5C層	19.9	3.3	1.3	板目	
W064	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	SD29		13.5	3.0	1.2	板目	
W065	祭祀具	木簡状木製品			Ⅳ区		6層	13.3	2.2	0.6	柾目	
W066	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区		9層	12.6	3.5	1.3	板目	
W067	祭祀具	木簡状木製品			Ⅰ区	F14	9層	16.4	2.7	0.33	追柾目	
W068	祭祀具	木簡状木製品			Ⅳ区			15.1	1.4		板目	
第135図												
W069	服飾具	下駄			Ⅰ区	SX50		24.0	9.0	2.8	柾目	左足、緒ずれ指ずれ無いが、多少歯が使用減り
W070	服飾具	下駄			Ⅰ区	F14	10層	21.0	10.0	2 歯2	柾目	左足、使用減りほとんど無し
W071	服飾具	下駄			Ⅰ区	SB05		23.0	9.0	3.0	柾目	右足、使用減り顕著、緒孔開け直し・未完通孔あり
W072	服飾具	下駄			Ⅰ区	F17	10層	24.0	7.0	2 歯1	半裁削り出し	右足、使用減りあり、焼け

第48表　木製品　観察表③

掲載番号	大別	名称	部位ほか	樹種	調査区	グリッド	層位	法量(長さ・幅・厚み) cm			木取り	備考
第136図												
W073	服飾具	下駄			Ⅳ区	C19	5C層	22.0	10.5	1.8	柾目	右足、腐食による破損進む
W074	服飾具	下駄		ニレ属	Ⅰ区	E16	10層	18.0	8.5	2 歯3	板目	右足、使用減り顕著、焼損
W075	服飾具	下駄			Ⅰ区	SD06		12.0	5.0	2.0	追柾目	右足、使用減りわずか
W076	服飾具	下駄			Ⅰ区	D15	9層	21.0	8.5	1.0	柾目	右足、使用減り顕著
W077	服飾具	下駄			Ⅰ区	E15	34層	22.0	8.0	3.0	板目	左足、使用減り・指ずれ顕著
W078	服飾具	下駄		ミズキ属	Ⅳ区		5C層	20.0	8.0	6.5	芯持削り出し	使用減りほとんど無し
第137図												
W079	服飾具	櫛		ヒサカキ属	Ⅰ区	SX10		4.6	4.6			
W080	服飾具	櫛		ヒサカキ属	Ⅰ区	SD16	2層	3.3	2.0			
W081	服飾具	檜扇		ヒノキ属	Ⅰ区	ⅠD区 SX50		23.5	2.0	0.3	柾目	
W082	容器	挽物	蓋	ニレ属	Ⅰ区	F17	10層	径18	ツマミ 径3	1.5		
W083	容器	挽物	坏	モクレン属	Ⅰ区	F14	第10層	8 5.5	2.5 7	1.5 1.5		
W084	容器	挽物	Ⅲ	ニレ属	Ⅰ区	ⅠC区 南溝		底部 径10		1.5		
W085	容器	挽物	Ⅲ	ニレ属	Ⅳ区	B20	5C層	14.0	16.0	0.5		
W086	容器	挽物	壺	ニレ属	Ⅳ区	Z20	6層	13.0	6.0	1.0		
第138図												
W087	容器	挽物	Ⅲ	ニレ属	Ⅳ区		5C層	20.0	20.0	1.0		
W088	容器	挽物	Ⅲ	ヒノキ	Ⅳ区	A21	5C層	18.0	7.0	1.0		
W089	容器	挽物	Ⅲ	ニレ属	Ⅳ区	A20	7層	21.0	21.0	1.0		
W090	容器	挽物	Ⅲ	ニレ属	Ⅰ区	SD29-2		23.0	19.0	1.0		
第139図												
W091	容器	指物	箱	ヒノキ属	Ⅰ区	F16	10層	26.0	5.0	0.4	板目	
W092	容器	指物	箱		Ⅰ区	排土中		12.0	3.0	0.5	板目	径2～3㎜の円孔３箇所
W093	容器	指物	箱		Ⅰ区	D１６ SX46上		16.0	6.0	0.5	柾目	
W094	容器	指物	箱		Ⅰ区	E15		13.0	3.5	0.5	柾目	
W095	容器	指物	箱	スギ	Ⅳ区	B20	5層	13.0	4.5	0.5	柾目	
W096	容器	指物	箱		Ⅰ区	N溝	10層 以上	19.0	8.8	0.9	柾目	
W097	容器	指物	箱	スギ	Ⅰ区	C16		13.5	5.8	0.5	追柾目	
W098	容器	指物	箱	スギ	Ⅳ区	B20	6層 SKBベース層	20.0	4.0	1.0	柾目	結合の小孔５箇所、１箇所斜め方向の穿孔あり
第140図												
W099	容器	刳物	槽		Ⅰ区	SB05-1		55.0	11.0	9.0	板目	
W100	容器	刳物	槽		Ⅳ区	C19	5C層	17.0	4.0	3.0	追柾目	
W101	容器	曲物	枠		Ⅳ区	B19	5C層	43.0	3.5	2.0	板目	
W102	容器	曲物	枠	スギ	Ⅳ区	C-19	5C層	38.0	3.0	2.0	板目	
W103	容器	曲物	底板	ヒノキ	Ⅳ区	C19	5C層	44.5	3.5	0.8	追柾目	
W104	容器	曲物	蓋か	スギ	Ⅰ区	D15	24層	42.0	14.0	0.5	柾目	
W105	容器	刳物	柄杓か		Ⅳ区	P9柱穴内		16.8	7.0	4.5		
W106	容器	刳物	盤脚部		Ⅰ区	SX50		10.0	4.5	3.0	割材削り出し	一方の木口側はきれいな切断面を呈し、再加工が加わっているものか
W107	容器	曲物	底板		Ⅰ区	D5 溝		18.0	8.0	0.5		
W108	容器	曲物	把手	スギ	Ⅰ区	F15	11層	13.0	5.0	0.5	柾目	
W109	容器	曲物	底板	ヒノキ属	Ⅰ区	E14		28.0	2.8	0.7	柾目	

第49図　木製品　観察表④

掲載番号	大別	名称	部位ほか	樹種	調査区	グリッド	層位	法量(長さ・幅・厚み) cm			木取り	備考
第141図												
W110	容器	円形曲物		スギ	Ⅳ区	Z19	5C層	13.0	13.0	0.75	柾目	ピン
W111	容器	円形曲物		ヒノキ	Ⅳ区	B19	5C層	14.8	9.3	0.57	柾目	ピン
W112	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	SD25	32層	15.2	15.2	0.81	柾目	ピン
W113	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	F14	9層	13.0	13.0	0.54	柾目	ピン
W114	容器	円形曲物		ヒノキ属	Ⅰ区	SX45		13.8	13.8	0.60	柾目	ピン
W115	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	F15	9層	15.7	15.7	0.54	柾目	ピン
W116	容器	円形曲物		スギ	Ⅳ区	A20	5B層	13.8	10.1	0.70	柾目	ピン
W117	容器	円形曲物		ヒノキ属	Ⅰ区	C16	22層	長15.10 短14.40	15.1 14.4	0.53	板目	ピン
W118	容器	円形曲物		ヒノキ属	Ⅰ区	F17	10層	17.0	17.0	0.49	板目	ピン
W119	容器	円形曲物		ヒノキ属	Ⅰ区	SX45		16.6	10.2	0.55	柾目	ピン
第142図												
W120	容器	円形曲物		ヒノキ	Ⅳ区	A19	5C層	17.4	13.2	0.68	柾目	ピン
W121	容器	円形曲物		スギ	Ⅳ区	C18	5C層	21.0	20.0	0.84	板目	ピン
W122	容器	円形曲物		スギ	Ⅳ区	A20	5C層	23.2	21.9	0.60	柾目	ピン
W123	容器	円形曲物			Ⅳ区		5C層					綴じの残る側板
W124	容器	円形曲物			Ⅰ区	F15	9層	－	－	－		綴じの残る側板
W125	容器	円形曲物			Ⅰ区	SX50						
第143図												
W126	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	SD16	第1層	17.2	17.2	0.59	柾目	紐
W127	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	G15	第10層	17.4	17.4	0.63	柾目	紐
W128	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	SX45		17.4	9.9	0.62	板目	紐
W129	容器	円形曲物		スギ	Ⅳ区	C19	5C層	17.2	17.2	0.58	柾目	紐
W130	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	SX50		17.6	17.6	0.66	柾目	紐
W131	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	SD16	2層	14.0	13.4	0.46	柾目	紐
W132	容器	円形曲物			Ⅰ区		9層	17.8	4.8	0.71	柾目	「上」刻書
W133	容器	円形曲物		スギ							柾目	紐
第144図												
W134	容器	円形曲物		ヒノキ属	Ⅰ区	SX16		18.2	18.2	0.49	柾目	紐
W135	容器	円形曲物		スギ	Ⅳ区	A20	7層	17.8	9.5	0.40	柾目	紐
W136	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	D15		17.6	17.6	0.69	柾目	紐
W137	容器	円形曲物		スギ	Ⅰ区	F16	10層	18.0	18.0	0.61	柾目	紐
第145図												
W138	紡織具	糸巻	横木	ヒノキ属	Ⅰ区	排土中		9.5	2.0	1.0	柾目	
W139	紡織具	糸巻	横木	ヒノキ属	Ⅰ区	G16	10層	11.0	3.0	1.5	板目	
W140	紡織具	糸巻	横木	カヤ属	Ⅰ区	SD16		11.0	2.5	1.0	板目	
W141	紡織具	糸巻	枠木		Ⅰ区	E15	8層	14.0	2.0	1.0	割材削り出し	
W142	紡織具	糸巻	枠木		Ⅳ区	A21	7層	16.0	2.2	1.0		
W143	紡織具	糸巻	枠木	スギ	Ⅰ区	SX50		20.0	1.5	1.0	割材削り出し	
W144	紡織具	糸巻	枠木	モミ	Ⅳ区	A19	5B層	21.5	2.0	2.0		
W145	紡織具	糸巻	枠木	モミ属	Ⅰ区	SX50		25.0	1.7	1.2	割材削り出し	
W146	紡織具	糸巻	枠木	ヒノキ属	Ⅰ区	D16		25.0	1.6	1.2	割材削り出し	

第50表　木製品　観察表⑤

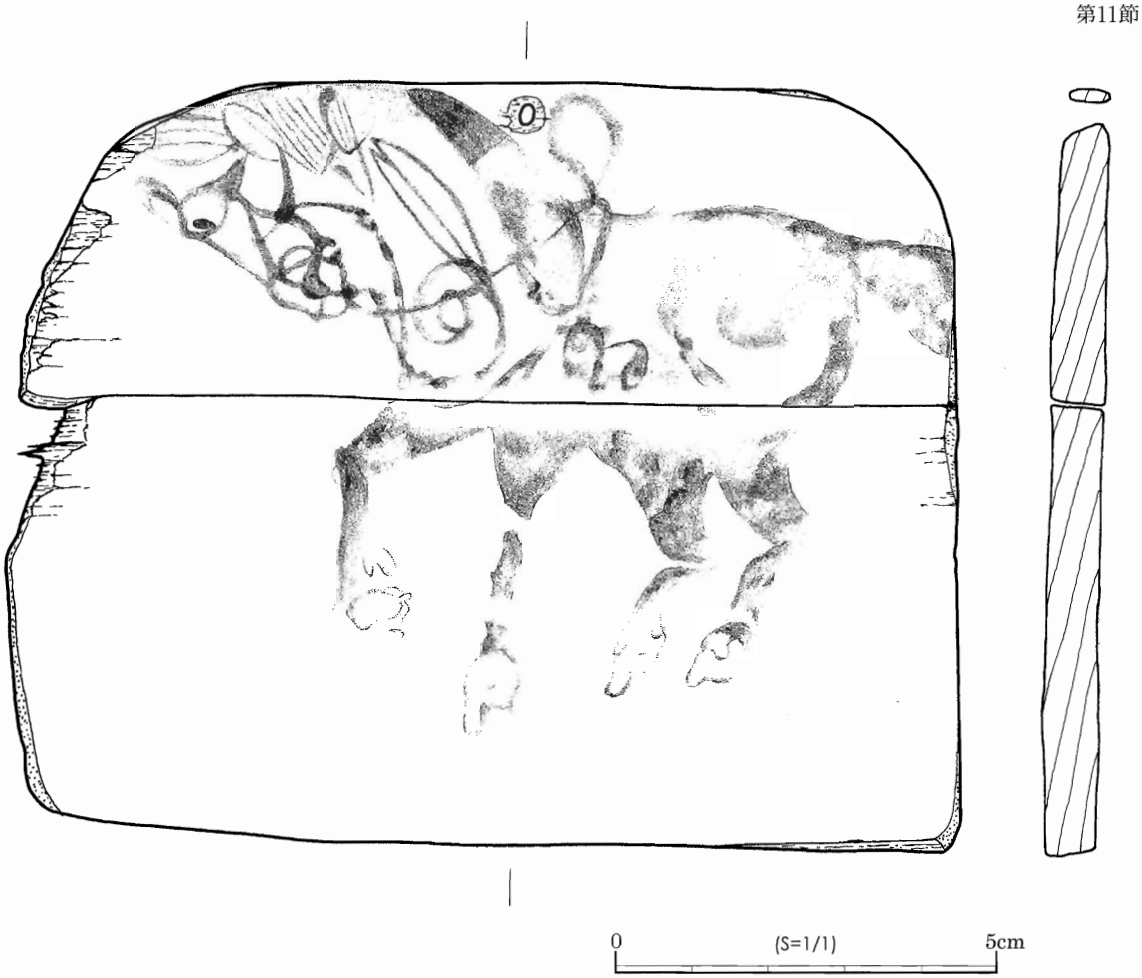
掲載番号	大別	名称	部位ほか	樹種	調査区	グリッド	層位	法量(長さ・幅・厚み) cm			木取り	備考
第146図												
W147	不明品	棒状		スギ	Ⅰ区	SX16		19.0	2.0	2.0	割材削り出し	
W148	紡織具	整経具	糸掛	スギ	Ⅰ区	SB05		19.0	2.5	2.0	割材削り出し	
W149	紡織具	桙	支え木	スギ	Ⅰ区	F15	9層	16.0	3.0	2.5	割材削り出し	
W150	紡織具	綛かけ	軸材	スギ	Ⅰ区	D16	34層	12.0	4.2	2.5	割材削り出し	
W151	不明品	棒状			Ⅰ区	F17	第11層	27.5	径1.5		割材削り出し	
W152	紡織具	織機	構造部材	スギ	Ⅰ区	北タメマス		46.0	8.0	3.0		
第147図												
W153	農具	編具	木錘	クワ属	Ⅰ区	E14	9層	9.0	2.0	2.0	丸太材	径2cmの丸太削り出し、基部は周囲から切り込み後に折り、樹皮残る
W154	農具	編具	木錘	サカキ	Ⅳ区		6層	9.0	3.0	2.0	丸太材	腐食劣化はげしい
W155	農具？	編具？	木錘？	ウツギ属	Ⅳ区	Z21	6層	12.3	1.8	1.8	丸太材	径1．9cmの丸太材削り出し、芯抜けによる空洞
W156	農具	編具	木錘	イチイ属	Ⅰ区	F15	8層	13.0	3.5	3.0	丸太材	径3.3cmの丸太削り出し、樹皮残る
W157	農具	編具	木錘		Ⅳ区		6層	13.0	3.0	2.0	丸太材	径3.4×2.9cmの丸太材削り出し、樹皮残る
W158	農具	編具	木錘		Ⅳ区	A19	6層	13.5	4.0	2.5	半裁削り出し	
W159	農具	編具	木錘	ニレ属	Ⅰ区	D16	9層	16.5	3.5	3.5	丸太材	芯抜けによる空洞貫通する
W160	農具	編具	木錘	クワ属	Ⅰ区	SB05 トレンチ		17.0			丸太材	径3．0cmの丸太材削り出し、外表に近い
W161	農具	編具	木錘	クワ属	Ⅰ区	F17	11層	18.0	4.0	3.0	丸太材	先端部に焼け
W162	農具	編具	木錘	サカキ	Ⅳ区	SK02 基盤層		20.5	4.0	4.0	丸太材	径4．2cmの丸太材削り出し、樹皮残る
W163	農具	編具	木錘	シキミ	Ⅰ区	G13	9層	20.0	7.0	5.0	丸太材	扁平な丸太材削り出し
W164	農具	編具	木錘	コナラ属 (アカガシ亜属)	Ⅰ区	ⅠD区 E14	35層	8.0	7.0	2～0.7		
W165	農具？	編具？	木錘？		Ⅰ区	SX10		16.0	2.5	2.0	割材削り出し	
W166	農具	編具	木錘	モミ属	Ⅰ区	ⅠD区 E溝ベルト		19.5	径5		丸太材	径5cmの丸太材削り出し、外表に近い。
第148図												
W167	工具	工具柄		ヒノキ属	Ⅰ区	G15	10層	17.0	4.0	2.0	割材削り出し	
W168	工具	鎌柄			Ⅰ区	G15	10層	15.0	2.5	2.5	芯持削り出し	
W169	工具	刷毛		ヒノキ属	Ⅰ区	SD06		20.9	2.8	7.9	板目	
W170	食事具	杓子形木製品			Ⅰ区	E15	第10層	15.5	2.5～0.8	1.2～0.4		
W171	漁撈具	浮子			Ⅰ区	ⅠD区 E14	34層	20.5	6.5	0.8	板目	
W172	発火具	火鑽臼	曲物底板	スギ	Ⅳ区	SD01		20.0	9.0	1.0	柾目	釘結合、用途不明の穿孔3箇所、刀子使用痕多数
W173	発火具	火鑽臼		スギ	Ⅳ区	C19	5C層	40.0	5.0	2.0	柾目	端部は粗い切り折り、未使用の切り欠き３つ
W174	発火具	火鑽臼		スギ	Ⅳ区		5C層	41.0	6.0	3.0	柾目	年輪幅広い材、端部は粗く切り折り
第149図												
W175	農具	収穫具	竪杵	ヒサカキ属	Ⅰ区	SD16	1層	36 25.5	7.5 7	7.5 7		
W176	農具	収穫具	薄槌	サカキ	Ⅰ区	SX30	21層	19.8	6.0	4.0	丸太材	木口面は平滑に切断、表皮近く使用減り明瞭でない
W177	構造材	接合補助材	木栓	スギ	Ⅰ区	SD16-77		12.5	9.0	8.0		
W178	接合補助材	楔		スギ	Ⅳ区	SB03		12.0	3.0	2?0.2		
W179	接合補助材	楔			Ⅰ区	F10	第10層	8.0	4.0	1.5		
W180	接合補助材	楔			Ⅳ区	C19	5C層	18.0	4.0	2.8		
W181	構造材	建築材	端材		Ⅰ区	北壁	古代	3.5	4.5	2.5	割材削り出し	全面平滑な直方体
W182	構造材	建築材	端材		Ⅰ区	SD16-78		9.0	6.0	3.5		
W183	構造材	建築材	端材		Ⅰ区	F15	9層	14.0	5.0	2.5		
W184	構造材	建築材	端材		Ⅰ区	SX50		15.5	2.5	2.5	割材削り出し	
W185	構造材	建築材			Ⅰ区	D16	9層	21.0	4.0	4.0		
W186	構造材	器具材	枠材か	スギ	Ⅰ区	F15	10層	17.0	2.0	1.0	割材削り出し	一方の端部には小突起が作りつけられ、先端が欠ける。他方の端部は粗雑な穴がもうけられている。
W187	構造材	建築材	端材		Ⅰ区	D16		25.0	7.0	3.0		
W188	構造材	建築材	端材		Ⅰ区	S溝		6.0	4.0	1.0		

第51表　木製品　観察表⑥

掲載番号	大別	名称	部位ほか	樹種	調査区	グリッド	層位	法量(長さ・幅・厚み) cm			木取り	備考
第150図												
W189	構造材	建築材			Ⅰ区	ⅠD区N溝	10層以下	25.5	7.0	4.5	割材削り出し	工具の粗い削り残す、片側端部は平滑に切断
W190	構造材	器具材	軸受台		Ⅰ区	D14		19.0	9.0	3.0	半裁削り出し	
W191	構造材	建築材	束柱台か		Ⅰ区	D16	34層	20.0	11.0	8.0		
W192	構造材	建築材	水平構造材か		Ⅰ区	SB07		58.5	8.0	2.5		
W193	構造材	器具材			Ⅳ区	B19	5C層	38.5	3.0	3.5		
W194	構造材	器具材	軸受台	モクレン属	Ⅰ区	D16	9層	25.0	25.0	6.5		
W195	木樋			スギ	Ⅰ区	SD16周辺		62.0	10.0	6.0		
第151図												
W196	杭材				Ⅰ区	SX16		66.0	3.0	2.0		
W197	杭材				Ⅰ区	SX16C		55.0	6.5	1.5		
W198	杭材				Ⅰ区	S溝		54.5	2.5	2.0		
W199	杭材				Ⅰ区	SD06		52.0	4.0	3.5		
W200	杭材			スギ	Ⅰ区	SX16-A		64.0	3.0	1.5		
W201	杭材				Ⅰ区	SX16-A		44.0	3.5	2.5		
W202	杭材			スギ	Ⅰ区	E16		28.5	2.3	1.5		
W203	構造材	建築材	扉蹴放し材	スギ	Ⅰ区	ＳＸ16		130.0	20.0	6.0		
第152図												
W204	不明品	板状			Ⅰ区	F14	10層	14.0	3.1	6.0		
W205	不明品	板状			Ⅳ区	SD01杭		10.0	1.0	0.8		両面に刃物痕残る。曲物底板が破損したものとすれば、木取りが板目となる。
W206	不明品	棒状			Ⅰ区	SX50		11.0	1.0	1.0		
W207	不明品	棒状		スギ	Ⅳ区	A20	5C層	17.0	2.0	1.0		
W208	不明品	調整具か		スギ	Ⅰ区	SD16		17.0	2.0	1.0		完形
W209	不明品				Ⅰ区	F15	10層	11.0	2.0	0.8		片端斜めの切断面、片端は破面
W210	不明品				Ⅳ区	B20	5C層	13.8	2.2	1.2		
W211	不明品				Ⅳ区		5C層	18.0	5.52	1.0		
W212	不明品	板状			Ⅰ区	ⅠD区D16		12.0		0.3		
W213	不明品	調整具か		コナラ属(アカガシ亜属)	Ⅰ区	F15	11層	11.0	3.5	1.5		一端が欠損するが、破面の状況から方孔があったとみられる。
W214	不明品	板状		クワ属	Ⅰ区	G14		9.0	4.0	1.0		
W215	不明品				Ⅰ区	F14	9層	8.0	2.0	2.0		
W216	不明品	木栓状		スギ	Ⅰ区	南壁		7.0		3?2		孔内面は焼け、熱した棒状工具によって穿孔
W217	不明品	棒状			Ⅰ区	F15	10層	29.0	4.0	1.5		
W218	不明品	棒状		スギ	Ⅰ区	SX50		20.0	2.0	1.0		
W219	不明品	棒状			Ⅳ区	Z19	6層	18.8	1.4	1.0		
W220	不明品	棒状			Ⅰ区	G15	10層	29.0	1.5	0.5		
W221	不明品	棒状			Ⅳ区	Z19北壁溝	7層	27.0	1.7	1.7		
W222	不明品	棒状		スギ	Ⅰ区	D16		31.0	1.4	0.8		
W223	不明品	棒状		スギ	Ⅰ区	ⅠD区SX50		41.0	1.5	0.5		

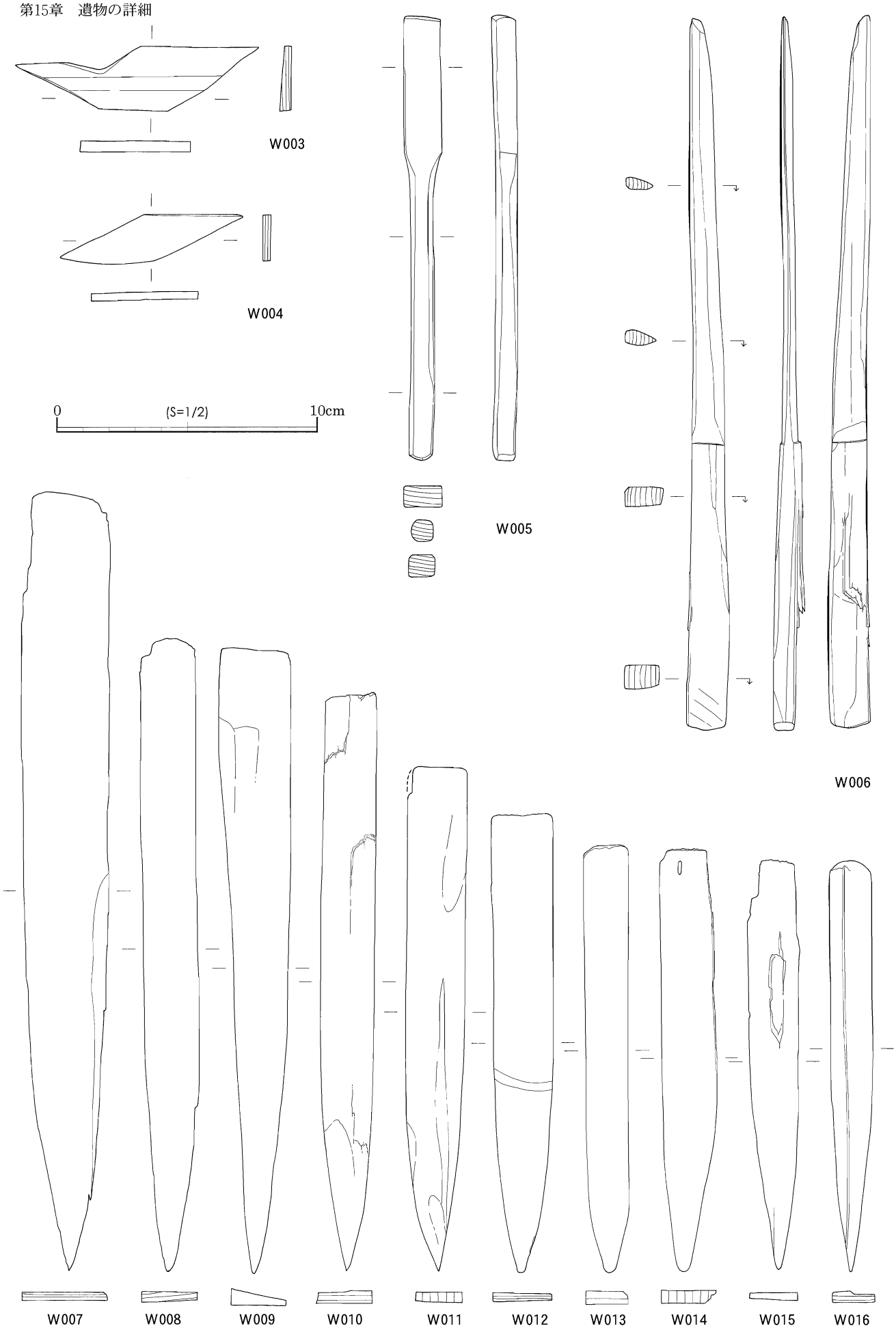
第129図　木製品実測図①（神像）

第130図　木製品実測図②（神像）

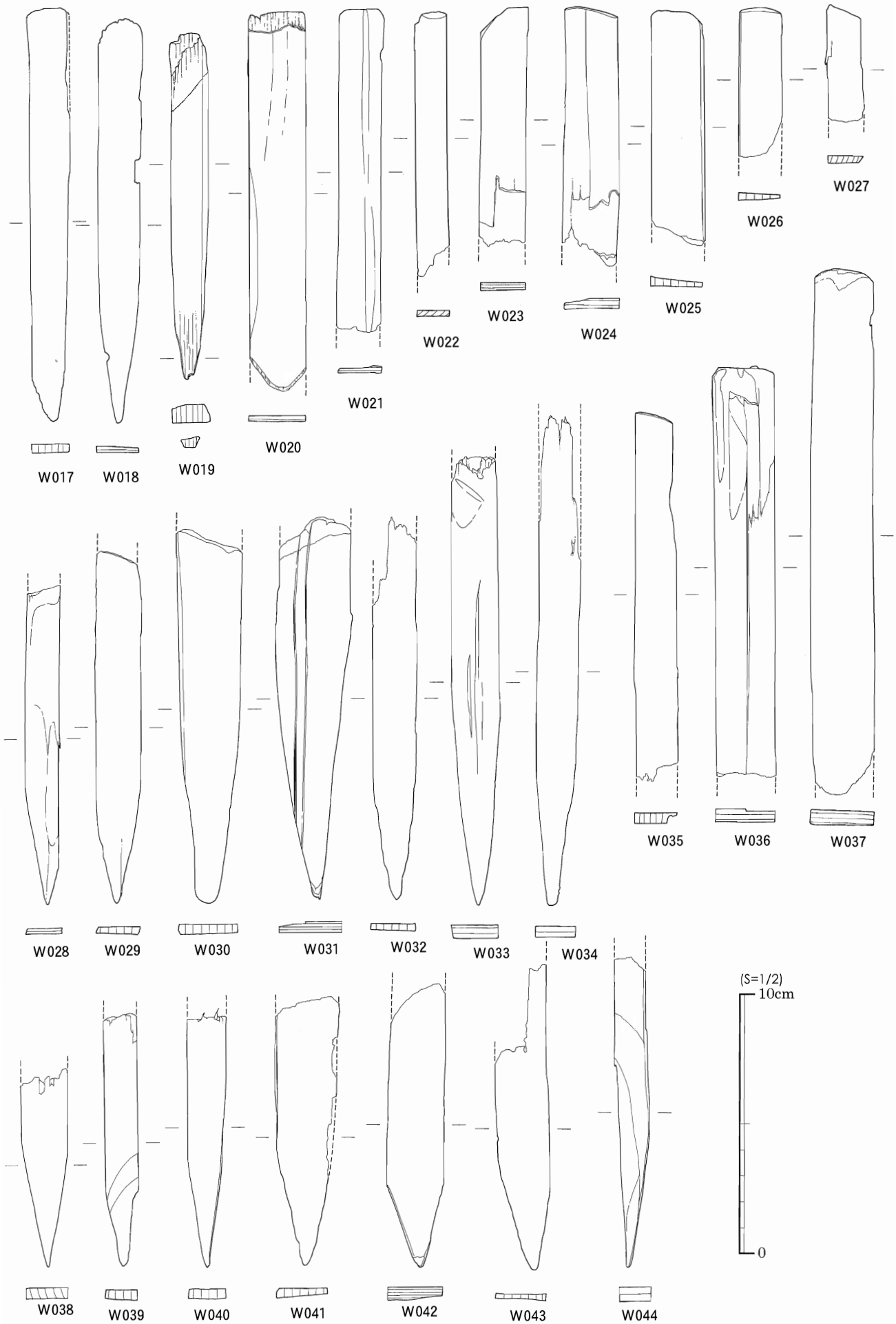


W002

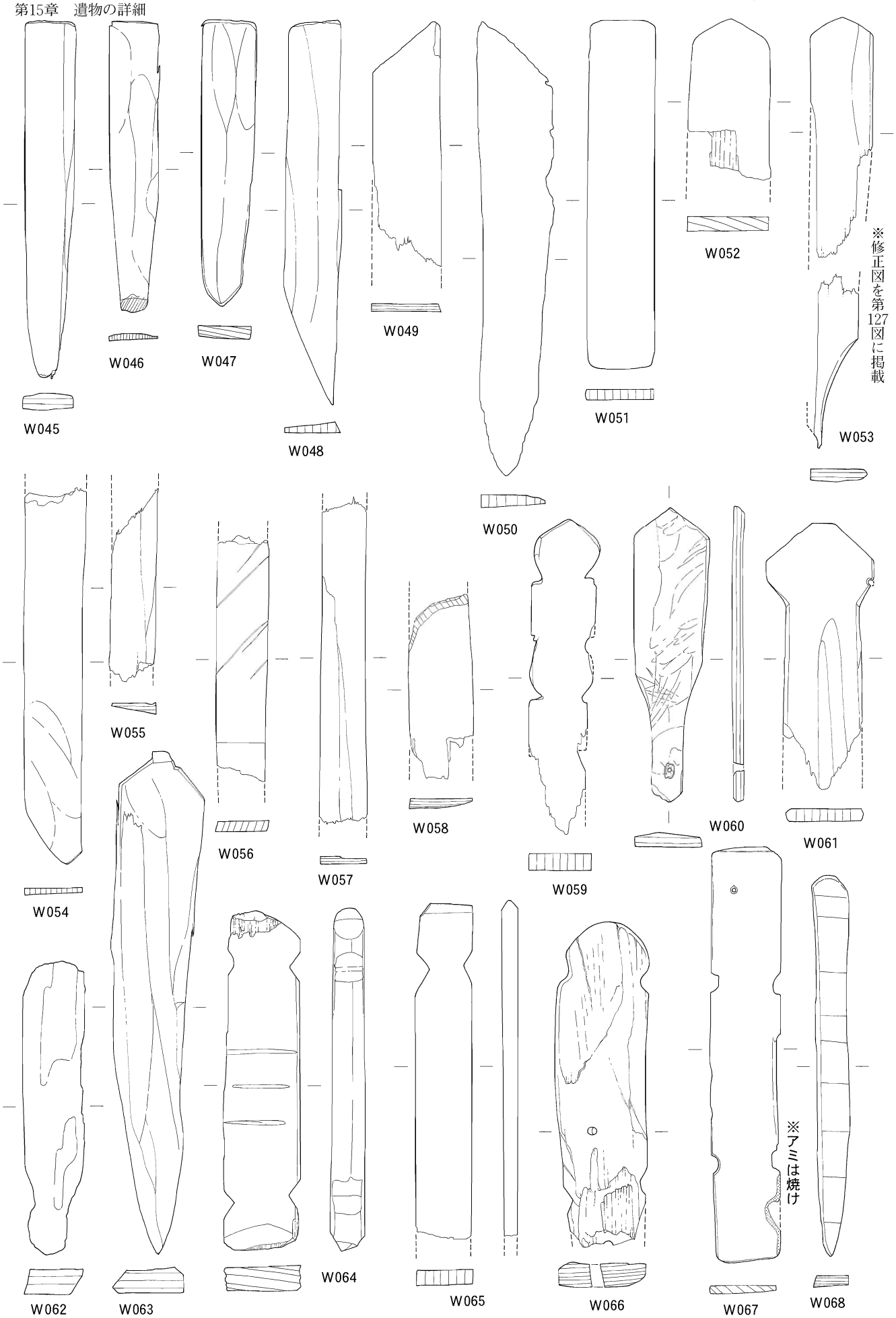
第131図　木製品実測図③（絵馬）



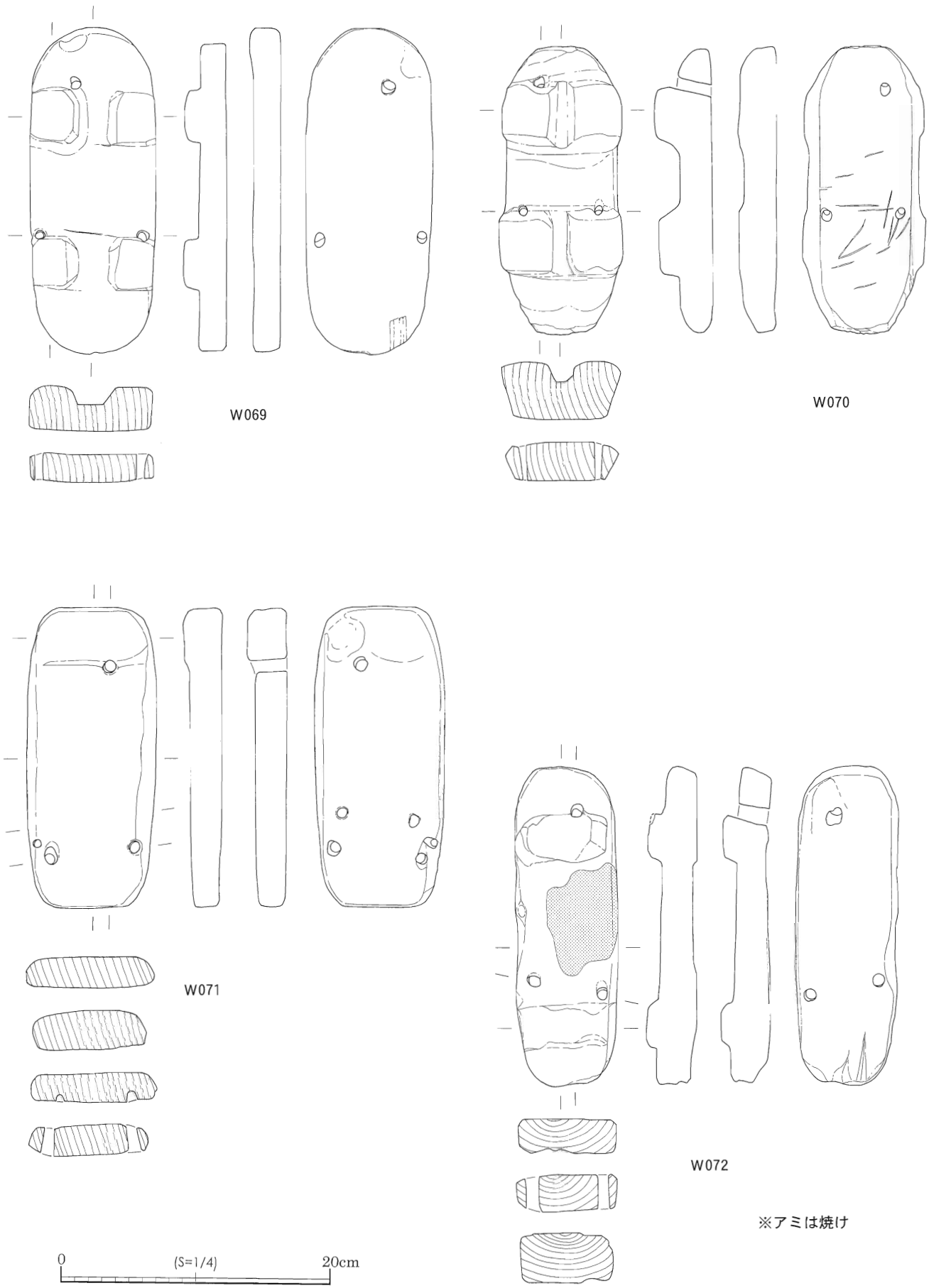
第132図　木製品実測図④（木簡状木製品）



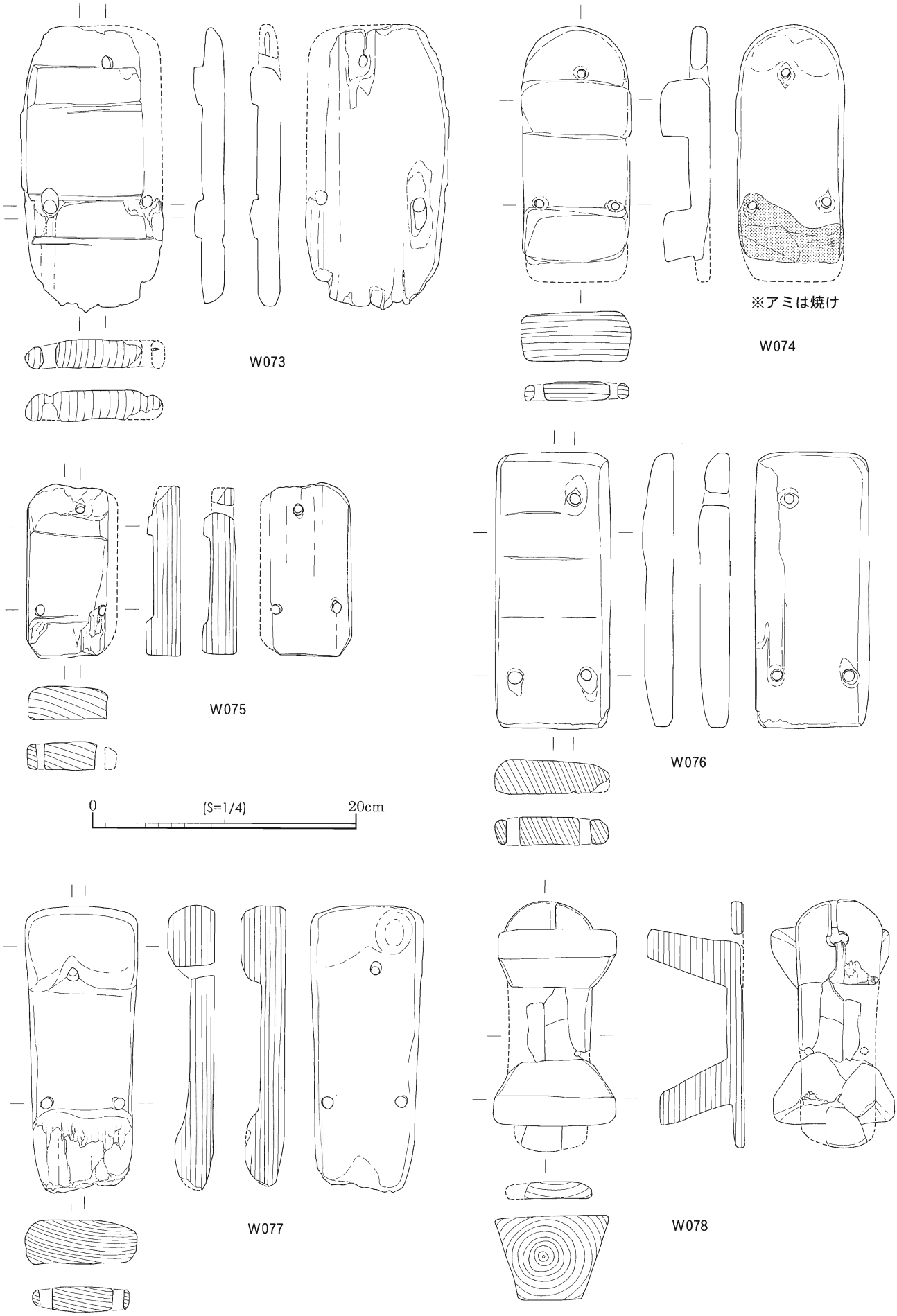
第133図　木製品実測図⑤（木簡状木製品）



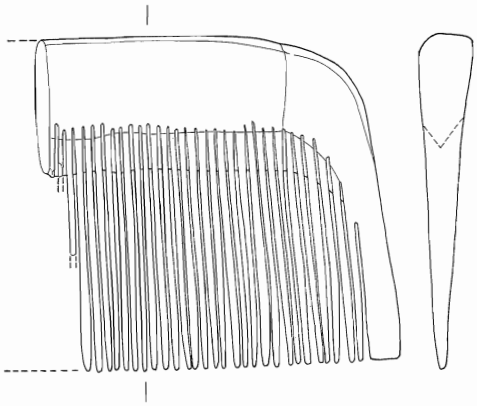
第134図　木製品実測図⑥（木簡状木製品）

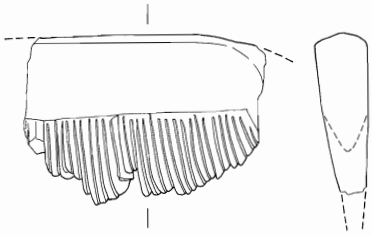


第135図　木製品実測図⑦（下駄）

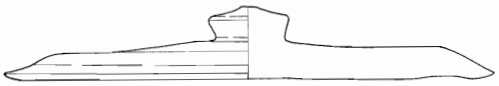


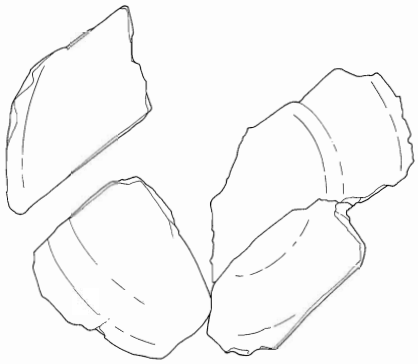
第136図　木製品実測図⑧（下駄）

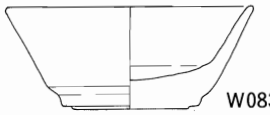


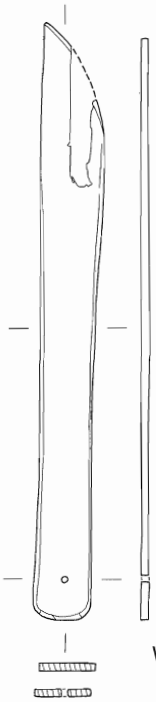


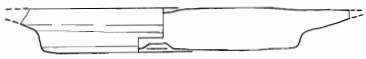
0　(S=1/1)　5cm

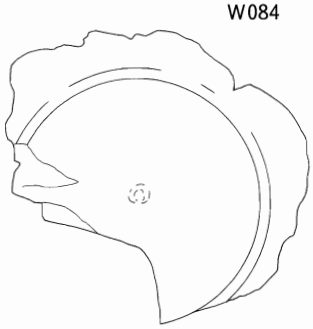


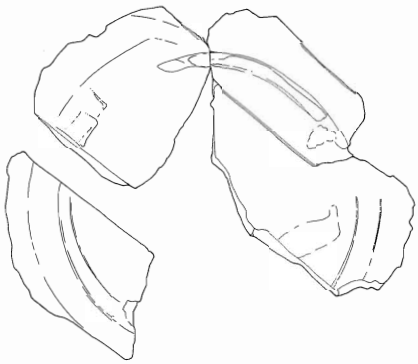


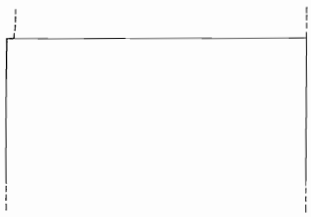






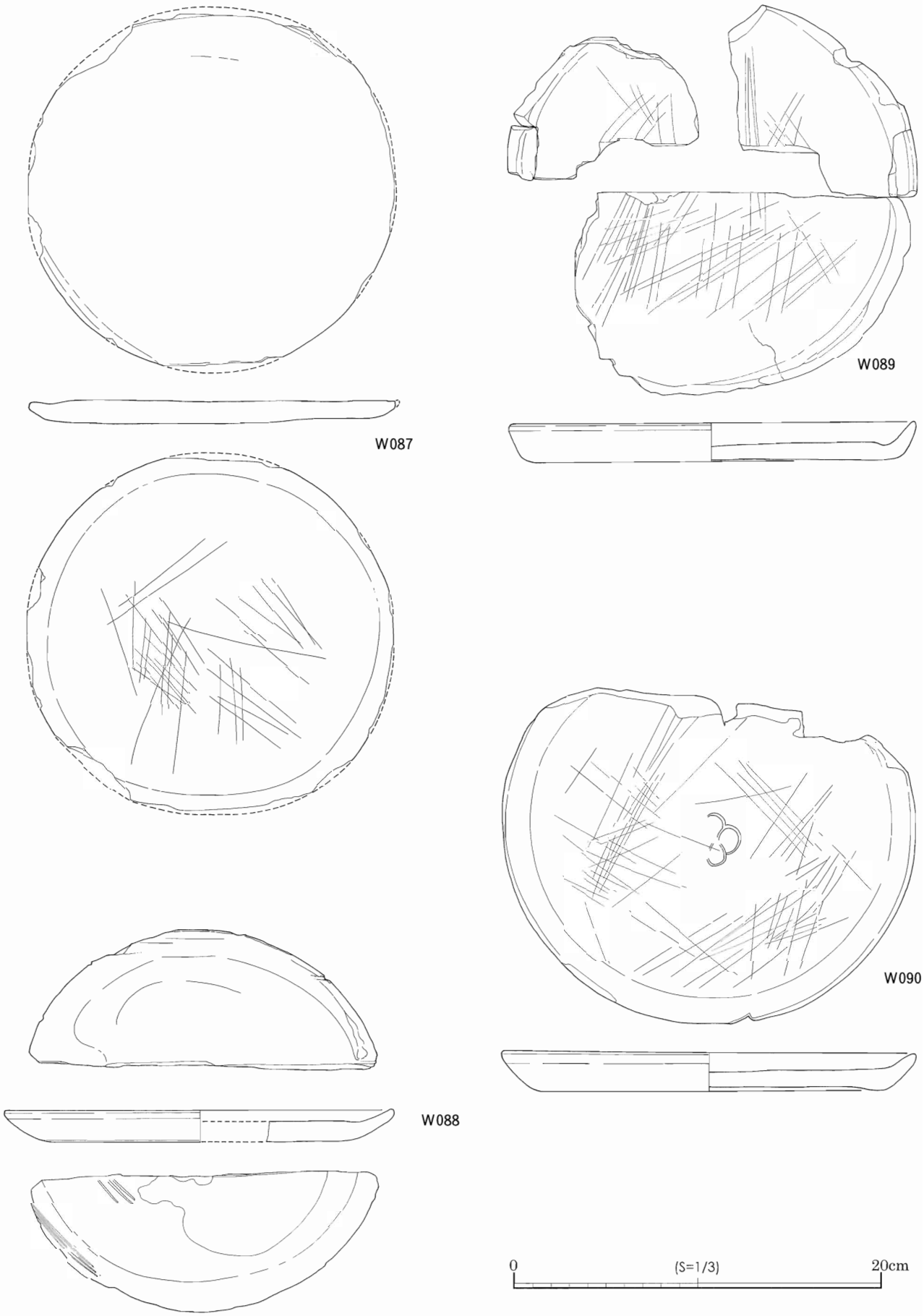




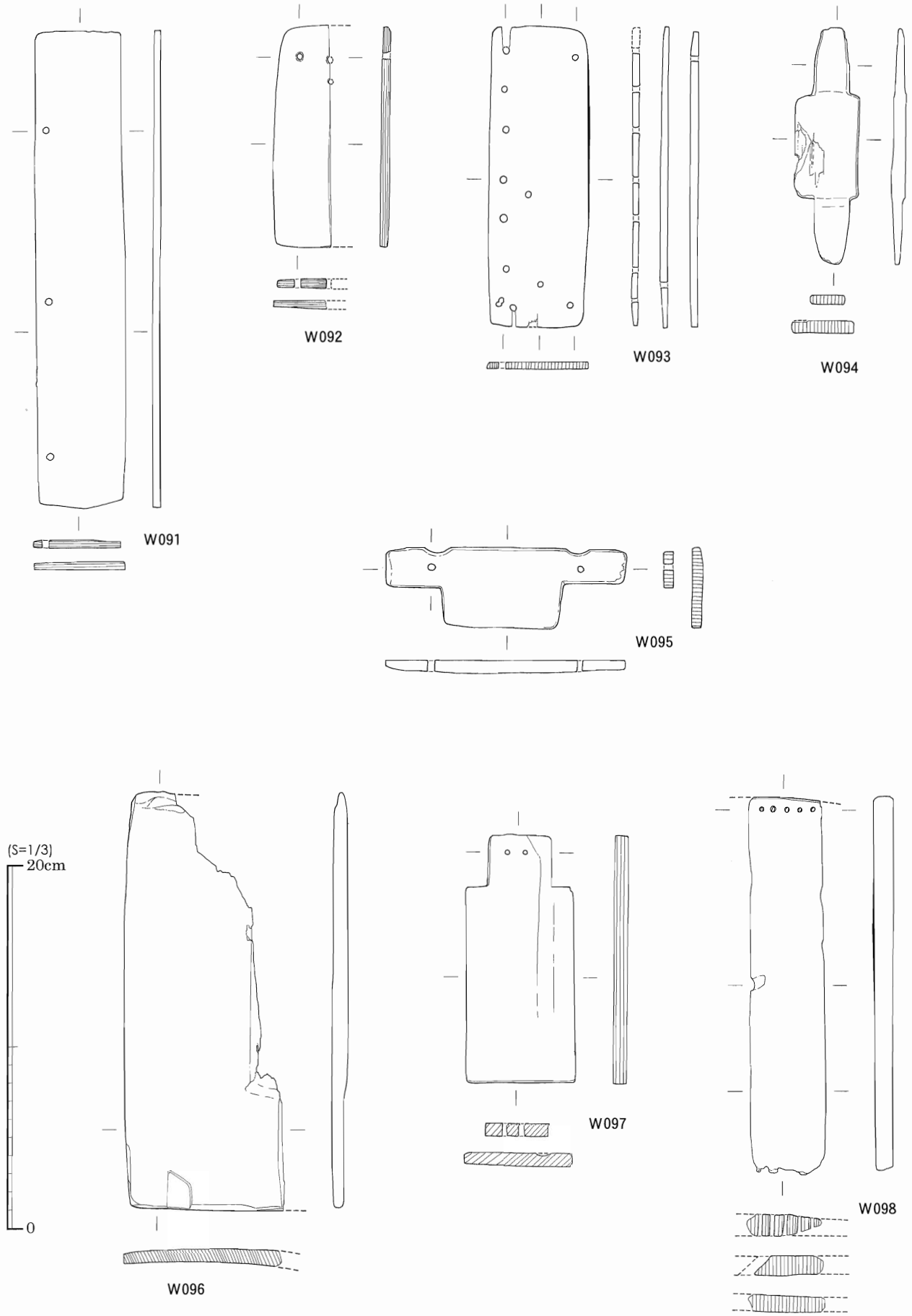


0　(S=1/3)　10cm

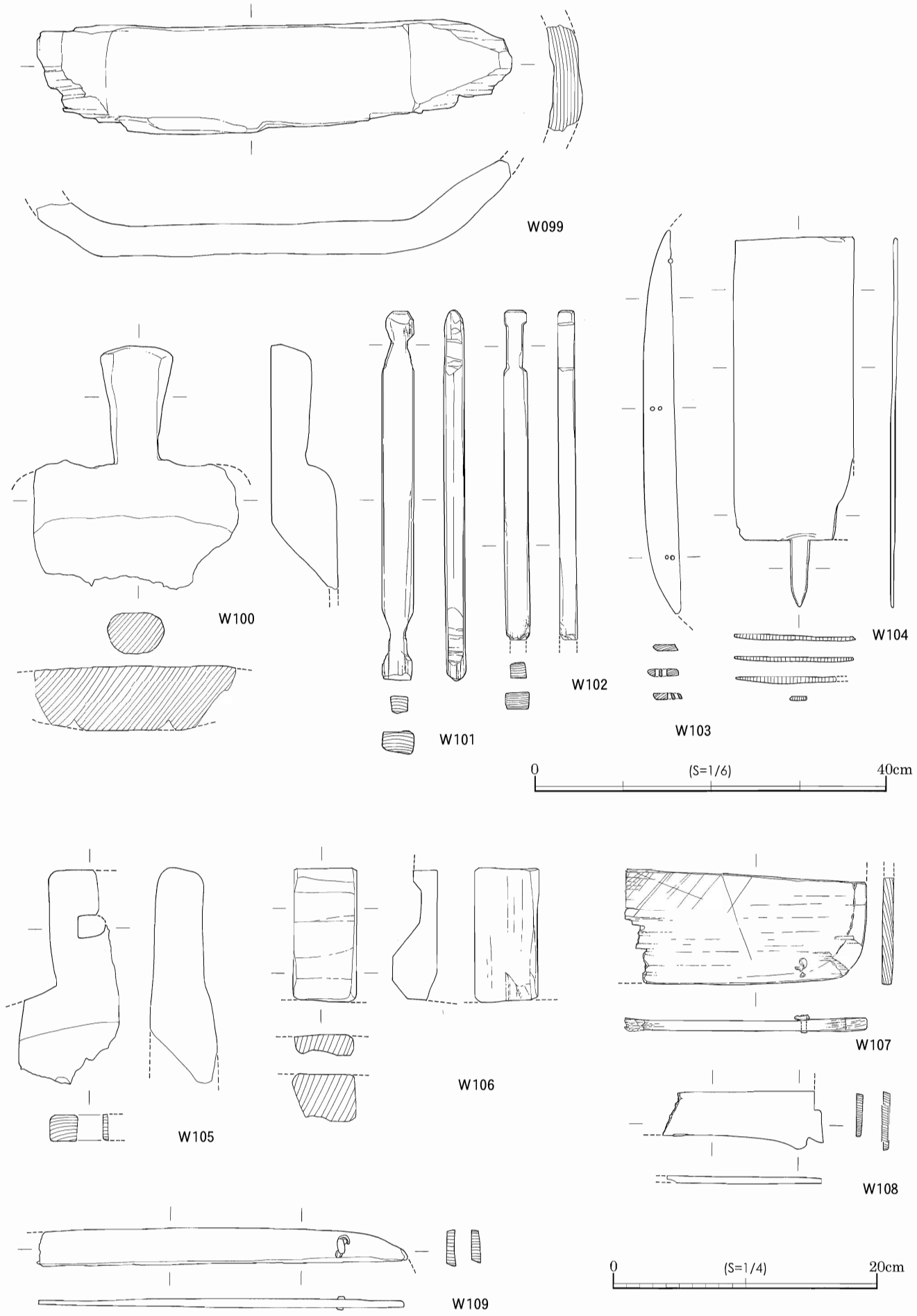
第137図　木製品実測図⑨（櫛・檜扇・挽物）



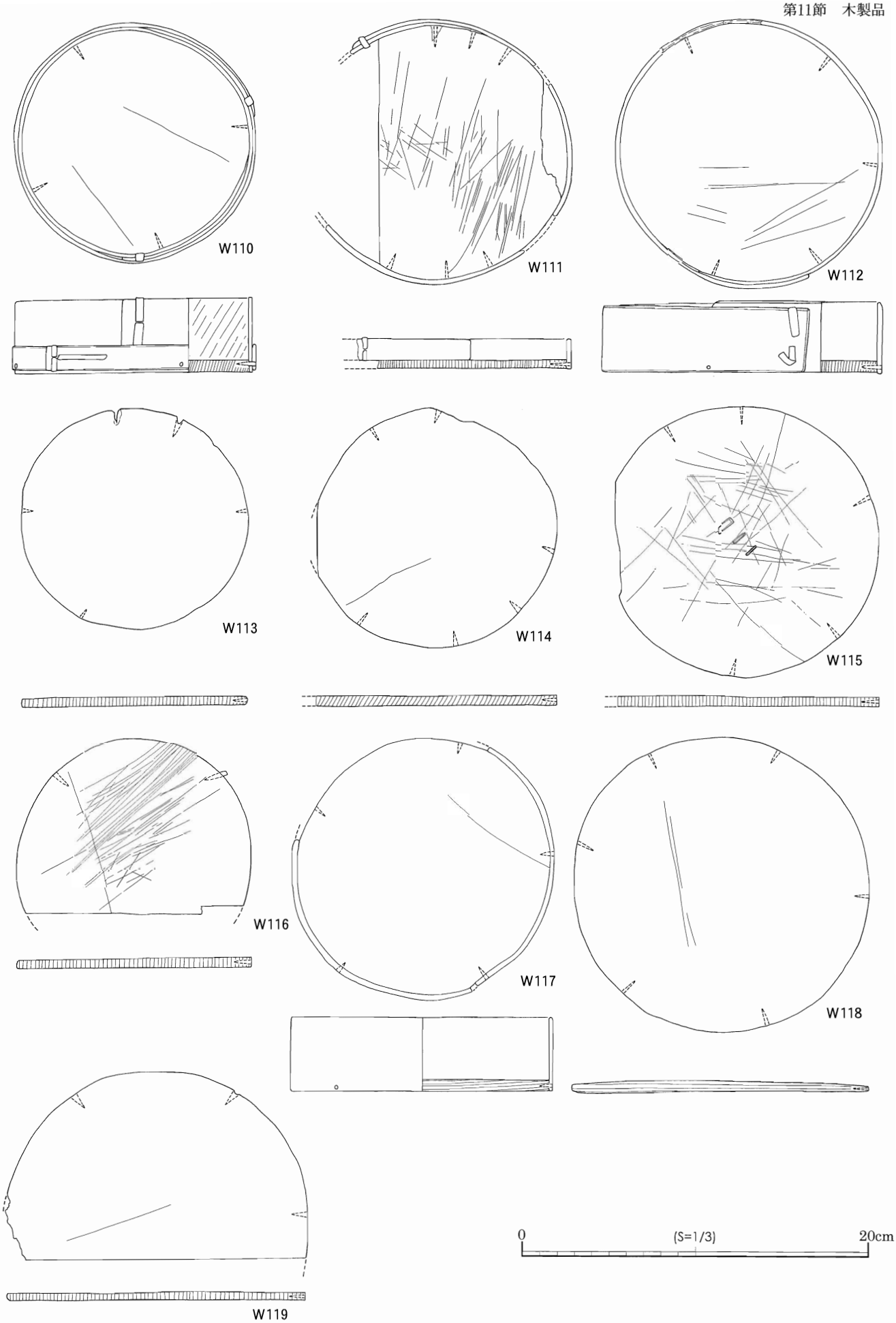
第138図　木製品実測図⑩（挽物）



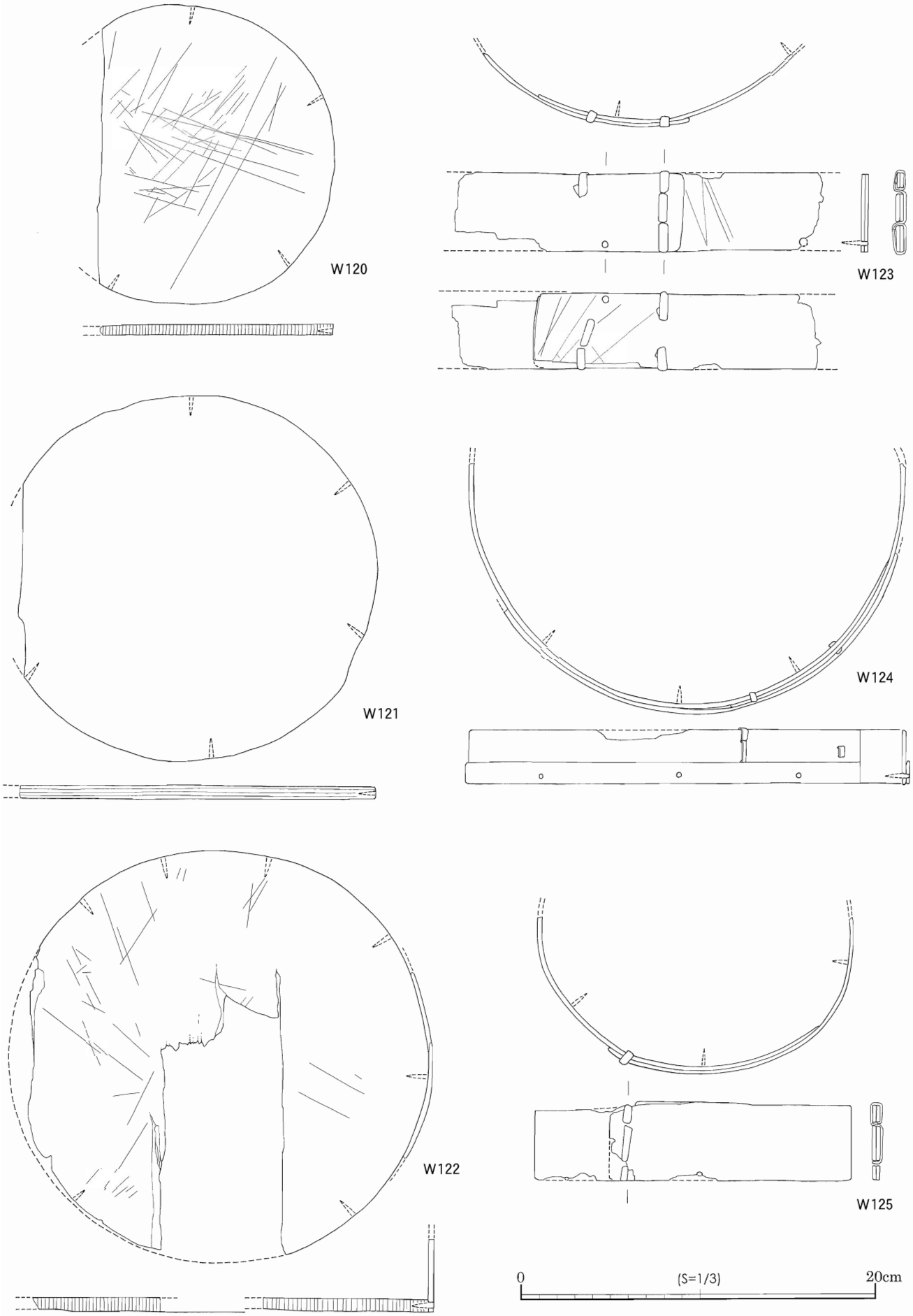
第139図　木製品実測図⑪（指物）



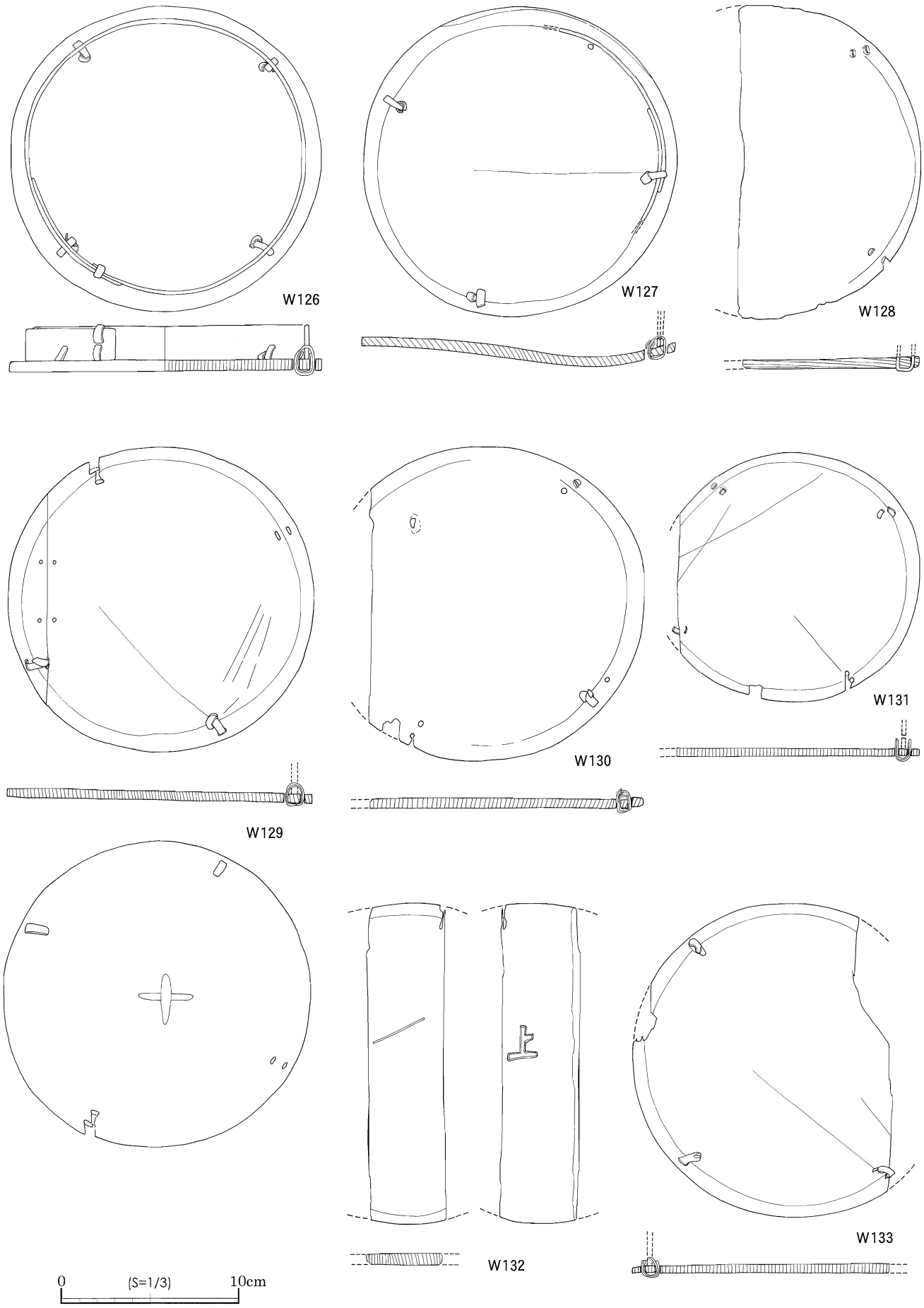
第140図　木製品実測図⑫（刳物・曲物）



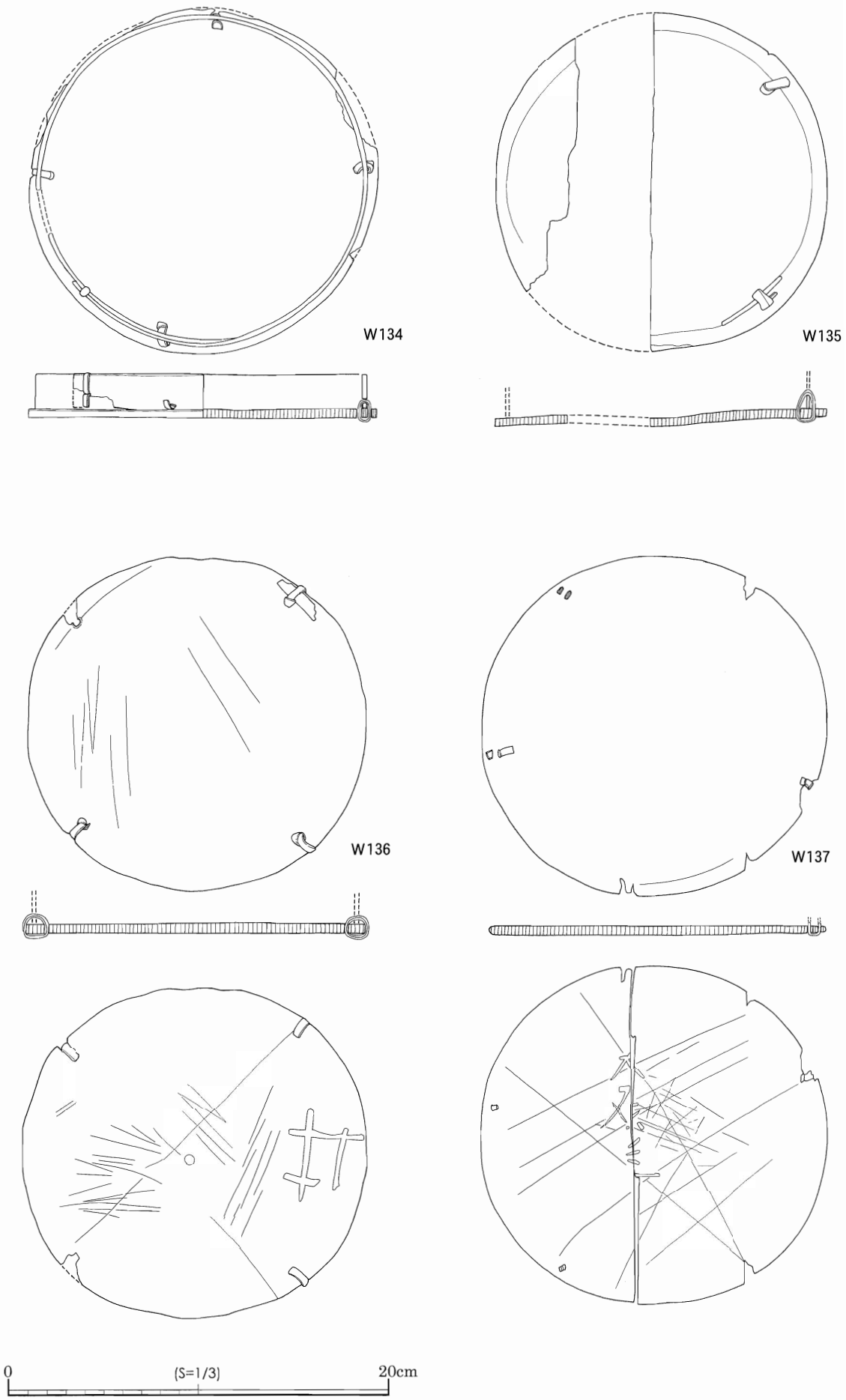
第141図　木製品実測図⑬（円形曲物）



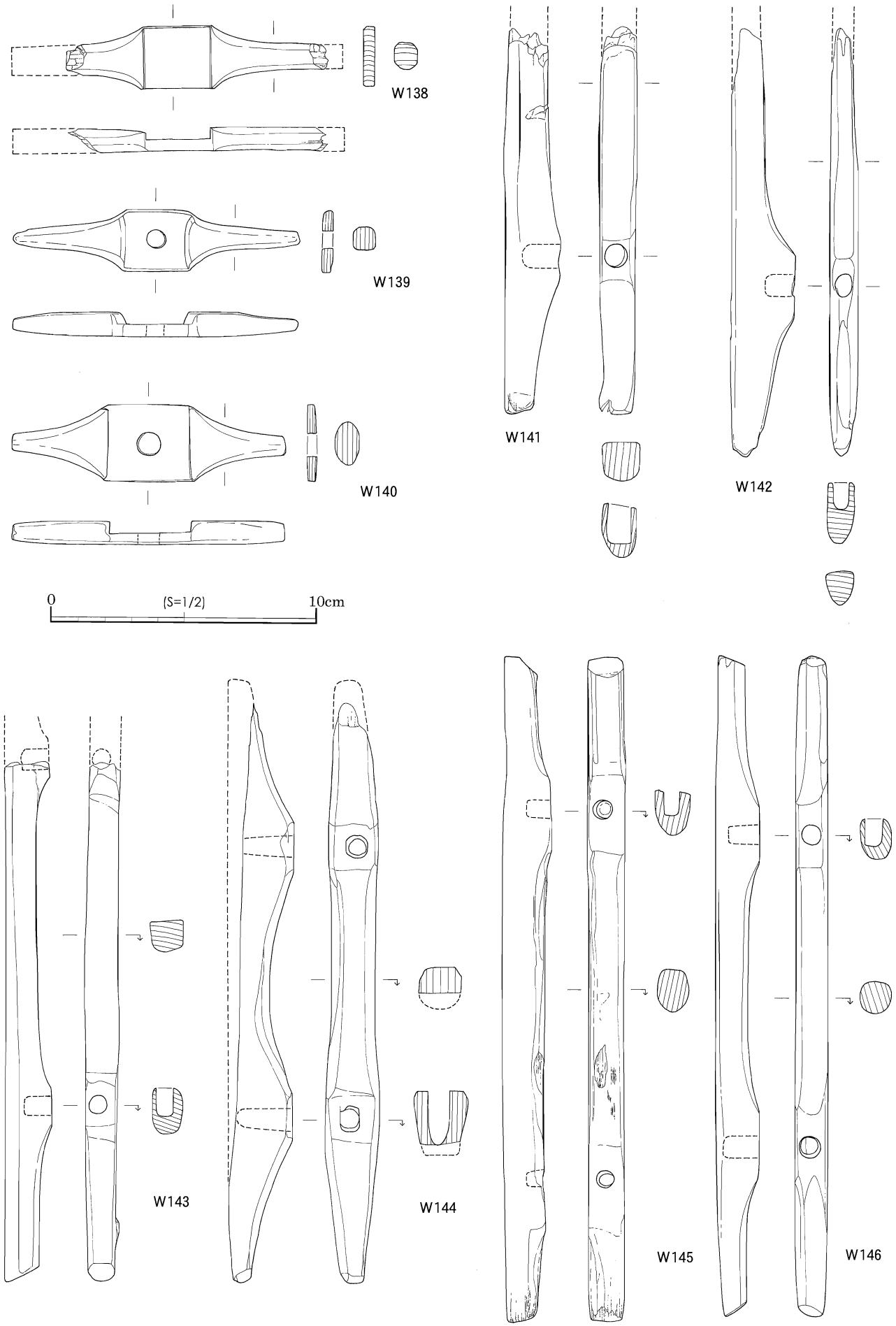
第142図　木製品実測図⑭（円形曲物）



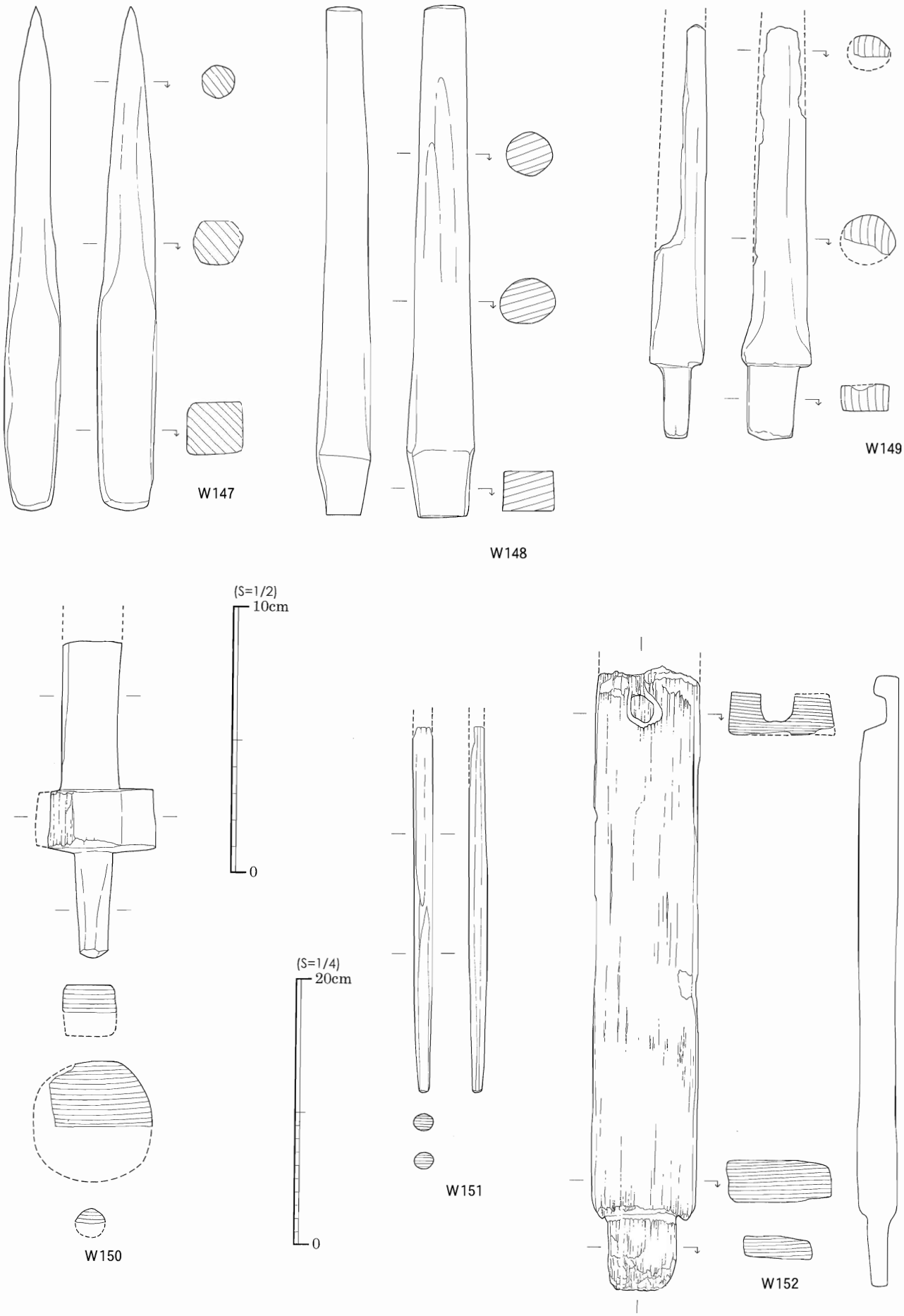
第143図　木製品実測図⑮（円形曲物）



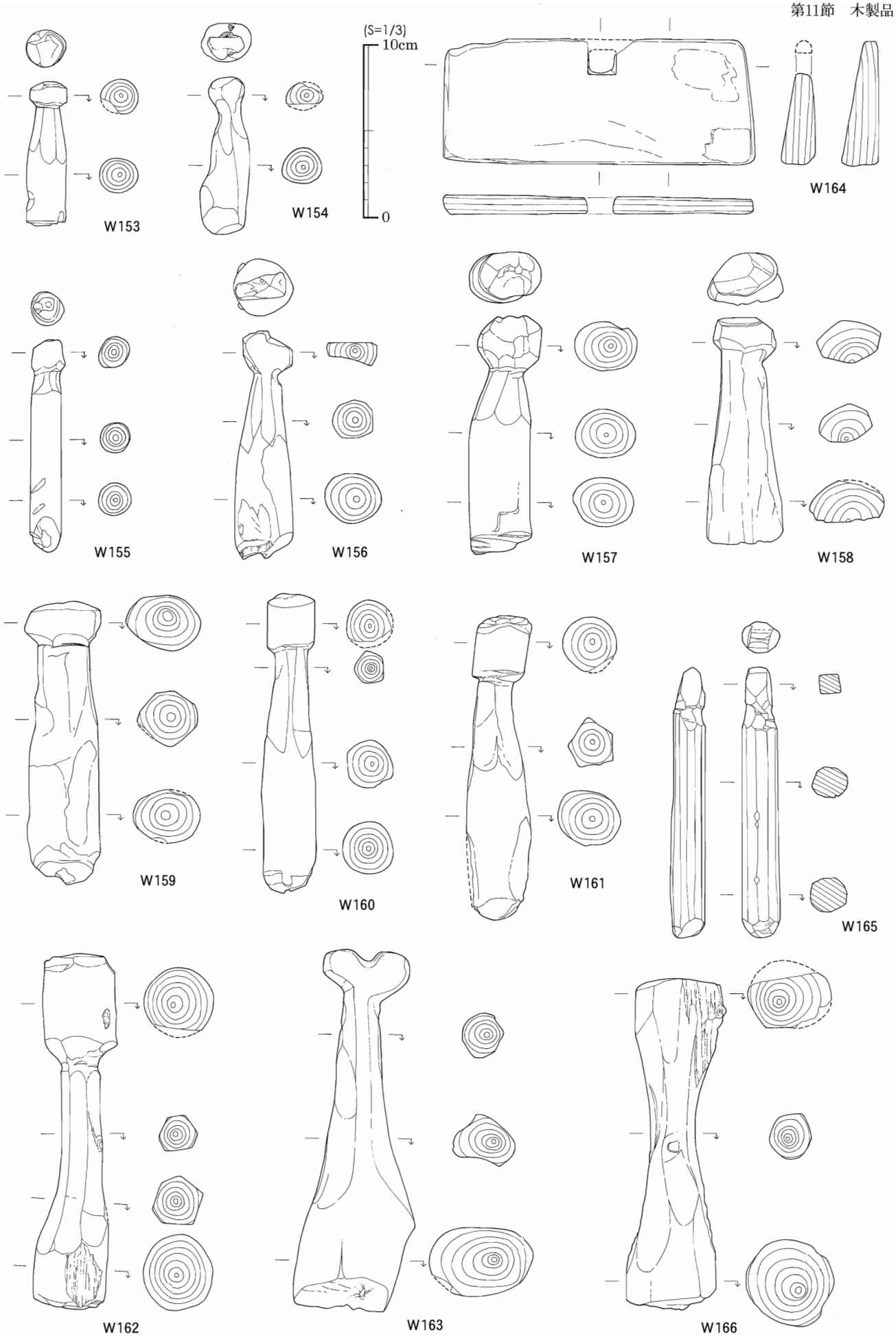
第144図　木製品実測図⑯（円形曲物）



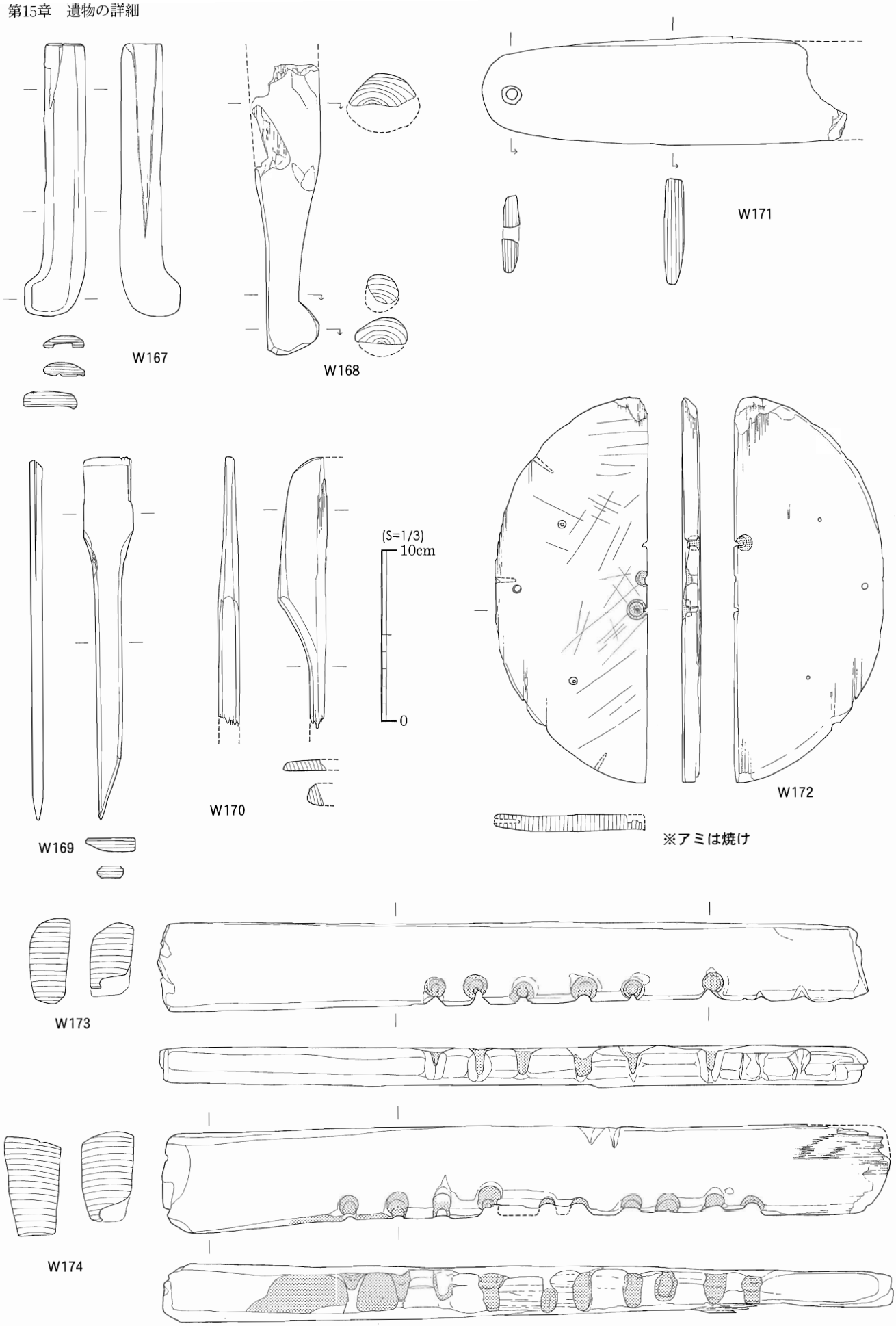
第145図　木製品実測図⑰（糸巻）



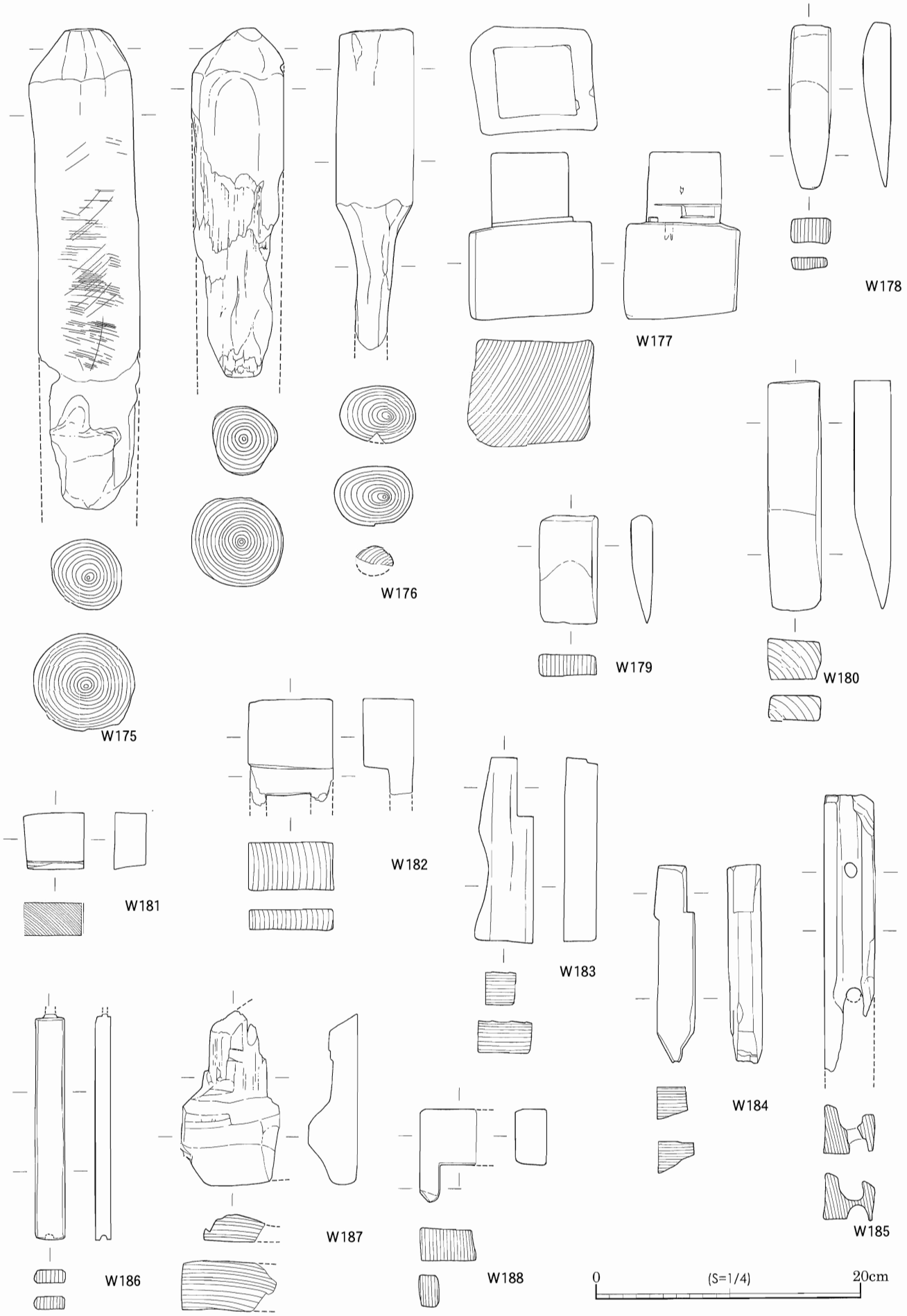
第146図　木製品実測図⑱（紡織具）



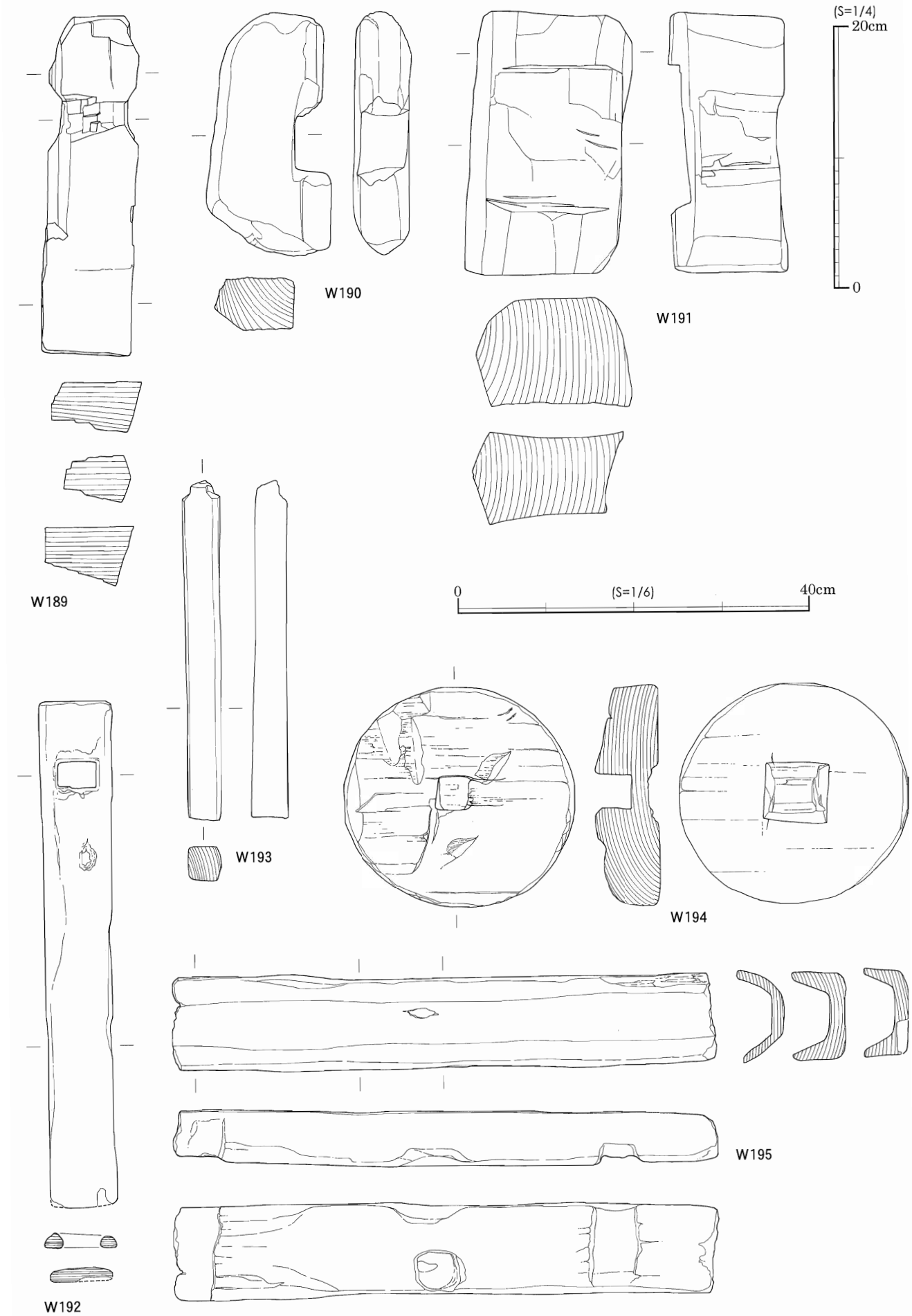
第147図　木製品実測図⑲（木錘）



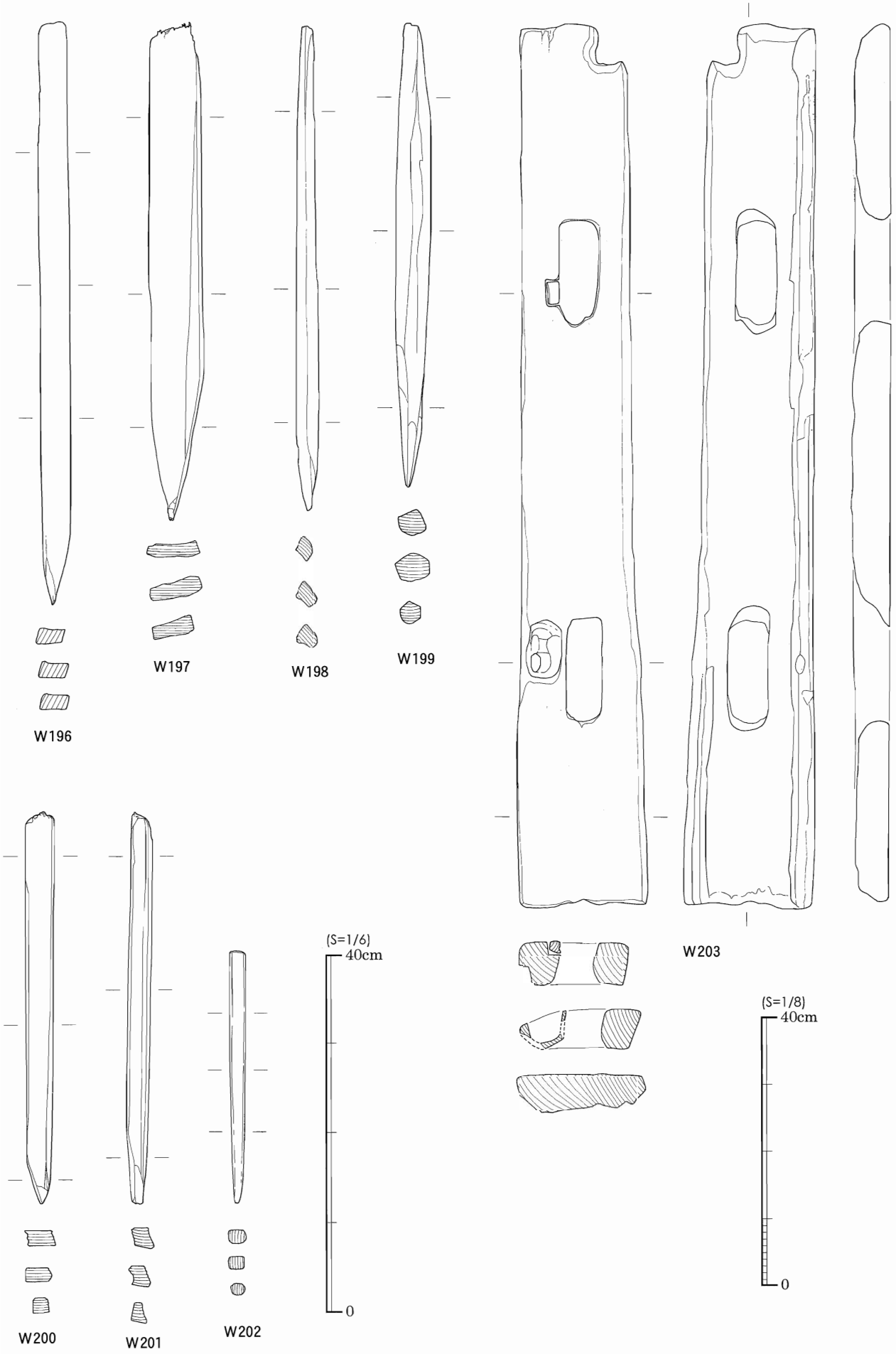
第148図　木製品実測図⑳（工具・食事具・漁撈具・火鑽臼）



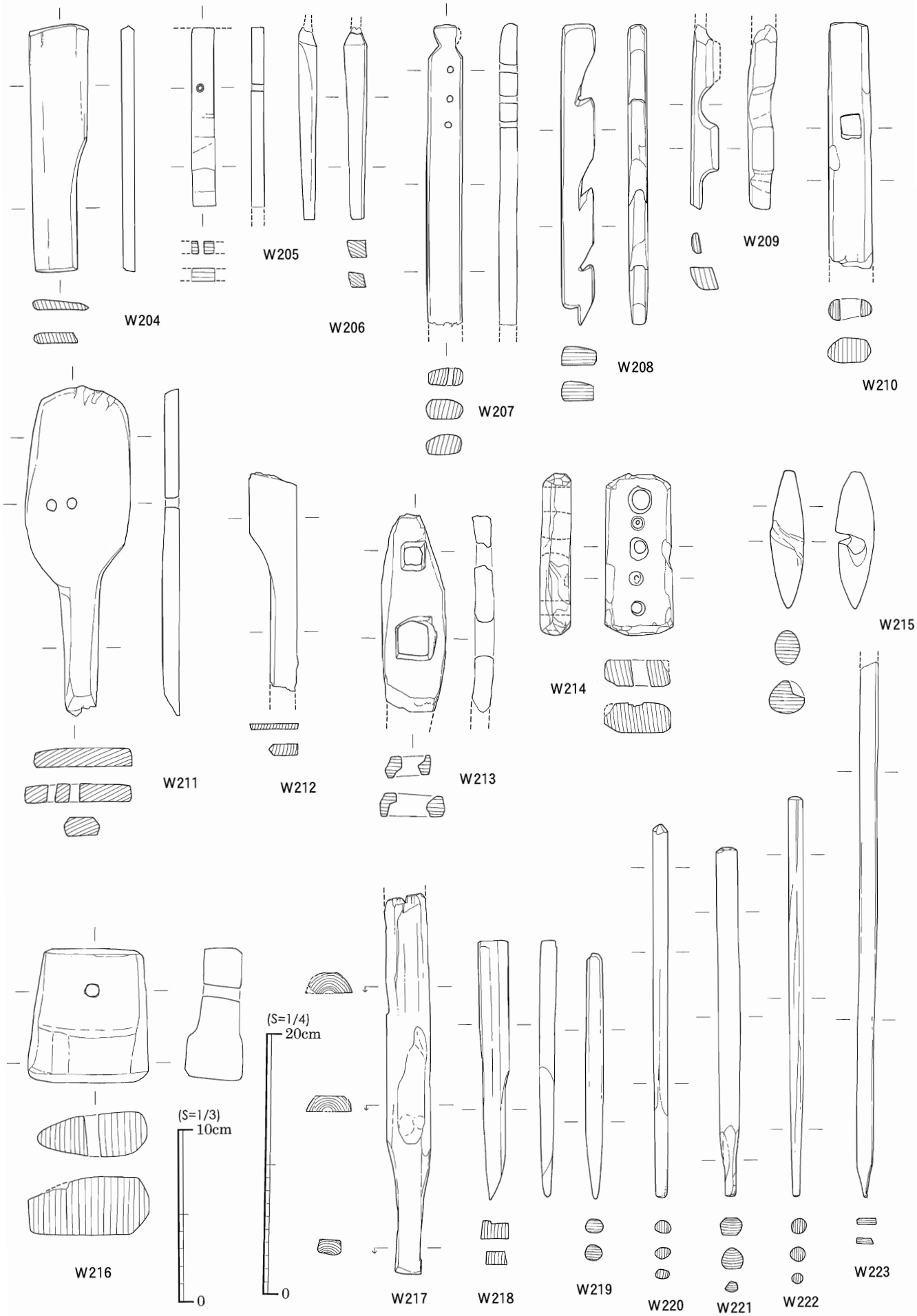
第149図　木製品実測図㉑（構造材・接合補助材）



第150図　木製品実測図㉒（構造材）



第151図　木製品実測図㉓（杭材・扉蹴放材）



第152図　木製品実測図㉔（不明品）

写真図版一六〇　木製品／祭祀具／神像

（W001）

写真図版一六一　木製品／祭祀具／神像

左側面

背面

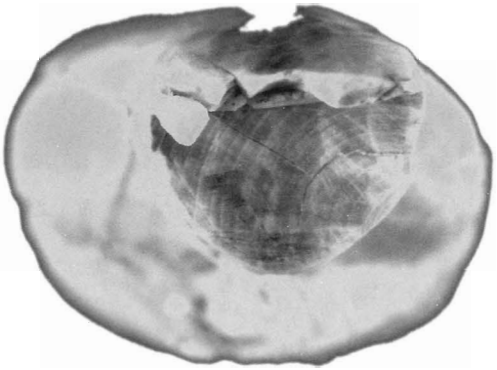
右側面

赤外線写真・正面

赤外線写真・背面

写真図版一六二　木製品／祭祀具／神像

底面（上が正面）



赤外線写真・上面

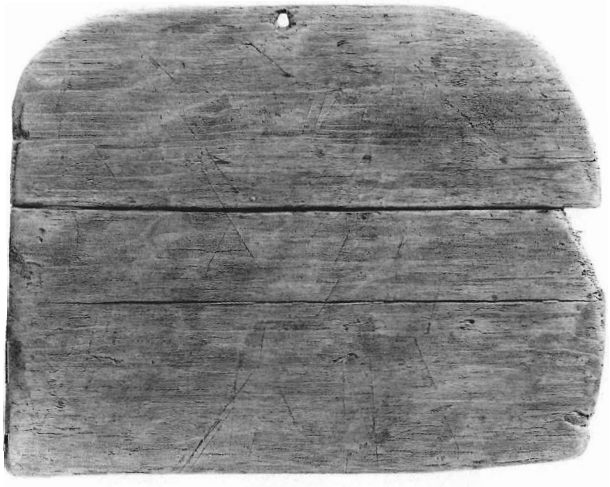
（W001）

写真図版一六三　木製品／祭祀具／絵馬

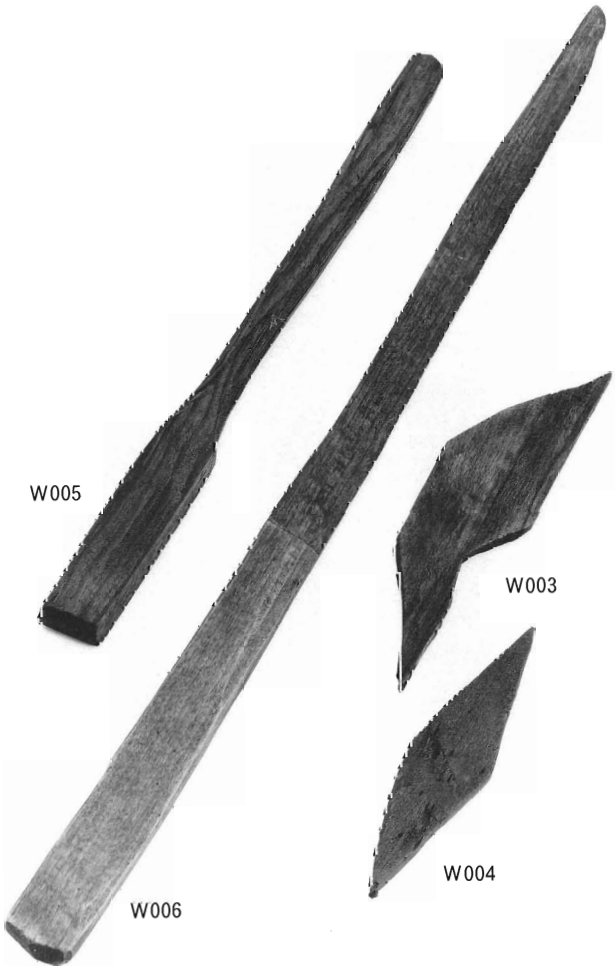
赤外線写真

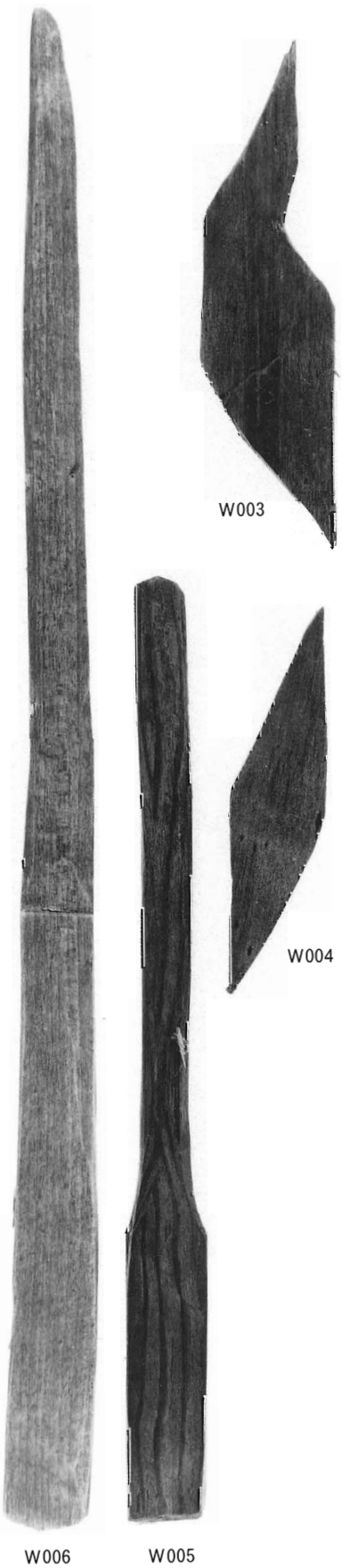
（W002）

写真図版一六四　木製品／祭祀具／絵馬・形代

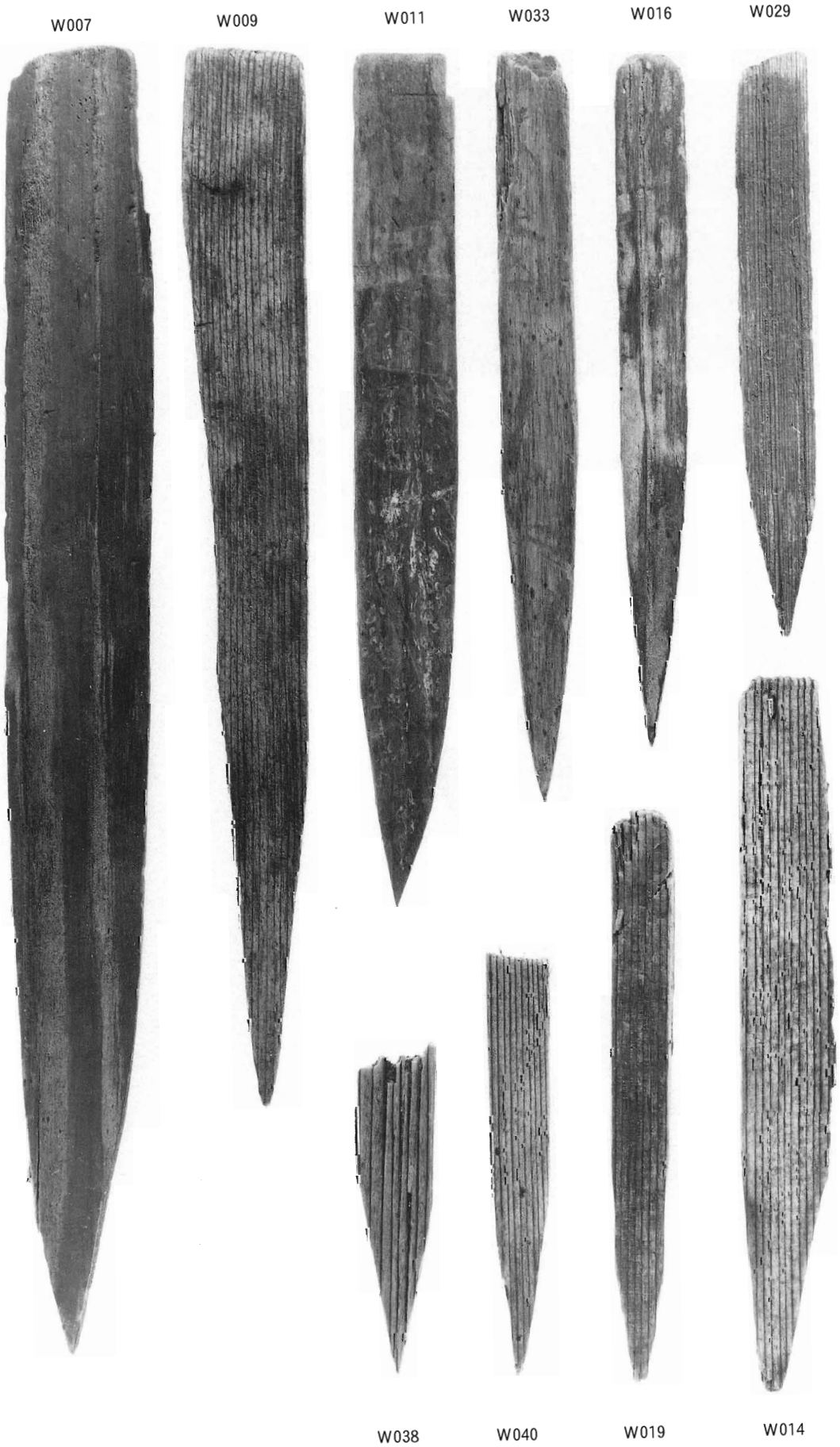


絵馬　裏面　（W002）

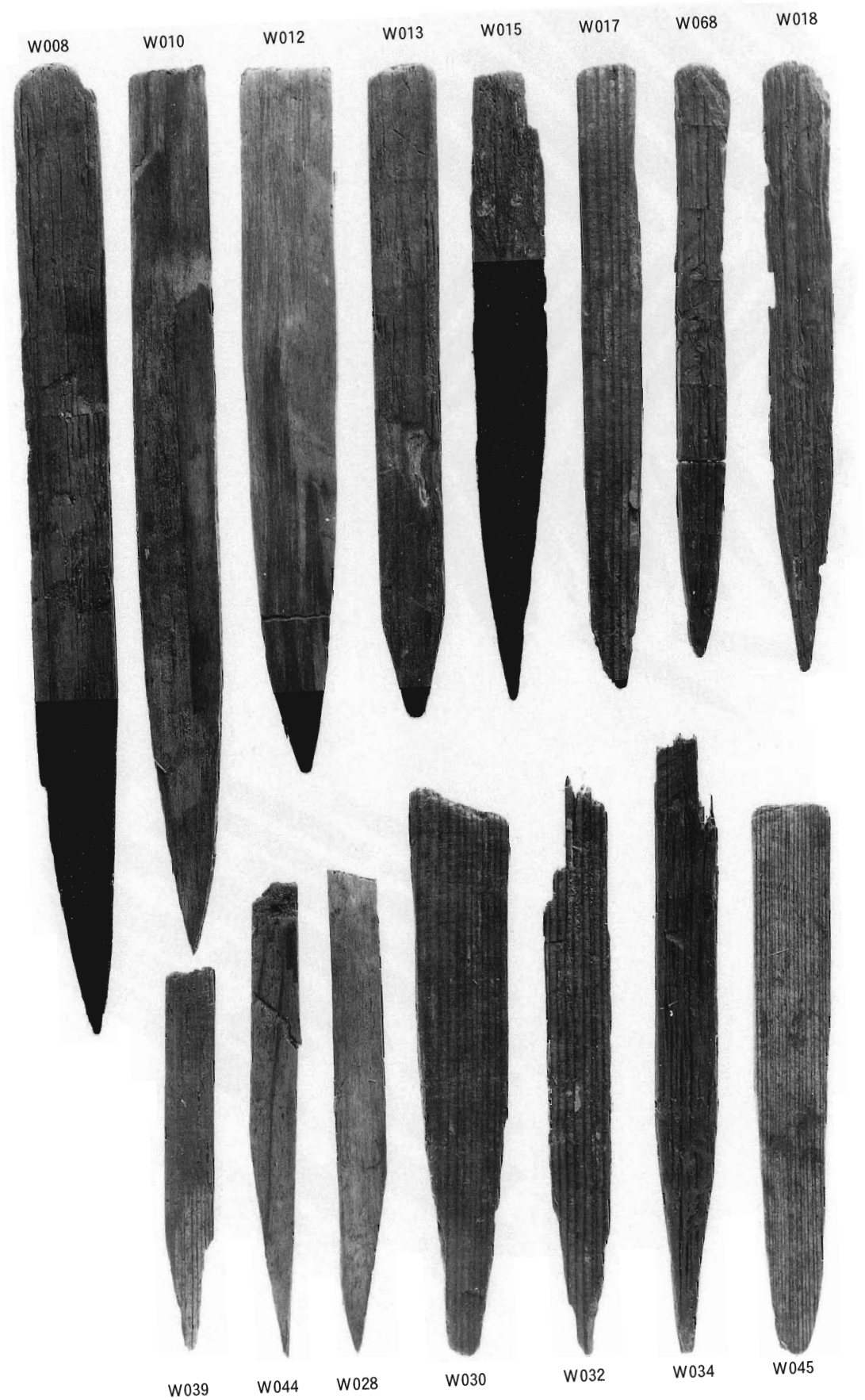




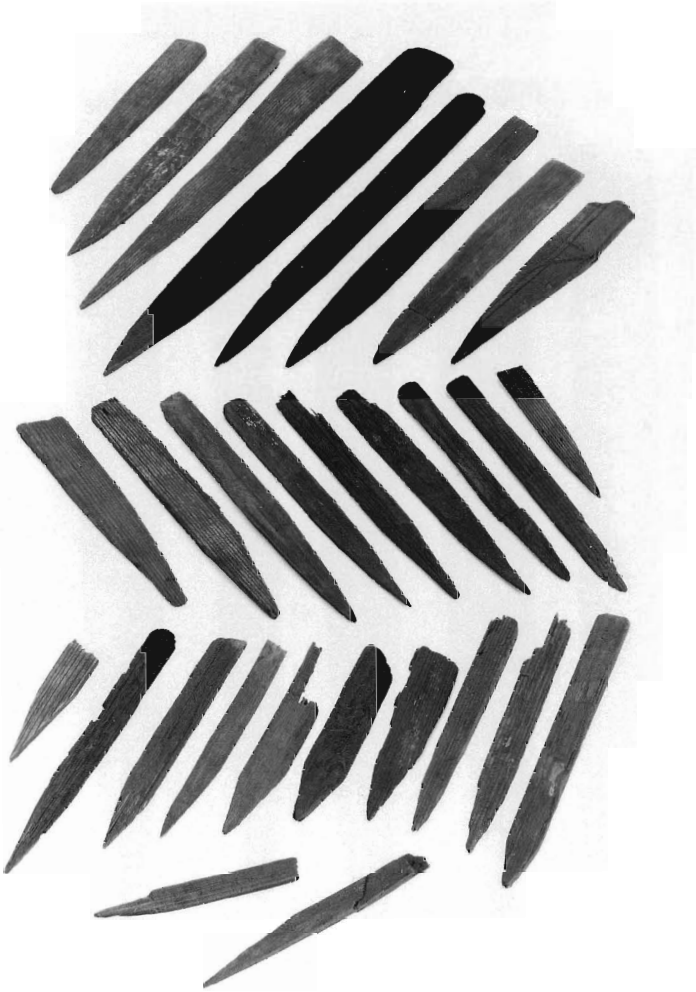
写真図版一六五　木製品／木簡状木製品

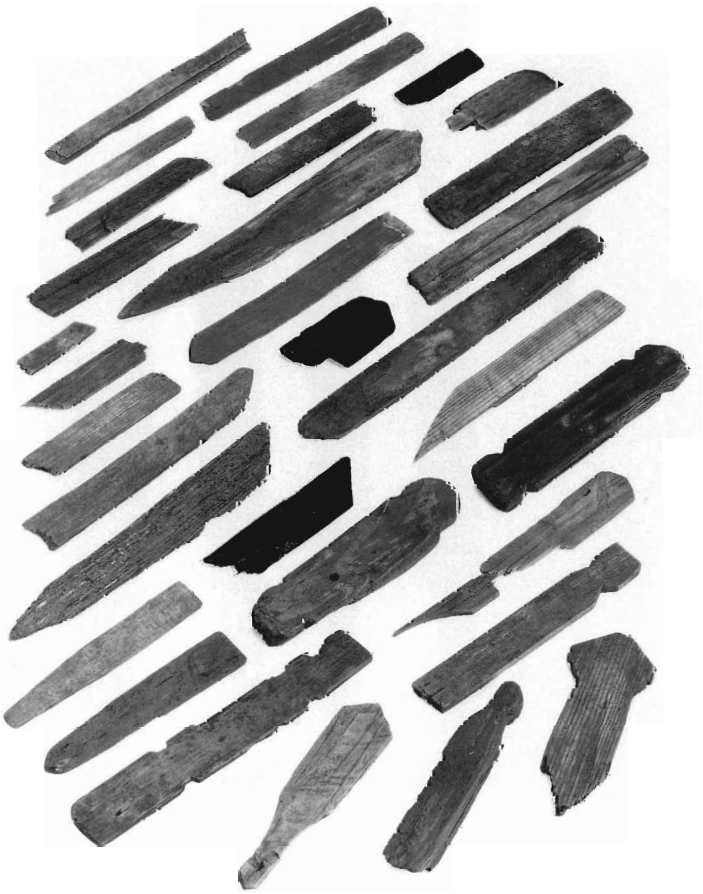


写真図版一六六　木製品／木簡状木製品



写真図版一六七　木製品／木簡状木製品





写真図版一六八　木製品／木簡状木製品

W063

W046

W048

W064

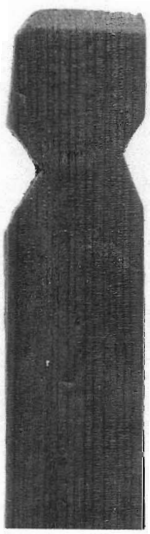
W047

W067

W066

W061

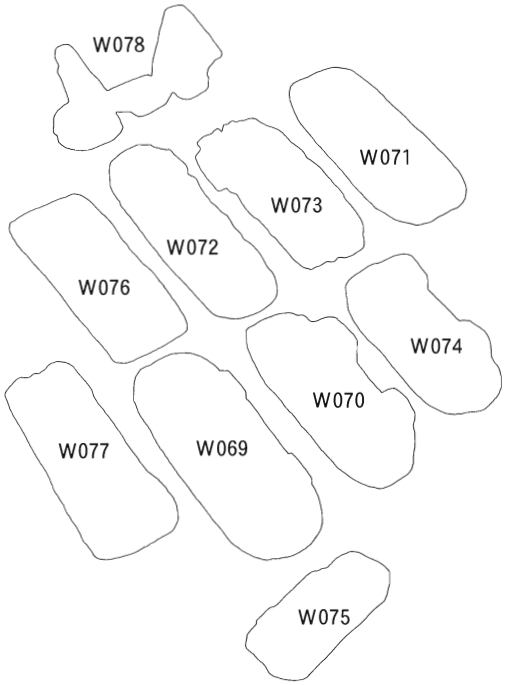
W062


W065

W060

写真図版一六九　木製品／服飾具／下駄

写真図版一七〇　木製品／服飾具／下駄



W078

W072

W073

W074

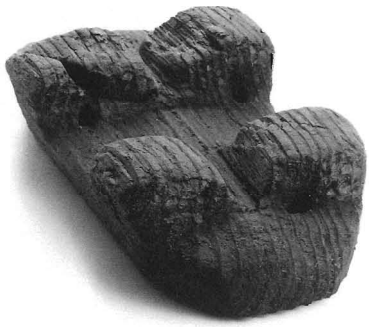
W075

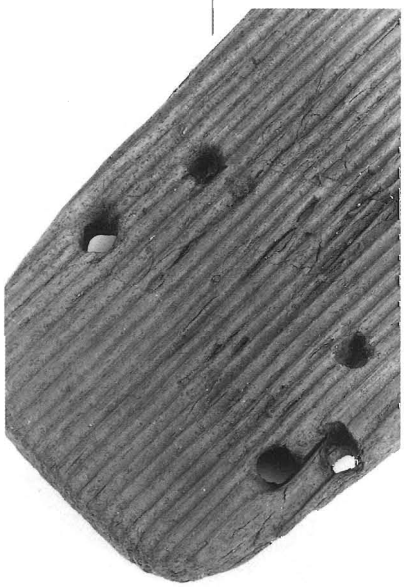
写真図版一七一　木製品／服飾具／下駄

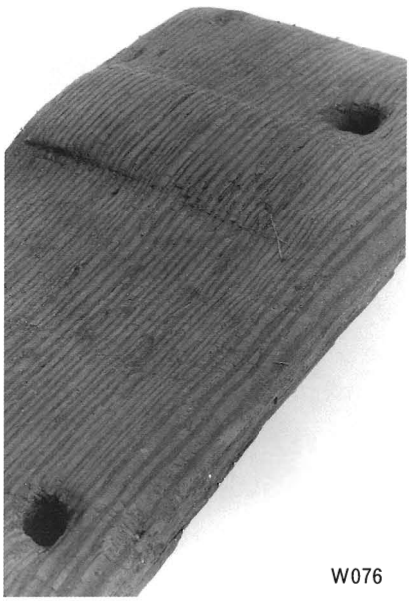
W069

W070

W071

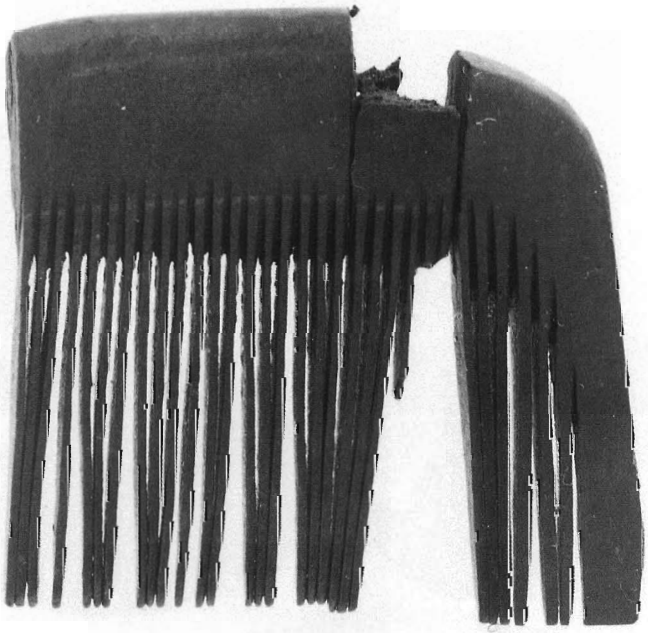






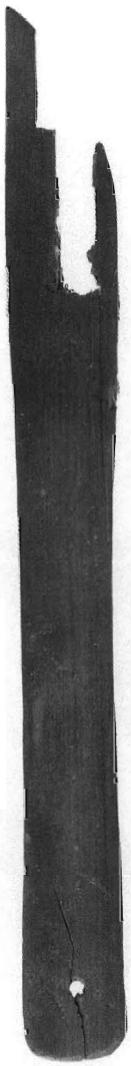
W076

写真図版一七二　木製品／服飾具／櫛扇・櫛

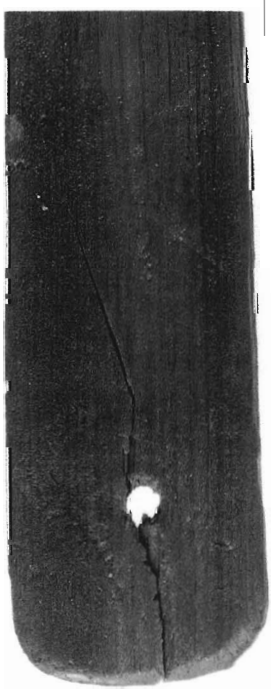


W079

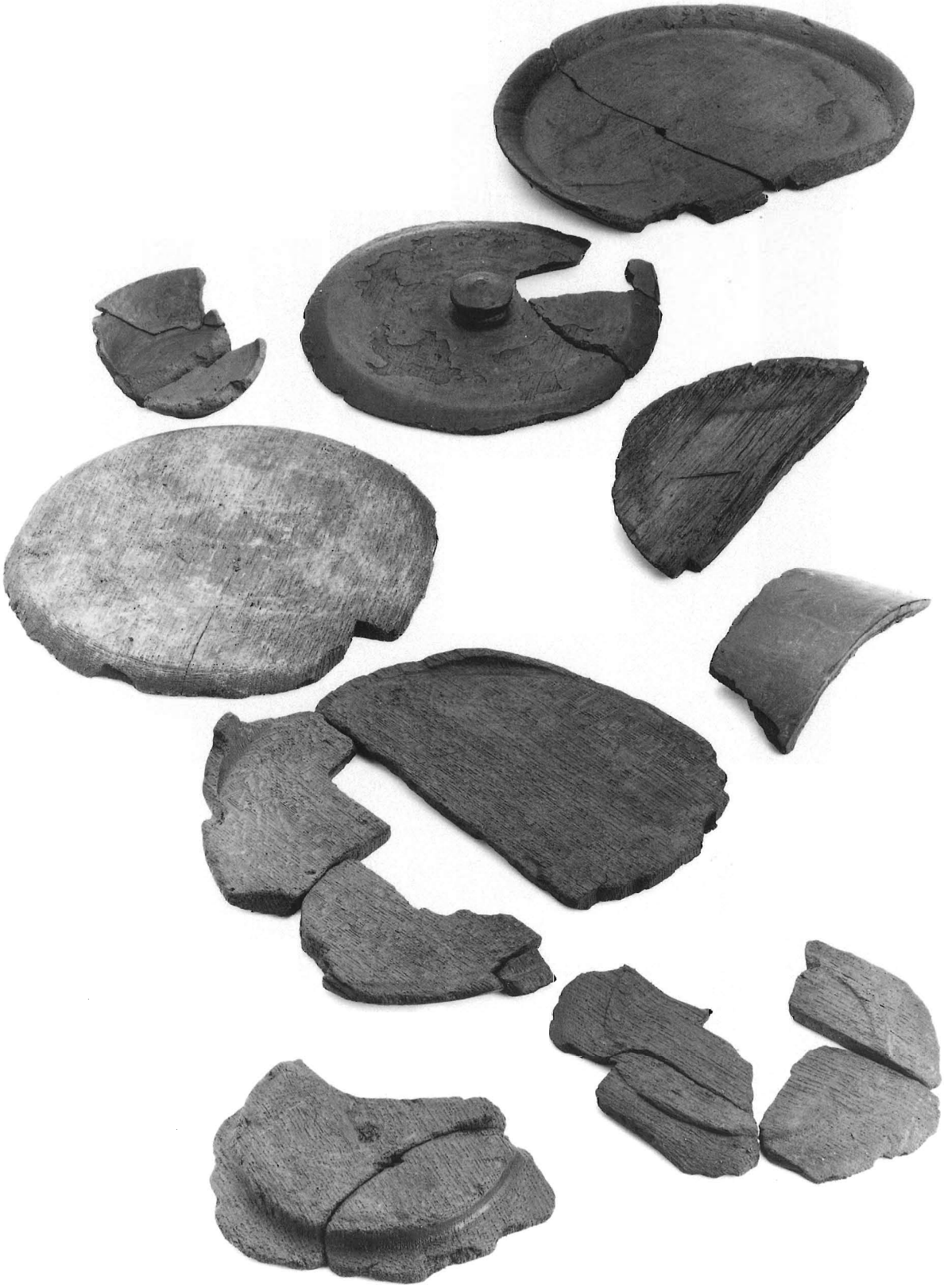
W080



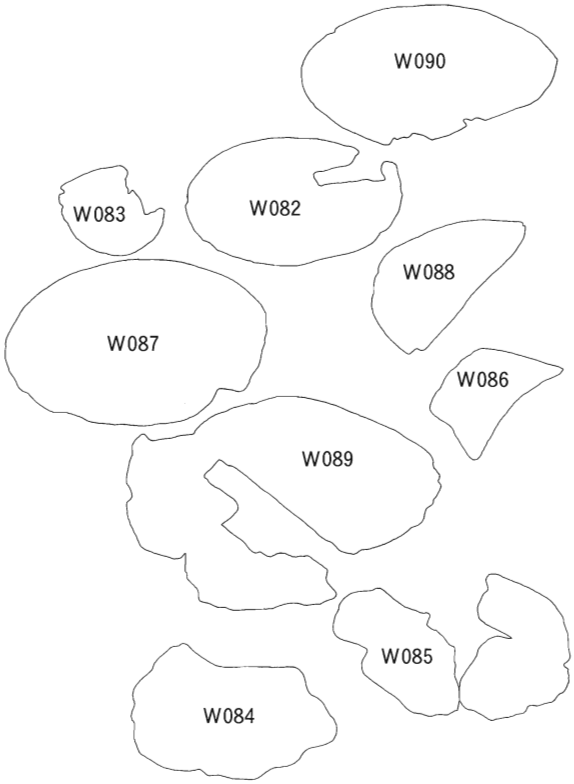
W081



写真図版一七三　木製品／容器／挽物

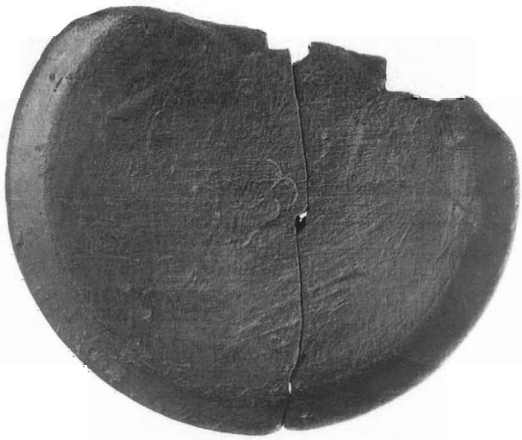


写真図版一七四　木製品／容器／挽物

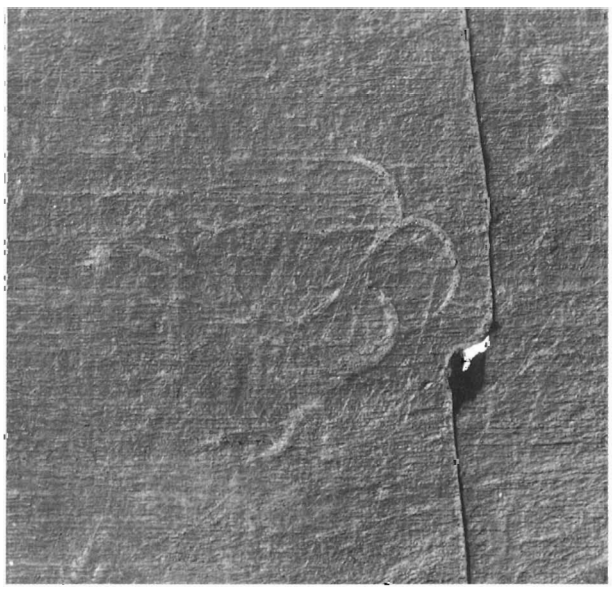


W090

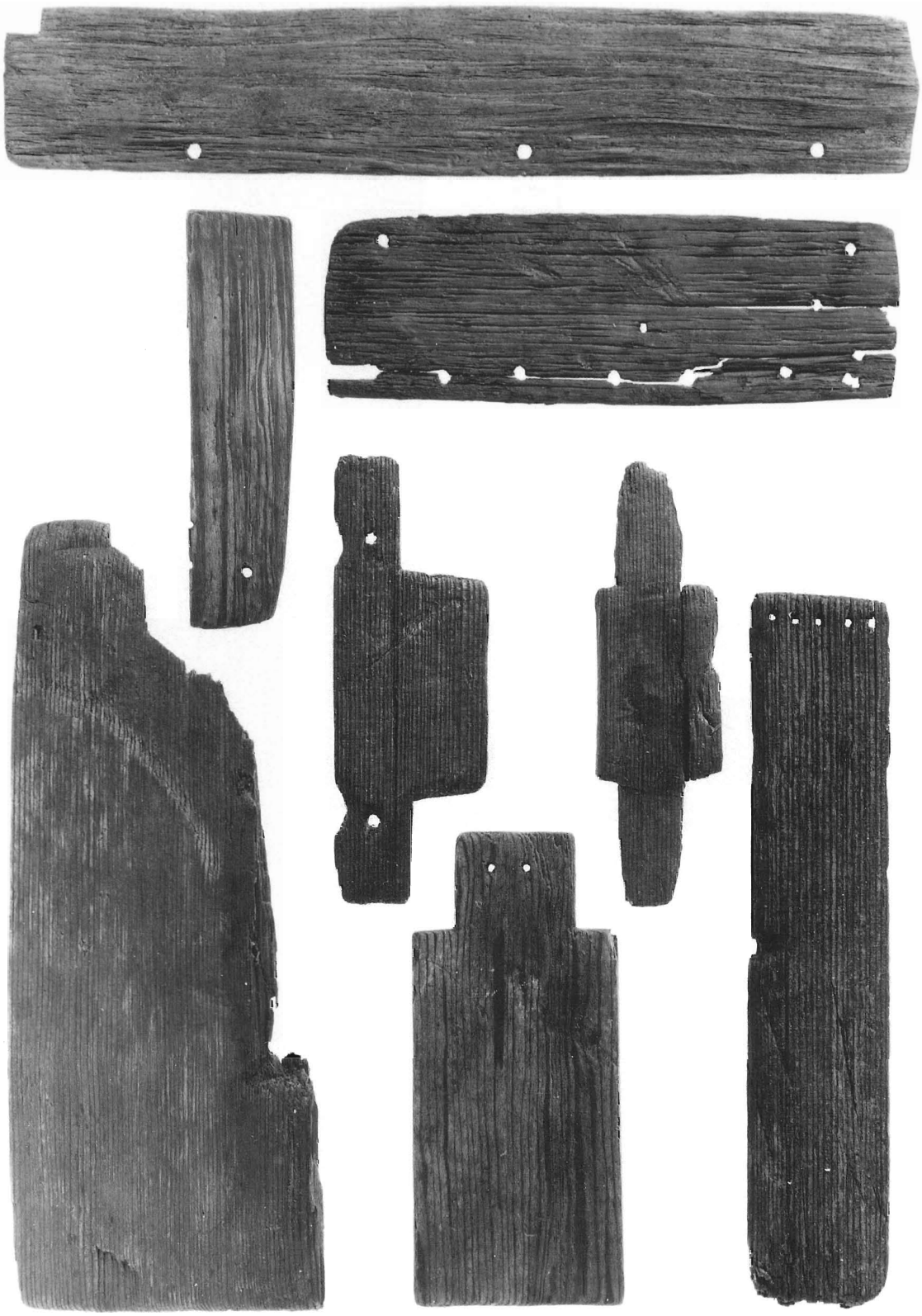
W082



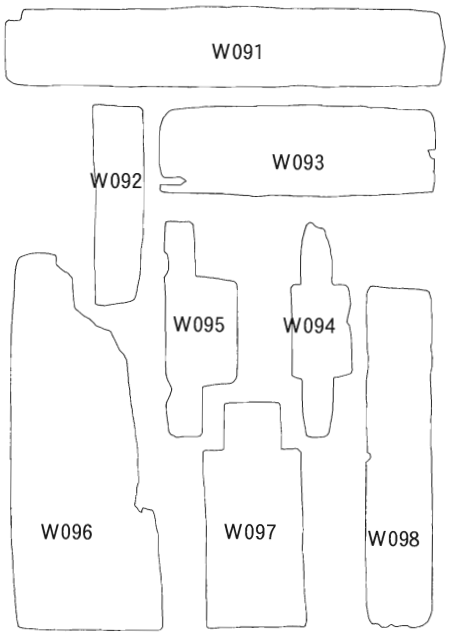
W087

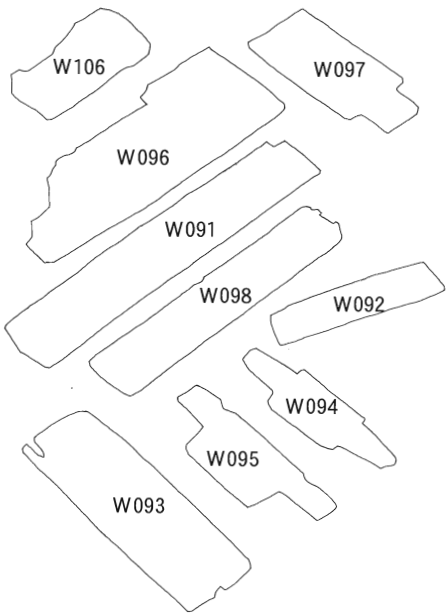


写真図版一七五　木製品／容器／指物

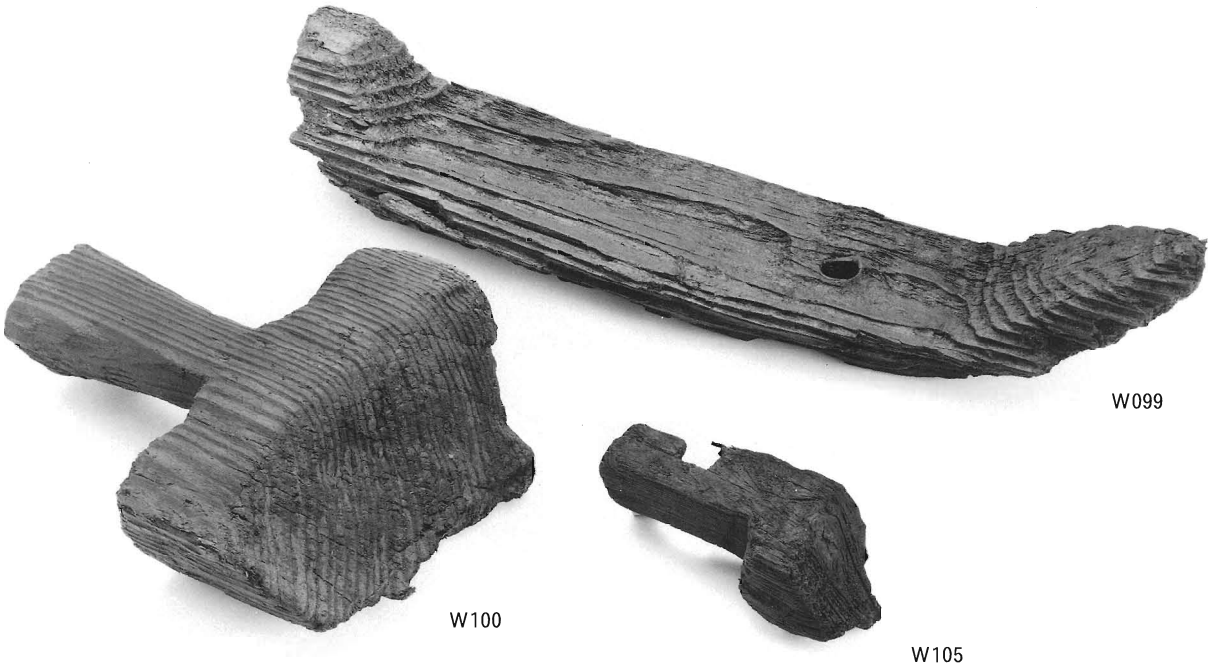


写真図版一七六　木製品／容器／指物





写真図版一七七　木製品／容器／刳物



W099

W100

W105

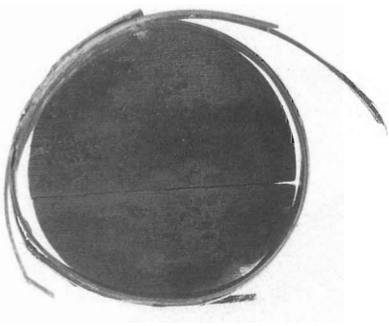
W100

W105

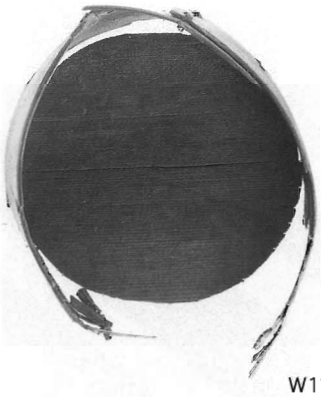
W099

写真図版一七八　木製品／容器／曲物

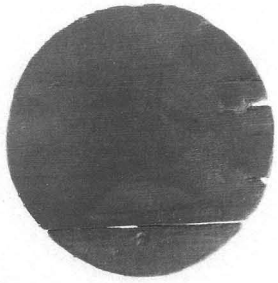
写真図版一七九　木製品／容器／曲物



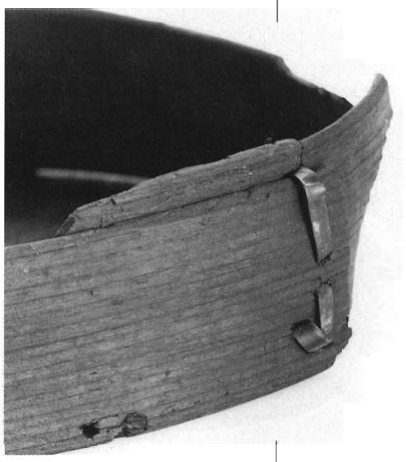
W110

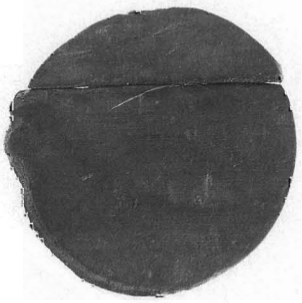


W112



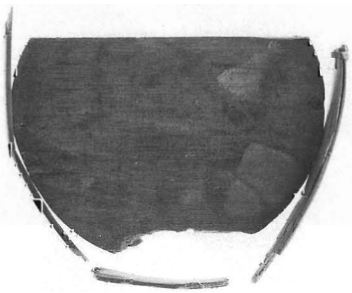
W113



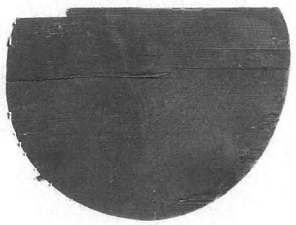


W114

W117



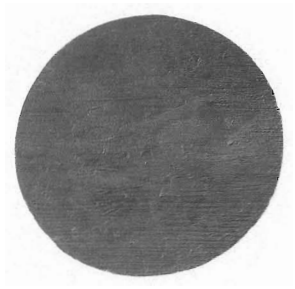
W111



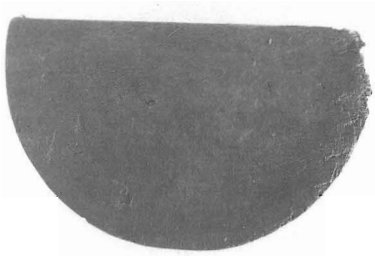
W116

円形曲物（針結合）

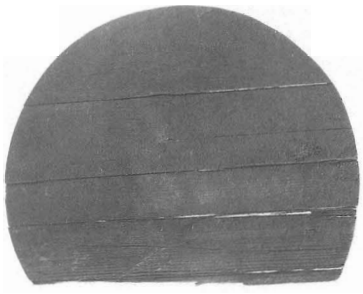
写真図版一八〇　木製品／容器／曲物



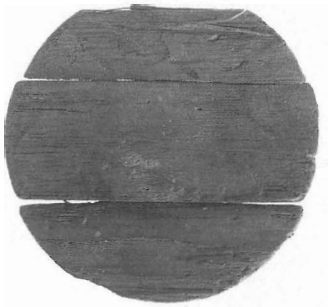
W118



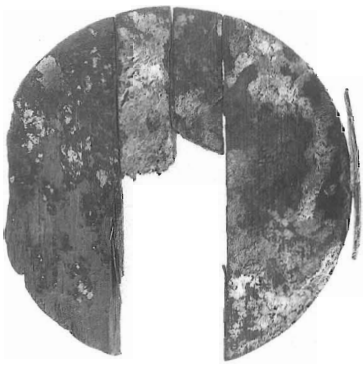
W119



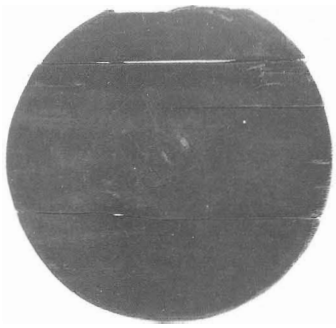
W120



W121



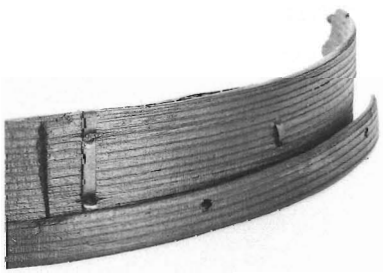
W122



W115

W123

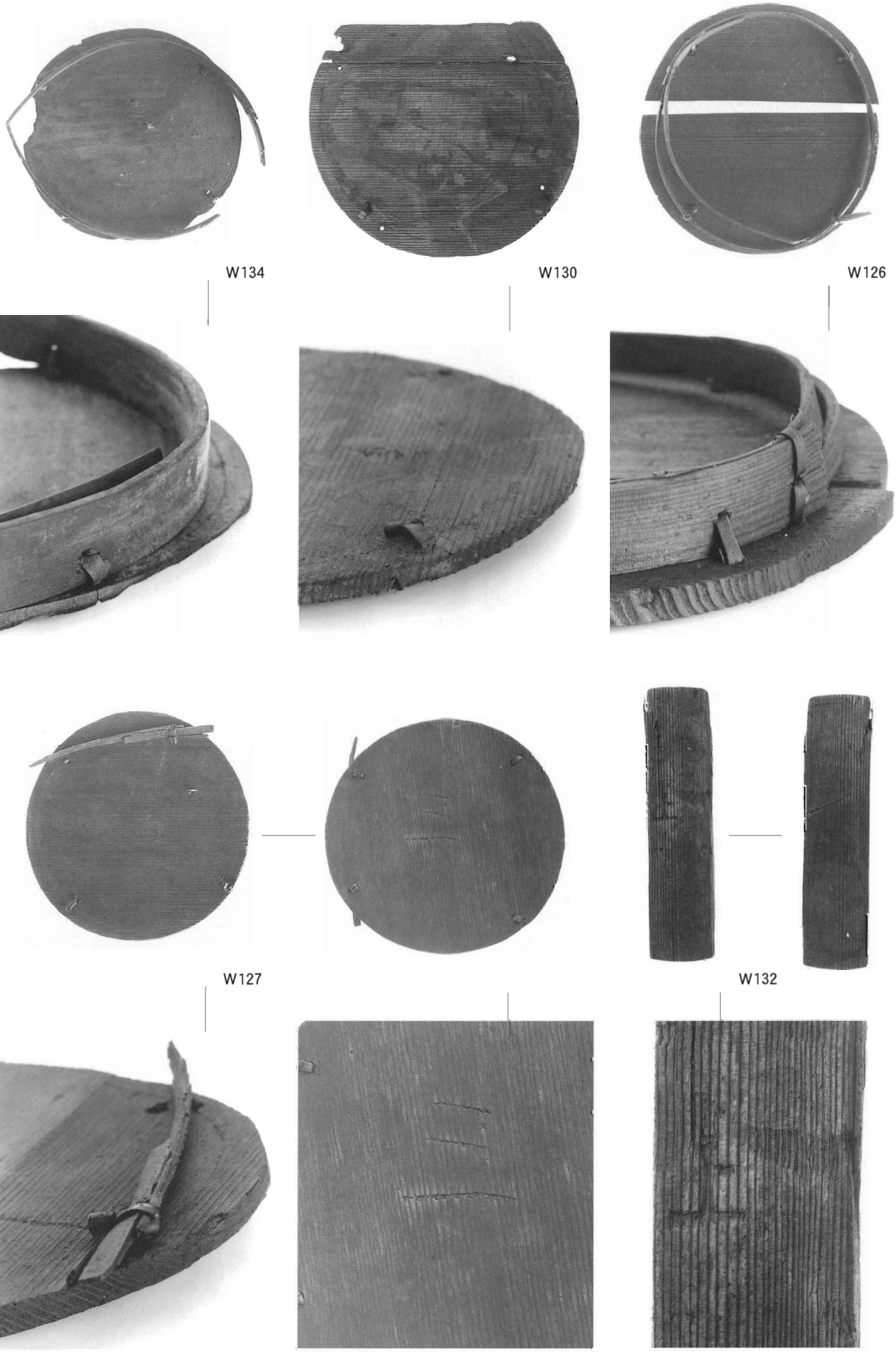
W124



W125

円形曲物（針結合）

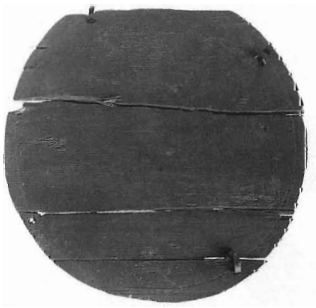
写真図版一八一　木製品／容器／曲物



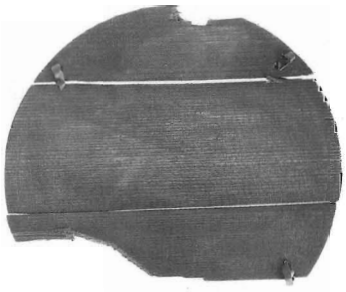
円形曲物（樺皮結合）

写真図版一八二　木製品／容器／曲物

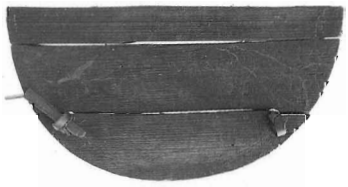
W128



W131

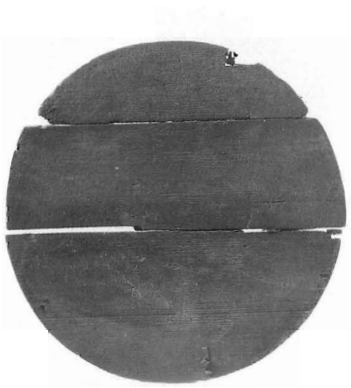


W133

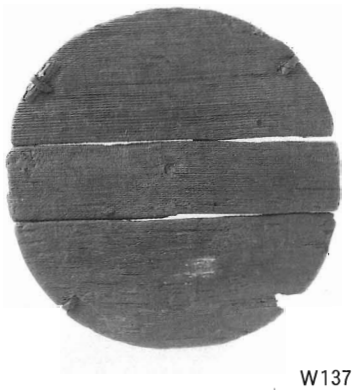


W135

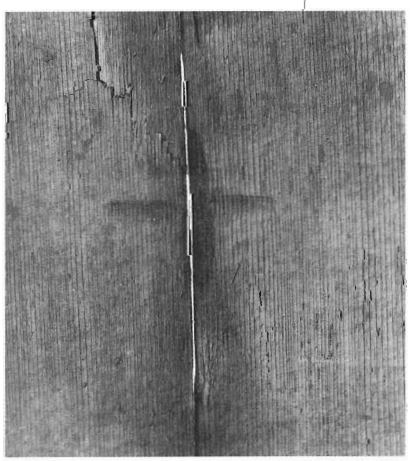
W129

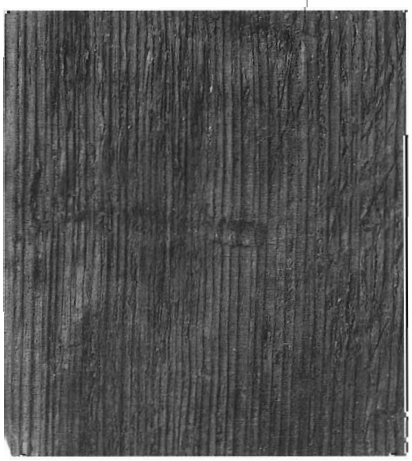


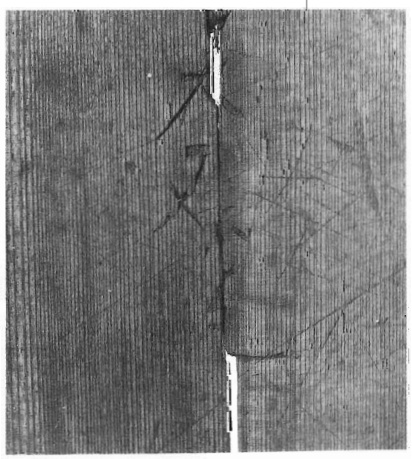
W136



W137



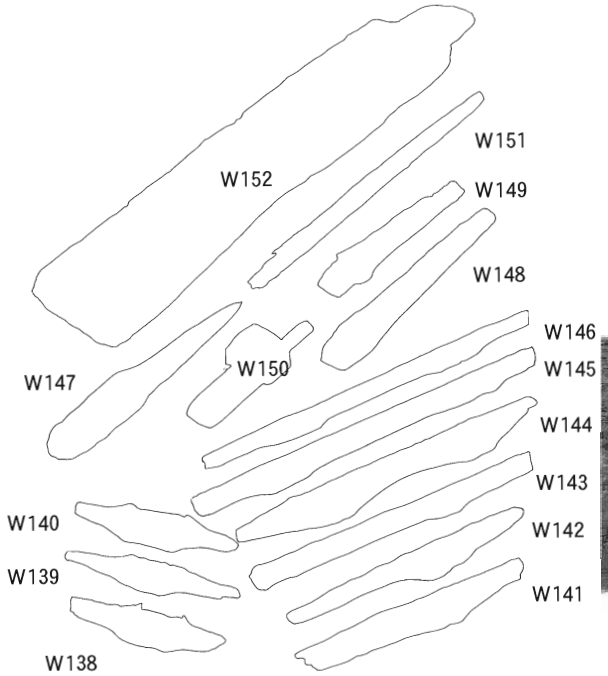


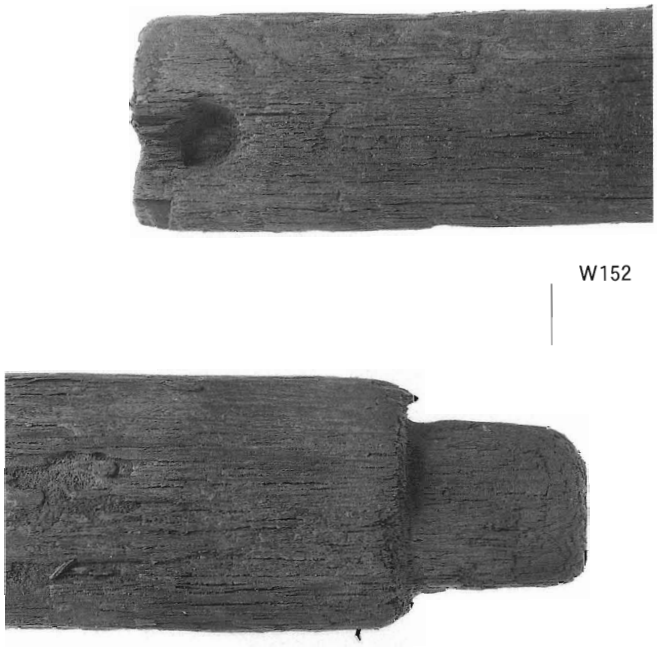


円形曲物（樺皮結合）

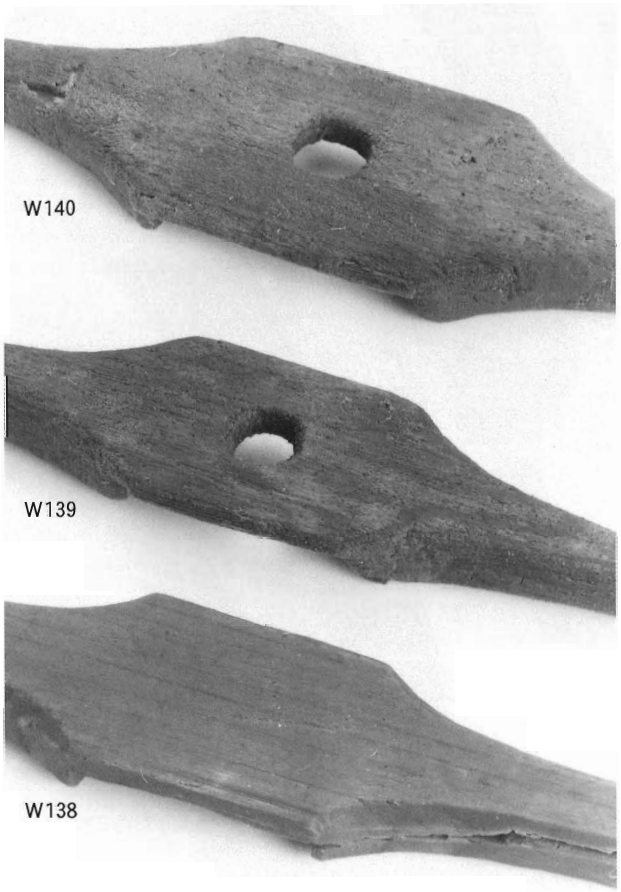
写真図版一八三　木製品／紡織具

写真図版一八四　木製品／紡織具

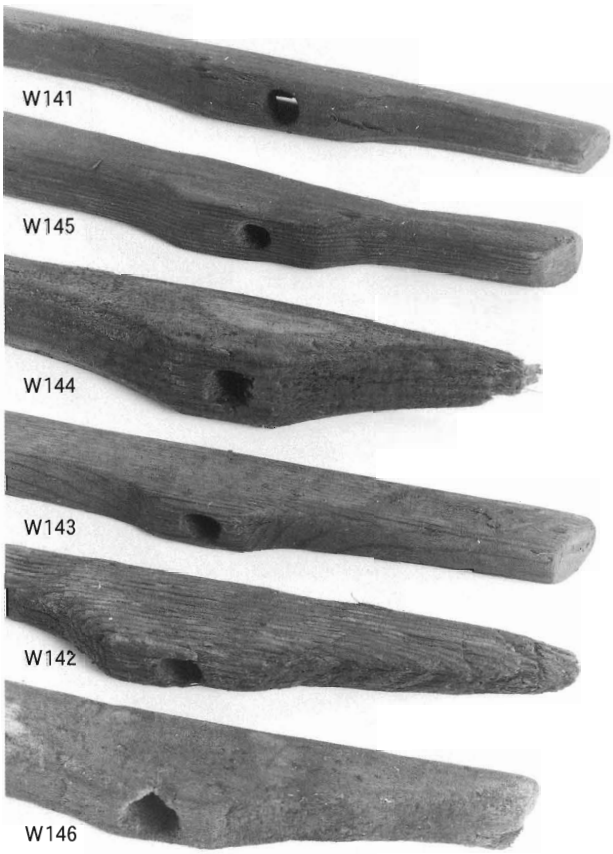




織　機（まねき受）



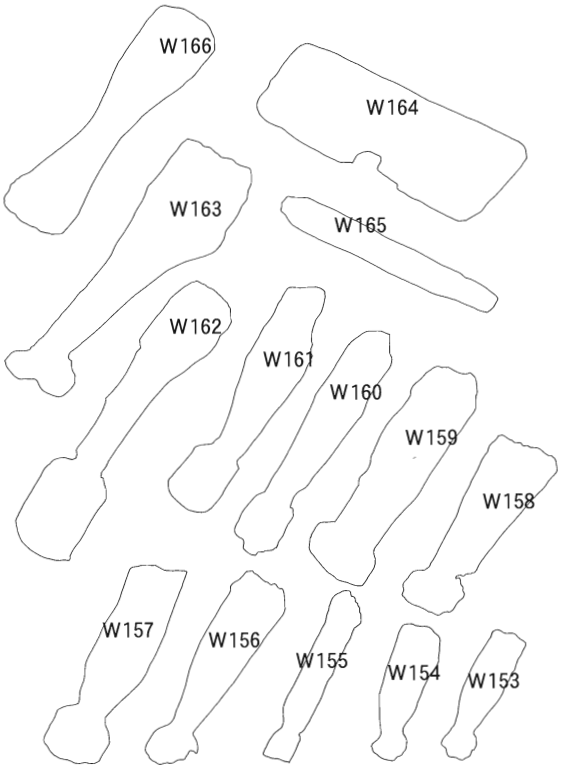
糸　巻（横木）

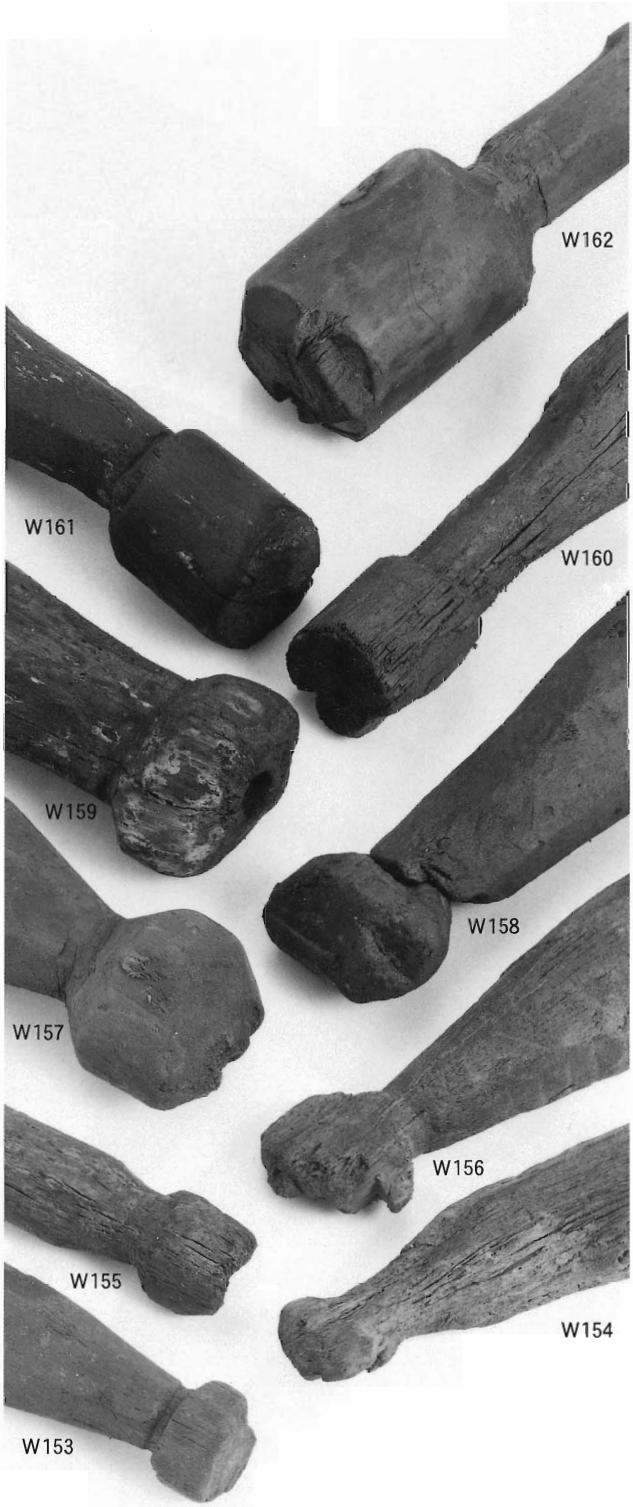


糸　巻（枠木）

写真図版一八五　木製品／農具／編錘

写真図版一八六　木製品／農具／編錘





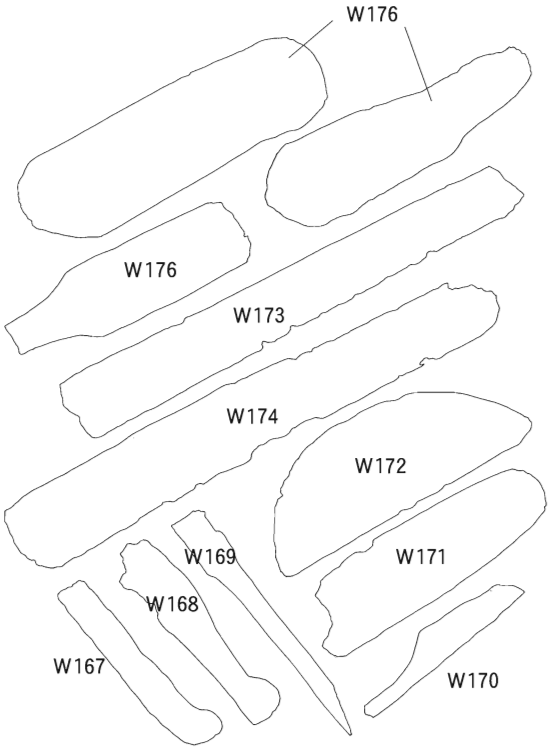
W111

W097

W096

写真図版一八七　木製品／農具・工具・漁撈具・食事具・発火具

写真図版一八八　木製品／農具・工具

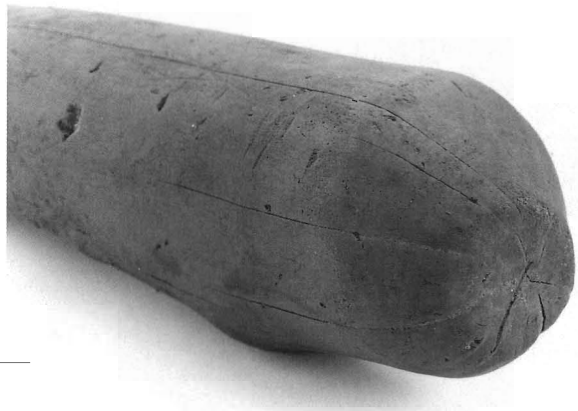


W168

鎌　柄

W167

工具柄



W175

W176

横　槌

W169

刷　毛

写真図版一八九　木製品／発火具・接合補助材

W174

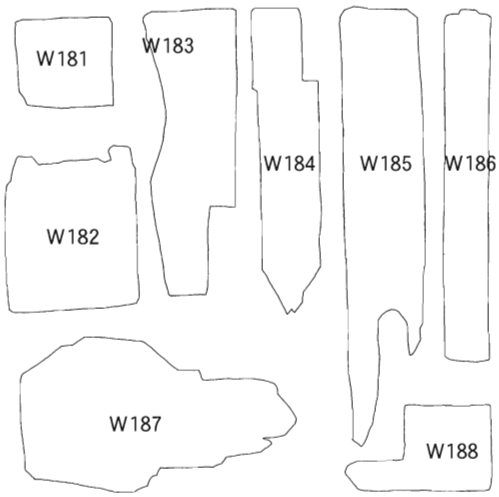
W173

曲物底板の転用　W172

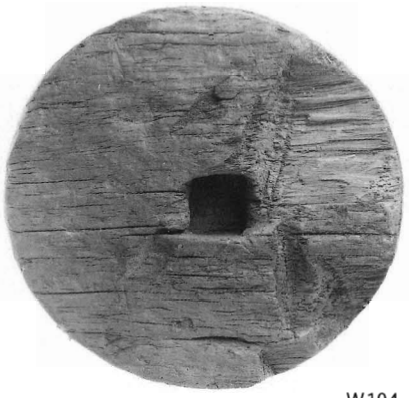
火鑽臼

接合補助材（木栓・楔）

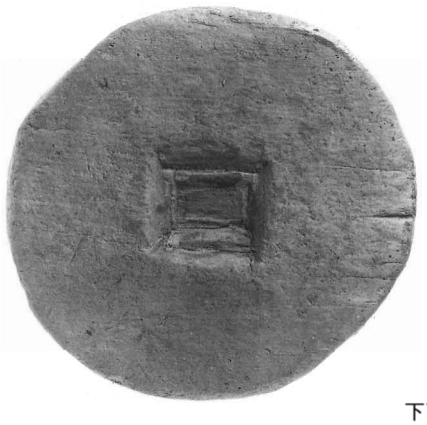
写真図版一九〇　木製品／構造材／建築材・器具材



写真図版一九一　木製品／構造材／建築材・器具材

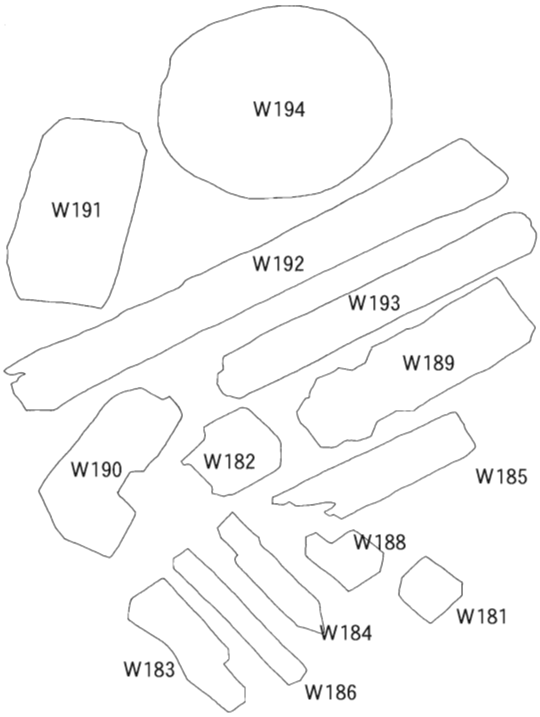


W194 上面



下面

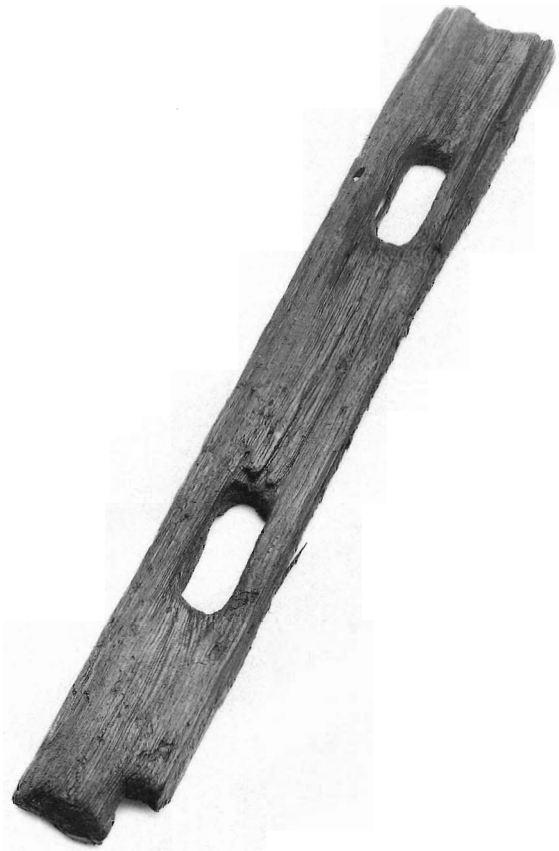
器具材（軸受台）



W191

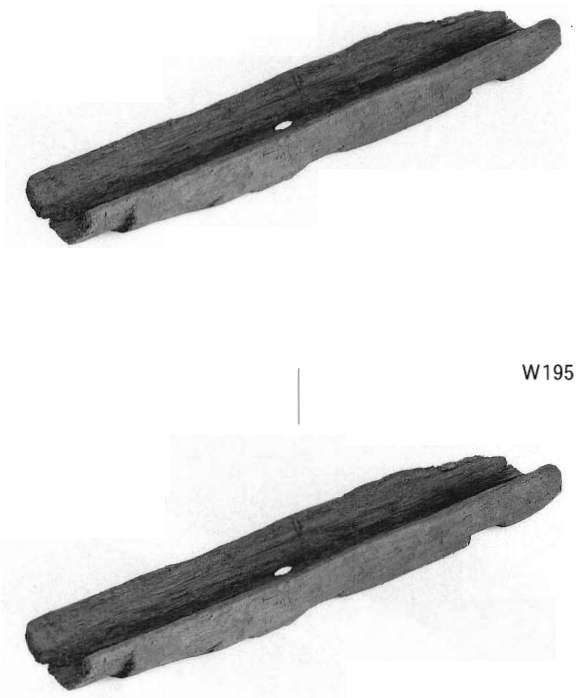
建築材（束柱台か）

写真図版一九二　木製品／構造材・木樋・杭



W203

建築材（扉蹴放材）



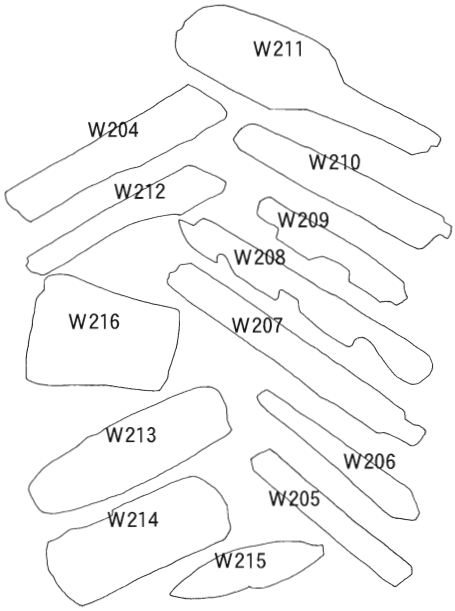
W195

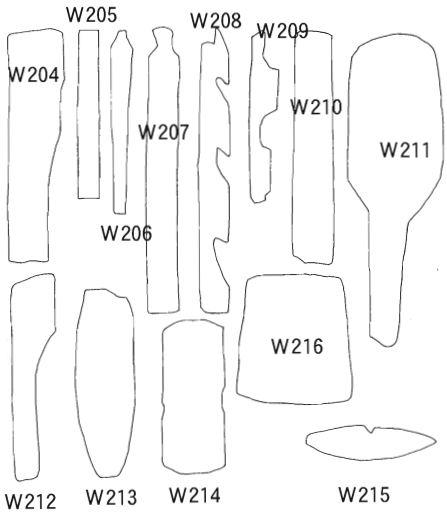
木　樋

杭

写真図版一九三　木製品／用途不明品

写真図版一九四　木製品／用途不明品





写真図版一九五　木製品／用途不明品